

博士論文

論文題目 東国正韻漢字音研究

—中声の修正を中心に—

氏名 林 茶 英

目次

1	はじめに	1
1.1	研究目的	1
1.2	先行研究	2
1.3	研究対象及び研究方法	5
1.4	用語について	8
2	韻書『東国正韻』について	14
2.1	『東国正韻』編纂の目的と動機	14
2.2	『洪武正韻訳訓』との比較	16
3	初声と終声の修正	21
3.1	申叔舟の「序」	21
3.2	初声の修正	22
3.3	終声の修正	27
4	中声修正の実際	29
4.1	ŋ 終声	29
4.1.1	iŋ 韻部	31
4.1.2	oiŋ・uiŋ 韻部	44
4.1.3	oŋ 韻部	50
4.1.4	aŋ 韻部	53
4.1.5	uŋ 韻部	57
4.1.6	iəŋ 韻部	58
4.1.7	まとめ	62
4.2	n 終声	64
4.2.1	ʌn 韻部	65

4.2.2 on・un 韻部	70
4.2.3 an 韻部	72
4.2.4 ən 韻部	75
4.2.5 まとめ	80
4.3 m 終声	81
4.3.1 ʌm 韻部	82
4.3.2 am 韻部	86
4.3.3 əm 韻部	88
4.3.4 まとめ	90
4.4 w 終声	91
4.4.1 ow 韻部	92
4.4.2 uw 韻部	98
4.4.3 まとめ	102
4.5 ø 終声	103
4.5.1 ʌ 韻部	106
4.5.2 oi 韻部	119
4.5.3 ai 韻部	120
4.5.4 ui 韻部	127
4.5.5 iəi 韻部	134
4.5.6 o 韻部	140
4.5.7 a 韻部	142
4.5.8 u 韻部	146
4.5.9 ə 韻部	148
4.5.10 まとめ	150
4.6 中声の修正パターン	152

5 結論	154
参考文献	156

1 はじめに

1.1 研究目的

本研究は韻書『東国正韻』¹(1448)に収録されている‘東国正韻漢字音’²の中声と15世紀末から16世紀初までに刊行された文献に現れる‘伝承漢字音’³の中声を比較することにより、正韻音が伝承音の傾向に従っていることを証明した上で、正韻音の中声の修正パターンを明らかにすることを目的とする。

『正韻』は‘訓民正音’の創制直後、15世紀当時の伝承音を整えるため作られた標準的な(規範的)韓国漢字音の韻書である。韻書の編者たちはその当時の伝承音が相当乱れていると判断し、伝承音の一部分を修正し、新たな漢字音体系を作り出したが、それが‘東国正韻漢字音’である。『釈譜詳節』(1447)や『月印千江之曲』(1447)などの初期文献から始め、15世紀末まで刊行されたほとんどすべての文献における漢字音表記には正韻音が用いられたが、『六祖法宝壇經諺解』(1496)や『施食勸供』(15世紀末)などの文献から正韻音のかわりに伝承音を使いはじめ、16世紀に刊行された文献の漢字音表記には伝承音だけが用いられるようになった。

「序」を見れば分かるように『正韻』の編者たちは伝承音のいくつかの特徴を一種の‘誤り’と見なし、その誤りを‘字母之変’‘七音之変’‘清濁之変’‘四声之変’と類別化したうえで、それをある基準により修正した。例えば初声の場合、伝承音には「ㄱ·ㄷ·ㅂ·ㅅ·ㅈ·ㅊ·ㅌ·ㄴ·ㅇ」などのいわゆる‘各自並書’で表記された例が1個も見当たらないが『正韻』においては23字母のうち全濁に当たるすべての字母を‘各自並書’をもって表記している。なお伝承音では「ㄹ」に現れる終声をあえて「ㄹ」に修正したことも正韻音ならではの特徴である。全濁の字母を‘各自並書’で表記したのは‘清音’と‘濁音’を区別するためであり、「ㄹ」を「ㄹ」に修正したのは‘舒声’と‘入声’を区別するための処置であるが、こういった正韻音と伝承音の違いから、韻書の編者たちが‘清濁’と‘四声’を必ず守られなければならない語音の資質と考えていたことを明らかにすることができる。このように「序」の内容に基づいて正韻音と伝承音の差をきちんと分析すればその当時の学者たちの語音に対する認識をつかむことができるだろう。

¹ 『東国正韻』は1447年に完成し、1448年に頒布された。この韻書の原刊本のうち第1巻と第6巻を韓国の潤松美術館で所蔵しており、完本は現在建国大学校図書館に所蔵されている。

² 以下においては『正韻』及び正韻音と略す。

³ 15・16世紀に実際に使われた漢字音を「現実漢字音(略称：現実音)」とも言うが、‘伝えられる’の意味が含まれた伝承漢字音の方が、人工的に作られた東国正韻漢字音との差をより対比的に表すと考え、本稿においては伝承漢字音という用語を用いることにした。以下伝承音と略す。

「序」では初声や終声の修正について詳しく説明しているものの中声に関してはほぼ言及していない。しかし、それは正韻音の中声が伝承音のそれと完全に一致しているためではない。両者を比較してみれば一見して相当異なっていることが分かる。にもかかわらず「序」において中声の修正についてあまり説明していない理由はおそらく初・終声とは異なり中声の場合、説明しなければならない例外が多く、その分修正の内容をパターン化しにくいからだろうと思われる。しかし、中声の修正がどういった基準により行われたかを明らかにしないと、韻書『正韻』と正韻音に関するすべてを解明したとは言えないし、また『正韻』の編者たちの語音に対する認識を完全に理解することもできないだろう。そこで本研究においては伝承音と正韻音の中声を対比し、両者の間の異同に基づいて正韻音の中声の修正基準を明らかにしたいと思う。

1.2 先行研究

東国正韻漢字音に関する研究は大体次の2種類に類別することができる。91韻の配列原理を探る研究が1つであり、韻の設定根拠を解明する研究が1つである。まず、前者の代表的研究として유창균(1965B、1966) 이동림(1970) 김무림(1996)があげられる。

유창균(1965B)は『正韻』の91韻とその代表字を『韻鏡』『七音略』『切韻指掌図』(以上刊行時期は不詳)『皇極経世声音唱和図』(北宋時代)『古今韻会举要』⁴(1297)のような韻書や韻図の韻部目録と対比分析した研究であるが、『正韻』の91韻が『举要』の字母韻に基づいて立てられ、91韻を類別する原理は3種の韻図(『七音略』『切韻指掌図』『皇極経世声音唱和図』)に倣っていると述べた。유창균(1966)は『広韻』⁵(1008)『集韻』(1039)『洪武正韻』⁶(1375)『蒙古字韻』(1308)『蒙古韻略』(不詳)まで比較の範囲をさらに広げた研究である。大体的内容は 유창균(1965B)と一致しているが91韻を確定する際、『举要』の字母韻を参考しながら同時に『蒙古字韻』にも影響された可能性が高いと説明している。

이동림(1970)も中国伝統の韻書や韻図と『正韻』を比較した研究であるが、主な参考資料として『韻鏡』と『七音略』を用いている点が特徴的である。유창균(1965B、1966)と同様

⁴ 元代の黄公紹が編輯した『古今韻会』(佚)が餘に大部なので、熊忠がそれを「举要」して『古今韻会举要』を作ったと推測される。この韻書は『広韻』(1008)の中古音と『中原音韻』(1324)の近代音との間の過渡的産物として扱われている。『古今韻会举要』音韻体系を見ると表面的に『集韻』の反切に従っていると同時に、裏では「字母韻」の体系を立て現実の音を共存させている。花登正宏(1997: 5、49、56-57)を参照。以下では『举要』と略す。

⁵ 正式名称は『大宋重修広韻』。陳彭年等が皇帝の勅令を奉じて『切韻』『唐韻』などの前代の韻書を修正して編纂した韻書である。最初の官撰韻書である。

⁶ 1375年、太祖の勅令により宋濂(1310-1380)などが編纂した韻書。韻母北方音の体系を、声母は南方音の体系をそれぞれ反映していると知られている。

『挙要』が『正韻』の底本であると述べながら、『正韻』を『挙要』の反切をそのまま転写した韻書と指摘しているが、この見解は批判の余地がある。

김무림(1996)は『正韻』の編韻に現れる訓民正音字母の配列上の特徴を検討し、さらに91韻の設定及び配列について探った研究であるが、91韻目が‘四呼’の原理により配列していると解釈し⁷、さらに91韻目の配列順序を文字論の側面から見ると‘基本字優先’の原則が守られていると述べている。しかし「・一 | ·|·」の5つの中声が表面的に‘四呼’とは全く関係がなく、さらに該当韻目に合口韻が存在しない理由及び「ㄷ」が開口と扱われている点については説明が足りない。

次に、91韻(192韻類)の各韻の設定根拠を明らかにする研究は、正韻音の中声がどういった基準により修正されたかを解明することにつながっているが、김철현(1959) 유창균(1967) 강신항(1997) 권혁준(1997AB, 1998, 1999, 2000, 2001AB) 조운성(2011B)が代表的な研究である。上述の研究のうち김철현と권혁준が正韻音が中国音に基づいて修正されたと解釈していることに対して유창균、강신항、조운성은正韻音の中声が伝承音のそれをほとんどすべて受け入れていると述べている。

김철현(1959)は正韻音を16撰に分けてそれぞれの音価を推定した研究である。主に董同龢(1967, 1954)と藤堂明保(1957)の上古音や中古音の推定音を利用したが、その他にも『中

⁷ <表 1> 『正韻』の中声体系の四呼展開

開	齊	合	撮
· / 一			
· ·			
과		과	
하			
귀	귀		
	귀		귀
고	고		
ㅏ	ㅏ	ㅏ	
ㅓ	ㅓ		
ㅗ	ㅗ	ㅗ	ㅗ

原音韻⁸』(1324)『洪武正韻』『切韻指掌圖』などの文献をも参考にして正韻音の中声の音価を推定した。『正韻』の編者たちが『広韻』のような切韻系韻書に反映されている漢字音体系に合わせて伝承音の中声を修正した可能性が高いと推測した。しかし、正韻音の中声が主に唐代(或いは唐末時期)の中国音を反映していると述べながらも、中世音⁹を受け入れている跡も見えると指摘している。さらに本文中時々設定の根拠が明らかではない韻が少なくないと述べているが、そのことから正韻音の中声を中国音に基づいて修正したとすると、説明しにくい例外が沢山出てくることが分かる。

권혁준(1997AB, 1998, 1999, 2000, 2001AB)は『正韻』の音韻体系と『挙要』の音韻体系との比較研究である。薛鳳生(1985)に基づき『挙要』の反切下字体系が反映している音韻を推定して、その体系を正韻音の中声体系と比較し、正韻音の中声が韻図時期即ち後期中古音を反映していると説明したが、ほとんどすべての例外について伝承音に影響された結果と解釈した点などは김철현(1959)の見解と大きな差異はないと考えられる。

유창균(1967)は正韻音の基層音に関する研究である。『正韻』の編纂に関連している韻書や韻図のうち『挙要』に最も直接的影響を与えられたと見なして、『挙要』の反切下字及び字母韻を正韻音の韻部母音(本研究における中声)と比較したが、いずれも正韻音の中声体系との対応関係が整然としていないということから正韻音の中声が伝承音の中声にしたがっていることが明らかになると述べている。しかし、正韻音と伝承音の中声を直接に比較した結果ではないという点がこの研究の限界と言える。

강신항(1997)は正韻音に関する研究のうち伝承音資料を利用した最初の研究であるが、漢字音の音節を初声(声母)と中・終声(韻母)に分けてそれぞれの正韻音、伝承音、中古音を対比させた。分析の結果初声が『広韻』の36字母と『挙要』の反切にしたがって修正された可能性がある反面、中・終声の場合中国音ではなく伝承音に基づいてそれをさらに体系的に整理したことに過ぎないと解釈した。しかし、研究の範囲が平声字や入声字に限られており、また例外として‘撮口呼’に当たる漢字音が幾つか挙げられているだけで、他の例外については全く言及していない。

조운성(2011B)は正韻音の音節を初声(声母)と中・終声(韻母)に分けて『正韻』の韻類を中古音・『挙要』の字母韻及び反切・伝承音と比較した研究であるが、中・終声の場合伝承音のそれをほぼそのまま受け入れていると説明しながら、正韻音と伝承音は次の3つの点が異なると指摘した。つまり、開合を修正したこと、終声の表記に「ㄹㅇ」が用いられたこと、例外的に字母韻にしたがって中声を修正したことがそれであるが、そういった両者間の差異については詳しく説明していない。

上述した先行研究によると正韻音の中声を中国音に基づいて修正したとすると説明の一貫性が保たれず例外が多すぎるということが分かる。それに対して韻書の編者たちが伝承音を参考にして中声を修正し、各々の韻を立てたと仮定すると、逆に例外が少なくなることが明らかになったと考えられる。しかし、すべての伝承音の中声を正韻音と対比した上で、修正のパターンを明らかにし、さらに類型化しにくい例外について説明した研究はまだ行なわれていな

⁸ 元代の周德清(?)が作った曲韻書。中国語の近代音体系を反映している代表的文献である。

⁹ 김철현の‘中世音’は宋末の中国音を表していると考えられる。

い。そこで以下においては両者の中声の対比作業により、正韻音の中声が伝承音の中声をほぼそのまま受け入れているということを証明したいと思う。

1.3 研究対象及び研究方法

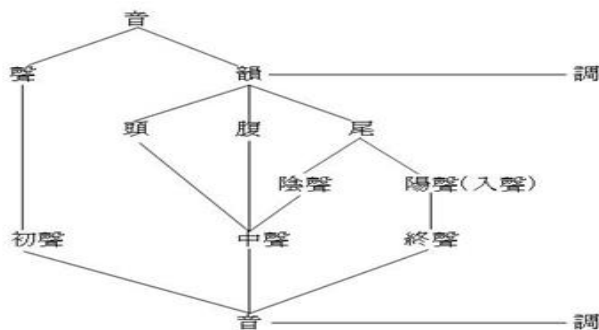
‘東国正韻漢字音’は‘韻書『東国正韻』に収録されている漢字音’を意味する。先行研究を見ると‘東国正韻式漢字音’(유창균, 伊藤智ゆき) ‘『東国正韻』音’(강신항, 조운성) ‘東国音’(김철현)などが本稿における‘東国正韻漢字音’と同一の意味として用いられていることが分かる。いずれにしても4種の用語が表している意味はさほど変わらないと考えられるが、차익중(2014A:1-3)が指摘したように‘文献のなかで実際に使われている東国正韻式漢字音’を‘『東国正韻』に収録されている漢字音’と区別した方がいいと思われる。本稿においては混同を避けるために‘東国正韻漢字音’と‘東国正韻式漢字音’を区別し、研究対象を‘東国正韻漢字音’に限る。

本研究は正韻音の中声に関する研究である。漢字音の中声は中国語中古音の韻母の一部に対応する。説明の便宜のために韓国語と中古音の音節の対応関係を表すと次の通り。

<表 2> 韓国語と中国語の音節の対応関係¹⁰

中古音	声母	韻母(声調)			
		介音(韻頭) i- w-	主母音(韻腹)	韻尾	
				陰声韻尾 -i -w	陽声韻尾 (入声韻尾) -p -t -k (-m -n -ŋ)
韓国語	初声	中声		終声	

¹⁰ 임용기(2008:124)を参照して表にしたものである。原文の<図 1>は以下のとおり。



<図 1> 韓国語と中国語の音節の対応

<表 2>を見れば分かるように韓国語の中声は中古音の介音・主母音・陰声韻尾と対応する。したがって本論においては正韻音と伝承音の中声及び上述した中古音の3つの要素を扱って論議を進めることにするが、正韻音の場合 91 韻(26 韻部 192 韻類)に属する 18800 余字の正韻音の中声が研究の範囲に含まれる。本論において扱う 91 韻と中古音の撰・韻の一覧を以下に示しておく。

<表 3> 『正韻』の韻部と中古音

終声	26 韻部 (91 韻)	192 韻類	中・終声	攝韻(等)
ŋ /k	𪛗(肯亘亟)	𪛗(肯亘亟)	iŋ/ik	曾登 曾蒸
		徵(慶澄陟)	iŋ/ik	曾蒸
		庚(梗更格)	ɿiŋ/ɿik	梗庚 ₂ 梗耕 曾蒸
	觥(礦橫號)	觥(礦橫號)	oiŋ/oik	曾登 梗庚 ₂ 梗耕
	肱(國)	肱(國)	uiŋ/uik	曾登
	公(拱貢穀)	公(拱貢穀)	oŋ/ok	通東 _{1,3} 通鍾 通冬
		躡(冢湏塚)	ioŋ/iok	通鍾
	江(講絳覺)	江(講絳覺)	aŋ/ak	江江 宕唐 宕陽
		張(長帳著)	iaŋ/iak	宕陽
		光(廣誑郭)	oaŋ/oak	江江 宕唐 宕陽
	弓(重諤菊)	弓(諤菊)	uŋ/uk	通東 ₃ 通鍾
		中(重中囿)	iuŋ/iuk	通東 ₃ 通鍾
	京(景敬隔)	京(景敬隔)	iəŋ/iək	梗庚 ₃ 梗耕 梗清 梗青
肩(憬詠昊)		iuieŋ/iuek	梗庚 ₃ 梗耕 梗清 梗青 曾蒸	
n /l	根(懇良訖 ¹¹)	根(懇良)	ɿn/ɿl	臻痕
		巾(謹斬訖)	in/il	臻眞 臻欣 臻痕 臻臻
		珍(緊鎮吉)	in/il	臻眞
	昆(袞輪骨)	昆(袞輪骨)	on/ol	臻魂
	干(筭汗葛)	干(筭汗葛)	an/al	山寒 山刪 山山 山桓
		官(管貫括)	oan/oal	山桓 山刪 山山
	君(攢攢屈)	君(攢攢屈)	un/ul	臻文
		鈞(綰俊橘)	iun/iul	臻眞 臻諄
	鞬(蹇建訖)	鞬(蹇建訖)	ən/əl	山元 山仙
		堅(繭見結)	iən/iəl	山仙 山先
卷(卷孃厥)		uən/uəl	山元 山仙	
涓(畎睂玦)		iuieŋ/iuek	山先 山仙	
m /p	簪(瘁譖戢)	簪(瘁譖戢)	ɿm/ɿp	深侵
		金(錦禁急)	im/ip	深侵
		礎(蹠搥塾)	im/ip	深侵

¹¹ 弓韻部の上声‘重’と根韻部の入声‘訖’はそれぞれ中韻の上声と巾韻の入声である。

	甘(感紺闇)	甘(感紺闇)	am/ap	咸談 咸覃 咸銜 咸咸
	箝(檢劔劫)	箝(檢劔劫)	əm/əp	咸鹽 咸嚴 咸凡
		兼(歉歉頰)	iəm/iəp	咸鹽 咸添
w	高(杲誥)	高(杲誥)	ow	效豪 效肴
		驍(皎叫)	iow	效宵 效蕭 效肴
	鳩(九救)	鳩(九救)	uw	流侯 流尤
		糲(糾晝)	iuw	流幽 流侯 流尤
o	貲(紫恣)	貲(紫恣)	ʌ	止支 止脂 止之
		祇(企棄)	i	止支 止脂 止之 止微
		胎(待戴)	ʌi	蟹哈 蟹灰
		羈(己寄)	ii	止支 止脂 止之 止微
	傀(隗僎)	傀(隗僎)	oi	蟹灰 蟹泰
	佳(解蓋)	佳(解蓋)	ai	蟹佳 蟹皆 蟹哈 蟹泰 蟹夬
		乖(掛卦)	oai	蟹佳 蟹皆 蟹夬
	媯(軌媿)	媯(軌媿)	ui	止支 止脂 止微 蟹祭
		規(癸季)	iui	止支 止脂
	雞(啓鬪)	雞(啓鬪)	iəi	蟹齊 蟹祭 蟹廢
		圭(桂)	iuiəi	蟹齊 蟹祭 蟹廢
	孤(古顧)	孤(古顧)	o	遇模 遇魚
	歌(哿箇)	歌(哿箇)	a	果歌 果戈 仮麻 ₂
		迦(姐借)	ia	果戈 ₃ 仮麻 ₃
		戈(果過)	oa	果戈 仮麻 ₂
	拘(矩履)	拘(矩履)	u	遇虞
		株(駐駐)	iu	遇虞
	居(舉據)	居(舉據)	ə	遇魚
豬(貯著)		iə	遇魚	

伝承音は伊藤智ゆき(2007)の「資料篇」に収録されている5000字余りの漢字音資料を主な比較対象として利用する¹²。原則的には『正韻』のすべての収録字の伝承音を調べなければならないが、伊藤(2007)の資料を除けば今確認できる伝承音資料がないと言えるし、5000余字を利用して伝承音の示している傾向をある程度とらえることができるため、本研究においては上掲の資料だけを研究対象にする。そして、中古音の場合、まず『広韻』(1008)の反切を第1資料として用いたが『広韻』に載っていない字の場合『集韻』(1039)の反切を利用

¹² 伊藤智ゆき(2007)の「資料篇」は15世紀から16世紀の間に刊行された『六祖法宝壇經諺解』『真言勸供・三檀施食諺解』『翻譯小学』『訓蒙字会』『小学諺解』『大学諺解』『中庸諺解』『論語諺解』『孝經諺解』『分門瘟疫易解方』『簡易壁辟瘟方』『誠初心学人文・発心修行章・野雲自警序』『蒙山法語諺解』『四法語諺解』改刊『法華經諺解』『長寿經諺解』に収録されている伝承漢字音を整理した資料である。

する。また本研究の目的は正韻音の音韻体系を突き止めることではないため、中古音の推定音はなるべく使わない。

本論では次の手順を踏んで研究を進める。

まず、『正韻』192 韻類を終声別に分類し、それぞれのグループに属する字をさらに中古音の韻母に基づいて分け、それをまた七音により分類する。

次に、各グループに属する字の伝承音の中声の示している傾向を分析して正韻音の中声がそれにしがっているか否かを確認する。

また、正韻音の中声が伝承音のそれと異なっている場合、該当の中声が何に基づいて修正されたかを明らかにし、伝承音が修正の基準になれなかった理由について述べる。

さらに、すべての韻類について検討した結果、解明された中声の修正の内容をパターン化し、それに基づいて韻書の編者たちの語音に対する考え方を調べる。

1.4 用語について

東国正韻漢字音に関する研究は韓国語史のみならず中国語の音韻史にも同時に関連している。さらに‘訓民正音’の創制や韻書の制作の根底にあったのは中国の伝統的音韻学理論であった。そのため正韻音について述べる際やむなくそれと関係している概念や用語を使わなければならない。そこで以下においては中国語音韻学上の基本用語を簡単にまとめておく。

中国語の音節は声母と韻母に分けられ、韻母はさらに介音(韻頭)、主母音(韻腹)、韻尾の3つの部分に分かれる。一般的に中古音の声母は36 字母体系であり、韻母は16 撰 206 韻の体系であるという。まず36 字母は声母を五音(七音)や清濁により分類したものであるが、そういった仕分け方法は『韻鏡』に最初に現れ、36 字母の字母名は『七音略』から使われ始めたものである。

‘五音(七音)’は唇音・舌音(半舌音)・牙音・齒音(半齒音)・喉音を指す。現代音声学における調音部位(place of articulation)にあたる概念である。早期韻図(『韻鏡』『七音略』)の場合五音が唇舌牙齒喉の順に並んでいる反面、後期韻図(『四声等子』『切韻指南』『切韻指掌図』)には五音が牙舌唇齒喉の順に現れるが、『訓民正音』や『東国正韻』における五音の並び方が後期韻図にしたがっているのが興味深い。

中国の音楽用語としての‘清濁’はそれぞれ高音と低音を表すが、音韻学においてはその意味が明らかではない。ただし‘清濁’はおそらく今の‘無声音’や‘有声音’に近い意味だろうと推測される。中古音の36 字母を表にすると次のとおり。

<表 4> 中古音の 36 字母

清濁 七音	全清	次清	全濁	次濁	全清	全濁
	幫	滂	並	明		

唇音		非	敷	奉	微		
舌音	舌頭	端	透	定	泥		
	舌上	知	徹	澄	娘		
牙音		見	溪	群	疑		
齒音	齒頭	精	清	從		心	邪
	正齒	照	穿	牀		審	禪
喉音		影	曉	匣	喻		
半舌音					來		
半齒音					日		

中古音の韻母は16撰・206韻の体系である。206韻は『広韻』(1008)の韻母体系を指し、平声57韻、上声55韻、去声60韻、入声34韻からなるが、韻とは同一の主母音・韻尾・声調を持つものの集まりをいう。一方韻図においてはすべての韻を16個の撰に類別しているが、撰とは韻尾が同一であり、かつ主母音が類似しているものの集まりをいう。206韻を16撰に区別してみると次の通り。

16撰 206韻

通撰 東董送屋 冬宋沃 鍾腫用燭

江撰 江講絳覺

止撰 支紙寘 脂旨至 之止志 微尾未

遇撰 魚語御 虞麌遇 模姥暮

蟹撰 齊霽霽 祭泰 佳蟹卦 皆駭怪 夬 灰賄隊 哈海代 廢

臻撰 眞軫震質 諄準稕術 臻櫛 文吻問物 欣隱焮迄 魂混愨沒痕很恨

山撰 元阮願月 寒旱翰曷 桓緩換末 刪漕諫蹻 山産欄黠 先銑霰屑 仙獮線薛

効撰 蕭篠嘯 宵小笑 肴巧效 豪皓號

果撰 歌哿箇 戈果過

仮撰 麻馬禡

宕撰 陽養漾藥 唐蕩宕鐸

梗撰 庚梗映(敬)陌 耕耿諍麥 清靜勁昔 青迥徑錫

曾撮 蒸拯證職 登等嶝德

流撮 尤宥宥 侯厚候 幽黝幼

深撮 侵寢沁緝

咸撮 覃感勘合 談敢闕盍 鹽琰豔葉 添忝忝帖 咸賺陷洽 銜檻鑑狎 嚴儼釅業
凡范梵乏

韻母を説明する際、‘開合’や‘等’がよく用いられるが、両者はすべて韻図において現れる用語である。まず‘開合’は前期韻図である『韻鏡』¹³に初めて登場する用語であり、四十三転の各図の先頭に‘開’‘合’‘開合’のような形で現れる。江永の『音学辨微』(1759)には開口が発音するとき唇をまるくしない音であり、合口が唇をまるくする音であると述べられている¹⁴。この説明によると、開合の意味は今の lip-rounding の意味と合致すると考えられる。一方『訓民正音』(1443)に現れる‘闔關’の概念が上述した‘開合’に関わっていると考えられるが、両者の意味が完全に一致しているかどうかについては断言できない。

次に‘等’は『守温韻学殘卷』「四等重輕例」に初めて現れる用語である。『四声等子』や『切韻指南』では‘等’が用いられている反面『韻鏡』や『七音略』では‘等’の代わりに‘位’が使われている。‘等’の概念に関する学者らの意見は未だ一致していないが、『音学弁微・弁等例』¹⁵の「音韻有四等、一等洪大、二等次大、三四皆細、而四尤細」といった説明を参考にすると開口度が最も大きいのが1等であり、2等は1等より開口度が小さいと解釈するのが妥当だと思われる¹⁶。

¹³ 『韻鏡』の刊行年度は不詳。おそらく850年頃以降、すなわち唐末くらいに作られたと思われる。

¹⁴ 『音学辨微』 「七. 辨開口合口」 “音呼有開口合口。合口者吻聚、開口者吻不聚也。”
최영애(2000 : 123)

¹⁵ 清代の学者である 江永(1681-1762)の著書

¹⁶ しかし、심소희(1995 : 92-93)は唐宋時期までさかのぼると、四等が声母と深く関連していることが確認できると述べながら、四等と三十六字母の結合関係を次の表のように説明した。林茶英(2015 : 8)

<表 5> 四等と三十六字母の結合関係

来	匣	曉	影	心	從	清	精	疑	溪	見	泥	定	透	端	明	並	滂	幫	一	
等																				
来	匣	曉	影	禪	審	床	穿	照	疑	溪	見	娘	澄	徹	知	明	並	滂	幫	二
等																				

明末清初時期の韻図や韻書を見ると、一等と二等が合流し、三等と四等が合流してしまったことが確認できる。また、それまで用いられていた‘四等’や‘開合’の代わりに、‘四呼’という概念が韻の説明に使われるようになる。しかし、四呼が四等や開合とは全く関係のないものであったわけではない。これらの関係は次のとおりである。

<表 6> 四等’及び‘開合’と‘四呼’の関係

	開口	合口
一等	開口呼	合口呼
二等		
三等	齊齒呼	撮口呼
四等		

最後に韻母に関わっている用語には‘韻撰(撰)’‘韻部’‘韻(韻目)’‘韻母’‘韻類’の5つがあるが、各々の概念を簡単にまとめると次のとおり¹⁷。조운성(2011B: 6)参照

‘韻撰(撰)’	‘韻部’	‘韻(韻目)’	‘韻母’	‘韻類’
韻腹	韻腹	韻腹	韻頭	韻頭
近	韻尾	韻尾	韻腹	韻腹
韻尾	同	声調	韻尾	韻尾
同		同	同	声調
				同

『正韻』の91韻のうち平声だけを数えると26個になるが、これを一般的に26韻部という。即ち「捫觥肱公江弓京/根昆干君韃/簪甘箝/高鳩/賁傀佳嬌雞/孤歌拘居」が26韻部であるが、このうち「捫/根/簪/賁」韻部を除けば、22韻部の‘韻部’の概念は上述した‘韻部’の概念と一致する。「捫/根/簪/賁」韻部の‘韻部’は却って‘韻撰’の概念に類似しているかもしれない。同様に91韻のうち「捫肯互亟/根懇良訖/簪痒譜戢/賁紫恣」の15韻

日 来 喻 曉 影 禪 審 床 穿 照 疑 群 溪 見 娘 澄 徹 知 明 微 並 奉 滂 敷 幫 非 三
等

来 喻 匣 曉 影 邪 心 從 清 精 疑 溪 見 泥 定 透 端 明 並 滂 幫 四
等

¹⁷ 下の内容によると‘韻撰’とは韻腹が類似しており、韻尾が同一である韻の集まりであり、‘韻部’とは韻腹と韻尾が同一である韻の集まりであるということが分かる。

を除けば残りの 76 韻の‘韻’の概念は上述の‘韻’と同一の意味を表す。91 韻をさらに同一の中声を持つ韻別に再分類すると 192 韻類になるが、ここにおける‘韻類’は上述した‘韻類’と同一の意味である。

『広韻』の 36 字母と『正韻』の 23 字母の字母名が重なる場合がほとんどなく、説明する際に字母名が用いられる場合があまり多くないため、36 字母と 23 字母の字母名をそのまま使っても問題はないだろう。しかし、韻母の場合中古音の韻母が 206 個もあり、『正韻』の韻類が 192 個ある。そこで、本論においては混同を避けるために 206 韻の韻母名は漢字で示し、26 韻部や 192 韻類はローマ字で表記する。192 韻類のローマ字転写の一覧は以下の<図 2>のとおり。

○終声類

ㄱ	궁楮	: 궁肯	· 궁ᄃᆞ	· 극亟	iŋ/ik
ᄃ	딩徴	: 딩慶	· 딩瞪	· 딩陟	iŋ/ik
ᄃ	깁庚	: 깁梗	· 깁更	· 각格	Δiŋ/Δik
ᄃ	굉觥	: 굉礦	· 굉橫	· 곡號	oiŋ/oik
ᄃ	굉肱	: 곡國			uiŋ/uik
ᄃ	궁公	: 궁拱	· 궁貢	· 곡穀	oŋ/ok
ᄃ	통踵	: 통冢	· 통渾	· 독塚	ioŋ/iok
ᄃ	강江	: 강講	· 강絳	· 각覺	aŋ/ak
ᄃ	당張	: 당長	· 당帳	· 닥著	iaŋ/iak
ᄃ	광光	: 광廣	· 광誑	· 각郭	oaŋ/oak
ᄃ	궁弓	: 궁誇	· 곡菊		uŋ/uk
ᄃ	중中	: 중重	· 중中	· 옥圍	iuŋ/iuk
ᄃ	경京	: 경景	· 경敬	· 격隔	iəŋ/iək
ᄃ	평平	: 평憬	· 형詠	· 곡昊	iuieŋ/uiiek

ㄴ終声類

ㄴ	근根	: 근懇	· 근艮		Δn/Δl
ㄴ	근巾	: 근謹	· 근靳	· 근訖	in/il
ㄴ	딘珍	: 딘緊	· 딘鎭	· 딘吉	in/il
ㄴ	곤昆	: 곤袞	· 곤論	· 곤骨	on/ol
ㄴ	간干	: 간筭	· 간旰	· 간葛	an/al
ㄴ	관官	: 관管	· 관貫	· 관括	oan/oal
ㄴ	군君	: 군攬	· 군據	· 군屈	un/ul
ㄴ	균鈞	: 균梱	· 준俊	· 균橘	iun/iul
ㄴ	건韃	: 건蹇	· 건建	· 건訐	ən/əl
ㄴ	견堅	: 견繭	· 견見	· 견結	iən/iəl
ㄴ	권卷	: 권卷	· 권孌	· 권厥	uən/uəl
ㄴ	권涓	: 권畎	· 권睞	· 권玦	iuieŋ/uiiel

ㄹ終声類

ㄹ	증簪	: 증瘁	· 증譜	· 증戢	Δm/Δp
ㄹ	금金	: 금錦	· 금禁	· 금急	im/ip
ㄹ	딤礎	: 딤隄	· 딤搥	· 딤繫	im/ip
ㄹ	감甘	: 감惑	· 감紺	· 감閤	am/ap
ㄹ	검箝	: 검檢	· 검劔	· 검劫	əm/əp
ㄹ	겸兼	: 겸歉	· 겸款	· 겸頰	iəm/iəp

ㅁ終声類

ㅁ	골高	: 골杲	· 골誥		ow
ㅁ	골驍	: 골皎	· 골叫		iow
ㅁ	골鳩	: 골九	· 골救		uw
ㅁ	골樛	: 골糾	· 둘晝		iuw

○終声類

ㅇ	중贊	: 중紫	· 중恣		Δ
ㅇ	깁祇	: 깁企	· 깁棄		i
ㅇ	딩胎	: 딩待	· 딩戴		Δi
ㅇ	굉羈	: 굉己	· 굉寄		ii
ㅇ	굉傀	: 굉隗	· 굉僧		oi
ㅇ	갱佳	: 갱解	· 갱蓋		ai
ㅇ	괩乖	: 괩掛	· 괩卦		oai
ㅇ	굉媯	: 굉軌	· 굉媿		ui
ㅇ	굉規	: 굉癸	· 굉季		iu
ㅇ	굉雞	: 굉啓	· 굉闕		iəi
ㅇ	괩圭	: 괩桂			iuiei
ㅇ	공孤	: 공古	· 공顧		o
ㅇ	강歌	: 강哥	· 강箇		a
ㅇ	장迦	: 장姐	· 장借		ia
ㅇ	광戈	: 광果	· 광過		oa
ㅇ	궁拘	: 궁矩	· 궁屨		u
ㅇ	등株	: 등	· 등駐		iu
ㅇ	경居	: 경擧	· 경據		ə
ㅇ	덩豬	: 덩貯	· 덩著		iə

< 図 2 > 192 韻類のローマ字表記

2 韻書『東国正韻』について

2.1 『東国正韻』編纂の目的と動機

‘訓民正音’を制定した翌年の1444年(世宗26年)世宗は『韻会』の諺訳を命じた¹⁸。このことは世宗実録103巻に記録されている¹⁹。即ち

命集賢殿校理崔恒・副校理朴彭年・副修撰申叔舟・李善老・李塏・敦寧府注簿姜希顔等、詣議事廳、以諺文譯《韻會》²⁰。東宮與晉陽大君瑀・安平大君瑔監掌其事、皆稟睿斷。賞賜稠重、供億優厚矣。

しかし、それ以降『韻会』の諺訳を完成し、その本を刊行したという記事はどこにも見当たらない。つまり、諺訳事業はおそらく何らかの理由で中止されたと推測される。ただ、その事業が中止になった原因は不明である。このことに関連して정경일(2002: 67-68)は『韻会』の漢字音が韓国漢字音とは余りにも異なっていることやさらに『韻会』の音韻体系が明代の‘正音’を表すために作られた『洪武正韻』の音韻体系とも相当違っていることが事業中止の原因になった可能性が高いとしている。つまり『韻会』の表している漢字音が韓国漢字音だけでなく中国漢字音にも類似していないため、学者たちにそれを諺訳する必要性が感じられなかったということである。ただ、そうすると最初に『韻会』が諺訳の対象と選ばれた理由が説明しにくい。そのことを解明できないと事業が中止になった原因を明らかにすることもできないだろう。なお、上掲書(67-68)は『韻会』の反訳事業は2通りに分けられ韓国漢字音の韻書である『東国正韻』(1448)と中国漢字音の韻書である『洪武正韻訳訓』²¹(1455)の編纂という結果をもたらしたと述べているが、実際に『韻会』の諺訳本が刊行されなかったことやその後『正韻』と『訳訓』が次々と編纂された事実から見ると3種の韻書がお互いに深く関連していることは否定できないと考えられる。

河野六郎(1940-1979: 191-192)は上述した記事を根拠にして『韻会』諺訳の試みが『正韻』の編纂に関係があると述べている。また、河野六郎(1959-1979: 283)は新しい文字を作るためには当時の韓国語(朝鮮語)を分析しなければならなかったが、当時の学者たちにとって扱いやすいのは‘朝鮮語音(固有語)’より韓国漢字音の方であったと言いながら、しか

¹⁸ 実録の記事における‘『韻会』’とは『古今韻会』ではなく『古今韻会挙要』である可能性がある。강신항(1997:51)を参照。

¹⁹ 実録記事は国史編纂委員会の朝鮮王朝実録データベースを利用した。
(<http://db.history.go.kr/>)

²⁰ 下線は筆者。

²¹ 以下においては『訳訓』と略す。

し、申叔舟が言った通り‘朝鮮字音(伝承音)’が相当乱雑であったため伝承音の整理から着手しなければならなかったと述べている。さらに、漢字音の分析から得られたものは朝鮮語音に適用したに違いなく、その結果‘訓民正音’が制定され、同時に材料として用いられた漢字音はさらに整理され『正韻』の編纂に至ったと説明している。

『正韻』の編纂目的は乱れていた伝承漢字音を校正し、新しい文字‘訓民正音’をもって表記した正しい漢字音を提示することにあつたと考えられる²²。そのことは「序」を読めばすぐ明らかになる。「序」の内容を次々と見ると最初に“‘声’には‘七音’と‘四声’が揃っており、そこから‘清濁’‘軽重’‘深淺’‘疾徐’が生まれる²³”と説明し、次に音韻学の発展過程について述べている²⁴。また、語音の違いを引き起こす原因が地域や風土の違いにあるとし²⁵、伝承音と中国音が異なっていることが当然であると言っているが、続いて当時の伝承音を見ると変わってはいけぬ語音の資質まで変わっていると批判しながら、伝承音が乱雑になった原因を並べている²⁶。そしてその‘乱れ’を速やかに直さなければ手の施しようがない状態になるだろう²⁷と述べているが、これこそ『正韻』を編纂した目的であると考えられる²⁸。つまり、世宗と韻書の編者たちは当時の伝承音に‘清濁’‘軽重’‘深淺’‘疾徐’などの語音資質が守られていないため、それを修正するしかないと判断し『正韻』を編纂したのである。

²² 유창균(1966 : 32-35)は「序」に基づき『正韻』の編纂目的が“1)我々の言語体系に基づいて 2)復古的韻学体系を再構成することにより 3)聖人之道へ進める”ことにあると述べている。

²³ “天地網緼大化流行而人生焉、陰陽相軋氣機交激而聲生焉。聲既生而七音自具七音具、而四聲亦備。七音四聲經緯相交、而清濁輕重深淺疾徐生於自然矣。是故包犧畫卦蒼頡制字、亦皆因其自然之理、以通萬物之情。”(序 1a)

²⁴ “及至沈陸諸子彙分類集諧聲協韻而聲韻之說始興。作者相繼各出機杼論議既衆舛誤亦多。於是溫公著之於圖康節明之於數、探蹟鉤深以一諸說。”(序 1a-1b)

²⁵ “夫音非有異同、人有異同。人非有異同、方有異同。盖以地勢別而風氣殊、風氣殊而呼吸異。東南之齒唇、西北之頰喉是已…(後略)”(序 1b)

²⁶ これについては 3.1 においてさらに詳しく述べる。

²⁷ “世之爲儒師者、往往或知其失、私自改之、以教子弟、然重於擅改、因循舊習者多矣。若不一大正之、則愈久愈甚、將有不可救之弊矣。”(序 3b)

²⁸ 一方、사재동(2014)は正しい漢字音を示すというのは『正韻』の表向きの編纂目的であり、実際にはそれが仏教と密接に関係しているかもしれないと述べた。つまり、正韻音が主に国文仏經の刊行、大乘經典の諺解、王室内の国文文献を制作する際用いられたことから『正韻』が作られた実の目的は仏經諺解などの国文事業にあつたと解釈しているのである。このことを解明するためには『正韻』の収録字のうち仏經に主に出現する字と儒教書によく使われる字を分けて両者の特徴をさらに深く検討しなければならないが、この問題は今後の課題にする。

2.2 『洪武正韻訳訓』との比較

『東国正韻』(1448)に続いて刊行された『洪武正韻訳訓』(1455)は世宗の命により明代の官撰韻書である『洪武正韻』(1375)²⁹を翻訳した韻書である。申叔舟の『保閑齋集』に載っている「洪武正韻訳訓序」には次のように書かれている。即ち

我世宗莊憲大王留意韻學、窮研底蘊、創制訓民正音若干字... (中略)... 於是以吾東國世事中華而語音不通、必頼傳譯、首命譯洪武正韻... (後略) (『洪武正韻訳訓』「序」1a-1b)

つまり、『洪武正韻訳訓』は中国との交流の際通訳官に頼らなければならない不便をなくすため刊行されたと推測できる。しかしよく知られているように『洪武正韻』(1375)は当時の実際の中国音を反映していなかった。そこで申叔舟などの韻書の編者たちは正確な中国音を転写(transcription)するため中国まで何回も訪ねなければならなかったが「序」にそういった編者たちの工夫について詳しく述べられている³⁰。そして韻書には彼らが調べた実際の北方語音(主に北京音)が‘俗音’として収録されている。

収録字の漢字音は当然ながら反切の代わりに‘訓民正音’をもって表記している。正韻音が韓国漢字音を写しているのに対して洪武正韻訳訓漢字音³¹は当時の中国音を写している³²。今の言語学用語をもって言えば、正韻音が外来語を、訳訓音が外国語を表していると考えて良いだろう³³。それから『正韻』と『訳訓』の編纂に参加した人物がほとんど一致しており、中でも崔恒・朴彭年・申叔舟・成三問・姜希安・李埏・李善老は‘訓民正音’の創制に

²⁹ 『洪武正韻』には初刊本の76韻本(1375)と重修本の80韻本(1379)があるが、いずれも実際の中国音を反映していない。『洪武正韻訳訓』は76韻本を翻訳したものであるが、76韻本が選ばれた理由は明らかではない。

³⁰ “(前略)然語音既異、傳訛亦甚。乃命臣等就正中國之先生學士。往來至于七八、所與質之者若干人。燕都爲萬國會同之地。而其往返道途之遠、所嘗與周旋講明者又爲不少。以至殊方異域之使、釋老卒伍之徼、莫不與之相接、以盡正俗異同之變。且天子之使至國而儒者、則又取正焉。凡謄十餘藁、辛勤反復、竟八載之久。而向之正罔缺者、似益無疑。”(『洪武正韻訳訓』「序」1b-2a)

³¹ 以下『洪武正韻訳訓』を『訳訓』と略し、洪武正韻訳訓漢字音を訳訓音と略す。

³² 小倉進平(1964: 492-504)が『正韻』を『訳訓』と同様中国漢字音を載っていると述べているが、これに関連して河野六郎(1979: 200-201)は『正韻』は韓国漢字音の韻書であり、『訳訓』は『洪武正韻』(1375)を翻訳した中国音の韻書であると指摘している。

³³ 当時の学者らに‘韓国漢字音’と‘中国漢字音’が今の‘外来語’や‘外国語’と同一の概念として認識されていたとは言い切れないが、今のところ最も類似している概念と思われるのが上述した2つである。

もかかわっている人物であるため³⁴、正韻音と訳訓音の表記上の特徴を調べれば、朝鮮初期の外来語と外国語の表記方針が窺われると考えられる。本節においては『正韻』と『訳訓』そして正韻音と訳訓音の差について調べたいと思う。

『正韻』と『訳訓』を比較してみると、最も特徴的なのが字の分類方法である。つまり、『正韻』が字を終声>中声>初声>四声の順に分類した反面、『訳訓』は中国伝統の韻書の分類方法にしたがって四声>韻母>声母の順に字を分けているのである。また、声母韻母体系を見ると『正韻』が23字母91韻の体系となっているのに対して『訳訓』は31字母76韻の体系であるが、31字母76韻³⁵が『洪武正韻』の体系であることは言うまでもない。31字

³⁴ 『解例』：鄭麟趾 崔恒 朴彭年 申叔舟 成三問 姜希安 李塏 李善老

『正韻』：申叔舟 崔恒 成三問 朴彭年 李塏 姜希顔 李賢(善)老 曹變安 金曾

『訳訓』：申叔舟 崔恒 成三問 朴彭年 李塏 姜希顔 李賢(善)老 曹變安 金曾 孫壽山

³⁵ 31字母と76は次の通り

<表7> 『洪武正韻訳訓』の31字母

	全清	次清	全濁	不清不濁	全清	全濁
牙音	見 ㄱ	溪 ㅋ	群 ㄱ	疑 ㅇ		
舌頭音	端 ㄷ	透 ㅌ	定 ㄷ	泥 ㄴ		
唇音重	幫 ㅍ	滂 ㅍ	並 ㅍ	明 ㅁ		
唇音輕	非 ㅍ		奉 ㅍ	微 ㅍ		
齒頭音	精 ㄷ	清 ㄷ	從 ㄷ		心 ㄷ	邪 ㄷ
正齒音	照 ㄷ	穿 ㄷ	牀 ㄷ		審 ㄷ	禪 ㄷ
喉音	影 ㅇ	曉 ㅇ	匣 ㅇ	喻 ㅇ		
半舌				來 ㄷ		
半齒				日 ㄷ		

<表8> 『洪武正韻訳訓』の76韻

四声	韻
平声	東支齊魚模皆灰眞寒刪先蕭爻歌麻遮陽庚尤侵覃鹽

ㄴ終声「根・一」昆ㄴ干ㄷ斗君ㄸㄸ韃ㄷㄷㄷㄷ

ㄹ終声「簪・一」甘ㄹ筭ㄷㄷ

ㄹ終声「高」ㄴㄴ鳩ㄸㄸ

ㅇ終声「賞・一」ㄷㄷ愧ㄷ佳ㄷㄷ媯ㄷㄷ雞ㄷㄷ孤ㄴ歌ㄷㄷ斗拘ㄸㄸ居ㄷㄷ

ただ、訳訓音の表記に使われた中声字の数が正韻音のそれより少ないが、『訳訓』においては同一の中声異なる音声を写している場合もあった。例えば『訳訓』の刪韻には発音に関する次のような注釈が付いている。すなわち

韻内中声ト音諸字其声稍深宜ト・之間読之唯唇音正齒音以ト呼之

その反面『正韻』には以上のような発音注釈が全く付いていない。それは正韻音に使われた中声字が固有語に用いられた中声字と同一の発音を表したためだろうと考えられる。

終声字の目録を比較してみると次のとおり。

韻尾	訳訓音	正韻音
ŋ	ㅇ/ㄱ	ㅇ/ㄱ
n	ㄴ/ㄷ	ㄴ/ㄷ
m	ㅁ/ㅂ	ㅁ/ㅂ
w	ㅁ	ㅁ
i(及びø)	ø	o

終声字の場合、まず n 韻尾の入声韻尾(t)を『訳訓』では‘ㄷ’で写したが『正韻』では‘ㄷ’をもって表記したことや i(及びø)韻尾を『訳訓』では表記しなかった反面『正韻』では‘o’で写したことが異なっている。実例は次のとおり。

字	伝承音	正韻音	訳訓音	反切
弗	블H	·불	·분	分勿
雞	계L	경	계	古奚

さらに『訳訓』の終声字‘ㅁ’が音価(-w)を持っているのに対して『正韻』の終声字‘ㅁ’はその字が中古音の w 韻尾を伴っていることを示すだけで実際の音価を持たない。例えば‘高’の正韻音と訳訓音は次のように現れる。

字 伝承音 正韻音 訳訓音 反切

高 高L **골** **갈** 古勞

‘高’の中古音は[pu]³⁸と推定されるが、正韻音では [pu]を1つの‘ㄱ’で写している³⁹ため、終声のㅁは単なるしるしに過ぎないと考えられる。その反面訳訓音の場合、主母音の[p]をㄱで韻尾[u]をㅁで表記したと解釈することができる。つまり‘高’の正韻音は初声‘ㄱ’中声‘ㄴ’終声‘ㅁ’と分析され、訳訓音は声‘ㄱ’韻‘ㅁ’と分析することができるのであるが、これは中国音が声と韻に分かれるのに対して朝鮮の学者は1つの音節を初声中声終声の3つの部分と分析したことと関連している可能性がある⁴⁰。そして正韻音の場合必ず初声中声終声を備えて表記したのに対して訳訓音はそうではない(例えば上述の‘雞’)ということもそういった中国漢字音と韓国漢字音の音節に対する異なる認識を反映しているかもしれない。

³⁸ 再構音は麥耘(2009)による。

³⁹ これは伝承音にしたがって表記した結果であるが、4.4においてさらに詳しく述べる。

⁴⁰ これに関連して임용기(2008:152)は‘虬(渠幽切)’の訳訓音‘**궐**’の‘ㄱ’が声を‘ㄱ’が韻を表記していると述べている。そしてそれは『訓民正音』「初声解」において‘君’の漢字音‘**군**’を‘ㄱ’と‘**ㅁ**’に分析し‘ㄱ’が声を‘**ㅁ**’が‘韻’をそれぞれ写していると解釈したと等しいとしながら、つまり‘**궐**’は中国音の音節に対する二分法的考え方を反映した表記であると述べている。

3 初声と終声の修正

東国正韻漢字音はそれまで使われてきた伝承漢字音をある基準により修正した人工の漢字音体系である。したがって正韻音の性格を理解するためにはまず韻書の編者たちが伝承音をどういった基準により修正したかを明らかにしなければならない。「序」では主に初声と終声だけに関するものではあるが、編者らが考えていた伝承音の問題点やその原因そして修正の実例などについて詳しく説明しているため、その内容に基づけば『正韻』の編纂方針及び修正基準がうかがわれる。これについてすでに数多くの先行研究が行なわれている。そのうち河野六郎(1940-1979)、유창균(1966)などは申叔舟の「序」を詳しく分析しており、조운성(2011B)は「序」の内容だけでなく中国音資料(主に中古音と『挙要』の字母韻及び反切)や伝承音資料まで扱って正韻音の特徴を究明している。そこで本章においては先行研究の結論を整理しながら「序」の内容と初声終声の修正について述べたいと思う。

3.1 申叔舟の「序」

言語と語音の変化について申叔舟は地域や風土の違いこそ語音の違いを引き起こす原因であり、語音とは永久不変のものではなく変化するものであるため、伝承音が中国音と異なっているのは当然であると言っている⁴¹。このことから当時の学者たちが韓国語が中国語と異なっている事実はもちろん伝承音が中国音の声母と韻母の音色をそのまま反映していないことも自然なことと認識していたと推測される。

申叔舟は両言語の差を認めていながら同時に変わってはいけない資質(或いは法則)について言及している。すなわち‘清濁’や‘四声’がそれであるが⁴²、この2つの資質が中国音の声母と韻母を説明する際使われる‘清濁’や‘四声’そのものとは言い切れない。つまり、

⁴¹ “夫音非有異同、人有異同。人非有異同、方有異同。蓋以地勢別而風氣殊、風氣殊而呼吸異。東南之齒唇、西北之頰是已。遂使文軌雖通、聲音不同焉。矧吾東方表裏山河、自爲一區。風氣已殊於中國、呼吸豈與華音相合歟。然則語音之所以與中國異者、理之然也。至於文字之音、則宜若與華音相合矣。然其呼吸旋轉之間、輕重吸關之機、亦必有自牽於語音者。此其字音之所以亦隨而變也。”(序 1b-2a)

この言語に対する観点が基づいているのはいわゆる‘風土説’であるが『訓民正音』の鄭麟趾の「序」にもそれが確認できる。すなわち次の部分である。

“有天地自然之聲、則必有天地自然之文、所以古人因聲制字、以通萬物之情、以載三才之道、而後世不能易也。然四方風土區別、聲氣亦隨而異焉。蓋外國之語、有其聲而無其字。”(世宗実録 113 卷)

⁴² “其音雖變清濁四聲則猶古也。”(序 2a)

韻書の編者たちはおそらく上述の2通りの資質を言語の普遍的資質として認識していた可能性が高いのである。ともかく「序」には当時の伝承音が相当乱れていることを指摘し、その状況について詳しく述べている。すなわち

而曾無著書以傳其正、庸師俗儒、不知切字之法、昧於紐躡之要、或因字體相似而爲一音、或因前代避諱而假他音、或合二字爲一、或分一音爲二、或借用他字、或加減點畫、或依漢音、或從俚語。(序 2a-2b)

河野六郎(1979: 183-185)は“或因字體相似而爲一音”が伝承音不統一の最も重要なものとし、諧声声符による類推形がそれに当たると述べながら、例えば‘欧鷗’の伝承音(本文では朝鮮字音)がいずれも‘구’であるが、この音は‘区’という諧声声符による類推形であり、その『広韻』の反切(烏侯切)や日本字音‘オウ’より2字の正しい音が‘우’であることが明らかになると述べている。また“或合二字爲一”は例えば‘娑(살)’‘耄(늬)’のようなものと思われるとしながら、このことから一種の発音文字をより古い時代(朝鮮朝より早い時代)に構成していた可能性が考えられると述べた。さらに“或分一音爲二”の例として‘茶’の伝承音が‘차’の他に‘다’も使われていること‘車’の伝承音に‘거’と‘차’があることを挙げている。そして“或依漢音”というのはおそらく近代中国音の借用を言っているだろうと述べながら、例えば‘鞋(혜)’や‘階祇(계)’などが近代音の借用であるとし、吏読や地名などに漢字を訓読するものがあるがそれがおそらく“或從俚語”であろうと述べている⁴³。

3.2 初声の修正

『正韻』は23字母体系であり、23字母は清濁と七音により分かれている。中古音の36字母に比べ唇重音唇軽音、舌頭音舌上音、齒頭音正齒音がそれぞれ唇音舌音齒音に合流している。23字母を表にすると次のとおり。

<表9> 『東国正韻』の23字母

清濁 七音	全清	次清	全濁	不清不濁	全清	全濁
牙音	君 ㄱ	快 ㅋ	蚪 ㆁ	業 ㆁ		
舌音	斗 ㄷ	呑 ㆁ	覃 ㄷ	那 ㄴ		
唇音	驚 ㅍ	漂 ㅍ	歩 ㅍ	彌 ㅍ		
齒音	即 ㅈ	侵 ㅈ	慈 ㅈ		戌 ㅈ	邪 ㅈ
喉音	挹 ㅎ	虚 ㅎ	洪 ㅎ	欲 ㅎ		
半舌音				閭 ㅎ		

⁴³ 河野六郎(1940-1979)では“或因前代避諱而假他音”“或借用他字、或加減點畫”についてはあまり言及していない。

半齒音				穰 △		
-----	--	--	--	-----	--	--

伊藤智ゆき(2007:45)では中古音の36字母と伝承音の初声の対応を次のように表している。

<表10> 中古音36字母と伝承音初声の対応関係⁴⁴

		全清		次清		全濁		次濁	
唇音	幫組	幫	ㄅ(ㄅ)	滂	ㄆ(ㄆ)	並	ㄇ(ㄇ)	明	ㄇ
	非組	非	ㄆ	敷	ㄆ	奉	ㄆ	微	ㄆ
舌音	端組	端	ㄊ	透	ㄊ	定	ㄊ	泥	ㄊ
	來組							來	ㄌ
	知組	知	ㄊ	徹	ㄊ	澄	ㄊ	娘	ㄊ
齒音	精組	精	ㄑ	清	ㄑ	從	ㄑ		
		心	ㄑ			邪	ㄑ		
	莊組	莊	ㄑ	初	ㄑ	崇	ㄑㄑㄑ		
		生	ㄑ			俟	ㄑ		
	章組	章	ㄑ	昌	ㄑ	船	ㄑ	日	△
		書	ㄑ			常	ㄑ	羊	○
牙喉音		見	ㄑ	溪	ㄑ	群	ㄑ	疑	○
		曉	ㄑ			匣	ㄑ		
		影	○					云	○

<表10>から伝承音において中古音の全濁が全清と合流しており、舌音と齒音が1系列に合流していることが目立つ。ともかく伝承音の初声表記に用いられた初声字は『正韻』の23字母より9字も少ない「ㄑㄊㄊㄌㄇㄑㄑㄑㄑㄑㄑㄑㄑㄑ」の14字である。つまり、このことから『正韻』の編者たちが伝承音の初声を大幅に修正したことが明らかになるが、以下ではまず「序」で説明している初声の修正について述べる。

「序」に現れる初声に関する説明は次の5つのことに要約できる。

- ① 若以牙音言之溪母之字太半入於見母此字母之變也。(序2b)
- ② 溪母之字惑入於曉母此七音之變也。(序2b)
- ③ 我国語音其清濁之變與中国無異而於字音獨無濁声豈有此理 此清濁之變也。(序2b-3a)
- ④ 初声之變亦衆国語多用溪母而字音則獨夬之一音而已此尤可笑者也。(序3a)
- ⑤ 如舌頭舌上唇重唇輕齒頭正齒之類於我国字音未可分辨亦當因其自然可必泥於三十六字母乎。(序4a)

⁴⁴ 原文では伝承音の初声をローマ字で表しているが、ここではハングルで表記した。

そして「序」では固有語においては「ㄷ」が頻繁に使われているのに初声が「ㄷ」に現れる字が「夫(부)」しかないということを指摘している。

最後に、伝承音に舌頭音と舌上音、唇重音と唇軽音、歯頭音と正歯音の区別がないということも指摘しているが、それに関して風土の違いにより生じた両言語(韓国語と中国語)の差と認め、修正する必要がないと述べている。

以上で「序」に述べられている初声の修正について検討した。しかし俞昌均(1967: 126-128)が指摘したように『正韻』の「業欲慈邪」が一体何を基準にとり分類されたかが問題として残っている。上述したように23字母と36字母の対応関係はとても整然としている。例えば「君快虯」の場合36字母の「見溪群」と一対一の対応関係にあり、例外が全くないのである(唇音舌音歯音喉音の例は省略)。したがって業母は牙音の不清不濁(すなわち疑母)に、欲母は喉音の不清不濁(すなわち喻母)に、慈母と邪母は歯音の全濁に対応しなければならないが、実際のところ疑母の一部が‘ㅇ(欲母)’に喻母の一部が‘ㅇ(業母)’に現れるなど、上述の4つの字母に限って中古音の36字母と整然とした対応を見せない。

조운성(2011B: 19-22)は『正韻』の23字母のうち業母と欲母が中古音の36字母ではなく『挙要』の36字母にしたがって分類されたと述べている。『挙要』の36字母は次のとおり。

<表 11> 『古今韻会挙要』の36字母⁴⁸

清濁 九音	清	次清	次清次	濁	次濁	次濁次
角	見	溪		羣	疑	魚
徵	端	透		定	泥	
宮	幫	滂		並	明	
次宮	非	敷		奉	微	
商	精	清	心	從		邪
次商	知	徹	審	澄	娘	禪
羽	影	曉	幺	匣	喻	合
半徵商					來	
半商徵					日	

上掲論文では『正韻』の業・欲母と『挙要』の疑・魚・喻母そして中古音の疑・喻母の対応関係を分析し、3者の関係について次のとおりに述べている。

たと考えられ、制約的分布に変化が生じた結果語中以外の位置にも現れるようになったと解釈している。

⁴⁸ 『挙要』の36字母は元代の音韻を反映している。中古音の36字母に比べると舌上音と正歯音が合流していること、魚・幺・合母が増えたことが目に立つ。

つまり、中古疑母 1・2・3 等開口、喻母₃(すなわち云母)開口、疑母 1・2 等合口が『挙要』の疑母に属し、中古疑母 3 等合口及び云母合口が『挙要』の魚母に属し、中古喻母₄(すなわち以母)開合口と疑母 4 等開口が『挙要』の喻母に属するが、『挙要』の疑母と魚母が『正韻』の業母に当たり『挙要』の喻母が『正韻』の欲母に当たるということである。これに関連して차익중(2014A: 36)は『正韻』に中古音以降の音韻変化(すなわち中古音疑母が消失した変化)が反映されていることを示しているとしながら、23 字母を説明する際中古音 36 字母だけを利用してはいけない理由がそこにあると述べている。

一方、23 字母の慈母と邪母はさらに一層複雑であるが、慈母が中古従母・船母(章組全濁)の一部・崇母(莊組全濁)の一部に対応し、邪が中古邪母禪母・船母の一部・崇母の一部に対応する。問題になるのは船母(章組全濁)と崇母(莊組全濁)が本来双に現れるべきであるが、実際にはすべての船母字の初声が双で写されており、崇母字の初声表記には双と双が共に現れるということである。조운성(2011B: 22-24)は『正韻』の小韻字の正韻音と伝承音を比較しながら、中古船母が伝承音の傾向に基づいて分類された可能性があり得ると述べている。上掲論文で示している小韻字は次のとおり。

船母の小韻字⁴⁹

「食 實職 澄訖・씩 식 H⁵⁰」 「贖 神蜀 澄菊・속 속 H」 「射 食亦 澄訖・씩 석 H」 「神 乘人 澄巾 썸 신」 「盾 豎尹 禪穉:瓮 R 순」 「順 殊閨 禪攢·瓮 순 H」

つまり、船母の伝承音の初声が双に現れる傾向にあるため中古船母を『正韻』の邪母に分類したということである。例字を見れば分かるように船母は中古音 36 字母と『挙要』の字母韻どちらにもしたがっていなくて、伝承音の傾向により分類されたように見える。しかし崇母の場合必ずそうしたわけではない。上掲論文で示している小韻字は次のとおり。

崇母の小韻字⁵¹

慈母に属する小韻字

「棧 仕限 澄筈 :짚 잔 H」 「撰 雛縮 澄撰 :짚 찬 R」 「撰 雛免 澄撰 :짚 선 R」 「岑 鉏 簪 澄簪 𪛗 𪛗」 「讒 鋤咸 澄甘 째 참」 「讒 士監 澄紺· 째 참」 「儻 仕陷 澄紺· 째 참」 「爍 士洽 澄怛· 째 잡 H」 「柴 鉏佳 澄該 썸 𪛗」 「豺 牀皆 澄該 썸 𪛗」 「鉏 牀魚 澄孤 썸 서」 「助 牀據 澄顧· 썸 조 R」 「雛 崇芻 澄孤 썸 추」

⁴⁹ 上掲論文には 16 個の小韻字が挙げられているが、ここでは 6 個だけ載せる。伝承音は伊藤智ゆき(2007)による。

⁵⁰ 括弧中は『正韻』の小韻字、反切、字母韻、正韻音、伝承音の順

⁵¹ 上掲論文では 46 個の小韻字が挙げられたが、ここでは伝承音まで揃っている字だけを示す。

邪母に属する小韻字

「牀 仕莊 澄莊 쌍 상」 「狀 助亮 澄壯 · 쌍 장 R」 「崇 鉏弓 澄公 崇 승」 「巢 鋤交 澄高 崇 소」 「愁 鋤尤 澄鉤 崇 수」 「士 鉏里 澄紫 崇 ㅅ R」 「俟 牀史 澄紫 崇 ㅅ R」 「事 荏吏 澄恣 崇 ㅅ R」 「槎 鋤加 澄牙 쌍 사」 「乍 助駕 澄訝 · 쌍 사 R」

崇母の場合伝承音の初声が入或いはスに分かれて現れる傾向がある。조운성 (2011B : 25) は船母は伝承音にしたがって邪母に分類したと解釈することができるが、崇母は今のところ伝承音の傾向により慈母と邪母に分けて分類したとは言い切れないと述べている。確かに上の例を見ると合計 13 字のうち初声が入である字が 4 字あり、入に現れる字が 4 字、スに現れる字が 5 字あるため、伝承音の初声が入に現れる傾向にあるとは断言できないと考えられる。(入がスの有気音であることを考慮に入れば少しは納得できるかもしれない。)これに関連して차익중 (2014A : 40) は崇母が分けられた理由は不明であるが、他でなく慈母(齒音全濁)と邪母(齒音全濁)に収めたのは崇母が全濁であることを考えれば、『正韻』の編者たちが初声を修正する際‘清濁’を必ず区別しようとしたことがさらに明らかになると述べている。

要約すると「業母欲母」は字母韻により「慈母邪母」は伝承音により分類したということになる。今のところなぜ上述した 4 つの字母だけが他の字母と異なる基準により分類されたかが明らかでないが、このことから『正韻』の 23 字母を中古音 36 字母、『挙要』の反切及び字母、伝承音のどちらかの一方に頼って説明することは不可能であることが証明されたと思う。なお、23 字母の分類基準を解明することと同時にその基準が立てられた理由をも明らかにしなければならないが、このことは今後の課題にしておく。

3.3 終声の修正

終声は中古音の入声韻尾や陽声韻尾に対応する。詳しく言えば入声韻尾-p -t -k と陽声韻尾-m -n -ŋ が伝承音の終声-ㅁ -ㄷ -ㄱと-ㄴ -ㄹ -ㅇに対応するが、その対応は非常に整然としている。例外は稀であるが 真韻(-n 韻尾)に属する「親忍仞刃賓頻蘋擯牝」の終声が「ㄹ」の他に「ㅇ」にも現れることや、「鬢嬪」の終声が「ㅇ」に現れることが挙げられる。また蒸韻(-ŋ 韻尾)に属する「仍稱」の終声が「ㅇ」だけでなく「ㄹ」に現れる例があり、「坳(-m 韻尾)」の伝承音が「단」であることも例外と言える。

興味深いのは入声韻尾-t が-ㄱではなく-ㄷに現れ、-ㄱに現れる例外が全くないという事実である。「序」ではそういった伝承音の特徴を‘四声之變’という誤りと規定しながら‘以影補来’をもってその誤りを直したと述べている。

語音則四声甚明、字音則上去無別。質勿諸韻、宜以端母為終声、而俗用來母。其声徐緩、不宜入声。此四声之變⁵²也。(中略) 又於質勿諸韻以影補來因俗歸正。舊習譌謬至是而悉革矣。(序 3a、5a)

つまり「質勿」などを「·진·믈」ではなく「질믈」のように発音すると音が緩むためそれは入声と言えない⁵³。したがって終声-ㄹ(來)にㄹ(影)を補ったが、これにより伝承音に従うと同時に誤りが直られたということである。河野六郎(1959 1979: 269)が述べたように‘以影補來’は一種の妥協策であったと考えられるが、換言すればそれは四声の区別をきちんとしながら伝承音の特色をも維持するため編者たちが工夫した跡であると言えるだろう。

⁵² 原文では伝承音に上声と去声が混乱している事実をも指摘しているが、本節では終声の修正を扱っているため、声調の修正に関する内容は省略する。

⁵³ 以上のような-t入声に関する説明は『訓民正音』「終声解」にも現れる。

“且半舌之ㄹ当用於諺而不可用於文如入声之ㄹ字終声当用ㄹ而俗習讀爲ㄹ盖ㄹ變而爲輕也若用ㄹ爲ㄹ之終則其声舒緩不爲入也”(終声解 23a)

4 中声修正の実際

『東国正韻』の「序」においては、中声の修正についてそれほど言及していない。敢えて言えば、(1)“盖古之為詩也、協其音而已。自三百篇而降、漢魏晉唐諸家亦未嘗拘於一律、如東之與冬江之與陽之類、豈可以韻別而不相通協哉”(序 3b-4a)と(2)“旁採俗習博考傳籍、本諸広用之音協之古韻之切、字母七音清濁四声靡不究其源委以復乎正”(序 4b)の2箇所が中声の修正に関連する内容と考えられる。これらの文章は次のように解釈できるだろう。まず、文(1)には韻書を制作する際、形式的な韻母や韻目より、実際の音質を重視した『正韻』の編者らの意識がうかがわれる。つまり、東韻と冬韻、江韻と陽韻のように同一韻ではなくても、押韻する場合がありますと述べながら、韻母にこだわる必要がないと説明しているのである。言い換えれば、韻が異なっても実際の音質さえ類似していれば、協韻できるという意味である。次に、文(2)により、世宗や『正韻』の編者らの中声修正に対する基本方針が現れる。つまり、修正の際には俗習や伝籍を参照し(旁採俗習博考傳籍)、なかでも最も広く通用している伝承音に基づくべきであるが、古韻の反切にも符合するように(本諸広用之音協之古韻之切)しなければならないということである。

序文から明らかになった修正の基本方針は次の2つにまとめることができる。1つ目は音声類似している字を1つの韻にまとめておくこと。2つ目は基本的に伝承音のうち最もよく用いられる音を選ばなければならないが、古韻に比べて大きく外れている場合には修正すること。しかし、ここで問題になるのは、序文では修正しなければならない程度の外れについて全く説明していないということである。したがって、その‘外れ’を明らかにするためには正韻音や伝承音の中声を比較し、両者間の異同を分析する作業により、帰納的にそのパターンを導き出さなければならない。そこで以下においては『正韻』における字の分類法に従って終声ごとに正韻音や伝承音の中声を比較し、どの部分がどういうふうに修正されたかを調べ、正韻音の修正パターンをまとめることにする。

4.1 ㄱ終声

正韻音のうち終声-ㄱを持つ韻部は全部で7個であり、これらの韻部はさらに14個の韻に分かれる。7韻部と14韻及びその代表字をまとめると次のとおりである。

<表12> ㄱ終声類

韻部	韻	平	上	去	入
iㄱ	iㄱ	捩	肯	亘	亟
	iㄱ	徵	慶	瞪	陟
	Δiㄱ	庚	梗	更	格
oiㄱ	oiㄱ	觥	礦	橫	號
uiㄱ	uiㄱ	肱			國
oㄱ	oㄱ	公	拱	貢	穀
	ioㄱ	瞳	冢	漣	瘡
	aㄱ	江	講	絳	覺

aŋ	iaŋ	張	長	帳	著
	oaŋ	光	廣	誑	郭
uŋ	uŋ	弓		諤	菊
	iuŋ	中	重	中	囿
iəŋ	iəŋ	京	景	敬	隔
	iuieŋ	局	憬	詠	昊

さらに、『正韻』の韻部と韻類、正韻音の中声表記、中古音の韻と撰、『挙要』の字母韻及び反切下字、『洪武正韻訳訓』に収録されている洪武正韻訳訓漢字音の中声を表にすれば、次の通り。

<表 13> ㄛ [ŋ] ㄣ [k]終声類

韻部	韻類	中声	中古音撰韻(等 ⁵⁴)	字母韻	反切下字	訳訓音中声 ⁵⁵
ㄅ ⁵⁶	ㄅ	— i	會登 會蒸	ㄅ京經公 ⁵⁷	登陵弘	ㄣ
	ㄨ	l i	會蒸	京	陵	l
	ㄨ	·l ʌi	梗庚 ₂ 梗耕 會蒸	ㄅ京經公 行	庚耕	ㄣ
ㄆ	ㄆ	ㄣ oi	會登 梗庚 ₂ 梗耕	公泓	弘横宏	ㄣ
ㄆ	ㄆ	ㄣ ui	會登	公	弘	ㄣ
公	公	ㄣ o	通東 ₁₃ 通鍾 通冬	公弓	公中宗容	ㄣ
	ㄆ	ㄣ io	通鍾	公弓	容	ㄣ
江	江	ㄣ a	江江 宕唐 宕陽	岡江莊	郎江良	ㄣ
	張	ㄣ ia	宕陽	岡江	良	ㄣ
	光	ㄣ oa	江江 宕唐 宕陽	光黄江	光江方	ㄣ
弓	弓	ㄣ u	通東 ₃ 通鍾	弓雄	中	ㄣ
	中	ㄣ iu	通東 ₃ 通鍾	公弓	中容	ㄣ
京	京	ㄣ iə	梗庚 ₃ 梗耕 梗清 梗青	京經行	京盈經耕 庚	ㄣ
	局	ㄣ iuiə	梗庚 ₃ 梗耕 梗清 梗青 會蒸	弓雄公兄	營局榮	ㄣ

⁵⁴ 1つの韻に2種以上の等が存在する場合に等を示す。

⁵⁵ 表には正音だけを示す。

⁵⁶ <表 13>においては韻部名を漢字で示したが、以下では中古韻と区別するために『正韻』の韻をローマ字で表記する。(ローマ字転写の一覧は1.4の<図 2>を参照されたい。以下同)

⁵⁷ 入声字母韻は<表>に載せない。

中古音においてŋ韻尾を持つ韻は通、江、宕、梗、曾撰に属する韻である。『正韻』の韻部と十六撰の対応関係を見ると、iŋ、oiŋ、uiŋ、iəŋ韻部が曾、梗撰に、oŋやuŋ韻部が通撰に、aŋ韻部が江、宕撰に対応する。しかし、おおまかに見ても、1つの撰が正韻音においては2つ以上の韻部に分かれて置かれていたり、2つの撰が1つの韻部に取りまとめられていたりするなど、正韻音と中古音の対応関係は整然としていない。유창균(1965B, 1967)、강신항(2009)、조운성(2010A, 2011A)、차익중(2014A)が指摘したように、正韻音の中声体系が基にしているのは伝承音だろうと思われる。とはいうものの、正韻音がすべての伝承音を受け入れたとは言えない。それは、場合によって、韓国語固有語においてはほとんど見られない中声を用いて伝承音を修正した例が現れるためである。以下においては『正韻』の編者らが伝承音を受け入れた理由や、修正しなければならなかった理由、すなわち修正の基準を明らかにするために、韻部ごとに正韻音と伝承音の中声を比較検討する。

4.1.1 iŋ韻部

iŋ韻部にはすべてiŋ韻・iŋ韻・ɿiŋ韻の3つの韻が含まれており、これらの韻には中古音の曾撰・梗撰の開口字が対応する。〈表14〉は「iŋ・iŋ・ɿiŋ」韻に対応する中国音を韻ごとにまとめたものである。

〈表14〉 iŋ韻部

中終声	撰	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
iŋ ⁵⁸	曾	登	1	開		ə	ŋ/k ⁵⁹	牙、舌頭、唇重、精組、喉、半舌
iŋ	曾	蒸	3	開	j	i	ŋ/k	牙、精組(心母除外)、莊組(生母除外)、喉(曉母入声除外)、半舌
iŋ	曾	蒸	3	開	j	i	ŋ/k	舌上、唇重、章組、心母、生母(入声除外)、曉母(入声)、半齒
ɿik	曾	蒸	3	開	j	i	k	生母入声
ɿiŋ	梗	庚	2	開	r	æ	ŋ/k	牙(疑母除外)、舌、唇重、正齒、匣母、半舌
ɿiŋ	梗	耕	2	開	r	ɛ	ŋ/k	溪母、舌上、唇重、正齒、匣母、半舌

⁵⁸ 正韻音の表記は강신항(1997)による。

⁵⁹ 中古音の再構音は麥耘(2009)による。

以下の<表 15><表 16><表 17>は、各韻に当たる伝承音の資料⁶⁰をまとめたものであるが、出現頻度が高い中声の順に並べた。

<表 15> 「iŋ/ik」 韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
登開 1 曾 ⁶¹	牙音 (16 ⁶²)	「i ⁶³ 」 肯克剋 (3) 「Λ」 互刻 (2)
登開 1 曾	舌頭 (48)	「i」 登燈等鐙凳橙得忒慝騰滕藤鄧特能 (15) 「ə」 德 (1)
登開 1 曾	唇音 (43)	「i」 崩北朋鵬棚陪墨默冒 (9) 「o」 葡 (1)
登開 1 曾	齒頭 (26)	「i」 增增憎罨曾 (精) 則層曾 (從) 贈僧 (10) 「ə」 賊 (1) 「Λi」 塞 (1)
登開 1 曾	喉音 (3)	「i」 黑 (1) 「Λ」 恆 (1)
登開 1 曾	半舌 (15)	「i」 楞勒肋 (1)
蒸開 3 曾	牙音 (23)	「i」 兢矜亟棘襪極凝 (7)
蒸開 3 曾	齒頭 (19)	「i」 甌卽繪 (3) 「i」 稷 (1)
蒸開 3 曾	照 2 (15)	「i」 側仄廁測惻 (5) 「Λi」 晷 (1)
蒸開 3 曾	喉音 (35)	「i」 膺應 (平 ⁶⁴) 鷹應 (去) 興 (平) 興 (去) 蠅 (7) 「ə」 億臆憶抑 (4) 「i」 孕媵 (2)

⁶⁰ 伝承音は伊藤智ゆき (2007) の資料篇を参照した。しかし、資料篇にはあるが、『正韻』には載っていない字は外した。

⁶¹ 韻母の情報は‘韻’‘開合’‘等’‘攝’の順に記す。

⁶² 括弧内は『正韻』に載っている字の数値。

⁶³ 括弧内は伝承音の中声を表す。初声と中古音の声母との対応は1対1ではないため、初声は外す。終声の場合、例外がないため、表には載せない。

⁶⁴ 括弧の中は四声、或いは字母を表す。例：(平)(上)(去)(入)(見)(溪)(群)(疑)等々。

蒸開3會	半舌(15)	「i」陵凌綾菱菱力 ⁶⁵ (6)「iə」力 ⁶⁶ (1)
------	--------	--

正韻音の中終声が *ij* で写された字は中古音の蒸韻と登韻に当たる。両韻はすべて曾撰に属するが、蒸韻は3等韻であり、登韻は1等韻である。しかし、曾撰の場合、1等韻と3等韻(一部)がすべて中声 *i* で写されている。以下では、韻ごとに声母との結合関係や、例外について検討する。

まず、登韻開口の場合、介音や韻尾を持たず、主母音だけで成り立った1等韻である。伝承音の中声は声母に関わらずほとんどすべてが *i* で現れるが、そのほかにも「 $\Lambda(3)\text{ə}(2)\text{o}(1)\Delta i(1)$ 」(7/46)でも現れる。中声ごとに分布を見ると、 $\Lambda(3)$ の場合、牙喉音

⁶⁵ 伊藤智ゆき(2007)の資料篇によると儒教の經典に関連する文献、すなわち『論語諺解』などの四書諺解には「力」の漢字音がすべて「*riək*」となっており、仏經に関する文献には「力」の漢字音が「*riək*」だけでなく「*rik*」でも現れる。詳しく言えば、『蒙山法語諺解』には「力」の漢字音が「**rik^{H(L)}*」と「*niək^H*」で現れ、『改刊法華經諺解』には「*riək^{H(L)}*」「*niək^H*」「**rik^{H(L)}*」で、『長寿經諺解』に「*riək*」や「*rik*」で現れる。これらの文献のうち、『改刊法華經諺解』の場合、この文献に表記されている漢字音が伝承音ではなく正韻音である可能性も少なくはない。伊藤智ゆき(2007)の資料篇の凡例によると、*しるしは正韻音か伝承音かはっきりしない場合に付けるという。さらに、『改刊法華經諺解』の漢字音に関連して차익종(2015:204)は次のように述べている。

「ただし、漢字音については、時々正韻音が現れるものの、主に伝承音が使われていると思われていたが、本稿において改刊本の巻1や巻2のすべての漢字音を調べた結果、この文献中の漢字音が伝承音であるとはとても考えられない。正韻音をそのまま受け入れている場合もあれば、正韻音でも伝承音でもない漢字音も現れる。」

その上、사재동(2014:27)は正韻音の用いられた文献について調べた上で、正韻音が主に『月印千江之曲』『釈譜詳節』『月印釈譜』などの国文仏經や『円覚經諺解』『法華經諺解』などの仏經諺解書、なお『五大真言』のような陀羅尼の音訳、また『内訓』のような王室の書物に使われたと述べながら、『正韻』の刊行の表向きの理由は乱れている漢字音を整理するためであったが、実際には仏經諺解などの国文事業のためであったとしている。

上述した内容によれば、仏經系文献にしか現れない「*rik*」という漢字音が正韻音に影響された漢字音である可能性もあり得る。しかし、今のところ『蒙山』や『長寿』の漢字音まで伝承音ではないと断定する根拠がないため、本稿では「*riək*」や「*rik*」を「力」の伝承音として表に載せた。

⁶⁶ 複数音がある場合、すべての音を示す。

字にだけ現れ、ə(2)は舌頭音字や歯頭音字に、o(1)は唇音字に、li(1)は歯頭音字にしか現れない⁶⁷。

一方登韻開口の正韻音を見ると、すべての中声が i で現れ、例外はない。つまり、伝承音において「 $\Lambda \cdot \text{ə} \cdot \text{o} \cdot \text{li}$ 」のように現れる例外をすべて i に修正したのである。その理由については次のように解釈することができる。中声が Λ で写された字は「互・恆(以上 $\text{h}\Lambda\text{ŋ}$ ⁶⁸) 刻(kak)」であり、すべてが牙喉音の声母を持つ。これらの字は音節制約⁶⁹のため修正したと考えられる。詳しく言えば、牙音字の場合、今確認できる伝承音のデータが全部で5字あるが、そのうち3字の中声が i で現れ、残りの2字の中声が Λ に現れる。また、喉音字は全部で2字あるが、i と Λ が1回ずつ現れる⁷⁰。つまり、中声 i で写された字が Λ で写された字より圧倒的に多いとは言えないのである⁷¹。したがって『正韻』の編者らにとっては登韻牙喉音字の中声をすべて Λ に修正することも可能であったと言えるだろう。それは、2.3において述べたように、最も広く通用している字音を選び出し、それに基づき伝承音を修正する⁷²ことが修正の基本方針であったためである。にもかかわらず、中声が Λ で写された伝承音をすべて i に修正した理由は漢字音の音節において「 $\Lambda\text{ŋ}$ (或いは Λk)」という形が許されないと判断したためではないか。実際に「 $\Lambda\text{ŋ}$ (或いは Λk)」は正韻音においては全く現れず、伝承音の幾つかの例を除けば、韓国語の固有語においてもあまり見当たらない音節である。つまり、「互・恆・刻」の中声は音節制約のため i に修正したと考えられる。

⁶⁷ 河野六郎(1979: 476-477)によると曾撰1等の伝承音は3つの層を反映しているという。つまり、伝承音の中声 i が反映している中国音は c 層であり、 Λ や li は b 層を、ə は a 層をそれぞれ写しているということである。それに対して、伊藤智ゆき(2007: 207)は伝承音の中声が写しているのはやはり b 層であり、i は韻尾に影響され狭母音化した中国語を表していると解釈した。また、 Λ は登韻の主母音の変化が生じる前の中国音を表すと述べた。ə の場合、入声字にだけ現れるが、曾撰の蒸韻の入声字も ək で写された例があることから登韻・蒸韻の ək は -i + ə + k から由来しているとした。そして li や o で写されている字は類推と解釈した。

⁶⁸ 以下、伝承音の表記は伊藤智ゆき(2007)による。

⁶⁹ 伝承音と固有語に存在している音節(中声あるいは中声と終声の組み合わせ)が正韻音において全く現れていない場合があるが、ここに当たる修正の類型を本稿では‘音節制約’と呼ぶ。ここにおける‘音節制約’という用語は『東国正韻』において当該の音節が許されていないということを表すが、この‘制約’と言語学で用いられる‘制約(constraint)’の概念が完全に一致してはいない。

⁷⁰ 『正韻』には登韻の牙音字が16字、喉音字が3字載っているが、その中で伊藤智ゆき(2007)の資料篇において確認できる字は牙音字が5字、喉音字が2字である。

⁷¹ 勿論『正韻』には載っているが、伝承音のデータが残っていない字の中声が i であった可能性もあり得るが、今のところそういう仮説を裏付ける根拠がない。

⁷² “旁採俗習博考傳籍、本諸広用之音協之古韻之切、字母七音清濁四声靡不究其源委以復乎正”(序4b)

伝承音で中声がəで現れる字は「徳(tək)賊(cək)」であり、ɿiで現れる字には「塞(sɿik)」があるが、これらの字はすべて舌歯音の入声字である。伝承音資料が残っている登韻舌歯音字は都合28字(舌音16字、歯音12字)あるが、そのうち入声字が8字である。舌音字の場合、5つの入声字(「得忒慝特徳」)のうち「徳」の中声だけがəで現れ、残りの4字の中声はiで現れる。したがって「徳」の場合、中声がiで現れる傾向に従ってəからiへ修正されたと考えて良いだろう。

その反面、歯音(歯頭)の入声字は3字あるが、それぞれ異なる中声で現れる。つまり「則(i)賊(ə)塞(ɿi)」。3つのうち出現の頻度が高いものがないため、いずれにせよ、どちらかの1つを選び、それに基づいて他の中声を修正すれば良かっただろう。しかし、それらの中声の中でɿiはその基準に当てはまらない。それは、二重母音より短母音が、主母音だけで成り立った登韻に対応しやすいからである。ともかく、最終的に残りの2つのなかでiが選ばれたが、その理由として次の2つが考えられる。

まず、歯音舒声字の中声がすべてiで現れるため、入声字の中声もそれに合わせて修正したと解釈することができるが、正韻音を見ると同じ声母を持つ字を舒声と入声に分け、異なる韻に組み入れた場合があるため、必ずしもそうだと断言できない。

次に、正韻音の中声体系において「əŋ(ək)」が許されない音節であったため、修正された可能性もあり得る。実際に『正韻』には「əŋ(ək)」で終わる字が1字も現れない。もし、音節制約のために「賊」を修正したのであれば、舌音字の「徳」の場合も同様に解釈できるだろう。そうすると、固有語においては「əŋ(ək)」で終わる音節が多数あるのに、なぜその音節が許されなかったのかについて説明しなければならないが、それは「序」の内容によれば、次のように説明することができる。つまり、修正の際には、いわゆる‘広用之音’に基づき、さらに‘古韻之切’に合わせてみてもずれがないようにしなければならなかった。この文を逆に言えば、いくら伝承音で広く使われていても、ある基準(すなわち古韻之切)を満たさなければ受容しないということになる。つまり、中声iが選ばれたのはそれがəより‘古韻之切’に当てはまる中声であったためであり、同時にəが‘古韻之切’の基準を満たさなかったため修正せざるを得なかったと考えられる。それなら、中声əのこういった部分が編者らの考えていた基準から外れていたのか。それは伝承音にəkで終わる音節は幾つか存在するが、əŋという音節は全く現れないためではないか。つまり、舒声字のうち中声がəで終わる字が1字もないから、もし『正韻』にəŋ(ək)韻が立てられれば、その韻には入声字だけが入ることになるだろう。(əŋ韻に入れるため舒声字の中声をあえてəに修正することはできないはずであろう)しかし、伝統韻書を見れば分かるように、入声だけからなる韻は存在せず⁷³、入声韻尾は常に陽声韻尾と対をなしている。編者らはおそらくそういうところが‘古韻之切’に合わないと認めたくも知れない。以上のことから、『正韻』の編者らは曾撰1等開口に対応する中声としてiが最も適当だと認めていたと推察される。

中声がoで写された字は「葡(pok)」の1字であり、この字は唇音の声母を持つ。伝承音のデータを見ると、登韻唇音字は10字あるが、1例を除けば、すべての中声がiで現れる。したがって、「pik」は最も広く使われていた中声に合わせて修正した結果である。

⁷³ 去声だけからなる韻は幾つかある。

蒸韻は3等韻であるため、その韻母は3等介音や主母音からなる。しかし、蒸韻の牙音・齒頭音・照組2等・喉音・半舌音の伝承音の中声は、3等介音が表記に反映されておらず、ほとんどの場合、中声 i で現れる。『正韻』においては、以上のような3等介音を反映していない中声を修正せず、そのまま受け入れている。韻書全般にわたってそういった傾向が見られるが、合口性が中声表記に反映されていない場合、その中声を必ず修正したことと全く対比的である。後述するが、合口字の伝承音の中声を修正する際編者らは該当中声に合口性(すなわち[+口蹙])を加える方法で伝承音を修正した。それは訓民正音の中声体系のなかに‘闔關’の対を成す中声字があったからこそ可能となった修正の方法と考えられる。そうすると、3等介音が含まれた韻母の場合、それを表記することができる中声字、すなわち[+起於⁷⁴]の資質を持つ中声⁷⁵「io・ia・iu・iə」が存在したにもかかわらずそうしなかったことになる。このことは『正韻』の編者ら(=訓民正音の制字に参加した学者ら)が二重母音に当たる[io][ia][iu][iə]を単母音と認識したこと⁷⁶を裏付ける根拠となるかもしれない。詳しく言えば、もし彼らが[io]を二重母音と受け取り、その母音を[j]+[o]と分析したと仮定すれば、3等介音を反映していない中声を[+起於⁷⁴]の中声をもって書き直した可能性が高くなると考えられる。しかし、『正韻』全般にわたって3等字の中声を修正しなかったのは、もちろん編者らに伝承音をそのまま受け入れようとする意識があったことも原因の1つであるが、それに彼らが以上の4つの二重母音を単母音と⁷⁷捉えており、その上「io・ia・

⁷⁴ ‘起於⁷⁴」は「ㄣ ㅏ ㅑ ㅓ」と「ㄣ ㅓ ㅕ ㅗ」とを区別する資質である。それは『訓民正音』「制字解」における次の解説から確認できる。

“ㄣ 與 ㄣ 同而起於⁷⁴ ㅏ、ㅓ 與 ㅓ 同而起於⁷⁴ ㅑ、ㅕ 與 ㅕ 同而起於⁷⁴ ㅓ、ㅗ 與 ㅗ 同而起於⁷⁴ ㅏ” (制字解 9b)

⁷⁵ これらの中声の音価は[io][ia][iu][iə]であり、音声的側面から考えれば3等介音を持つ韻母に対応すると言える。例えば通撰の冬韻と鍾韻は同一の主母音を持ち、1・3等の対を成している。麥耘(2009)は両韻の韻母をそれぞれ oŋ や ioŋ に(平山久雄(1967)は oŋ や ioŋ)推定した。両韻の再構音に基づけば冬韻は中声 o で、鍾韻は中声 io で写されると想定される。しかし、両韻の伝承音の中声は予想通りには現れない。これについては4.1.3及び4.1.5において述べる。

⁷⁶ 임용기(2008:142-144)は中声字の制字原理である象形・合成・相合・連書・附書について説明しながら、中声「io・ia・iu・iə」は合成の方法により作られた文字であり、もし[io][ia][iu][iə]を二重母音と認識したとすれば、それらの中声字は合成ではなく相合の方法により作られたはずだろうと述べた。さらに、임용기(2010:100)によると中声「io・ia・iu・iə」はそれぞれ中声「o・a・u・ə」に‘・’が‘合成’した結果であるため、二重字(두겹글자)ではなく単字(홀글자)と見なければならぬという。また、[io][ia][iu][iə]を表記するための二重字を作るのは不可能であると述べ、中声「io・ia・iu・iə」が単字(홀글자)であるからこそ三重母音の「ioj・iaj・iuj・iəj」などを「ㅟ ㅓ ㅕ ㅗ」などの二重字で写すことができた」と解釈した。

⁷⁷ これに関連し姜昶錫(1992:48)は次のように述べている。「“単音は‘それ以上分析することができない最小の音の単位’であり、合音は複数の単音が合わさった音、すなわちさらに分析することができる音”と説明できる。このような解釈は現代音韻学の音素或いは音群の概念とほ

iu・iə」が単字として作られたため、3等介音を写す際それらの中声を用いることができなかつたと可能性をも考えられる。

中声 i のほかに中声「ə(4)i(3)ɿi(1)iə(1)」(9/36)で写された字もあるが、二重母音で写された例は極稀である。蒸韻の伝承音の中声を声母ごとに見ると、牙音字の場合、例外なしにすべての中声が i で現れ、歯頭音字や照組 2 等字にもそれぞれ例外が 1 ずつある。喉音字は例外が比較的が多いが、i で現れる字が 7 つであり、ə で現れる字が 4 つもある。さらに i で現れる例外も 2 つある。半舌音字の場合、中声が iə で現れる例外が 1 つだけ存在する⁷⁸。

喉音字の伝承音を見ると、全部で 3 種の中声が現れる。最も多く見られる中声が i であり、そのほかに中声が ə で現れる字には「億臆億抑(ək)」があり、i で現れる字には「孕勝(ip)」がある。興味深いのは入声字の中声がすべて ə で現れる事実である。正韻音ではそれらの例外をすべて i に修正した。まず「孕勝」の中声 i が修正された理由はおそらくほとんどすべての舒声字が i で写されたために間違いないだろう。しかし、入声字の場合、すべての中声が ə で現れるにもかかわらず、伝承音を受け入れずに舒声字と同様に i に修正した。その理由はおそらく曾撰 1 等の登韻とかかかわっていると思われる。つまり、両韻は同撰に属するため、主母音は等しいか或いは非常に似ていた。したがって 3 等介音をもつか否かにより、両者が区別された。つまり、蒸韻は 3 等介音を持つため、蒸韻の韻母が登韻のそれより高母音に近かつた可能性が高い⁷⁹。このことについては『正韻』の編者らも気付いていたは

ぼ一致している。しかし、単位の性格についての定義は同一であっても実際の内容は異なっている場合もある。(中略) また piəl(星)の中声‘iə’の場合、今と 15 世紀の捉え方が異なっている。現代の観点から見れば‘iə’を‘j+ə’の二重母音と分類するが、15 世紀にはそれを合音ではなく単音と認識した。」(訳は筆者)

⁷⁸ 曾撰 3 等韻について河野六郎(1979: 501-502)は、次のように層別化した。

	舌音・歯音(莊組以外)・唇音	牙喉音・莊組
a 層	-iə	-ə / -iə
b 層	-i	-i
c 層		-ɿi
d 層	-i	

その反面、伊藤智ゆき(2007: 209)は蒸韻の介音や主母音が、牙喉音では i で反映され、舌歯音(莊組以外)・唇音では i で反映されると述べた。また、莊組の場合、i もしくは ɿi で現れるとした。

⁷⁹ それは現代の中国語音韻学者らの再構音を見ても妥当な意見である。再構音は学者によって少しずつ異なるが、ほとんどの場合、登韻の主母音を推定するとき、蒸韻の主母音と同じか或い

ずである⁸⁰。ところで『訓民正音』の説明によれば、*ə*は*i*に比べれば[+口張]を持つ中声である⁸¹。つまり、*ə*はより広い母音であるため、1等韻に対応しやすく、*i*は狭母音に近いため、3等韻に対応しやすかったと考えられる。したがって『正韻』の編者らは3等韻を表記するには*ə*より*i*の方が妥当であると判断した可能性がある。しかも、1等韻である登韻字の中声を*i*で写した以上、3等の蒸韻字の中声を*ə*で写すことはなおさら許されなかっただろうと思われる。

正韻音の特徴の1つとして挙げられるのが、正歯音を莊組(照2)や章組(照3)に大体区別しているという点である。蒸韻の場合にも声母が莊組か章組かにより該当字を異なる韻に配属した。つまり、蒸韻莊組の場合、ほとんどすべての中声が*i*になっており、章組の場合、中声が*i*になっている。莊組の伝承音を見ると、例外が1字「辰(c^hlik)」ある。これを修正した理由は他の莊母字の中声がすべて*i*であるためであろう。

歯頭音字の中声はほとんどすべてが*i*であるが「稷(cik)」の中声だけが*i*で現れる。これを修正したのは言うまでもなく他の字の伝承音の中声が*i*で現れるためである。

半舌音字の場合、合計6字のうち6字「陵凌綾蔞菱力(i)」の中声が「i」で現れる。ただ、「力」の伝承音は「rik」のほかに「riək」という音でも現れる。「riək」には3等介音を反映されていると思われ、したがって「rik」に比べ「riək」の方が中国音をより一層きちんと写していると言える。しかし、編者たちは他の半舌音字の伝承音を顧慮し「力」の中声を「iə」から「i」へ修正したと考えられる。

<表 16> 「iŋ/ik」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
蒸開3會	舌上(32)	「i」 徵敕鴻飭澄直匿(7) 「i」 澄(1)
蒸開3會	唇音(12)	「i」 冰憑馮(3)
蒸開3會	齒頭(2) ⁸²	「i」 息(1)
蒸開3會	正歯(82) (照3)	「i」 職織稱稱秤式識軾拭食蝕瘡寔殖植(15) 「i」 蒸拯承證秤升昇陸勝勝繩乘承丞乘(15)

はそれより低母音で推定する。代表的に、麥耘(2009)は登韻の主母音を*ə*に、蒸韻の主母音を*i*に推定した。また、平山久雄(1967)は両者をすべて*ə*に推定した。

⁸⁰ 実際に、正韻音の全般を見ると、1・2等韻のほとんどの中声が低母音([+口張など])で現れ、3・4等韻のほとんどの中声が高母音([+起於 l]など)で現れる傾向がある。

⁸¹ “ㄷ與一同而口張其形則・與 l合而成”(『訓民正音』「制字解」9a-9b)

⁸² 中声が*i*で現れる字はすべてが心母入声字である。心母以外の歯頭音字の中声は声調に関わらず*i*で現れる。蒸韻心母には舒声字がなく、入声字しかない。

蒸開 3 曾	照 2(2)	「殊・洗 ⁸³ 」
蒸開 3 曾	喉音(18) ⁸⁴	「i」 弋杙鉞翼翊翌(6)
蒸開 3 曾	半齒(9)	「i」 仍(1)

次に<表 16>に基づいて「iɲ/ik」韻類を考察する。正韻音の中声が i で現れる字はすべてが蒸韻開口である⁸⁵。詳しく言えば、舌上音・唇音・照組 3 等・半齒音・心母入声・生母舒声(2 字の声調はともに上声である。)・曉母入声・以母入声の中声が i で現れる。齒頭音の心母・照組 2 等の生母・喉音の曉・以母の中声が i ではなく i で現れることを見ると、『正韻』の編者らが韻をなるべく細かく分類しようとしていたことが分かる。一方、伝承音を見ると、ほとんどの場、中声が i で現れ、舌上音・照組 3 等字を除けば、例外がない。舌上音字の場合、すべてほとんどの中声が iɲ で現れるが、「澄」の伝承音が「tiɲ」・「tiɲ」の 2 種類で現れる。したがって、上述した「力」と同様に解釈して良いだろう。

照組 3 等の伝承音の中声は<表 16>を見れば分かるように、i あるいは i で現れるが、その出現の頻度が同一である。したがって、照組 3 等字の場合、iɲ 韻に入れてもかまわないが、照組 2 等字と一緒に iɲ 韻に入れても問題はなかったはずである。しかし、編者たちは 2 等字(壯組)を iɲ 韻に、3 等字(章組)を iɲ 韻に配属した。さらに、正韻音の全般を見てもわずかの例外(後述する「殊・洗」など)を除けば照組を等により区別する傾向が見られる。このことから編者らはおそらく照組の 2 等や 3 等をできるだけ区別した方がより正しいと考えていたと推測される。しかし一方、伝承音において、中声が i で現れる字が i で現れる字より多かったため、照組 3 等字を iɲ 韻に入れた可能性も全くないとは言えないだろう。確認したところ『正韻』には全部で 82 字の章組字が収録されているが、そのうち、伝承音資料が残っている字は 30 字に過ぎない。つまり、残りの 52 字の伝承音の中声が何であったかについては、今のところ断言することはできないのである。ただ、正韻音の全般を見ると、伝承音の中声を受け入れる傾向が強いため、照組 3 等字が iɲ 韻に入れられた事実を顧慮に入れれば、それらの 52 字の中声が i で現れる傾向にあった可能性もなくはないだろう。

興味深いのは生母(照組 2 等の全清)の舒声字である「殊・洗」の正韻音の中声が i で現れ、照 3 と同一の中声で写された事実である。このことを見ると、まるで照 2 や照 3 が混ざっているように見える。しかし、それはおそらく字母韻により字を分類した結果と思われる。つまり、生母の舒声字が章組字と同様「京」字母韻に属しているため⁸⁶、『正韻』の編

⁸³ この 2 字は『広韻』には載っておらず『集韻』に収録されている。反切は「色拯切(生拯上曾開三)」である。伝承音の資料が残っていないため表には伝承音の中声を示さない。ただし現代韓国漢字音においてはすべてが「siɲ」で現れる。

⁸⁴ 曉・以母の入声字の中声が i で現れる。

⁸⁵ 平山久雄(1967)によると、蒸韻の再構音は声母と開合により主母音が ɛ や ə に分かれるという。つまり、唇音 iɛɲ、牙喉音合口 ɤɛk、牙喉音開口 iəɲ、莊組 iɛɲ、舌齒音(莊組除外) iəɲ に推定した。平山久雄による区別が正韻音における蒸韻の区別と完全に一致してはいないが、声母によって韻母が分かれる傾向があると解釈したという点は共通する。

⁸⁶ ただし、舒声字を持つのは生母しかない。

者らがそれを参考にして字を分類したと考えられる。そうすると、生母の入声字が $\Delta i\eta$ 韻に取りまとめられたことが問題になるかもしれないが⁸⁷、生母の入声字は他の莊組入声字と一緒に「克」字母韻に属している。つまり、生母の舒声字は章組と同じく取り扱われ、入声字は莊組として取り扱われたと考えられる。ただし、他の声母とは異なり、生母の入声字だけが $\Delta i\eta$ 韻に入れられたのは伝承音のためと見られる。以下の〈表 17〉を見ると「色・齋・穡」の伝承音の中声が Δi で現れることが分かる。つまり、生母入声字は伝承音に基づき、 $\Delta i\eta$ 韻に収められたと考えられる。以上のことから、『正韻』の編者らがどういった手順で、照組を区別したかが明らかになると思う。まず、照 2・照 3 等を字母韻により分ける。次に、各韻の中声を定める際、伝承音のなかで最も頻繁に現れる中声に合わせて他の中声を修正するが、その際、組全体ではなく声母ごとに伝承音を調べ、中声を定める。言い換えれば、莊組字が章組字と同一の韻に置かれることは許されなかったが、同一の組に属する字が、必ずしも同一の韻に取りまとめられる必要はなかったと考えられる。

一方、蒸韻歯頭音字を見ると、清母・邪母がなく、精母・從母・心母をもつ字しかない。『正韻』において精母(去声入声)・從母(平声入声)をもつ字はすべてが $i\eta$ 韻に配属し、心母入声字だけが $i\eta$ 韻に属している。収録字の数は 2 字しかないが、そのうち「息 sik」の伝承音が確認できる。したがって蒸韻心母の正韻音は伝承音を受け入れたと考えられる。

喉音の曉母・以母の入声字の伝承音の中声は例外なく i で現れ、正韻音の中声も一緒である。興味深いのは曉母・以母の舒声字はすべて $i\eta$ に配属し、入声字だけ $i\eta$ 韻に入れておいたという事実である。このことに基づけば、『正韻』の編者らが字を分類する際、字母のレベルに限らず、さらに声調の違いをも考えに入れたということが明らかになる。

〈表 17〉 「 $\Delta i\eta/\Delta ik$ 」 韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
庚開 2 梗	牙音 ⁸⁸ (44)	「 Δi 」 更羹稭梗哽更格坑客額 (10) 「 $i\eta$ 」 庚鷓更梗梗鯁鯁格假假 (11) 「a」 骼 (1)
庚開 2 梗	舌上 (39)	「 Δi 」 垢宅宅澤擇擇擗 (7) 「 $i\eta$ 」 丁斥根鯨翟 (5) 「a」 瞠瞠拆 (3)
庚開 2 梗	端母・泥母 (8)	「 $i\eta$ 」 打 (1)
庚開 2 梗	唇音 (74)	「 Δi 」 百伯栢烹拍珀魄彭白帛舶盲虻猛孟陌貉驀 (18) 「 $i\eta$ 」 駢聶 (2) 「a」 迫拍珀 (3)
庚開 2 梗	照 2 (34)	「 Δi 」 笮鑑生笙牲銑銑甥省 (9) 「 $i\eta$ 」 猩 (1) 「a」 鑑 (1)
庚開 2 梗	匣母 (11)	「 Δi 」 行桁杏行 (4) 「 $i\eta$ 」 衡 (1)
庚開 2 梗	半舌 (1)	「 Δi 」 泠 (1)
耕開 2 梗	溪母 (7)	「 Δi 」 鏗 (1) 「 $i\eta$ 」 硜硜 (2)
耕開 2 梗	舌上 (12)	「 $i\eta$ 」 謫 (3)
耕開 2 梗	唇音 (45)	「 Δi 」 薈萌氓麥 (4) 「 $i\eta$ 」 迸迸薛檠擗擗 (6) 「i」 繃繃棚 (3)
耕開 2 梗	照 2 (34)	「 Δi 」 爭箏諍責噴策冊柵索 (9) 「 $i\eta$ 」 諍憤 (2)

⁸⁷ 莊母、初母、崇母の場合、入声字しかない。『正韻』の $i\eta$ 韻には莊母字が 8 字(伝承音が確認できる字は 4 字)、初母字が 5 字(2 字)、崇母字が 2 字(無し)載っている。

⁸⁸ 見母・溪母・疑母字がある。群母は 3 等韻にしか現れない。

耕開 2 梗	影母・匣母(49)	「 Δi 」 鸚櫻鷲厄阮軛莖幸覈核(10) 「 $i\text{ə}$ 」 罍翮(2)
蒸開 3 曾	正齒(3)	「 Δi 」 色嗇穡(3)

次に<表 17>に基づいて「 $\Delta i\eta/\Delta ik$ 」韻類を考察する。正韻音の中声が Δi で写されたのはほとんどすべてが梗撰の庚₂⁸⁹韻や耕韻に属する字である。庚₂韻や耕韻は 2 等韻であり、韻母の構成を見ると韻尾を除けば、2 等介音⁹⁰と主母音から成り立っている。したがって、両者の主母音は異なっていたはずである。しかし、正韻音や伝承音の中声にはその違いが全く反映されていない。それは中国語において重韻の合流したことに関連している。重韻とは 1 つの撰に開合や等を同じくする韻が 2 つ以上存在する場合を指す。主に 1 等韻や 2 等韻に現れるが、重韻の関係にある韻には「哈(灰)泰」「皆佳夬」「庚耕」「東冬」「刪山」「覃談」「咸銜」韻がある。また、重韻は切韻(601)時期には確かに存在したが、慧琳の『一切経音義』(807)では区別が完全になくなった現象である⁹¹。つまり、伝承音が重韻の区別がなくなった中国音を反映していると考えれば、正韻音や伝承音に重韻の区別が見られないのは当然なことである。勿論、韓国語の母音体系が単純であったため、異なる中国音が 1 つの母音に聞き取られた可能性もなくはない。しかし、いずれにせよ『正韻』においては庚₂韻の曉母や耕韻の見母・明母を除いた梗撰の 2 等韻が $\Delta i\eta$ 韻にまとめられた⁹²。

$\Delta i\eta$ 韻には、梗撰の 2 等韻のほかにも、蒸韻生母(莊組)の入声字も入っている。つまり、蒸韻生母は声母により 2 つの韻に分かれているが、舒声は $i\eta$ 韻に、入声は $\Delta i\eta$ 韻にそれぞれ収められた。

庚₂韻のうち、正韻音の中声が Δi で現れるのは、牙音(見溪疑)・舌上音・舌頭音(端泥)・唇音・正齒(照 2)・喉音(匣)・半舌音の声母をもつ字である。伝承音における中声 Δi の出現頻度は 40%(20/49)程度で、それほど多くない。さらに、 Δi のほかに中声「 $i\text{ə}$ (21)・ a (8)」(29/49)でも現れるが、 Δi や $i\text{ə}$ がほぼ同率で現れる⁹³。一方、耕韻の場合、牙音(溪)・舌上音・唇音・正齒(照 2)・喉音(影匣)字の正韻音の中声が Δi で現れる。伝承音の

⁸⁹ 庚韻はさらに 2 等韻と 3 等韻に分かれるが、庚₂庚₃のように表す。

⁹⁰ 以前の研究では 2 等韻に介音が含まれないと看做されてきたが、最近の研究(潘悟雲(1994)、麥耘(2009)など)は 2 等介音として $-w$ (麥耘(2009)は w にそり舌音の音質が加わった音と再構した)を認める傾向がある。

⁹¹ 河野六郎(1979)は朝鮮漢字音(すなわち本稿における伝承音)が主に唐代長安音(b 層)を反映していると解釈したが、その主張を裏付ける根拠の 1 つとして、朝鮮漢字音に重韻の違いが現われないということを挙げた。しかし、蟹撰 1 等韻の伝承音には重韻の名残が残っていると思われる。

⁹² 庚₂韻の曉母や耕韻の見母・明母は $i\text{ə}\eta$ 韻に配属する。

⁹³ 河野六郎(1979: 450)は庚₂韻や耕韻の伝承音に関連して、中終声「 $\Delta i\eta$ (或いは Δik)」は b 層を反映し、「 $i\text{ə}\eta$ (或いは $i\text{ə}k$)」が d 層を写していると解釈した。その反面、伊藤智ゆき(2007: 217)は伝承音の $\Delta i\eta$ や $i\text{ə}\eta$ はほぼ同時代の中国音を反映していると述べた。

中声を見ると、 Δi で写されたのが 24 字(24/42)であり、その他「 $i\theta(15) \cdot i(3)$ 」(18/42)で現れる字もある。つまり、庚₂韻や耕韻ともに Δi と $i\theta$ がほぼ半分程度ずつ現れるのである⁹⁴。両韻の伝承音の中声の出現頻度をまとめると、次の通り。

	牙音	舌上音	舌頭音	
庚 ₂ 韻	$i\theta(11) > \Delta i(10) > a(1)$	$\Delta i(7) > i\theta(5) > a(3)$	$i\theta(1)$	
耕韻	$i\theta(1) > \Delta i(2)$	$i\theta(1)$		
	唇音	莊組	喉音	半舌
庚 ₂ 韻	$\Delta i(18) > i\theta(3) > a(2)$	$\Delta i(9) > a \cdot i\theta(1)$	$\Delta i(4) > i\theta(1)$	$\Delta i(1)$
耕韻	$i\theta(6) > \Delta i(4) > i(3)$	$\Delta i(9) > i\theta(2)$	$\Delta i(10) > i\theta(2)$	

最も疑問になるところは、庚₂韻の舌頭音字や耕韻の舌上音字が $\Delta i\eta$ 韻に配属されているということである。蒸韻字を伝承音に基づいて $i\eta$ や $i\eta$ 韻に分けて入れておいたことに照らしてみれば、庚₂韻や耕韻に対するそういう扱いが納得し難い。ただし、拙稿(2015: 15)は耕韻舌上音字「丁𠄎摘擿謫謫適(知)橙澄睽(澄)儻諱(娘)」のうち、「丁摘適」字が『広韻』において梗撰 2 等(中莖切、陟革切)のほかに、4 等(当経切、都歴切、他歴切)でも現れると述べ、またそれらの字が『正韻』においても $\Delta i\eta$ 韻だけでなく $i\theta\eta$ 韻に収録されたと説明した。その説明を参考にすると、耕韻の舌音字の正韻音が伝承音を全く受け入れなかったとは言えないかも知れない。その反面、庚₂韻舌頭音字の場合、『正韻』には「打(端母)獐蓋寧鬚鬚攘囊(泥母)」の 8 字が収録されているが、「打」(1/8)を除けば、伝承音が確認できない。つまり、残りの 7 字の中声が現時点では確認できないのである。それらの字の中声が Δi で現れた可能性が全くないとは限らないが、これはあくまでも推測に過ぎない。

以上の例外を除けば、 Δi と $i\theta$ の出現頻度はほぼ等しい。したがって、基準を定める際、 $i\theta$ と Δi どちらを選んでも修正の基本方針に外れることはなかつただろう。それに、『正韻』には $i\theta\eta$ 韻が存在し、その韻には梗撰の 3・4 等韻や 2 等の一部が入っていたため、梗撰の 2 等韻を声母により分けて一部を $i\theta\eta$ 韻に入れても問題はなかつたはずである。にもか

⁹⁴ 河野六郎(1979: 439)は、 Δ の後に来る i について、終声 η と母音 Δ の間に glide(i)が発達したと説明した。また、平山久雄(1998: 128)は伝承音の終声 $-\eta$ や $-k$ の口蓋化が中国音よりさらに進み、新しい音素 $-\eta$ や $-c$ を形成したが、それらの音素の舌位置は $[i]$ に近いため、狭める段階に $[i]$ に似た渡り音を伴いやすかつたと解釈した。つまり、伝承音の Δi について、中国音が写されたものではなく韓国語の内部で起こった変化を反映していると解釈したのである。しかし、本稿においては 2 等韻の介音を認める立場をとるため、 Δi について中国音を写した結果と解釈したい。つまり、中声 Δi や $i\theta$ が 2 等韻の介音及び主母音を写していると見ても良いのではないだろうか。そういう場合、後舌高母音と推定する 2 等介音が Δ で写され、低母音に近かつたと見られる主母音が i で写された理由を説明しにくい。しかし、中声 $i\theta$ の場合、 j が介音を θ が主母音を写している可能性が全くないとは言えない。

かわらず、『正韻』の編者らはほとんどすべての2等韻を*ɿiɿ*韻に配属したのである⁹⁵。こういう修正の結果は曾撰字の場合ときわめて異なっている。つまり、曾撰は等にかかわらず伝承音に基づいて字を分類したが、梗撰はかえって等により分類したのである。そういう違いはおそらく、『正韻』の編者らの等に対する認識と関連していると思われる。蒸韻は曾撰に属する3等韻であり、該撰には蒸韻以外に1等韻の登韻が含まれている。一方、梗撰には庚₂韻や耕韻のほかに庚₃韻・清韻・青韻が含まれている。庚₂・耕韻は2等韻、庚₃・清韻は3等韻、青韻は4等韻である。つまり、曾撰に比べれば、梗撰の方がより多様な韻で成り立っており、また梗撰には曾撰にはない2等韻が含まれているのである。1つの撰に属する韻の数が大事なのは韻が多ければ多いほど、韻同士の音声的差が大きくなるためである。例えば、登韻と蒸韻は3等介音だけが異なっていたが⁹⁶、場合によっては声母のため3等介音が音声として実現しなかった(或いは非常に弱かったかもしれない)こともあった。実際に、伝承音を見てもその可能性が高いと見られる。その反面、梗撰は2等韻と3等・4等韻⁹⁷の音声がより一層異なっていたと思われる⁹⁸。それは伝承音を見ると、さらに明らかになるが、2等韻の場合、*iə*と*ɿi*がほぼ半分ずつ現れるのに対して、3等・4等韻の中声はほとんどすべてが*iə*で現れる。もし、2等韻の韻母と3・4等韻の韻母の音声が類似していたとすれば、梗撰字の伝承音も登韻と蒸韻のように声母によって中声が分かれて現れる可能性が高い。しかし、梗撰3・4等韻字のうち中声が*ɿi*で現れる例が極稀であることを見ると、2等韻と3・4等韻の間にはある程度の音声的差があったと考えられる⁹⁹。『正韻』の編者らは、そ

⁹⁵ *iəŋ*韻に置かれている2等韻を根拠として、梗撰の2等韻も声母によって分かれていると言えるかも知れないが、中声が*iə*でしか現れない庚韻の舌頭音字や耕韻の舌上韻字を*iəŋ*韻と分類しなかった事実に基づけば、それは例外と考えなければならないと思う。

⁹⁶ ほとんどの研究者が登韻や蒸韻の主母音を同一の母音で推定するか、少なくとも1つの音素として解釈している。麥耘(2009)の場合、音声的には両韻の諸母音をそれぞれ*ə*と*i*に推定したが、*i*を*ə*の異音と看做した。また、平山久雄(1967)は登韻の主母音を*ə*、蒸韻の主母音を*ɛ*(または*ə*)と推定したが、音声はほぼ一緒であったと述べた。

⁹⁷ 本来4等韻は介音を持たず、主母音(主に高母音)で成り立っていたが、後期中古音の時期には3等介音を持つようになった。

⁹⁸ 平山久雄(1967)は庚韻の主母音を*a*、耕韻の主母音を*ɐ*、清韻・青韻の主母音を*ɛ*と推定した。つまり、これは2等介音を認めず、清韻と青韻を3等介音の有無によって区別した結果である。その反面、麥耘(2009)は庚韻の主母音を*æ*、耕韻・清韻の主母音を*ɛ*、青韻の主母音を*e*と推定したが、これは耕韻と清韻を2等介音の有無によって区別した再構音である。

⁹⁹ 韻図において等の概念について説明していないため、それが正確に何を示しているかは明らかではないが、江永(1681-1762)の『音学辨微』「八、辨等例」によると、「音韻には四等があるが、一等は洪大であり、二等は次大であり、三・四等はすべて細であるが、四等がより細である。学ぶ人にとって四等を区別することは容易ではない。四等を区別するためには字母を区別することから始めなければならない。36個の字母が四等の音と合わさってこそ、すべてが整えるのである(音韻有四等、一等洪大、二等次大、三四皆細、而四尤細。学者未易辨也。辨等之法須於字母辨之。凡字母三十六位、合四等之音乃具)」という。この説明に基づき、ほとんどの研究

ういう音声差を等によるものと判断したのではないか。そのため、梗撰の2・3・4等字を取り合わせて iəŋ 韻に入れるのは避けたと思われるが、蒸韻の莊組を等により分けたことに照らしてみれば、彼らの等に対する捉え方がある程度一貫性を保っていると言えるだろう¹⁰⁰。

4.1.2 oiq・uiq 韻部¹⁰¹

oiq 韻部には oiq 韻が、uiq 韻部には uiq 韻が属する。oiq 韻には登韻の合口や梗撰2等韻の合口が対応し、uiq 韻には登韻の合口が対応する。〈表18〉〈表19〉は各韻に対応する中国音をまとめたものである。

〈表18〉 oiq 韻部

中終声	撰	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
oiq	曾	登	1	合	w	ə	ŋ/k	溪母、匣母
oiq	梗	庚	2	合	rw	æ	ŋ/k	見母、喉
oiq	梗	耕	2	合	rw	ɛ	ŋ/k	見母、喉

〈表19〉 uiq 韻部

中終声	撰	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
uiq	曾	登	1	合	w	ə	ŋ/k	見母、曉母

者が、等の違いを開口度の違いと解釈している。そういう解釈は『正韻』において大体1・2等や3・4等が分かれていることと通じるところがある。

¹⁰⁰ 유창균(1965B: 103, 131)は『正韻』の根底には等韻の差を区別しようとする考えが強く作用していると述べている。しかし、編者たちがどういう資料により「等」の概念をつかんでいたかについては明確にできなかった。ただ、韻書を制作する際「切韻指掌図」や「皇極経世書」を参考資料として利用したことは確かであるが、前期韻図の1種である「韻鏡」まで参考にしたかは断言できないとしている。

しかし、최영애(2000: 127)は韻図の体裁の側面から見ると「切韻指掌図」や「七音略」が「韻鏡」と同類であり、「四声等子」と「切韻指南」が同類であるとしている。つまり、『正韻』の編者たちは「韻鏡」系の韻図から「等」の概念を把握していたと考えられる。

¹⁰¹ oiq 韻部や uiq 韻部は独立した別個の韻部であるが、それぞれに1つの韻しか含まれていないため、まとめて検討することにする。

以下の〈表 20〉〈表 21〉は各韻ごとに七音との対応関係及び、伝承音を示したものである。

〈表 20〉 「oiŋ/oik」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
庚合 2 梗	牙音(11)	「oi」觥(1)
庚合 2 梗	喉音(31)	「oi」横(1)
耕合 2 梗	牙音(12)	「oi」馘(1) 「u」蝸鬪(2)
耕合 2 梗	喉音(46)	「oi」宏紘畫獲(4)
登合 1 曾 ¹⁰²	喉音(7)	「o」弘或惑(3)

〈表 21〉 「uiŋ/uik」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
登合 1 曾	牙音(3)	「u」國圀(2) 「oi」肱(1) 「i」肱(1)
登合 1 曾	喉音(3)	「u」薨(1)

4.1.1において検討したように、iŋ 韻には曾摂と梗摂の開口が対応する。中声の開合(闔關¹⁰³)関係から見ると、中声 o は ʌ の合口に当たり、u は i の合口に当たる¹⁰⁴。また、ʌi や oi、ii や ui がそれぞれ開合の対を成す。したがって、開口が主に中声 ʌi で現れる梗摂 2 等韻の合口が中声 oi で写されたのは当然なことであろう。さらに、梗摂 2 等韻字の伝承音を見ると、耕韻の「蝸鬪(kuk)」を除けば、すべての中声が oi で現れるため、それらの字を oiŋ 韻に配属したのは当たり前の結果だろう。例外の「蝸鬪」の中声をすべて oi に修正した理由はおそらく開合にかかわっているだろう。つまり、耕韻開口の中声が ʌi で現れるため、その開合関係に合わせるため oi に修正したと考えられる。正韻音を一見して明らかであるが、最も特徴的なのが、開合をはっきり区別していることである。さらに、その表記に用いられた中声字を見ると、文字同士の関係から見ても開合の関係に立っているのが明らか

¹⁰² 『正韻』の oiŋ 韻には登韻の溪母字が 4 字「鞞鞞鞞鞞(苦弘切)」載っているが、伝承音の資料が残っていない。それらの字は『広韻』には載っておらず『集韻』に収録されている。

¹⁰³ 『訓民正音』「制字解」においては‘開合’という用語の代わりにの‘闔關’という用語が用いられている。

¹⁰⁴ “此下八声一闔一關。一與・同而口蹙、其形則・與一合而成、取天地初交之義也。

一與・同而口張、其形則 一與・合而成、取天地之用發於事物待人而成也。一與一同而口蹙、其形則一與・合而成、亦取天地初交之義也。一與一同而口張、其形則・與 一合而成、亦取天地之用發於事物待人而成也”(『訓民正音』「制字解」9a)

になる¹⁰⁵。つまり『正韻』の編者らは、おそらく梗撰 2 等の開口：合口を $\Lambda i : oi$ と見なし
ていたため、「蝸鬪」の中声を修正したと解釈できる¹⁰⁶。

以上により、梗撰は開口韻に基づき合口韻を修正したことが明らかになった。このことか
ら推察すると、登韻開口の正韻音の中声がすべて i で現れるため、登韻合口の中声は u で現
れなければならない。しかし、『正韻』においては登韻の合口字を声母によって $oi\eta$ 韻か
 $ui\eta$ 韻に分韻した。詳しく言えば、溪母や匣母は $oi\eta$ 韻に、見母や曉母は $ui\eta$ 韻に入れてお
いたのである。一方、登韻合口の伝承音を見ると、声母によって異なる傾向がある¹⁰⁷が、匣
母の中声はすべて o で現れ、正韻音の中声に比べれば oi から i が脱落した形になってい
る。また、見母の中声は「 $u(2)oi(1)i(1)$ 」のように現れ、曉母の中声は u で現れる。例外
がなくはないが、いずれにせよ u の方が多く見られ、 ui から i が脱落した形になってい
る。つまり、登韻開口の正韻音か伝承音のどちらを参考にしても、登韻の合口は $oi\eta$ 韻か
 $ui\eta$ 韻ではなく $o\eta$ 韻或いは $u\eta$ 韻に入らなければならないと考えられる。にもかかわらず、
登韻合口字を $o\eta$ 韻・ $u\eta$ 韻に配属しなかった理由は何であろうか。

このことに関連して、유창균(1965B : 115)は『正韻』において「觥韻」と「肱韻」を区別
したのは「七音略」¹⁰⁸における分韻の状況と一致すると述べ、『正韻』における分韻の基準
が「七音略」に基づいているとした。しかし、この説明によると、伝承音においても見られ
ず、登韻開口韻と開合の対立が立たない韻をわざわざ立てたということになる。一方、
김철현(1959 : 33-34)は登韻合口の正韻音・四声通解音・奎章全韻音・現代韓国漢字音を比
較した結果¹⁰⁹、それらの表記は一貫性に欠けているとし、曾撰 1 等韻と梗撰 2 等韻が混ざり

¹⁰⁵ ただし、基本字である「 $\Lambda(\cdot)i(-)i(\cdot)$ 」は別途扱いされたと思われる。

¹⁰⁶ ところで、序文を参考にすれば、「蝸鬪」の伝承音が最初から修正の対象となっていた可能性
がある。序文では伝承音が乱されている理由の 1 つとして字体が類似していることが挙げられ
た。(或字体相似而為一音、中略、而字母七音清濁四声皆有變焉)つまり、それらの 2 字は「國
(kuk)」と字体が似ていたため、同じ発音になったに違いない。したがって、いくら広く使われ
ていたといえども、その伝承音が標準音と選ばれる可能性はなかったと考える。

¹⁰⁷ 河野六郎(1979 : 501)は $oi\eta$ ・ $o\eta$ を b 層、 $u\eta$ を d 層と分類した。一方、伊藤智ゆき(2007 :
208)は $oi\eta : \Lambda i\eta$ 、 $o\eta : \Lambda o$ 、 $u\eta : i\eta$ が開合の関係に立つと見られるが、登韻の伝承音を見ると、
開口の場合、見母や曉母の中声が i で現れる反面、匣母(恆)の中声は Λ で現れる。合口の場合、
見母の中声が oi ・ u ・ i 、曉母が u 、匣母が oi ・ o で現れる。こういうふうに関口、合口の
間で各声母の対応がほぼ並行していることから、登韻の $\Lambda : i$ 、 $o : u$ の違いは声母によるものか
も知れないと述べた。また、その場合、匣母では韻尾の影響による主母音の前進が遅れていたと
解釈した。

¹⁰⁸ 『韻鏡』(不詳)と並ぶ最も古い韻図。鄭樵(1102-1160)の『通志』の巻 36-37 に収録されて
いる。

¹⁰⁹ 김철현(1959 : 33)は各漢字音の初・中・終声をすべて表記したが、以下では中・終声だけを
表示する。

合っているのは訳訓音に影響された結果としている。さらに、実際に登韻合口の再構音である /-wəŋ/ を訓民正音で表記することは不可能であるとした。しかし、まず、訳訓音は 15 世紀の中国音(外国語)を写したものであり、正韻音は韓国語(外来語)であるため、正韻音が訳訓音に影響されたという説明は説得力が足りないと言える。『訳訓』と『正韻』を分けて編纂した事実から、朝鮮初期の学者らが外国語と外来語の違いをはっきりと認識していたということが明らかになる。それに、もし、訳訓音を参考にしたとすると、『訳訓』では登韻を 1 つの韻(庚梗敬陌韻)に取りまとめ、『正韻』においてはその韻を 2 つの韻、すなわち oiŋ 韻や uiŋ 韻に分けた理由が説明できない。次に、正韻音は韓国語であるため、登韻合口の再構音をそのまま写す必要が全くなかった。つまり、そもそも中国語の韻母と韓国語の母音は 1対1の関係とならない。そのため、伝承音の中声と中古音の韻母を比べてみると、二重母音から成り立った韻母が単母音の中声で現れる傾向が高い。正韻音を見ると、『正韻』の编者らが、そういう傾向を認め、伝承音の中声をそのまま受け入れたことが分かる。したがって、/-wəŋ/ が表記できないため、訳訓音に基づき、登韻合口を修正したとは考えられない。

そうすると、『正韻』の编者らが登韻合口を、oiŋ 韻や uiŋ 韻に分けて、取りまとめた理由は何であろう。それはおそらく曾摂と通摂が同一の韻に配属することを避けるためであろうと思われる。正韻音の全般を見ると、韻部ごとに含まれる摂が決まっており、例外は全く見られない¹¹⁰。摂と『正韻』の韻部の対応関係は次の通り。

曾摂・梗摂	iiŋ 韻部・oiŋ 韻部・uiŋ 韻部・iəŋ 韻部
通摂	oŋ 韻部・uŋ 韻部
江摂・宕摂	aŋ 韻部

	正韻音	四声通解音	奎章全韻音	現代韓国漢字音
肱	uiŋ	uiŋ	oiŋ	oiŋ
国	uik	ui	uk	uk
弘	oiŋ	uiŋ	oiŋ	oŋ
或	oik	ui	ok	ok

¹¹⁰ 유창균(1965B : 106-107)は『正韻』の韻目字を『韻鏡』の四十三内外転次と比較した結果、『正韻』における韻目は内外転次や開合の区別にかかわらず、伝承音の体系に基づいて 15 個の韻摂と設定されたと見られるが、それは中国音の韻部母音と韻尾を主に参考したことを示していると述べた。だが、韻部母音と韻尾は摂を類別する基準になるため、その意見は本稿における説明とだいぶ一致している。

以上の『正韻』の韻部と撰の対応関係を見ると、合流状況は中国音の変化とも相当類似していることが分かる。前期中古音と後期中古音の間に起きた重要な変化として次の3つが挙げられる¹¹¹。

- 1、東1と冬、東3と鍾の合流
- 2、宕撰と江撰の合流
- 3、曾撰と梗撰の合流

伝承音がすでに合流した中国音を受け入れたためなのか、それとも、韓国語の母音体系が中国語のそれより単純であったため複数の韻母を1つの中声で写すしかなかったのか、理由は分からないが、ともかく伝承音を見ると、曾撰・梗撰の韻母が同じ中声で現れ、江・宕撰の韻母が同一の中声で現れる場合が多いことが分かる。つまり、中国音の韻母と韓国語の中声の1対1に対応することは不可能であったことだけは確実だろう。しかし、韻書を作るためには分韻の基準を定めなければならなかった。そこで、『正韻』の編者らは中国音の韻ごとに入れる(『正韻』における)韻を定めておいたと推測できる。言い換えれば、中声ごとに対応できる韻母が限られていたとも言えるだろう。そして、たとえすべての伝承音が1つの中声で現れても、定められていた基準に外れると、その‘応用之音’は捨てられたと考える。結果的に、登韻合口が *oig*・*uig* 韻に配属した理由は曾撰に属する韻が *ig*・*oig*・*uig*・*iəŋ* 韻部以外には入れなかったためと思われる。

興味深いのは、『訳訓』において登韻合口に対する類似する取り扱いが観察されることである。訳訓音は15世紀の北方官話を写したと考えられるが¹¹²、それは現代漢語に相当近づいていた。登韻の開口合口の母音を音声記号で表すと [ə][u] である¹¹³。しかし、登韻の訳訓音を見

¹¹¹ 詳しく言えば、1は通撰内部において起こった変化であるが、東1韻や冬韻が合流し、1等になり、東3韻や鍾韻が合流し3等になったが、東₃韻や鍾韻の莊組だけが2等になった。2や3は撰同士の合流の例である。宕撰・江撰の場合、宕撰には1等である唐韻や3等である陽韻が含まれており、江撰には2等である江韻が属していたが、陽韻の莊組が江韻と合流し2等になった。曾撰と梗撰の合流は少し複雑であるが、まず、重韻の関係にあった梗撰の更2韻や耕韻が合流し、その後、それらの両韻が曾撰の3等である蒸韻の莊組と合流し、2等になった。次に、更₃韻、清韻、青韻が合流し、その後、曾撰の蒸韻と合流した。

¹¹² 編者らの出身地域から(浙江3人、安徽・江蘇・江西・廣東、各1人、河南2人-寧忌浮(2003:5)参照)『洪武正韻』(1375)の音韻体系が南方音に基づいている可能性が高いと推測できる。しかし、申叔舟の「序」では『訳訓』の編者らが中国音を正しく表記するため、燕都(今の北京)まで何回も往復したと述べている(然語音既異轉訛亦甚乃命臣等就正中国之先生学士往来意至于七八所與質之者若干人燕都為万国会同之地而其往返道途之遠所嘗與周旋講明者又為不少…後略)(下線は筆者)。つまり、それに基づけば、訳訓音が15世紀北方官話を反映していると思われる。

¹¹³ 麥耘(2009:180)は中古音と現代漢語の対応関係について述べながら、曾・梗撰から由来する現代漢語の韻母の拼音を次のように示した。括弧内の音声記号は王力(1980/2007:236)による。

ると、開口は「正音 iip、俗音 ip 又音 ip」で現れ、合口は声母にかかわらず「正音 uip (俗音や又音はない)」で現れる。つまり、開合を問わず、まるで登韻が韻尾[-i]を持っているように「與」相合字」をもって写したのである。兪曉紅(2014: 185-196)は『訳訓』の庚梗敬陌韻¹¹⁴が中声「ii・ui・iui」で写されたことを「文字転換方式¹¹⁵」②(「文字：音声」の対応関係)に当たる例と解釈した。つまり、『四声通解』の庚韻に対する説明¹¹⁶や、その韻の再構音に基づけば、庚梗敬陌韻は韻尾を持たない[ə][u][iu]と推定されるため、庚韻を写した中声「ii・ui・iui」はそれぞれ[ə][u][iu]を表していると見なければならぬとした。さらに、それらの音声に対応する中声「i・u・iu」が存在したにもかかわらず、それらの文字を使わなかった理由については次のように述べた。

1. 東韻と区別するために
2. 伝承漢字音の影響¹¹⁷
3. 入声韻(陌韻)の白読音の影響¹¹⁸

中でも、1の東韻との区別のためという説は최영애(1975)により、最初に提起されたが、要するに、韻書において韻目が異なると、当然韻部の母音も異になる。したがって『訳訓』において庚韻の韻母を当時の中国音に基づいて「ip・up・iup」のように写せば、「up・iup」で写さ

曾梗_{一開} eng/e ([əŋ])

曾梗_{一合唇} ong/o ([uŋ])

曾梗_{三四開唇} ing/i ([iŋ])

曾梗_{三四合} iong/ü ([iuŋ])

¹¹⁴ 『訳訓』の庚梗敬陌韻は中古音の梗撰と曾撰からなる韻である。

¹¹⁵ 김주필(2010)は「転換」について、ある言語を表記する際、使われる訓民正音に対する別段の扱い方と定義し、文字転換方式には次の3つがあると述べた。(兪曉紅(2014: 18)から再引用)

① 文字の数や形：文字の目録上の転換を示す。外国語の表記にしか使われない文字がある場合(初声ㄹ)、外国語を表記するために新しい文字が作られた場合(ㄹ等)、転換と見なす。

② 「文字：音声」の対応関係

③ 文字の運用方法：初声のㄹを用いて韻尾[-w]を表記するなど。

¹¹⁶ 凡例では“至於東與庚、則又以中声丁丁之呼而相混者亦多矣、故韻会庚韻内盲音與蒙同宏音與洪同、此因中声相似以致相混也”(下線は筆者)と述べているが、東韻と庚韻の発音が相当似ていたことが分かる。

¹¹⁷ 강신항(1973: 98)は梗・曾撰の伝承音の中で「坑 kɿip・行 hɿip(xɿip)、肱 koip・弘 hoip(xoip)」などの例を挙げながら、『訳訓』の編者らが庚梗敬陌韻の韻母を写す際、例のような伝承音に影響され、主母音と韻尾の間に「i」を挟んで表記したと説明した。

¹¹⁸ 兪曉紅(2014: 193)は白読音説を裏付けるために、『四声通解』の蒙音を根拠としている。

れた東韻と表記が重なってしまうため、『訳訓』の編者らがそれを避けるために庚韻を表記する際、半母音‘i’を挟んだということである¹¹⁹。

以上のことから、韻書を作る際、体系を立てるため、実際の音声にかかわらず人工の音声を選ぶ場合があったことが明らかになった。さらに、よく知られているように、『正韻』や『訳訓』の編者らはほとんどすべて重なっている。したがって、『正韻』において登韻合口を oiq・uiq 韻に分けて入れたのは韻書の体系が壊れないようにするためだろうと推測される。しかし、こういう事実は、単に彼らの分韻に対する基本的な考え方を示しているだけで、このことが、伝承音を修正する際、訳訓音を参考にしたという主張を裏付けられる根拠にはならない。もし、正韻音が訳訓音の影響を受けたとすれば、すべての登韻合口が oiq 韻か uiq 韻、どちらかの一方に入れられたはずである¹²⁰。しかし、編者たちは伝承音を顧慮して、登韻合口に属する字を oiq 韻と uiq 韻に分けて分韻した。つまり、溪・匣母を oiq 韻に、見・曉母を uiq 韻に入れたが、このことから伝承音の傾向を最大限に反映しようとした編者らの考えがうかがわれる。なお、そういった分韻の結果に基づけば、伝承音資料が残っていない登韻溪母の中声は o であった可能性が高くなる。

4.1.3 oj 韻部

oj 韻部¹²¹には oj 韻・ioj 韻の 2 つの韻が含まれており、この韻部には中古音の通撰の 1 等韻である東₁・冬韻や 3 等韻である東₃・鍾韻の一部が対応する。「oj・ioj」韻に対応する中古韻をまとめると次の<表 22>になる。

¹¹⁹ 兪曉紅(2014 : 192)

¹²⁰ 登韻合口の正韻音の中声や訳訓音の中声をまとめてみると次の通り。

	溪・匣母	見・曉母
訳訓音	ui	ui
正韻音	oi	ui

訳訓音の中声表記には中声 o が全く用いられず、中声 u だけが使われている。例えば、東韻の場合、正韻音では 1 等が o で、3 等が u で現れる傾向が見られるが、東韻の訳訓音のすべての中声は u で現れる。このことから正韻音が訳訓音とは全く異なる性質の漢字音体系であることがさらに明らかになると考えられる。

¹²¹ 김무림(1996)は oj 韻と uo 韻が ij 韻部に含まれず、それぞれ独立した 1 つの韻部を成していることに関連して、本来 o と u はそれぞれ ʌ と i の合口呼であるが、表面音声形において核母として機能しているため、ij 韻とは別の韻として看做されたと述べた。

<表 22> oŋ 韻部

中終声	攝	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
oŋ	通	東	1	独		u	ŋ/k	牙、舌頭、唇重、齒頭、喉、半舌
oŋ	通	東	3	独	j	u	ŋ/k	唇
oŋ	通	冬	1	独		o	ŋ/k	牙、舌頭、明母、齒頭、喉、半舌
oŋ	通	鍾	3	独	j	o	ŋ/k	牙、唇輕、影母、曉母入声、書母入声、 来母入声、娘母平声
ioŋ	通	鍾	3	独	j	o	ŋ/k	舌上、齒、来母舒声、半齒、以母

<表 22>を見ると、すべての1等韻の正韻音の中声がoで現れ、3等韻の中声は声母により、oかioに分かれるのが分かる。以下の<表 23><表 24>は各韻の伝承音の中声を示したものである。

<表 23> 「oŋ/ok」 韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
東独1通	牙音(44)	「o」 公工功攻貢穀穀谷空控控孔控哭(14)
東独1通	舌頭(100)	「o」 東董凍棟渾通侗桐桶痛秃鴉同筒桐銅童僮瞳動洞峒衝勳讀 齏瀆漬匱犢獨鞮(35)
東独1通	唇重(72)	「o」 ト扑醜蓬篷逢僕蒙矇蠓木沐(12)
東独1通	齒頭(88)	「o」 鬢總鏃蔥聰叢族送速餗(10)
東独1通	喉音(41)	「o」 翁塢甕屋永洪葑烘紅虹鴻闕斛榭(14)
東独1通	半舌(61)	「o」 豐權隴籠寵弄祿溘鹿漉輓麓籠(13)
東独3通	唇輕 (64)	「o」 福幅幅蝠腹覆蝮鳳伏茯馥服鵬(14) 「u」 風楓諷風豐馮(6)
東独3通	明母(21)	「o」 憐夢目苜睦牧穆繆(8)
冬独1通 122	牙音(8)	「o」 谷告(2)
冬独1通	舌頭(31)	「o」 冬篤統統彤毒蠹濃農膿(10)
冬独1通	齒頭(13)	「o」 宗綜宋(3)
冬独1通	喉音(9)	「o」 沃盜鵠(3)
鍾独3通	牙音(54)	「o」 恭供拱供恐曲筓葦共禺玉獄(12)
鍾独3通	舌頭(4)	「o」 醜濃(2)
鍾独3通	唇輕(41)	「o」 封丰峰峯鋒烽捧縫奉俸幞(12)
鍾独3通	照3(2) ¹²³	「o」 束(1)
鍾独3通	喉音(41)	「o」 鷗癩饗雍擁壅雍壅(8) 「u」 旭勗(2)

¹²² 牙・舌頭・齒頭・喉音以外に『正韻』には重唇音字が4字、半舌音字が7字載っているが、伝承音資料がないため、表から外した。

¹²³ 書母入声字のみ。

鍾独 3 通	半舌 (10) ¹²⁴	「o」録綠菴(3)
--------	---------------------------	-----------

<表 24> 「ioŋ/iok」韻類の韓国漢字音の中声比較

韻母	七音	伝承音
鍾独 3 通	舌上(16)	「io」塚籠(3)「iu」躅(1)
鍾独 3 通	歯頭 (54)	「io」縦從蹤縱足從竦聳松頌誦訟續俗(14) 「o」促趣竦駮粟(5)
鍾独 3 通	照 3 (50)	「io」鍾鐘腫腫種種燭屬觸春贖蜀屬(13) 「iu」衝(1)「oa」驢(1)
鍾独 3 通	喉音(52)	「io」容鎔庸傭墉涌湧捅踊踴蛹勇用欲慾浴谷(17)
鍾独 3 通	半舌(11)	「io」龍(1)「o」壟(1) 舒声
鍾独 3 通	半齒(24)	「io」宄辱褥(3)

通撰は東₁韻・冬韻・東₃韻・鍾韻の4つの韻から成り立つ。4つの韻はすべてが開合の区別がない独韻である。1等韻の正韻音の中終声はすべてがoŋで現れ、東₃韻の唇音字もoŋで現れる。鍾韻は声母によって分かれているが、牙音・舌頭音・唇音・書母・喉音・半舌音の中終声がoŋで現れ、舌上音・歯頭音・照3・喉音・半舌音・半齒音の中終声がioŋで現れる。

東₁韻・冬韻はすべて1等韻であり、ほとんどの研究において両韻の主母音を円唇母音で推定する¹²⁵。両者の音声間にはほとんど差がなかったと考えられるが、伝承音を見ても、すべての中声がoで現れ、例外が全く見られない。したがって、『正韻』の編者らは通撰1等韻、すなわち東₁韻と冬韻を躊躇わずoŋ韻に入れたであろう。なお、東₁韻・冬韻は中国音においても合流したが¹²⁶、中声についてめったに触れていない「序」においても唯一東韻・冬韻及び江韻・陽韻の合流についてだけは言及している¹²⁷。このことから見ても、東₁韻や冬韻をoŋ韻に入れたのは何の問題もなかったと考えられる。

東₃韻の場合、唇音字だけがoŋ韻に分類され、それ以外の声母を持つ字はすべてuŋ韻に属している。つまり、東₃韻の伝承音にも3等介音が反映されていない場合があるのである。しかし、蒸韻の場合と同様に、『正韻』では伝承音の傾向にしたがって、すべての東₃

¹²⁴ 入声字のみ。

¹²⁵ 麥耘(2009)は東韻と冬韻の主母音をそれぞれuとoで推定した。また、平山久雄(1967)は両韻をouŋやoŋで推定し、ほかにも최영애(2000)のuŋとuoŋで推定した。

¹²⁶ 前期中古音時期(『切韻』)には分かれていたが、後期中古音時期(『四声等子』)になってから合流した。

¹²⁷ “盖古之爲詩也、協其音而已。自三百篇而降、漢魏晋唐諸家亦未嘗拘於一律。如東之與冬江之與陽之類、豈可以韻別而不相。”(序 3b-4a、下線は筆者)

韻唇音字を *oŋ* 韻に取りまとめた。詳しく言えば、伝承音の資料が残っている字は都合 20 字あるが、中声が *o* で現れる字が 16 字「福幅幅幅腹覆蝮鳳伏茯苓馥服鵬」、中声が *u* で現れる字が 6 字「風楓諷風豐馮」ある。さらに、これらの字を声母ごとに分けてみると、非母字が 9 字「福幅幅幅腹(o)風楓諷風(u)」、敷母字が 3 字「覆蝮(o)豐(u)」、奉母字が 8 字「鳳伏茯苓馥服鵬(o)馮(u)」あるが、いずれにせよ中声 *o* で現れる字が中声 *u* で現れる字より多いことが分かる。つまり、伝承音の傾向により「風楓諷風豐馮」の中声が *u* から *o* へ修正されたと考えられる。

鍾韻は声母により、*oŋ* 韻或いは *ioŋ* 韻に配属した。鍾韻が 3 等韻であるにもかかわらず、中声が *o* で現れる伝承音をも受容したのである。正韻音と伝承音の中声を比較して見ると、伝承音を受け入れた結果に違いないだろう。半舌音や書母(章組の全清)の場合、舒声字を *ioŋ* 韻に、入声字を *oŋ* 韻に入れたのが目に立つ。書母の場合、伝承音の中声に基づき、分けたと考えられるが、半舌音の舒声字の伝承音を見ると「龍(*io*)壘(*o*)」のように *io* と *o* が 1 回ずつ現れるため、来母を舒声と入声に分けた理由は不明である。しかし『正韻』には鍾韻来母字が全部で 11 字、すなわち「龍(平声)籠籠籠瓏龐籠隴壘隴龍(上声)」が収録されているが、字形に「龍」字が含まれるため、伝承音の中声が *io* で現れた可能性が高いと思われる、正韻音がそれを受け入れたと見られる。また、「壘」の伝承音はおそらく中国音に影響されたと見えるが¹²⁸、「序」において示しているように¹²⁹、中国音或いは俗音は修正の対象であったため、最初から基準音と選ばれる可能性がなかったかもしれない。

4.1.4 aŋ 韻部

aŋ 韻部には aŋ 韻・iaŋ 韻・oaŋ 韻が含まれ、この韻部には宕摂・江摂が対応する。〈表 25〉は韻ごとに対応する中古音の韻をまとめたものである。

〈表 25〉 aŋ 韻部

中終声	摂	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
aŋ	宕	唐	1	開		ɒ	ŋ/k	牙、舌頭、唇重、齒頭、喉、半舌
aŋ	宕	陽	3	開	j	ɒ	ŋ/k	牙、莊組
aŋ	宕	陽	3	合	jw	ɒ	ŋ/k	唇輕
aŋ	江	江	2	独	r	ɔ	ŋ/k	牙、唇重、喉
iaŋ	宕	陽	3	開	j	ɒ	ŋ/k	舌上、精組、章組、喉音、半舌、半齒
oaŋ	宕	唐	1	合	w	ɒ	ŋ/k	牙、喉
oaŋ	宕	陽	3	合	jw	ɒ	ŋ/k	牙、喉

¹²⁸ 「壘」の訳訓音は「正音 riup、俗音 rup」で現れ、現代中国語の拼音では「long(第3声)」で書く。

¹²⁹ “(前略)…或依漢音或俚語而字母七音清濁四声皆有變焉…(後略)”(序 2b)

oaŋ	江	江	2	独	r	ɔ	ŋ/k	舌上、正齒、半舌
-----	---	---	---	---	---	---	-----	----------

以上の〈表 25〉から分かるように、1・2 等韻は開合或いは声母により、aŋ 韻か oaŋ 韻にそれぞれ配属し、また、3 等韻の開口は声母により aŋ 韻と iaŋ 韻に入れられ、合口は唇音が aŋ 韻に、それ以外の声母はすべて oaŋ 韻に入れられた。以下の〈表 26〉〈表 27〉〈表 28〉は中古音の韻母や声母の対応関係及び、各韻の伝承音資料をまとめたものである。

〈表 26〉 「aŋ/ak」 韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
江独 2 江 ¹³⁰	牙音(68)	「a」 江扛扛講港絳降降覺角桷腔殼嶽樂(15) 「oa」 確(1)
江独 2 江	唇重(65)	「a」 邦樸朴龐棒蚌雹匏匏邈邈藐(11)
江独 2 江	喉音(47)	「a」 幄握肛降缸項巷鶴确(9) 「ʌ」 學鶯(2)
唐開 1 宕	牙音(92)	「a」 剛綱亢甌各閣康糠炕伉昂柳諤愕鏗(16)
唐開 1 宕	舌頭(103)	「a」 當璫襠黨當湯帑儻盪託托橐籥唐塘糖糖堂螳棠蕩盪鐸度囊曩諾(27)
唐開 1 宕	唇重(91)	「a」 榜謗博縛縛粕膊漑傍房仿箔簿忙莽蟒莫漠膜幕(21)
唐開 1 宕	齒頭(58)	「a」 臧臧葬作倉蒼鶻錯藏藏昨柞柞鑿桑喪頽磔瘞瘞喪索(22)
唐開 1 宕	喉音(72)	「a」 盎惡聖矚壑航吭行沆翽翽統行貉(14)
唐開 1 宕	半舌(48)	「a」 郎廊狼浪洛落酪絡略珞樂驪(13)
陽開 3 宕	牙音(50)	「a」 薑疆疆疆疆姜襁腳羌蛻却疆疆澆仰仰虐瘡(18)
陽合 3 宕	唇輕(57)	「a」 方坊昉放舫芳訪防坊魴縛亡忘鉗網網罔罔望望(21)
陽開 3 宕	照 2(39)	「a」 莊粧裝壯瘡創霜孀爽牀床狀(12) 「oa」 孀(1)

〈表 27〉 「iaŋ/iak」 韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
陽開 3 宕	舌上(41)	「ia」 張長帳漲脹著輶長塤腸丈杖仗仗著娘釀(17)
陽開 3 宕	齒頭(88)	「ia」 將(平)漿漿將(去)醬爵雀槍槍鵠芍牆檣牆蓄匠矚襄驤相(平)緗箱廂想養相(去)削詳祥翔庠象像橡(34)
陽開 3 宕	照 3(113)	「ia」 章彰獐掌障嶂灼酌灼勺芍繳昌莒娼廠唱綽商觴傷賞餉爍常裳嘗償尚(平)上(上)尚(去)上(去)杓(33)
陽開 3 宕	喉音(104)	「ia」 約香鄉響嚮響屨享向陽楊揚烺羊洋養養樣恙煬藥躍燐鑰籥(25) 「a」 秧殃鴛(3)
陽開 3 宕	半舌(40)	「ia」 良娘量糧梁涼兩魎諒亮量略掠(13)
陽開 3 宕	半齒(22)	「ia」 讓攘輶壤攘讓弱若箬(9)

¹³⁰ 牙喉音・重唇音以外に、初母(莊組次清)入声字が12字「娒孀孀齶齶蹠促搨搨搨昔(測角切)」、徹母(舌上次清)入声字が2字「連蹕(救角切)」収録されている。

まず、aŋ 韻には江韻の牙喉音・唇重音、唐韻開口、陽韻の一部が対応する。〈表 26〉から正韻音が伝承音の中声をそのまま受け入れたことが明らかになる。江韻牙音字に例外が 1 字「確(oa)」、喉音字に例外が 2 字「學鷺(ɿ)」見られるが、「確」の場合、他の伝承音にそろえて修正したと考えられ、「學鷺(ɿ)」の場合、音節制約のため修正せざるを得なかっただろう。また、唐韻開口の唇重音字や、陽韻合口の唇軽音字と一緒に aŋ 韻に入れたのは、唇音の声母がすでに円唇性を帯びているため、唇音のあとには中声 oa が来れないと判断したためだろう。

一方、〈表 27〉から確認できるように、陽韻の舌上音・歯頭音・照 3・喉音・半舌音・半齒音の正韻音の中声は ia で現れ、伝承音の中声もほとんどすべてが ia で現れる。これは言うまでもなく伝承音を受け入れた結果である。

〈表 28〉「oaŋ/oak」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
唐合 1 宕	牙音 (36)	「oa」 光廣郭榔嶺續墻鞞鞞 (9)
唐合 1 宕	喉音 (86)	「oa」 汪艘螻荒霍曠黃潢皇風篋煌隍蝗惶徨幌穰鑊 (19) 「oi」 曠
江独 2 江	舌上 (39)	「oa」 椿 (1) 「a」 卓琢啄椽瘞幢濁濯 (8)
江独 2 江 131	照 2 (35)	「oa」 雙 (1) 「a」 捉窳鋌雙瀧朔槩數 (8)
陽合 3 宕	牙音 (38)	「oa」 誑誑鑿匡筐躑狂王往王 (10) 「ia」 夔 (1)
陽合 3 宕	喉音 (13)	「oa」 枉況 (2)

oaŋ 韻には宕攝 1 等・3 等の合口が対応する。1 等の喉音字から見ると、都合 20 字のうち、中声が oa で現れる字が 19 字あり、1 字「曠」の中声が oi で現れる。つまり、唐韻喉音字の場合、ほとんどすべての字の中声が oa で写されているのである。「曠」の中声はそういう伝承音の傾向に合わせて oi から oa へ修正されたとも考えられる¹³²。3 等の牙音字にも例外が 1 字「夔(ia)」見られる。例外の中声 ia はおそらく合口介音を反映せず、3 等介音と主母音だけが写された結果と思われるが、それを修正したことから、合口をはっきり写そうとする考えがうかがわれる。

一方、江韻は開合の区別がない独韻であるが、『正韻』においてはこの韻を声母により、aŋ 韻と oaŋ 韻に分けている。つまり、牙喉音・唇重音・初母入声を aŋ 韻に、舌上音・莊組(初母入声除外)・半舌音を oaŋ 韻に分けて取りまとめたのである。疑問になるのは〈表 28

¹³¹ 舌上音・莊組以外にも半舌音字が 2 字「瀧犖」収録されているが伝承音資料がないため表からはずした。

¹³² さらに、中国音の母音との対応関係から見ても、中声 oi の場合、唐韻合口を写しているとは到底考えられない。詳しく言えば、唐韻合口は合口介音と主母音からなるが、ほぼすべての唐韻開口が中声 a で写されることから、唐韻合口は oa で現れるのが当然であろう。つまり「曠」の中声 oi は合口介音はきちんと写しているが、主母音を間違えて写していると考えられる。このことから見ても、「曠」の中声を修正せざるを得なかったと考えられる。

>を見れば分かるように、舌上音字・莊組字のほとんどすべての中声が a で現れるにもかかわらず、『正韻』の編者らがそれらの字をあえて中声 oa に修正したことである¹³³。それに関連して 孟憲承 (2011B : 51) は舌上音・莊組・半舌音字が合口韻になった事実を考えに入れた結果と説明した。確かに『切韻指南』などの後期韻図を見ると、舌上音・莊組・半舌音が合口として扱われており¹³⁴、該当字の訳訓音を見ても、中国音における変化が反映されている¹³⁵。さらに、これらの字は『挙要』において、「郭」字母韻に属し、合口韻として扱われている¹³⁶。つまり、さまざまな中国の韻書や韻図を参考にすれば、正韻音が中国音の傾向を反映していると言えるかもしれない。しかし、正韻音が中国音の音声そのものを写しているとは言えず、本来、開合の区別がなかった江韻が、後に声母によって開口と合口に分かれたことを反映したと見なければならぬ。つまり、江韻の舌上音・莊組・半舌音字は合口韻と見なされたため、伝承音の中声 a に合口性を差し加えて oa に修正したのである。

伝承音では全く現れない江韻の開合を区別していることを見れば、『正韻』の編者らが開合を徹底的に区別しようとしたということがなおさら明らかになる。しかし、そうすると、江韻の初・徹母の入声字が oan 韻でなく an 韻に入っている理由を説明しにくい。しかし、

¹³³ これに関連して、金喆憲 (1959 : 41-42) は、元代の『切韻指南』において江摂を独韻として分韻しつつも、江摂を宕摂の 2 等韻にも入れておいたことや、本来江摂は開合不分なのに、該摂を開口呼とし、その反面、韻図においては声母により、牙喉唇音字を開口呼に、舌齒音字を合口呼に取りまとめたことを言及しながら、『正韻』における江摂に対する取り扱いがまさに『切韻指南』のそれと軌を同じくすると説明した。また、正韻音について六朝後期や唐代音だけでなく古官話系音まで参考にしたことを見ると、正韻音の基準音は非常につかみどころがないと批判した。しかし、それはあくまで正韻音の中声体系が中国の伝統の韻書や韻図の韻母体系に基づいて立てられたと思込み、出された結論としか考えられない。つまり、規則性があまり見られない伝承音の中声体系が正韻音の根幹をなしている以上、正韻音に規則性が見られないのは当然なことであろう。

¹³⁴ 最古の韻図である『韻鏡』や『七音略』においては江韻が開口呼に属していたが、『四声等子』『切韻指掌図』『切韻指南』では合口呼と変わった。さらに『切韻指南』の「江摂外一」では“見・幫・曉・喻母は開口に属し、知・照・来・日母は合口に属する(見幫曉喻属開、知照来日属合)”と説明している。

¹³⁵ 江韻の舌上・莊組・半舌音字の訳訓音の中声は次のとおり。

	知・澄	徹	娘	莊	初・生	崇	来
舒声	正 a 俗 oa	正 a 俗 oa	なし	なし	正 a 俗 oa	正 a 俗 oa	なし
入声	正 oa	なし	正 a	正 oa	正 a 俗 oa	正 a	正 a

¹³⁶ 「郭」字母韻は宕摂 1 等入声の「郭廓霍穫」小韻、3 等入声の「縛」小韻、江摂入声の「連濁朔」小韻から成り立つ。

花登正宏(1978 : 113)によると、初・徹母の入声は例外的に合口韻にならなかったという。さらに、筆者が調べた結果、初・徹母の入声は『挙要』においてそれぞれ「各」字母韻や「爵」字母韻に属するが、2つの字母韻はすべて開口扱いされる字母韻である。つまり、初・徹母の入声字だけが aŋ 韻に取りまとめられた理由は、『正韻』の編者らがそれらを合口と認めなかったためと考えられる。また、『正韻』における江韻の舌歯音に対する仕分け方法から、『正韻』の編者らがある字の開合を定める際、『挙要』における開合関係を重視したことがうかがわれる。

4.1.5 uŋ 韻部

uŋ 韻部には uŋ 韻や iuŋ 韻が含まれており、この韻部には通撰の3等韻である東₃・鍾韻の一部が対応する。「uŋ・iuŋ」韻に対応する中古韻をまとめると次の<表 29>になる。

<表 29> uŋ 韻部

中終声	撰	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
uŋ	通	東	3	独	j	u	ŋ/k	牙、喉
iuŋ	通	東	3	独	j	u	ŋ/k	舌上、齒、半舌、半齒、曉母、以母
iuŋ	通	鍾	3	独	j	o	ŋ/k	牙、舌上、喉

各韻の正韻音と伝承音の中声をまとめると、次の<表 30><表 31>のようになる。

<表 30> 「uŋ/uk」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
東独3通	牙音(37)	「u」弓躬宮菊鞠掬鷓穹芎麴窮(11)
東独3通	喉音(16)	「u」郁澳燠雄熊(5)
鍾独3通	牙音(3)	「u」局(1)

uŋ 韻には東₃韻の牙音・喉音(影母・匣母)及び鍾韻の群母入声字が取りまとめられている。両韻を比べてみると、鍾韻の場合、比較的 oŋ 韻に属する字が多く、その反面、東₃韻は唇音を除けば、すべての字が uŋ 韻に属する。それは<表 30>を見れば分かるように、伝承音の中声を受け入れた結果であろう。

<表 31> 「iuŋ/iuk」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
----	----	-----

東独3通 137	舌上(41)	「iu」 中忠衷中竹竺築蟲沖狝仲逐軸舳柚(15)
東独3通	齒頭(24)	「iu」 躡嵩肅宿蓓夙(6) 「io」 菘(1)
東独3通	照2(10)	「iu」 縮縮崇(3)
東独3通	照3(38)	「iu」 衆祝粥充芫菽叔倏孰塾淑(12) 「io」 終蠡(2)
東独3通	喉音(17)	「iu」 畜融育鬻(4) 「io」 彤(1)
東独3通	半舌(20)	「iu」 隆窿癘六陸蓼戮儻(8)
東独3通	半齒(9)	「iu」 戎肉(2)
鍾独3通	舌上(6)	「iu」 重(平)重(上)重(去)(3)
鍾独3通	喉音(21)	「iu」 胷兇凶(3)

正韻音の中声が iu で現れる字は東₃韻の舌上・齒頭・正齒(莊組・章組)・喉音(曉母・以母)・半舌音字及び、鍾韻の澄母舒声字や、曉母舒声字である。それらの字の伝承音を見ると、ほとんどすべての中声が iu で現れる。つまり、『正韻』では通撰字を等により分韻せず、伝承音に基づいて分類しているのである。さらに、声母と声調により分かれる伝承音の特徴まで受け入れられた事実から、『正韻』の編者らが、通撰字の場合、oŋ 韻部及び uŋ 韻部に属する韻であれば、どの韻に取りまとめられても基準から外すことはないと認めていたことがうかがわれる。

4.1.6 iəŋ 韻部

iəŋ 韻部には iəŋ 韻及び iuiəŋ 韻が含まれており、主に梗撰が対応し、そのほかに曾撰の3等韻の一部が対応する。以下の<表 32>は各韻と中古音の対応関係を示している。

<表 32> iəŋ 韻部

中終声	撰	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
iəŋ	梗	庚	2	開	r	æ	ŋ/k	疑母、曉母
iəŋ	梗	庚	3	開	j	æ	ŋ/k	牙、唇重
iəŋ	梗	耕	2	開	r	ɛ	ŋ/k	見母、明母
iəŋ	梗	清	3	開	j	ɛ	ŋ/k	牙、舌上、唇重、齒、喉、半舌
iəŋ	梗	青	4	開		e	ŋ/k	牙、舌頭、唇重、齒頭、喉、半舌
iək	曾	蒸	3	開	j	i	k	唇重
iuiəŋ	梗	庚	3	合	jw	æ	ŋ/k	見、云、曉母 耿は「広韻」では耕韻字
iuiəŋ	梗	清	3	合	jw	ɛ	ŋ/k	溪母、群母、心母、喉音

¹³⁷ iuŋ 韻の最初には「圀」(「于六切、東韻云母入声」)字が収録されている。조운성(2011B: 52)はそれが伝承音を参考にした結果とした。

iuiəŋ	梗	青	4	合	w	e	ŋ/k	牙、喉
iuiəŋ	梗	青	4	開		e	ŋ/k	曉母
iuiək	曾	蒸	3	合	jw	i	k	云母、曉母

正韻音の中声が iə・iuiə で現れる字を中古音の韻母・声母別に分け、伝承音の中声をまとめると以下の<表 33><表 34>になる。

<表 33> 「iəŋ/iək」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
庚開 3 梗	牙音(57)	「iə」京驚荊景警境敬竟鏡卿慶裕弊驚鯨鯨競迎逆(19) 「i」戟隙劇屐(4)
庚開 3 梗	唇重(41)	「iə」兵丙秉柄碧平萍枰評病明鳴皿命(14) 「Λi」盟(1)
庚開 3 梗	喉音(11)	「iə」英影映(3)
庚開 2 梗 138	喉音(9)	「iə」亨赫(2) 曉母
耕開 2 梗	牙音(9)	「iə」耕隔隔革籛(5) 見母
耕開 2 梗	唇重(4)	「iə」黽(1)
清開 3 梗	牙音(5)	「iə」頸輕(2)
清開 3 梗	舌上(26)	「iə」禎貞檉螳禎逞呈程程鄭擲躑(12)
清開 3 梗	唇重(38)	「iə」并餅屏併并辟壁襞璧薛擗關辟名(14) 「i」聘(1)
清開 3 梗	齒頭(98)	「iə」精晴蜻菁晶旌井積積跡蹟脊踏清團請靖刺磧情晴靜靖穿淨籍 瘠瘠省性生姓昔腊惜爲碼滂錫席夕汐窅(43)
清開 3 梗	照 3(47)	「iə」征鉦怔正整正政隻炙尺赤聲聖釋螫成城誠盛箴盛射石碩(24)
清開 3 梗	喉音(34)	「iə」嬰纓纓慶盈楹羸郢繹譯驛亦奕弈易蜴射(17) 「Λi」嬰掖液腋(4) 「i」益梲(2)
清開 3 梗	半舌(4)	「iə」令領嶺(3)
青開 4 梗	牙音(34)	「iə」經徑激擊擊磬(6) 「i」喫鷓(2) 「Λi」鷓(1)
青開 4 梗	舌頭(147)	「iə」丁釘頂鼎錠釘釘顛的勒酌滴滴嫡嫡適聽廳輕聽惕趨庭廷亭停 艇定狄荻敵笛翟翟滌靦寧甯佞(39) 「i」溺(1)
青開 4 梗	唇重(69)	「iə」壁霽瓶駟屏並甕冥冥銘茗覓(13)
青開 4 梗	齒頭(40)	「iə」績勣青鯖威鍼感寂星腥惺鯉錫惕暫浙析蜥(18)
青開 4 梗	喉音(29)	「iə」馨形刑型硯脛琨(7)
青開 4 梗	半舌(87)	「iə」伶靈樞零聆鈴鈴伶鸚翎瓠苓罔令歷曆癘癘霹礫礫(21)
蒸開 3 曾	唇重(14)	「iə」埴(1) 「i」逼(1)

¹³⁸ 曉母のほかに庚₂韻疑母の「硬鞭」字が収録されているが、伝承音が残っていないため、表から外した。

正韻音の中声が iə で現れるのは庚₃韻開口の牙喉音・唇重音、清韻開口の牙音・舌上・唇重・齒頭・照₃・喉音・半舌音、青韻開口の牙音・舌頭・唇重・齒頭・喉音・半舌音、庚₂韻開口の曉母、耕韻の見・明母、蒸韻開口の唇重音である。

庚₃韻の喉音・唇重音字を見ると、伝承音の中声がほぼすべて iə で現れるため、議論の余地がないと思う。明母字である「盟」の伝承音の中声は Δi で写されたが、ほかの明母舒声字¹³⁹の伝承音資料を見ると、「明鳴血命」の4字の中声が iə で現れる。したがって、庚₃韻の唇音字は伝承音に基づいて修正したと考えられる。一方、〈表 33〉を見れば分かるように、牙音字の伝承音の中声は iə 或いは i で現れるが、中声が i で写された字はすべて入声字である。詳しく言えば『正韻』には 57 字の牙音字が収録されているが、そのうち、舒声字が 37 字、入声字が 20 字載っている。伝承音資料が残っている入声字は 6 字あるが、中声が i で現れる字が 4 字「戟隙劇履」であり、iə で現れる字が 2 字「綌逆」ある。しかし、『正韻』においては牙音入声字を iə_ŋ 韻に取りまとめた。その理由は 4.1.1 において述べたように、2 等韻と区別するためだろうと思われる。

清韻の伝承音の中声は、唇音字の 1 字「聘(i)」や喉音字の 6 字「嬰掖液腋(Δi)益櫓(i)」を除けば、例外なく iə で現れる。しかし、唇音字の場合、全体 15 字のうち例外が 1 字しかいないため、「聘」の中声を iə に修正した理由は言うまでもないだろう。一方、喉音字の例外を見ると、「嬰櫓」が舒声であり、「掖液腋益」が入声であるが、舒声字は 10 字のうち 2 字が例外であり、入声字は 13 字のなかで 4 字が例外である。つまり、喉音字も唇音字と同様に伝承音に基づいて修正したと言える。

青韻の伝承音の中声もほとんどすべてが iə で現れる。例外を見ると、牙音字に 3 字「喫鷓(i)鷓(Δi)」(3/9)、舌頭字に 1 字「溺(i)」(1/40)が現れるが、それらの例外はすべて iə に修正した。

興味深い事実は庚₂韻の曉母、耕韻の見・明母が iə_ŋ 韻に配属されている点である。それらの字の伝承音を見ると、いずれも iə で現れ、 Δi で現れる字は 1 字も見られない。したがって、これは伝承音に基づいて分韻した結果としか考えられない。言い換えれば、梗撰 2 等韻の場合、伝承音の中声が Δi と iə の両方で現れると、 Δi _ŋ 韻に取りまとめたが、iə でしか現れない場合には、やむをえず iə_ŋ 韻に入れたと思われる。

蒸韻の唇音字は声調により舒声字が i_ŋ 韻に、入声字が iə_ŋ 韻にそれぞれ入れられた。4.1.1 において検討したが、舒声字の場合、例外がまったく見られなかった。しかし、〈表 33〉から分かるように中声が iə で現れる字が 1 字「堀 piək」、i で現れる字が 1 字「逼 p^hip」見られる。つまり、伝承音の中声出現率から考えれば、入声字を舒声字と同様に i_ŋ 韻に取りまとめたも良かっただろう。しかし、「逼」の伝承音は p^hip で現れ、終声が -p と写されている。伊藤智ゆき(2007: 211)はそれを *p^hik に由来するものと解釈したが、ŋ 終声を持つ字のなかで、「逼」の終声のみ -p に変わった理由が説明できない。ともかく p^hip

¹³⁹ 『正韻』に収録されている庚₃韻の唇音字はほとんどすべてが舒声字であり、入声字は幫母の「碧」字しかない。しかし、そもそも中国音にも庚₃韻唇音の入声字はきわめて少ない。「碧」は『広韻』ではなく、『集韻』に収録されている。

は梗撰字を写したとはとても考えられず、そういう理由で、基準音と選ばれなかったと考えられる。

<表 34> 「iuiəŋ/iuiək」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
庚合 3 梗	牙音(16)	「iə」榮蝶永詠泳(5)
庚合 3 梗	喉音(1)	「iə」兄(1)
清合 3 梗	牙音(25)	「iə」傾頃纈瓊(4)
清合 3 梗	齒頭(5)	「iə」駢(1) 心母のみ
清合 3 梗	喉音(23)	「iə」營穎役疫(4)
青合 4 梗	牙音(17)	「iə」肩綱(2)
青合 4 梗	喉音(27)	「iə」螢榮炯(3)
青開 4 梗	喉音(7)	なし、「鬪諫矜穆殺欸諡」
蒸合 3 曾	喉音(16)	「iə」域闕洫(3)

次に、<表 34>に見られるように、正韻音の中声が iuiə で現れる字は梗撰 3・4 等の合口、及び、4 等青韻開口の喉音字、また曾撰 3 等韻合口の喉音字である。これらの字の伝承音を見ると、すべての中声が iə で現れる。

まず、3 つの合口韻の構成要素を見ると、3 等介音、合口介音、主母音、陽声韻尾から成り立っている。しかし、伝承音の中声には 3 等介音や主母音しか反映されていない。河野六郎(1979: 441)によると、韓国語の場合、中国語のように二重母音や三重母音を豊富に持つ言語ではなく、むしろそれとは逆の単母音の傾向が強い言語であるという¹⁴⁰。つまり、梗撰 3・4 等及び曾撰 3 等韻の合口韻が韓国語に流入する時、韻尾を除いても 3 つもある韻母の要素をすべて受け入れることができず、一部だけが受け入れられた結果、それらの合口韻の中声が iə で現れたと考えられる。しかし、正韻音の全般を見れば、より明らかになるだろうが、『正韻』の编者らは 3 等介音が表記に反映されなかった場合、それを修正せず、そのまま取り入れたが、合口性が反映されていない場合には、その中声をもれなく修正した。したがって、上述の 3 つの韻の中声も iuiə に修正したのである。

それなら、合口性を反映していない伝承音をどのような方式で修正したのであろうか。考えられる方法は次の二通りある。

- ① 合口性が現れない伝承音の中声に合口性を差し加える。
- ② 該当韻の開口韻の中声に合口性を加える。

ここで問題になるのは開口韻と合口韻の伝承音の中声が異なっている例がなければ、2 種の方式のうちどちらが選ばれたかが分かりにくいということである。例えば、梗撰 3・4 等

¹⁴⁰ 河野六郎(1979)は効撰・流撰の伝承音に韻尾-wが反映されず、ほとんどの場合短母音で現れる現象を解釈する際、このような説明を付け加えたが、中国語の二重母音が韓国語において短母音に受け入れられるのは頻繁に見られる。

の場合、開合を問わず、伝承音の中声が $i\text{ə}$ で現れる。したがって①と②の結果が等しくなり、逆に言えば両方で解釈することができると言える。しかし、蒸韻喉音字の場合、開口韻の伝承音の中声が「 $i \cdot \text{ə} \cdot i$ 」で現れ、正韻音の中声は「 $i \cdot i$ 」で現れる¹⁴¹。一方、合口韻の伝承音は<表 34>から分かるようにすべての中声が $i\text{ə}$ で現れる。つまり、①の方式で蒸韻喉音字の伝承音を修正したとすれば、それらの字は $u\eta$ (合口性+i) 韻或いは $ui\eta$ (合口性+i) 韻に入れられる可能性が高い。しかし、蒸韻喉音字は $iuie\eta$ 韻に入れられた。つまり、このことに基づけば『正韻』の編者らが合口韻を修正する際、②の方式で伝承音の中声を修正したことが明らかになる。

一方、<表 34>を見ると、青韻開口の喉音字が合口扱いされたことが分かる。これらの字は『挙要』において「橘」字母韻¹⁴²に該当し、合口扱いされている。つまり、『正韻』の編者らは「閱跡矜穉殺赦諡」の7字が江韻の舌歯音字と同様に合口に変化したと判断し、それらの中声を $iuie\text{ə}$ に修正したと考えられる。また、正韻音の中声が $iuie\text{ə}$ に修正された結果から、おそらく7字の伝承音の中声は $i\text{ə}$ であった可能性が高いと推測できる。

4.1.7 まとめ

4.1においては「捭觥肱公江弓京」韻部の正韻音の中声を伝承音の中声と比較し、『正韻』の編者らが主にどういった中声を受け入れ、どういう中声を修正したか、また、修正した中声はなぜ修正しなければならなかったについて検討した。その結果、次のことが明らかになった。

『正韻』の韻を定める際、基本的に伝承音を考慮に入れたことや、正韻音の中声が伝承音の中声をかなり受け入れていることを確認した。しかし、開合の区別、莊組と章組との区別、1・2等と3・4等との区別は伝承音ではなく『挙要』の字母韻に基づき、該当字を分類したと考えられる。ただし、重韻の場合その差が中声に現れなくても修正せずそのまま韻書に載せた。さらに、伝承音に特定の傾向が見られない場合にも字母韻によりそれらの字を分類したと考えられる。しかし、開合などを区別する際字母韻を参考にしたとはいえ、その中声を修正する際には伝承音を最大限受け入れようとしたと見られる。

修正のパターンは次の四通りである

① 音節制約：本稿でいう音節制約とは固有語ではなく、『正韻』において許されない音節を示す。例えば、伝承音には「 $-\text{a}\eta$ ($-\text{ak}$) \cdot $-\text{e}\eta$ ($-\text{ek}$)」という音節が見られるが、正韻音を見ると、そういう音節形が全く見られない。それは、『正韻』において「 $\text{a}\eta \cdot \text{e}\eta$ 」のような音節が許されなかったことを示す。

¹⁴¹ $i \cdot \text{ə}$ で現れる字はすべて $i\eta$ 韻に取りまとめ、 i で現れる字は $i\eta$ 韻に配属した。

¹⁴² 「橘」字母韻は臻撰3等入声の「橘橘」小韻、梗撰4等入声の「臭闐闐」小韻から成り立つ。

② 韻部の区別：韻部を区別するためというのは、言い換えれば、撰ごとに入れる韻部が定められていたことを表す¹⁴³。例えば、登韻合口の伝承音のほとんどの中声が「o・u」で現れるにもかかわらず、「oŋ・uŋ」韻ではなく「oiŋ・uiŋ」韻に取りまとめた理由は、通撰と曾撰を同一の韻部に配属することが許されなかったためである。さらに、このことから『正韻』の編者らにとって中古音の「通・江・宕・曾・梗」の5つの撰は「通」「江・宕」「曾・梗」撰の3つのまとまり撰に認識されていたことがうかがわれる。

③ 開合の区別：先行研究でも指摘されてきたように、『正韻』では開合を厳格に区別していることを再確認することができた。さらに、曾撰1・3等の合口韻を検討することにより、合口性が反映されていない中声を修正する際には、該当字の伝承音を最大限反映しようとしたことを明らかにした。

④ 洪細¹⁴⁴の区別：『正韻』においては1・2等と3・4等をできるだけ区別しようとしていると見られる。それは梗撰の2等韻と3・4等韻を区別したことや、莊組と章組を区別したことから確認できる。

修正の対象となった中声を類型別に表すと、次の通りである。（下線は出現率が低いため修正した伝承音の中声を示す。）

撰 開合	正韻音中声	伝承音中声
曾撰 梗撰 開口	i i Λi iə	i・ <u>Λ</u> ・ <u>ə</u> ①・ <u>iə</u> ④・ <u>i</u> ・ <u>Λi</u> i・ <u>i</u> ④ Λi・ <u>a</u> ②・ <u>iə</u> ④・ <u>i</u> iə・ <u>Λi</u> ・ <u>i</u> ④i
曾撰 梗撰 合口	oi ui iuie	oi・ <u>o</u> ・ <u>u</u> ② <u>u</u> ②・ <u>i</u> ③・ <u>oi</u> <u>iə</u> ③
通撰	o io u iu	o・ <u>u</u> io・ <u>oa</u> ・ <u>iu</u> ・ <u>o</u> u iu・ <u>io</u>
宕・江撰 開口	a ia	a・ <u>Λ</u> ・ <u>oa</u> ia・ <u>a</u>
宕・江撰 合口	oa	oa・ <u>a</u> ③・ <u>oi</u> ・ <u>ia</u>

¹⁴³ 4.1.2を参照されたい

¹⁴⁴ 洪細は洪音と細音を合わせて呼ぶ際用いられる用語である。中国語音韻学において1等や2等を洪音と呼び、3等や4等を細音という。

4.2 n 終声

正韻音のうち終声-nを持つ韻部は都合5個であり、これらの韻部はさらに12個の韻に分かれる。5韻部や12韻及びその代表字をまとめると次のとおりである。

<表 35> n 終声類

韻部	韻	平	上	去	入
an	an	根	懇	艮	
	in	巾	謹	斬	訖
	in	珍	緊	鎭	吉
on	on	昆	袞	論	骨
an	an	干	筭	汗	葛
	oan	官	管	貫	括
un	un	君	攢	攢	屈
	iun	鈞	梱	俊	橘
ən	ən	鞮	蹇	建	訐
	iən	堅	繭	見	結
	uən	卷	卷	辮	厥
	iuiən	涓	畎	睞	玦

『正韻』の韻部、正韻音の中声表記、中古音の韻と撰、『挙要』の字母音及び反切下字、訳訓音の中声をまとめると、次の通り。

<表 36> ㄣ[n] ㄷ[1] (ㄷ[1]) 終声類

韻目	韻類	中声	中古音撰韻(等)	字母韻	反切下字	訳訓音中声
根	根	・ ㄆ	臻痕	根	痕	一ㄷ
	巾	一 i	臻眞 臻欣 臻痕 臻臻 ¹⁴⁵	巾根欣	巾斤痕臻	ㄱ一
	珍	ㄱ i	臻眞	欣巾	鄰	ㄱ
昆	昆	ㄱ o	臻魂	昆	昆	ㄷ
干	干	ㄱ a	山寒 山刪 山山 山桓	干間官	干姦閑官	ㄱ ㄱ ㄱ ㄱ
	官	ㄱ oa	山桓 山刪 山山	官關	官頑還	ㄱ ㄱ ㄱ
君	君	ㄱ u	臻文	鈞筠雲昆分	分	ㄱ ㄱ
	鈞	ㄱ iu	臻眞 臻諄	鈞筠	倫	ㄱ
	鞮	ㄱ ə	山元 山仙	鞮堅干	言虔袁	ㄱ ㄱ ㄱ
	堅	ㄱ iə	山仙 山先	堅鞮賢	年延	ㄱ

¹⁴⁵ 臻撰の重紐3等開口韻

韃	卷	ㄱ uə	山元 山仙	卷涓	袁員	ㅁ
	涓	ㅁ iuiə	山先 山仙	涓	玄緣	ㅁ ㅅ

中古音の撰のうち、韻尾-nを持つ撰は臻撰と山撰である。〈表 36〉から分かるように臻撰は $\Delta n \cdot on \cdot un$ 韻部に対応し、山撰は $an \cdot \Delta n$ 韻部に対応する。4.1.1 において検討したが、曾撰の伝承音にも中声が Δ で現れる字があった。しかし、『正韻』ではそれらの伝承音の中声をすべて他の中声に修正した。その反面、n 終声をもつ韻部には Δn 韻部が立てられており、臻撰 1 等韻をそこに取りまとめておいたという点が興味深い。以下では韻部ごとに正韻音と伝承音を比較検討する。

4.2.1 Δn 韻部

Δn 韻部には合計 3 つの韻が含まれているが、 Δn 韻・in 韻・in 韻がそれぞれである。 Δn 韻部は中古音の臻撰と対応するが、1 等は Δn 韻に、3 等韻は in 韻・in 韻にそれぞれ対応する。次の〈表 37〉はその対応関係を示したものである。

〈表 37〉 Δn 韻部

中終声	撰	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
Δn	臻	痕	1	開		Δ	n/t	牙、透母、影母
in	臻	欣	3	開	j	i	n/t	牙、喉、初母
in	臻	臻	3	開	j	i	n/t	莊組
in	臻	真	B	開	rj	i	n/t	牙、喉、初母
in	臻	痕	1	開		Δ	n/t	匣母
in	臻	真	A	開	j	i	n/t	牙、舌上、唇重、喉、半舌、半齒、精組、章組
in	臻	真	B	開	rj	i	n/t	唇重、影母
in	臻	諄	3	合	jw	i	n/t	崇母去声 ¹⁴⁶

以下の〈表 38〉〈表 39〉〈表 40〉は、伝承音の中声の出現頻度を声母ごとにまとめたものである。

〈表 38〉 「 $\Delta n/\Delta l$ 」 韻類の韓国漢字音の中声

¹⁴⁶ in 韻には諄韻・崇母・去声の「醕(伝承音なし)」字が収録されている。中古音では諄韻が真韻の合口韻であるが、「醕」は「巾」字母韻に属するため、『正韻』においては開口扱いされたことが分かる。

韻母	七音	伝承音
痕開1臻	牙音(14)	「i」根跟齷(3)「Λ」懇(1)
痕開1臻	舌頭(1)	「Λ」吞(1)
痕開1臻	影母(1)	「i」恩(1) 影母

Λn 韻には臻撰1等韻である痕韻の牙音・透母・影母が収められた。牙音字のうち伝承音の中声がΛで現れる字が1字しか見られず、ほかの3字の中声はすべてiで現れるが¹⁴⁷、『正韻』の編者らは伝承音を受け入れず、それらの字をΛn 韻に取りまとめた。さらに、影母字が1字しか収録されていないが、「恩」の中声はiで現れるにもかかわらず、その字をΛn 韻に入れた。さらに疑問になるのは、以下の<表 39>を見れば分かるように、痕韻の匣母の場合、伝承音の中声がΛとiが1回ずつ現れるが、in 韻に入れられた点である。つまり、痕韻の場合、伝承音を受け入れたとは言にくいかもしれない。それに関連して、조운성(2011B: 58)は『挙要』痕韻の牙音・透母・影母は「根」字母韻に属し、匣母だけが「巾」字母韻に属していることを反映した結果と述べた。つまり、痕韻に限って伝承音ではなく、字母韻に基づいて分韻したということになるが、その理由が分かりにくい。ただ、痕韻に属する字が余りにも少ないため¹⁴⁸、伝承音以外の資料を参考にした可能性があり得る。

ところで、4.1.1において述べたように、少数であるが、伝承音に中終声がΛnで現れる字があるにもかかわらず、『正韻』の編者らはΛn 韻を立てず、それらの字をin 韻に取りまとめた。その反面、中終声がΛnで現れる伝承音が、それほど多く見られるというわけでもないのに、今度は、わざわざΛn 韻を立て、わずかの字をそこに取りまとめた。つまり、曾撰の1・3等はそれほど細かく分類しなかったが、臻撰の1・3等はできるだけ細かく分類しようとしたのである。その理由は、撰内の韻同士の関係にかかわっていると思う。詳しく言えば、曾撰の1・3等韻はほぼ同一の主母音を持ち、両韻の違いは3等介音を持つか否かにあると考えられる。曾撰字の伝承音資料を見ると、中声表記に3等介音が反映されていない場合が沢山ある。しかし、『正韻』においては、そういった伝承音をほとんど修正しなかった。通撰の東₁・東₃韻や効撰の1・3等韻の関係も曾撰の1・3等韻と類似しているが、『正韻』におけるそれらの韻に対する扱い方はほぼ変わっていない。このことに基づけば、同じ主母音を持っている1・3等韻の伝承音の場合、あえて区別しようとしなかったと考えられる。一方、臻撰の痕韻や真韻も1等韻：3等韻の関係にあるが、両韻の主母音はか

¹⁴⁷ 河野六郎(1979: 470-471)によると、伝承音の中声Λとiは中国音のəを写す2つの方法であり、両者の間には時代的違いがあるという。また、『四声通解』を参考にすると、iと写すのが定石であるから、iの方が新しく、Λは古い時期の写音であると述べた。その上に、中国音のənは変化を成していないため、Λn・inは韓国語の母音の動きに関連すると解釈した。

¹⁴⁸ 調べたところ『広韻』に収録されている痕韻字は全部で15字である。すなわち「痕𦉳根橋(匣)根跟根根(見)恩袞𦉳(影)吞(透)垠圻浪(疑)」『正韻』には1字増えて、16字が収録されている。すなわち「根跟根良(見)懇根頤壘齷(溪)垠圻壘限眼(疑)吞(透)恩(影)痕𦉳根根恨(匣)」『広韻』には溪母字が載っていなかったが、『正韻』には5字もある。

なり異なっていた¹⁴⁹と考えられる。『切韻』時期の韻文において両韻が押韻する例が極めて稀であったことを参考にしても¹⁵⁰、その可能性が高い。つまり、『正韻』の編者らも臻撰の痕・真韻の関係が曾撰の登・蒸韻の関係とは異なっていることに気付いていたため、伝承音に現れるかすかな差を見逃さず、正韻音の表記に反映したと考えられる。だが、伝承音にそれほど多く見られない Δn を韻として立てた理由は、真韻がさらに重紐¹⁵¹A類とB類に分かれるためだろう。以下の〈表 39〉〈表 40〉を見れば分かるように、真韻の重紐A類とB類の伝承音の中声はそれぞれ i と i で現れる傾向がある。そのため、真韻を収めるためには in 韻や in 韻を立てなければならなかったはずである。つまり、 Δn 韻を立てなければ、やむをえず、痕韻を真韻のB類と一緒に in 韻に入れなければならなかった。そこで『正韻』の編者らは、それを避けるために、 Δn 韻を立て、痕韻をそこに取りまとめたと考える。

〈表 39〉 「in/il」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
真開 B 臻	牙音 (44)	「i」 僅 僅 覲 銀 闇 嚳 迤 (7) 「ə」 巾 (1)
真開 3 臻	照 2 (5)	「i」 櫛 櫛 齟 (3) 「i」 櫛 (1)
真開 B 臻	曉母 (2)	「i」 肸 (1) 入声
欣開 3 臻 ¹⁵²	牙音 (36)	「i」 斤 筋 謹 謹 斬 訖 勤 勲 芹 近 近 斷 (12) 「ə」 吃 乞 (2)
欣開 3 臻	喉音 (42)	「i」 殷 愍 隱 櫟 欣 訖 听 (7)
臻開 2 臻	照 2 (16)	「i」 櫛 瑟 蝨 (3) 「i」 榛 藜 (2)
痕開 1 臻	匣母 (5)	「i」 痕 (1) 「 Δ 」 恨 (1)

正韻音の中声が i で現れる字は真 B 韻¹⁵³の牙音・曉母、真韻の照 2、欣韻の牙喉音、臻¹⁵⁴韻の照 2、痕韻の匣母に当たる。痕韻を除いたほかの 3 つの韻は介音と主母音から成り立つ韻であるが、伝承音の中声はすべて単母音で現れる。

¹⁴⁹ 麥耘 (2009) は痕韻や真韻の再構音を以下のように推定した。

前期中古音：痕韻 ə、真韻 i

後期中古音：痕韻 ə、真韻 iə

平山久雄 (1967) の再構音は痕韻 ə、真韻 iě (iě)

¹⁵⁰ 최영애 (2000 : 277) による。

¹⁵¹ 重紐については 4.5 において述べる。

¹⁵² 牙喉音以外に初母の「齟」字が収録されているが、伝承音資料がない。

¹⁵³ 重紐の種類は韻の後に A か B を付けて表記する。下同

¹⁵⁴ 臻韻には莊組字しかなく、その上に平声・入声字しかない。一方、真韻の場合、莊組字が上・去声にしか現れない。そういうわけで、両韻を 1 つの韻に合わせることができる。顔師古

真B韻の牙音字の伝承音を見ると、中声 i が中声 ə より多く現れるため、伝承音を受け入れた結果と考えて良い。しかし、莊組字の場合、中声が i で現れる字が1字あり、i で現れる字が3字「櫛櫛齷」ある。さらに、曉母の場合、伝承音資料が残っている字が1つしかないが、その中声が i で現れる。つまり、真韻の莊組・曉母字の正韻音は伝承音を受け入れなかったと思われる。

まず、莊組字を見ると、章組字(照3)が in 韻に取りまとめられたことを考慮すれば、照2等・3等を区別するため、莊組字を in 韻に入れたと解釈することができる。その上、真韻の莊組字は臻韻の莊組字と相補分布をしているため、両韻を合わせて扱う場合が多い。つまり、真韻・臻韻を合わせて考えると、伝承音の中声の出現頻度は i(5) : i(4) で、ほぼ等しくなる。したがって、莊組字は照2・3等を区別すると同時に、伝承音をも受け入れていると言えるだろう。

一方、曉母の2字を in 韻に収めたのは理解しにくい。『正韻』には真B韻の喉音字が全部で8字、さらに詳しく言えば、影母入声字が2字「乙𪗇(i)」、曉母去声字が4字「𪗇¹⁵⁵ 𪗇興𪗇(伝承音なし)」、曉母入声字が2字「𪗇(i) 𪗇(なし)」収録されている。しかし、それらの字の伝承音を見ると、in 韻に収められた字の中声が i で現れ、in 韻に属する字の中声は i で現れることが分かる。つまり、分韻の結果を見ると、伝承音を受け入れないどころか、全く正反対の結果を示している。さらに「乙𪗇」字が、真A韻の影母入声字である「一𪗇(i)」と一緒に in 韻に置かれているが、これはほかの字に対する扱い方¹⁵⁶を考えれば、到底納得できない。また、真B韻の喉音字の字母韻を確認したところ、4字の入声字が「訖」字母韻に属し、曉母去声字は「巾」字母韻に属する。2種の字母韻は単に舒声と入声の違いを示しているだけであるため、以上の8字を in 韻と in 韻に分けて収めた根拠にはならない。in 韻に真B韻の喉音字を入れたのは、あるいは『正韻』の編者らの間違いかも知れないが、それを裏付ける根拠がない。

欣韻の牙喉音字を in 韻に取りまとめたのは言うまでもなく伝承音を受け入れた結果であろう。

<表 40> 「in/il」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
真開 A 臻	牙音(5)	「i」 緊吉詰(3)
真開 3 臻	舌上(58)	「i」 珍鎮室銍趁陳塵陣秩帙姪(11)
真開 B 臻	唇重(55)	「i」 彬筆貧弼佛旻愍閔憫泯敏(11)
真開 A 臻	唇重(81)	「i」 賓僮擯殯鬢必畢齏匹疋頻蘋 ¹⁵⁵ 牝秘民蜜密(18)

(581-645)の『漢書注』(不詳)には真韻と臻韻が区別されていないが、『切韻』では両韻がそれぞれ独立している。

¹⁵⁵ 「𪗇」の現代韓国漢字音は hin である。

¹⁵⁶ 照2等・3等字を区別することや、重紐A・B類を分けることなど。

真開 3 臻	齒頭(67)	「i」 津盡晉摺進親七漆漆秦盡疾疾疾辛新薪信訊洒頤悉蟋膝燼(25)
真開 3 臻	照 3 (110)	「i」 眞畛畛疹震振賑質攢礦蛭恹噴申伸紳身娠矧哂失室神辰晨 宸臣腎慎實(32) 「iu」 蜃(1)
真開 B 臻	喉音(6)	「i」 乙𪔐(2)
真開 A 臻	喉音(54)	「i」 因茵姻印一壹寅引蚓逸佚佻溢(13) 「iə」 姻(1)
真開 3 臻	半舌(56)	「i」 鄰麟麟吝恪磷(6) 「iu」 栗慄策(3)
真開 3 臻	半齒(18)	「i」 人仁忍刃刃切日(7)

正韻音の中声が i で現れるのは真 A 韻の牙音・唇重音・喉音、真 B 韻の唇重音・喉音、真韻の舌上音・齒頭音・章組・半舌音・半齒音字である。有坂秀世(1936 : 44-45)によると、伝承音において 3 等韻には A 類の牙・唇・喉音と舌上・齒頭・章組・半舌・半齒音が同一の中声で現れ、B 類の牙・唇・喉音と莊組が同一の中声で現れる傾向があるという¹⁵⁷。ただし、唇音はほとんどの場合、重紐の差が反映されず、A 類の中声で現れる。真韻の伝承音を見ると、唇音を除けば、A 類と B 類がはっきりと区別されており、正韻音も伝承音のそういう傾向をそのまま受け入れている。

半舌音字の場合、舒声字の伝承音の中声が i で現れる反面、入声字の中声は iu でしか現れない。伝承音に従えば、入声字が iun 韻に収められなければならない。iun 韻には臻撰の文韻や諄韻が配属しているが、両韻はそれぞれ欣韻と真韻の合口韻に該当する。しかし、入声字の中声 iu がまるで合口介音を反映しているように見えるが、中古音においても、字母韻を見ても、「栗慄策」などの入声字は合口扱いされていない。つまり、入声字を in 韻に取りまとめた理由は、それらの字が確かに開口であるため、合口と一緒に収めることが、許されなかったと解釈できる。

真韻の莊組(照 2)・章組(照 3)字の伝承音を見ると、章組字の中声が i で現れるのに対して、莊組字の中声は i や i が混ざって現れることが分かる。一方、蒸韻の場合、真韻とは異なり、莊組字の中声が i で現れ、章組字の場合、中声 i や i の出現頻度がほぼ等しい。しかし、『正韻』においては莊組字の中声を i に、章組字の中声を i に修正した。このことから、『正韻』の編者らの等に対する認識がうかがわれると思う。つまり、2 等韻には中声 i が、3 等韻には中声 i がそれぞれ対応すると考えたのではないか。それから、中声 i が[舌少縮]であり、i は[舌不縮]¹⁵⁸であるという説明を根拠にすると、『正韻』の編者らはおそらく 2 等韻と 3 等韻の違いを大体[舌縮]の程度でつかんでいたと見られる。

¹⁵⁷ 조운성 (2011B : 40) から再引用

¹⁵⁸ “・舌縮而声深・天開於子也。形之圓・象乎天也。一舌小縮而声不深不淺・地關於丑也。形之平・象乎地也。一舌不縮而声淺・人生於寅也。形之立・象乎人也”(『訓民正音』「制字解」8b-9a)

4.2.2 on・un 韻部¹⁵⁹

on 韻部は on 韻 1 つから成り立っており、un 韻部には un 韻・iun 韻が含まれている。両韻部にはそれぞれ臻撮合口の 1 等韻と 3 等韻が対応する。「on・un・iun」韻に対応する中古韻をまとめて見ると、次の通り。

<表 41> on 韻部

中終声	撰	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
on	臻	魂	1	合		u	n/t	牙、舌頭、唇重、齒頭、喉、半舌
on	臻	真	3	合	jw	i	n/t	生母

<表 42> un 韻部

中終声	撰	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
un	臻	文	3	合	j	u	n/t	牙、唇軽、喉
iun	臻	諄	3	合	jw	i	n/t	牙、喉、知組、精組、章組、来母、日母
iun	臻	真	B	合	jw	i	n/t	牙、喉

以下の<表 43><表 44><表 45>は、伝承音の中声の出現頻度を声母ごとにまとめたものである。

<表 43> 「on/ol」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
魂合 1 臻	牙音 (92)	「o」 昆 蛄 衰 滾 骨 坤 闔 困 兀 (9) 「u」 裊 窟 (2)
魂合 1 臻	舌頭 (65)	「o」 敦 墩 頓 拙 嗽 褪 豚 燉 圀 沌 遯 突 埃 揆 (14) 「u」 屯 臀 鈍 訥 (4)
魂合 1 臻	唇重 (73)	「o」 本 畚 沒 (3) 「u」 奔 賁 噴 盆 門 (5) 「ʌ」 勃 (1) 「i」 悶 (1)
魂合 1 臻	齒頭 (57)	「o」 尊 卒 村 村 寸 猝 卒 存 罇 孫 蠶 孫 異 孫 (14) 「u」 蹲 (1) 「a」 獮 (1)
魂合 1 臻	喉音 (59)	「o」 溫 穩 昏 闇 婚 忽 笏 魂 渾 混 渾 棍 鶻 (13)
魂合 1 臻	半舌 (7)	「o」 論 (1)
真合 3 臻	照 2 (4)	「o」 率 蟀 帥 (3)

¹⁵⁹ on 韻部や un 韻部は独立している韻部であり、韻目の配列を見ても、un 韻部は an 韻部の後に置かれているが、両韻部が共に臻撮の合口韻に対応するため、説明の便宜上、まとめて検討することにする。

正韻音の中声がoで現れる字は魂韻の牙音・舌頭音・唇重音・齒頭音・喉音・半舌音字、真韻の莊組字である。伝承音の中声は魂韻の唇音字を除けばほとんどの場合、中声oで現れる。

舌頭音字は「o」のほかに「u」で現れる字が4字「屯臀鈍訥」ある。しかし、例外が多いため、on韻に収められた。齒頭音字にも2つの例外「蹲(u)獮(a)」が見られるが「獮」の場合、2つの伝承音が存在し、そのうち1つがoで現れるため、実際には例外が1字「蹲」しかないと言える。そして、その例外は伝承音に基づき修正された。

唇音字の場合、さまざまな中声で写されたが、中声がoで現れる字が3つしかなく、uで現れる字が5字「奔賁噴盆門」、Λで現れる字が1字「勃」、iで現れる字が1字「悶」ある。にもかかわらず、唇音字をunでなくon韻に入れた理由は1等・3等の区別のためと考えられる。これは梗撰3等と区別するために2等をなるべくΛip韻に入れようとした扱い方と一脈通じるところがある。

真韻莊組字の場合、伝承音の中声にしたがっていると考えられる。

<表 44> 「un/ul」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
文合 3 臻	牙音 (68)	「u」君軍戰屈郡崛堀 (7) 「u」雲云芸耘運暈饌韻 ¹⁶⁰ (8)
文合 3 臻	唇輕 (170)	「u」分饋粉糞奮債芬氛紛忿粉盆焚漬墳墳憤忿分佛文紋聞蚊問聞汶豐 (28) 「i」弗黻不拂佛吻勿物 (8)
文合 3 臻	喉音 (64)	「u」鬱熨蔚熏纒勳葦訓 (8) 「o」氤蘊韞醞愠縕 (6)

正韻音の中声がuで現れる字はすべて文韻に属する。牙音字の場合、伝承音の中声がすべてuで現れるため、議論の余地がない。唇音字は中声uで現れる字が、iで現れる字よりずっと多いため、un韻に収められたと考えられるが、中声iが合口性を伴っていないため修正せざるを得なかったと解釈することもできる。喉音字は中声u(8字)やo(6字)がほぼ等しく現れるが、臻撰1等と区別するためにun韻に収められたらう。

<表 45> 「iun/iul」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
諄合 A 臻	牙音 (13)	「iu」鈞均橘 (3)
諄合 3 臻	舌上 (22)	「iu」椿黜朮 (3) 「u」窰 (1)

¹⁶⁰ 右側の8字の声母は中古音においては云母であったが、『挙要』では疑母になった。『挙要』の字母体系(声母体系)は36個の字母から成り立っているが、その中身は、中古音の36声母とは少し異なっている。조운성 (2011B : 21-22)によると、大体、中古の疑母1・2・3等の開口、云母開口及び1・2等の合口が『挙要』の疑母に対応し、疑母3等の合口や云母合口が魚母に対応し、以母及び疑母4等開口が喻母に対応するという。さらに、『挙要』と『正韻』の字母の対応関係を見ると、『挙要』の疑母・魚母が『正韻』の業母に対応し、喻母が欲母と対応するという。つまり、以上の8字は『挙要』の魚母に属し、『正韻』では業母に属する。

諄合3臻	齒頭(80)	「iu」 逡敏詢恂筍隼峻恤卹戍誅旬循巡徇(15) 「u」 遵(1)「o」 卒啐(2)
諄合3臻	照3(67)	「iu」 肫準春蠢出舜舜瞬胸脣純淳醇鶉蓐盾楯順術述稭(21) 「u」 肫(1)
諄合3臻	喉音(19)	「iu」 尹允繻鷗(4)
諄合3臻	半舌(15)	「iu」 倫淪輪綸律(5)
諄合3臻	半齒(9)	「iu」 閏潤(2)
真合B臻	牙音(28) ¹⁶¹	「iu」 困菌(2)「u」 窘(1) 「iu」 筠(1)「u」 隕殞(2) ¹⁶²

すべての諄韻字や真韻合口の牙音字は iun 韻に取りまとめられた。諄韻の牙喉・半舌・半齒字の伝承音には例外が見られない。舌上・照3字の場合、伝承音の中声が u で現れる字が1字ずつ現れ、齒頭音字にも u で現れる字が1字、o で現れる字が2字あるが、それらの例外は伝承音に合わせて修正した。真韻合口牙音字の場合、中声 iu と u が半分ずつ現れるが、すべての字が iun 韻に入れられた。これに基づけば『正韻』の編者らが文韻と諄・真韻合口韻をできるだけ区別しようとしたと推測される。上述したように、真韻(諄韻及び真韻合口の開口)は欣韻(文韻の開口)と一緒に臻撰に属しているものの、主母音があまり類似していない¹⁶³。『正韻』の編者らはそのことを考えに入れ、真韻合口字の中声をすべて iu に修正したかも知れない。

4.2.3 an 韻部

an 韻部には an 韻や oan 韻が含まれる。この韻部に山撰の1・2等韻や2等韻の崇母字が対応する。以下の<表46>は「an・oan」韻に対応する中古韻をまとめたものである。

<表46> an 韻部

中終声	撰	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
an	山	寒	1	開		ɒ	n/t	牙、舌頭、齒頭、喉、半舌
an	山	桓	1	合	w	ɒ	n/t	唇重
an	山	山	2	開	r	æ	n/t	牙、舌上、唇重、喉、莊組
an	山	刪	2	開	r	a	n/t	牙、舌上、唇重、喉、莊組
oan	山	桓	1	合	w	ɒ	n/t	牙、舌頭、齒頭、喉、半舌

¹⁶¹ 真B韻の牙音字以外にも喉音字(影母)が1字「贄」収録されているが、伝承音が残っていない。また、真A韻の曉母である「獠喬獠瞞曷眈愆」も載っているが、伝承音が残っていない。

¹⁶² 「筠隕殞」字の声母も中古音の云母に属する。

¹⁶³ 欣・文韻は痕・魂韻と近い。

oan	山	山	2	合	rw	æ	n/t	見、端、泥、莊、影、匣
oan	山	刪	2	合	rw	a	n/t	牙、喉、莊組
oan	山	仙	3	合	jw	ε	n/t	崇母 上声、去声

以下の<表 47><表 48>は、伝承音の中声の出現頻度を声母ごとにまとめたものである。

<表 47> 「an/al」 韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
寒開 1 山	牙音 (53)	「a」 干竿肝奸乾漈筍稈葛割吁幹看侃侃渴岸栳(18) 「iə」 岸(1)
寒開 1 山	舌頭(103)	「a」 單簞禪丹且灘攤坦炭歎嘆闢撻癩壇檀彈但袒誕憚彈但達難難捺(27) 「io」 且(1)
寒開 1 山	齒頭 (53)	「a」 贊讚撻餐璨殘珊散讖傘散薩(12) 「oa」 散(1)
寒開 1 山	喉音 (67)	「a」 安鞍按案遏漢喝寒韓早翰鋸汗駝悍駝轄(17)
寒開 1 山	半舌 (33)	「a」 蘭瀾欄癩爛辣糲(7)
刪開 2 山	牙音 (19)	「a」 姦諫澗坵慳顏鴈贗(8) 「oa」 菅(1)
刪開 2 山	舌上(4)	「a」 赧(1)
刪開 2 山	唇重(40)	「a」 班斑頒板攀蠻慢(7)
刪開 2 山	照 2(15)	「a」 刹訕(2)
刪開 2 山	喉音 (17)	「a」 晏瞎憚軒(4)
山開 2 山	牙音 (39)	「a」 間艱簡揀襴閒眼(7)
山開 2 山	舌上(5)	「a」 綻(1)
山開 2 山	唇重(21)	「a」 八瓣辨(3) 「iə」 盼(1)
山開 2 山	照 2(38)	「a」 盞札鏟察孱棧山産殺(9)
山開 2 山 164	喉音 (31)	「a」 閑癩(2) 「ʌ」 限(1)
桓合 1 山	唇重(118)	「a」 般半撥鉢潘判泮醜盤癩蟠胖伴畔叛跋拔撥曼謾饅饅饅鞞滿幔漫末沫抹麩(31) 「ə」 潘(1)

正韻音の中声が a で現れる字は寒韻の牙音・舌頭音・齒頭音・喉音・半舌音字、刪・山韻の牙音・舌上音・唇重音・照 2・喉音字、桓韻の唇重音字である。山撰 1・2 等韻の伝承音の中声はほとんどすべてが a で現れる。2 等の刪・山韻は重韻の関係にあるが、伝承音においてその違いが全く現れない¹⁶⁵。しかし『正韻』の編者らはその中声を修正せず、そのまま受け入れた。つまり、1 等韻と 2 等韻を分韻せず、さらに重韻に関係にある韻も分類しなかったということであるが、このこと

¹⁶⁴ ほかに、半舌音字が 4 字「爛癩隣隣」収録されているが、伝承音がない。

¹⁶⁵ 麥耘(2009)は刪・山韻の主母音を a・æ と推定し、平山久雄(1967)は a・ɐ と推定した。また、後期中古音時期には両韻が完全に合流し、慧琳音においては重韻の違いが全く現れない。

から彼らが伝承音を修正する際、伝承音を最大限受け入れようとしたことがさらに証明される¹⁶⁶。

寒韻の例外には、中声が iə で現れる字「岸」、io で現れる字「旦」、oa で現れる字「散」が1字ずつ見られるが、それらの字の伝承音を見ると、すべてが中声 a でも現れることが確認できる。つまり、寒韻字の伝承音には例外がないと言える。桓韻の唇音字にも中声が ə で現れる例外が1字「潘」見られるが、この字の中声もまた a や ə の二通りで現れる。

2等の刪・山韻字の伝承音の中声を見ると、ほとんどすべてが、a で現れるが、3つの例外が現れる。すなわち「菅(oa)、盼(ia)、限(Λ)」であるが、「菅」は開合を区別するため、「盼」は3・4等との区別のため、「限」は臻摂と山摂を区別するため、修正したと考えられる。

<表 48> 「oan/oa1」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
桓合1山	牙音(84)	「oa」官涓棺觀冠莞管瑄轄盥鶴觀灌瓘館盥冠括括适筭寬款闊玩(25) 「uə」虻(1)
桓合1山	舌頭(78)	「a」端短斷鍛礮斷湍獮脫團段奪脫暖(14)
桓合1山	齒頭(47)	「a」鑽纂鑽竄變酸狡算筭(10) 「oa」撮(1) 「uə」蒜(1) 「oi」撮(1)
桓合1山	喉音(81)	「oa」剋琬歡權權喚渙煥桓完丸芫紈萑緩浣換活(18) 「a」幹豁(2)
桓合1山	半舌(11)	「a」鸞巒卵亂(4)
刪合2山	牙音(18)	「oa」關慣貫串刮頑(6) 「a」亂(1)
刪合2山	照2(13)	「oa」刷(1)
刪合2山 167	喉音(39)	「oa」還寰環鬢患參宦(7) 「a」彎(1)
山合2山	牙音(3)	「oa」鰓(1)
山合2山 168	喉音(9)	「oa」幻滑猾(3)
仙合3山	照2(11)	「a」饌撰(2)

¹⁶⁶ 山摂字の字母韻を見ると、重韻は合流しているが、1等韻と2等韻はほぼ区別していることが分かる。1・2等の差は訳訓音の中声にも現れるが、1等韻の中声は a で、2等韻の中声は ia で現れる。

¹⁶⁷ 舌上音字が2字「竊納」載っている。

¹⁶⁸ 舌上音字が2字「豹狃」収録されている。

正韻音の中声が oa で現れるのは、桓韻の牙喉音・舌頭音・齒頭音・半舌音字、刪韻合口の牙喉音・照 2 字、山韻合口の牙喉音字、仙韻合口の照 2 字である。

刪韻の伝承音の中声はほぼすべてが oa で現れ、牙喉音字に 2 つの例外が「𪔐𪔑(a)」が見られるが、それらの中声は合口性を反映していないため、修正した。桓韻字の伝承音には例外が比較的多く見られるが、中声が uə で現れるのが 2 字「𪔒𪔓」、oi で現れるのが 1 字「撮」ある。それらの字は伝承音に基づき修正された。桓韻・仙韻の舌齒音字の伝承音を見ると、ほぼすべての中声が(仙韻の場合、すべての中声が)a で現れる¹⁶⁹。『正韻』の編者らは伝承音を受け入れず、それらの中声をすべて oa に修正した。このことから、唇音字以外はどんな場合にでも合口性を厳しく修正したことが分かる。

4.2.4 ən 韻部

ən 韻部には ən 韻・iən 韻・uən 韻・iuīən 韻が含まれる。この韻部に山撰の 3・4 等韻が対応する。以下の〈表 49〉は各韻に対応する中古音の韻母や声母をまとめたものである。

〈表 49〉 ən 韻部

中終声	撰	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
ən	山	元	3	開	j	o	n/t	牙、喉
ən	山	元	3	合	jw	o	n/t	唇輕
ən	山	仙	B	開	rj	ε	n/t	牙
ən	山	仙	A	開	j	ε	n/t	牙
iən	山	仙	A	開	j	ε	n/t	牙、唇重、喉、知組、精組、莊組、章組、来母、日母
iən	山	仙	B	開	rj	ε	n/t	疑母、唇重、喉
iən	山	先	4	開		ε	n/t	牙、舌頭、唇重、齒頭、喉、半舌
uən	山	元	3	合	jw	o	n/t	牙、喉
uən	山	仙	B	合	jw	ε	n/t	牙、来母

¹⁶⁹ これに関連して伊藤智ゆき(2007: 136)は次のように述べている。「しかし、朝鮮語(中期朝鮮語)にはそもそも、*toa-、*t^hoa-、*tiuie-、*t^hiuie-のような連続が原則として現れない。したがって朝鮮語にはこのような舌音の合口性を写す方法がなかったと見られる」また、桓韻の舌齒音は合口性が反映されず、-an(-al)で現れるのが原則と述べ、齒音に合口性が反映された例があるのは、莊組の調音が合口性を伴いやすいためと解釈した。(伊藤智ゆき(2007: 180、182)) 一方、河野六郎(1979: 428-430)は次のように述べた。「中国原音の合口の朝鮮字音における現れ方を見ると、まず 1・2 等では、牙・喉音の字は合口を明白に示す。(中略)舌頭音字は合口要素を示さないのが普通である。(中略)齒頭音も舌頭音と同様合口要素を脱落するが、合口を留める場合も可也ある。(中略)舌上音は例が少ないが、皆合口を示す。(中略)正齒 2 等は合口を失う場合と保つ場合とがある。」

iuiəŋ	山	仙	A	合	jw	ɛ	n/t	牙、喉、知組、精組、莊組、章組、来母、日母
iuiəŋ	山	仙	3	開	j	ɛ	n/t	邪母 平声
iuiəŋ	山	先	4	合	w	ɛ	n/t	牙、喉
iuiəŋ	山	先	4	開		ɛ	n/t	曉母

以下の<表 50>は、əŋ 韻に取りまとめられた字の伝承音中声の出現頻度を声母ごとにまとめたものである。

<表 50> 「əŋ/əl」 韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
元開 3 山	牙音 (45)	「ə」 鞑鞑建言 (4) 「a」 訐羯竭碣 (4) 「iə」 訐 (1)
元合 3 山	唇軽 (83)	「ə」 藩翻幡幡旛反煩繁纂燔樊攀伐筏馘罰肺 (17) 「a」 反返阪販販髮發攀飯飯晚挽萬韃襪 (15)
元開 3 山	喉音 (42)	「ə」 偃鯁堰軒掀獻憲歇蠍 (9) 「a」 謁蠍 (2)
仙開 B 山	牙音 (76)	「ə」 審愆騫攥子乾虔鍵件傑桀彦諺唁孽闐 (15) 「iə」 藁 (1)
仙開 A 山	牙音 (4)	「iə」 譴 (1)
仙開 3 山	喉音 (1)	「ə」 焉 (1)

正韻音の中声がəで現れる字は元韻開口の牙喉音字、元韻合口の唇重音字、仙韻の牙喉音字である。元韻の伝承音を見ると、喉音を除けば、中声əとaがほぼ等しく現れることが分かる¹⁷⁰。しかし、『正韻』の編者らは元韻をすべてəŋ 韻に取りまとめた。それは山撰の1・2等韻と区別するためと考えられる。

仙韻はさらに重紐A類とB類に分かれるが、仙韻の場合もほかの重紐韻と同様牙喉音字だけが重紐の差を表している。しかし、<表 50>を見ると、仙A韻の牙音字の中声がiəで現れるにもかかわらず、仙B韻と一緒にəŋ 韻に入れられたことが分かる。3.2.1において、『正韻』では重紐A・B類をきちんと区別しており、重紐字の分韻は伝承音に基づいていると述べた。しかし、仙韻牙音字の場合、伝承音を全く参考にしなかったように見られ、むしろ字母韻によりA・B類が分類されたと思われる。仙韻牙音字の字母韻を調べたところ、「譴」は重紐B類字が収められている「鞑」字母韻に、「遣」は重紐A類字が集められてい

¹⁷⁰ 元韻は本来臻撰に属する韻であったが、韻図時代に山撰に合流した韻である。최영애 (2000 : 278)によると『韻鏡』において元韻は山韻と同一の図(第21-22 転)、仙韻は刪・先韻と同一の図(第23-24 転)に置かれているが、韻書においては元韻が文・欣韻や魂・痕韻(臻撰)の間に入れられているという。元韻の伝承音の中声がəだけでなくaでも現れることに関連して、伊藤智ゆき (2007 : 185, 186)は次のように述べた。「元韻の唇音は軽唇音化を起こしている。そのため唇音は舒声-əŋ、入声-əl 以外に、舒声-an、入声-al で現れ、元韻の主母音 ʌ を反映している。」また、牙喉音の例外については類推と説明した。その反面、河野六郎 (1979 : 500)は-an(-al)をa層に、əをb層に置いた。

る「堅」字母韻に属していることが明らかになった¹⁷¹。これは『正韻』において「謹」がən韻に配属し、「遣」がiən韻に属することと一脈通じるが、このことにより、仙韻牙音字の場合、伝承音ではなく字母韻に基づき分韻したことが証明されることが考えられる。そうすると、仙韻に限り字母韻に従っている理由は何であろうか。それはおそらく字数の多寡に関係があると思われる。〈表 50〉〈表 51〉を見れば分かるように、『正韻』に仙A韻の牙音字は全部で9字しか載っておらず、そのうち伝承音が残っている字は3字に過ぎない。そこで、字母韻を参考し、仙韻A・B類を分韻したのではないか。つまり、重紐韻を分類する際、基本的には伝承音の傾向にしたがっているが、字数が余りにも足りない場合には¹⁷²、字母韻を参考して重紐A類とB類を区別した可能性があると考えられる。

しかし、だからといって、『正韻』において山摂3・4等を字母韻に基づき、分韻したとは考えられない。조운성(2010B: 216)によるとən韻部と字母韻の対応関係は次の通り。

ən韻「韃(元開・仙開)・堅(元開)・干(元合)」字母韻

iən韻「韃(仙開・先開)・堅(仙開・先開)・賢(先開)」字母韻

uən韻「卷(元合・仙合)・涓(元合)」字母韻

iuiən韻「涓(仙合・先合)」字母韻¹⁷³

以上で確認できるように、ən韻部の各韻と字母韻の対応関係は整然としていない。つまり、このことから『正韻』の編者らに伝承音が最も重要視されたことが示されると思う。ただ、上述したように、場合によっては字母韻を参考にしたことは確かなようである。

〈表 51〉 「iən/iəl」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
先開4山	牙音(60)	「iə」堅肩繭襴阡見結潔鍈挈妍研(12)「i」拮(1)
先開4山	舌頭 (146)	「iə」巔癩典天覲鐵饗田電甸畋殿澱蹶奠淀年撚涅捏(20) 「i」經埕迭(3)「a」涅捏茶(3)

¹⁷¹ 「韃・堅」字母韻は共に中古音の元韻・先韻・仙韻から成り立っており、また、開口の細音である。にもかかわらず、『韻会』においては両者が分かれている。これに関連して竺家寧(1986: 87)は韻母から見れば、その理由を説明することができないが、声母を分析すれば、「韃」字母韻には濁声母が、「堅」字母韻には清声母が収められたことが分かったと述べた。しかし、「謹(溪)」及び「遣(溪)」の声母はすべて清声母である。

¹⁷² 伝承音の資料が少ないという意味ではなく、中国の韻書に収録されている字が少ない場合を言う。同一の条件、すなわち、同じ韻母や声母に属する字が非常に少ない場合がある。例えば、『集韻』には仙韻重紐A類の牙音字が5字しか載っていない。

¹⁷³ 조운성(2010B: 220)は『正韻』に韻部と『挙要』の字母韻の対応関係について述べながら『挙要』では仙韻・祭韻の重紐の違いが見られないとしている。しかし、喉音字は1字もなく、収録された牙音字の数も余りにも少ないため(特にA類の牙音)、重紐の違いがないとは言えないと思う。

先開 4 山	唇重(74)	「iə」 邊邊編偏遍片駢編眠麪蔑蟻(12)
先開 4 山	齒頭(78)	「iə」 箋節千蒨倩切竊前截先跣霰先(13)
先開 4 山	喉音(76)	「iə」 煙燕咽咽宴燕鸞嚙咽嚙顯賢弦絃峴見覓絜(18) 「i」 咽纈頡(3) 「iə」 硯研齧覓 ¹⁷⁴ (4)
先開 4 山	半舌(17)	「iə」 蓮憐鍊煉(4)
仙開 A 山	牙音(1)	「iə」 遣(1)
仙開 3 山	舌上(48)	「iə」 展駮哲徹撤纏塵徹撤碾(10)
仙開 A 山	唇重(46)	「iə」 鞭鼈篇偏驕便便綿面滅滅(11)
仙開 B 山 175	唇重(30)	「iə」 變別辨辯卞弁別免冕勉媿(11)
仙開 3 山	齒頭(87)	「iə」 煎剪箭煎薦遷韃淺錢踐餞賤仙鮮獮鮮薜癬燹線薛絛蝶泄洩楔褻羨(28)
仙開 3 山	照 3(104)	「iə」 饅鸛旣旣折闡掣羶膾扇設蟬禪善鱗鱗膳舌(19)
仙開 3 山	喉音(37)	「iə」 延筵筵延邈演(6) 「ə」 焉(1)
仙開 3 山	半舌(20)	「iə」 連輦璉列烈裂剝(7)
仙開 3 山	半齒(3)	「iə」 然熱(2)

正韻音の中声が iə で現れる字は仙韻・先韻字である。それらの韻は 3 等介音と主母音からなる韻であるが、伝承音を見ると、ほぼすべての中声が iə で現れる。仙韻の場合、喉音字の「焉(ə)」を除けば、すべての中声が iə で現れる。したがって、『正韻』では「焉」の中声を iə に修正した。

一方、先韻を見ると、唇重音・歯頭音・半舌音字には例外が見られず、牙喉音及び舌頭音字に例外が若干見られるが、牙音字に 1 字「拈(i)」、舌頭音字に 6 字「經埵迭(i)、涅捏茶(a)」、喉音字に 3 字「咽纈頡(i)」現れる。例外のうち最もよく見られる中声が i であるが「咽」を除けば、すべてが入声字である。声ごとに入声字の中声出現の頻度を見ると、牙音字の場合、iə(4) : i(1) であり、喉音字は iə(5) : i(3) である。また、舌頭音字の場合、iə(2) : i(3) である。したがって、牙喉音字は伝承音に基づいて修正したと解釈してよい。舌頭音字の入声字を in 韻に入れなかった理由はその韻には臻撰が対応すると決められていたためと考えられる。舌頭音字には中声が a で現れる字が 3 つあるが、そのうち、2 字は「涅捏」の中声は iə でも現れる。つまり、先韻・仙韻開口の正韻音は伝承音をそのまま受け入れたと考えられる。ただし、先韻の舌頭音の入声字は韻部の区別のために、修正されたと見られる。

<表 52> 「uən/uə1」 韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
仙合 B 山	牙音(45)	「uə」 卷眷卷權拳卷圈(7) 「oa」 顴(1) 「uə」 員圓瑗援院(5) 「oa」 瑗(1)

¹⁷⁴ 中古音では疑母であったが、『挙要』では喻母に属する。

¹⁷⁵ 牙音字が 4 字「嚙嚙嚙嚙」載っているが、伝承音はない。

仙合 3 山	半舌(11)	「iə」戀(1) ¹⁷⁶
元合 3 山	牙音(93)	「uə」蕨蹶癸券勸闕楸蹶元龜原源願愿月別軌(17)「oa」阮(1) 「uə」袁轅猿椽園垣援遠遠楸鉞(11)「oa」援遠曰(3)
元合 3 山	喉音(59)	「uə」駕怨冤苑怨暄萱誼植(10)「oa」畹踴喧植(4)「ə」噦(1)

元韻合口と仙B韻の伝承音は合口性をきちんと反映している。ほとんどの中声が uə で現れ、正韻音もそれをそのまま受け入れている。例外がなくはないが、元韻喉音字の「噦」を除けば、すべての中声が oa で現れ、例外すら合口性を反映していることが分かる。oa の場合、山韻の 1・2 等韻との区別のために修正しただろう。唯一「噦」の中声が ə で現れるが、『正韻』においてはその中声に合口性を加えて修正した。

しかし、仙韻の半舌音字である「戀」が uən 韻に入れられた理由は説明しにくい。<表 52><表 53>を見れば分かるように、半舌音字の場合、舒声字が uən 韻に、入声字が iuiən 韻に置かれている。しかし、半舌音字の伝承音の中声はすべて iə で現れるため、あえてそれらの字を声調により分けたことは納得しがたい。ただし、字母韻を考えに入れれば、次のような可能性が考えられる。半舌音字の舒声字は「卷」字母韻に属し、入声字は「玦」字母韻に属する。「玦」字母韻字の場合、uən 韻・iuiən 韻に現れるが、「卷」字母韻字は uən 韻にしか現れない。つまり、伝承音に従えば、声調にかかわらず iuiən 韻に取りまとめなければならないが、「卷」字母韻字を iuiən 韻に入れられないと考え、舒声字を uən 韻に入れたかもしれない。しかし、仙韻の半舌音字に限り、字母韻に基づいて分韻した理由が分からない。

<表 53> 「iuiən/iuiəl」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
先合 4 山	牙音(44)	「iə」鶻鑿吠決訣決犬闕(8)「iu」譎(1)
先合 4 山 177	喉音(41)	「iə」淵絢血玄縣眩銜穴(8)
仙合 A 山	牙音(13)	「iə」絹狷缺(3)
仙合 3 山	舌上(23)	「iə」轉轉輟啜椽傳傳(7)
仙合 3 山	齒頭(63)	「iə」鑄俊全泉吮絶宣選撰雪旋旋(12)
仙合 3 山	照 3(50)	「iə」專軌顛穿川喘釧説船箒(10)
仙合 3 山	喉音(39)	「iə」鉛緣鳶悅説闕(6)
仙合 3 山	半舌(3)	「iə」劣(1)
仙合 3 山	半齒(45)	「iə」摺蠕膺蒸(4)
仙開 3 山	齒頭(4)	「iə」涎(1)

iuiən 韻には仙韻・先韻の合口が対応する。伝承音を見ると、先韻の牙音字に例外が 1 字「譎(iu)」見られるが、それを除けば、すべての中声が iə で現れる。中声 iə には合口性が

¹⁷⁶ 「卷」字母韻。

¹⁷⁷ 先韻開口の喉音字が 2 字「鞞顯」載っているが、「涓」字母韻である。

反映されていないため、『正韻』の編者らはそれらの中声に合口性を加え、*iuiə* に修正した。<表 53>から仙韻開口の齒頭音字が *iən* 韻ではなく *iuiən* 韻に入れられたことが確認できる。しかし、それらの字は「涓」字母韻に属する。「涓」字母韻は山撰 3・4 等の合口韻から成り立っているため、『正韻』の編者らはそれに基づき、仙韻開口の齒頭音字を *iuiən* 韻に取りまとめたであろう。

4.2.5 まとめ

4.2 においては「根昆干君韃」韻部に属する字の正韻音や伝承音を比較検討した。その結果、次のことが明らかになった。

まず、各韻部と撰の対応関係はつぎの通りである。

$\Delta n \cdot on \cdot un$ 韻部：臻撰

$an \cdot \text{ən}$ 韻部：山撰

次に、開口の一部(仙韻齒頭音字・先韻喉音字など)が合口韻に入れられた例が見られるが、それらの字の字母韻を調べた結果、すべてが合口の字母韻に属することが明らかになった。このことから開合を字母韻に基づいて区別したことが再確認できた。また、莊組と章組を区別する際には、伝承音で莊組・章組が区別される傾向にある場合に限り、両者を分けて異なる韻に入れたが、分韻の際には字母韻を参考にしたことを確認した。

そして「根昆干君韃」韻部を検討した結果、重紐韻に対する取り扱い方が明らかになった¹⁷⁸。臻撰真韻や山撰仙韻は重紐に当たるが、それらを分韻した結果により『正韻』の編者らが重紐 A・B 類を区別する際、主に伝承音の傾向に従うが、場合によっては、例えば、該当する字が不足している場合など、字母韻を参考にした可能性があることを確認した¹⁷⁹。さらに、開合や洪細の場合と同様、それらの韻を字母韻に合わせて分類したものの、正韻音の中声を定める際には伝承音を忠実に反映したことが明らかになった。

また、伝承音に重韻(刪韻・山韻)の違いが全く反映されていなかったが、『正韻』の編者らはそれを修正しなかった。このことは後期中古音時期に重韻の区別がなくなったことを反映している可能性もなくはないが、蟹撰の 1・2 等の伝承音や正韻音が重韻の差を反映していることを顧慮すれば、正韻音に山撰 2 等の重韻の違いが現れていないのは伝承音を受け入れたためと解釈できる。

最後に、開合・照組・重紐の以外にも、字母韻を参考にしたと考えられる場合があったが、痕韻の牙音・透母・影母(以上「根」字母韻)を Δn 韻に収め、匣母(「巾」字母韻)を in

¹⁷⁸ 「捭觥肱公江弓京」韻部には重紐韻がない。

¹⁷⁹ しかし、唇音の場合字母韻にかかわらず、重紐 A 類として扱われている。これも伝承音の傾向にしたがっていると考えられる。

韻に入れたことや、仙韻の半舌音字を声調により分けたことは字母韻に基づいた可能性が高い。その理由は分かりにくいですが、収録字の数が余りにも少ないため、字母韻を参考にしたかもしれない。

修正の対象となった中声を類型別に表すと、次の通りである¹⁸⁰。

撮 開合	正韻音中声	伝承音中声
臻撮 開口	Λ i i	Λ・ <u>i</u> ^④ i・Λ・ <u>i</u> ^④ ・ <u>ə</u> i・ <u>iu</u> ^③ ・ <u>iə</u>
臻 合口	o u iu	o・ <u>u</u> ^④ ・ <u>a</u> ・Λ・ <u>i</u> u・ <u>i</u> ^③ ・ <u>o</u> ^④ iu・ <u>o</u> ・ <u>u</u>
山撮 開口	a ə iə	a・ <u>iə</u> ・ <u>ə</u> ・Λ・ <u>oa</u> ə・ <u>a</u> ^④ ・ <u>iə</u> iə・ <u>i</u> ・ <u>a</u> ・ <u>ə</u>
山撮 合口	oa uə iuie	oa・ <u>a</u> ^③ ・ <u>uə</u> ・ <u>oi</u> uə・ <u>oa</u> ・ <u>ə</u> ・ <u>iə</u> <u>iə</u> ^③ ・ <u>iu</u>

4.3 m終声

正韻音のうち終声-mを持つ韻部は都合3つあり、これらの韻部はさらに6個の韻に分かれる。『正韻』の韻部や韻及びその代表字をまとめると次のとおりである。

<表 54> m終声類

韻部	韻	平	上	去	入
Λm	Λm	簪	痒	譜	戢
	im	金	錦	禁	急
	im	礎	蹠	搯	繫
am	am	甘	感	紺	閤
ə̄m	ə̄m	箝	檢	劔	劫
	iə̄m	兼	歉	歉	頰

『正韻』の韻部、正韻音の中声表記、中古音韻撰、『拳要』の字母韻及び反切下字、訳訓音の中声をまとめると、次の通り。

¹⁸⁰ ①音節制約、②韻部の区別、③開合の区別、④洪細の区別。下線は出現率が低いため修正した伝承音の中声を示す。

<表 55> 口[m] ㄷ[p]終声類

韻目	韻類	中声	中古音撰韻(等)	字母韻	反切下字	訳訓音中声
簪	簪	・ ʌ	深侵	簪	簪	一
	金	一 i	深侵	金歆	簪林	
	礎	i	深侵	金	林	
甘	甘	ト a	咸談 咸覃 咸銜 咸咸	甘緘	三含銜咸	ト ト
箝	箝	ト ə	咸鹽 咸嚴 咸凡	箝甘杵	占嚴凡	ト ト
	兼	ト iə	咸鹽 咸添	兼箝嫌	占兼	ト

中古音の撰のうち、韻尾-mを持つ撰には深撰と咸撰がある。両撰と『正韻』の韻の対応関係を見ると、<表 55>から分かるように深撰が ʌm 韻部に対応し、咸撰が am・əm 韻部に対応する。m 終声を持つ韻部にも、ʌm 韻部が含まれており、n 終声韻部と同様、ʌm 韻・im 韻・im 韻が揃っている。以下では韻部ごとに正韻音と伝承音を比較検討する。

4.3.1 ʌm 韻部

ʌm 韻部には ʌm 韻・im 韻・im 韻が含まれている。これらの韻には中古音の深撰が対応する。深撰は侵韻だけからなる撰であるが、侵韻の伝承音の中声は声母により分かれており、『正韻』においてもそれをほぼそのまま受け入れている。以下の<表 56>は ʌm 韻部と侵韻との対応関係を示したものである。

<表 56> ʌm 韻部

中終声	撰	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
ʌm	深	侵	3	独	j	ə	m/p	莊組
im	深	侵	AB	独	j	ə	m/p	牙、唇重、喉
im	深	侵	3	独	j	ə	m/p	知組、精組、章組、来母、日母

以下の<表 57><表 58><表 59>は伝承音の中声の出現頻度を声母ごとにまとめたものである。

<表 57> 「ʌm/ʌp」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
侵開 3 深	照 2(37)	「ʌ」簪譜岑涇參蔘(6)

Δm 韻に属する字は侵韻の莊組字である。侵韻は3等韻であるため3等介音と主母音からなるが、それらの字の伝承音を見れば分かるように、すべての中声が Δ で現れ¹⁸¹、介音が反映されていない。しかし『正韻』の編者らは伝承音を修正せず、そのまま受け入れた。これは彼らの3等韻に対する一貫した扱い方である¹⁸²。

<表 58> 「im/ip」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
侵開 B 深	牙音(62)	「i」金今襟錦禁急級汲給欽衾泣琴禽檣及笈吟(18) 「i」金(1)
侵開 B 深	唇重(2)	「u」稟品(2)
侵開 B 深	喉音(15)	「i」音陰飲(上)奢飲(去)邑浥歆(8) 「a」瘡(1) 「i」飲(去)(1)
侵開 3 深	喉音(14)	「i」淫姪(2)
侵開 A 深	喉音(11)	「i」揖挹吸翁(4)

正韻音の中声が i で現れるのは侵 B 韻の牙喉音・唇重音、侵 A 韻の喉音、侵韻の以母字である。侵 A 韻及び侵韻の伝承音には例外が見られない。侵 B 韻の牙喉音字の中声を見ると、i 以外に、中声「a(1)・i(2)」で現れる例外がある。しかし、「金・飲」の場合、伝承音の中声が「i・i」の二通りで現れる多音字である。「瘡」の中声が a で現れるが¹⁸³、他の喉音字の中声がほぼすべて i で現れるため、それに合わせて中声を i に修正した。

¹⁸¹ 侵韻の莊組字の中声が Δ で現れることに関して、河野六郎(1979: 475)は声母のために、介音が喪失した段階を写していると解釈し、伝承音の $-\Delta m$ を c 層に、 $-\Delta i$ を b 層に配置した。その反面、伊藤智ゆき(2007: 177)は邵雍の『皇極経世声音唱和図』に伝承音の $-\Delta m/-\Delta p$ に当たる音があると考えられ、伝承音の母胎層が唐末～宋初ぐらいであれば、 $-\Delta i$ と $-\Delta m$ が同時期の中国音を写していると解釈できると述べた。

¹⁸² ところで김철현(1959: 49-50)は『正韻』において Δn 韻(根) Δm 韻(簪) Δ 韻(質)の中声が $\Delta(\cdot)$ で写されたことから正韻音の Δ と訓民正音の Δ の音声が異なっていたことが証明されると述べた。つまり、 Δn 韻・ Δ 韻は1等韻であり、 Δm 韻は2等韻である。 Δn 韻は最初から『広韻』で韻目として立てられていたのに対して、 Δ 韻は本来4等韻であったが北宋以降に齒上音だけが1等韻になったものである。したがって3つの異質の韻を同じ Δ で写したことに基づけば、正韻音の Δ が訓民正音の Δ と完全に同一の音声を持っているとは考えられず、両者の音声が類似していたと見られるということである。さらに、『四声通攷』で記述している中声の発音法を見ても正韻音と訓民正音の Δ は同一ではないとした。しかし『四声通攷』の説明は訳訓音の中声に関するものであり、正韻音の中声とは特に関係がない。以上の見解はそこを見逃していると考えられる。

¹⁸³ 伊藤智ゆき(2007: 177)によると「瘡」は「暗」(覃韻影母)の類推という。

『正韻』には侵韻の唇重音字が2つしか載っていない¹⁸⁴。すなわち「稟品」。それらの2字の伝承音を見ると、すべての中声がuで現れる¹⁸⁵。伝承音のうち唇音字の中声に合口性が正しく反映されている例は極稀である。だが『正韻』ではそれらの中声をiに修正した。その理由については次の二通りの解釈ができる。

まず、唇音の声母にすでに合口性が含まれているため、中声に合口性を再び写す必要がないと判断し、あえて中声uをiに修正した可能性が考えられる。4.1及び4.2において検討したように、唇音字の伝承音の中声には合口性が全く反映されていなかったが、『正韻』の編者らはそれを修正せず、開口と同様に取り扱った。それは、彼らが唇音字の中声を[+口蹙]の中声字を用いて表記することを合口性を余計に加えることと考えたためではないか。そこで、唇音字の中声に合口性が現れる場合、それを削除したと思われる。ところで、4.1.6において述べたが、合口字なのに中声表記に合口性を反映しなかった場合(伝承音のほとんどの場合)、『正韻』の編者らはその中声を伝承音に基づき修正した。例えば、梗撰4等の合口韻の中声がiaで現れると、それを他の[+口蹙]を持つ中声ではなく、該当中声字に[+口蹙]を加えた中声に修正したのである。だが、「稟品」の伝承音を修正する際には、それと正反対の作業が行なわれた。つまり、uから[+口蹙]の資質を除いた結果、以上の2字の中声がiになったのである。

次に、侵韻には元々開口韻しか存在しないため、合口のための韻を立てなかった可能性も考える。中古音には開合の区別がない韻からなる撰が6つ「通・江・遇・効・流・深」あるが、『正韻』においてはそれらの撰に属する韻を開口か合口のどちらかの一方に取りまとめておいた¹⁸⁶。つまり、『正韻』の編者らは深撰に合口がないことを考えに入れ、合口性が現れる中声を修正したかもしれない。

興味深いのは、侵韻A・B類がともにim韻に収められた事実である。しかし<表58>を見れば分かるように侵韻A・B類の伝承音のほぼすべての中声がiで現れ、なかでも侵A韻の場合、すべての中声がiで現れる。したがって、伝承音において両者の区別がつかないため『正韻』においても両者を区別しなかったと解釈することができるだろう。しかし一方、侵韻字の字母韻を調べたところ、重紐A・B類を問わず、すべてが「金」字母韻に属しており、重紐の区別が完全になくなっていることが明らかになった。つまり、このことによれば、字母韻において侵韻A・B類が合流していることを顧慮し、両者をともにim韻に入れた

¹⁸⁴ 『広韻』においても侵韻の唇音字は多くない。調べたところ、幫母字が3字、滂母字が1字、並母字が1字収録されていた。そのうち、『正韻』には幫母字が1字「稟」滂母字が1字「品」載っている。

¹⁸⁵ 重紐韻の伝承音は牙喉音字の場合、A類とB類が分かれる傾向があることに対して、唇音字は大体A類のように現れるのが一般的である。しかし、侵A韻にはそもそも唇音字が存在せず、侵B韻の唇音字の中声は他のB類と一緒にiで現れる。これに関連して、伊藤智ゆき(2007: 176)は韻尾部分の唇の突き出しに伴って介音及び主母音が後退した可能性があるとして解釈した。

¹⁸⁶ 『正韻』では江撰を開口と合口に分類しているが、それは韻図において江韻の開合を区別しているためである。江韻は元々開合の区別のない独韻であったが、韻図時期(後期中古音)には開合が分かれ、後期韻図や『韻会』の字母韻にはそういう変化が反映されている。

と解釈しても問題はないのである。もし、伝承音においては重紐のA・B類が完全に合流しているが、字母韻は分かれている例があれば、编者たちが伝承音と字母韻のうちどちらをより重視したかが明らかになるだろうが、そういう例が見当たらない。したがって、仙韻A類の牙音字のように字数が足りない場合を除けば、重紐韻を分類する際、伝承音をより重視したと推測され、『正韻』の编者らは重紐韻を次の順で分類し、修正したと思われる。

伝承音に区別がない → 分韻しない

伝承音に区別がある → 字数が多い → 伝承音にしたがって分韻

→ 字数が不足 → 字母韻により分韻

<表 59> 「im/ip」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
侵開 3 深	舌上(33)	「i」砧樵湛沉朕塾賃(7)
侵開 3 深	齒頭(63)	「i」浸侵寢集心尋鬻燻(8) 「i」緝葺楫習襲(5)
侵開 3 深	照 3(43)	「i」斟鍼枕枕執汁瀋 ^深 審審諶甚甚十什(15) 「i」汁濕拾(3) 「Λ」箴(1)
侵開 3 深	照 2(3)	「Λ」讖(1)
侵開 3 深	半舌(17)	「i」林霖臨臨立粒笠笠(8) 「i」廩(1)
侵開 3 深	半齒(33)	「i」壬飴衽荏恁稔妊絳任入(11) 「iə」稔(1)

正韻音の中声が i で現れるのは舌上音・齒頭音・章組・莊組・半舌音・半齒音字である。上述したように『正韻』の编者らは侵韻字を伝承音に基づき分韻している。<表 59>から伝承音の中声がほぼすべて i で現れることが確認できる。舌上音字の中声は例外なく i で現れ、半齒字には例外が 1 字だけ「稔(iə)」見られるが「稔」の中声は iə のほかに i でも現れるため、議論の余地がないと思われるが、中声 iə は咸撰 3・4 等に対応するため、侵撰字の中声表記には適当ではなかったと考えられる。また、半舌字の場合、中声が i で現れる字が 1 字あるが、すなわち「廩」、都合 9 字のうち例外が 1 字しかないため、多数見られる中声に合わせて、「廩」の中声を i に修正しただろう。齒頭音字には中声が i で現れる字が 8 字、i で現れる字が 5 字ある。つまり、両中声の出現率はあまり変わらない。しかし、齒頭音の場合、章組と一緒に取り扱う場合が多く、さらに、わずかな差でも i のの方が多いため、齒頭字を im 韻に取りまとめたと考えられる。つまり、齒頭音字の場合、洪細を区別するため修正したと解釈できる。

章組字の場合、中声 i で現れる字が 15 字、i で現れる字が 3 字、Λ で現れる字が 1 字ある。そのうち、中声 Λ は出現率も低い、それより、Λm 韻には莊組字がまとめられたので、莊・章組を区別するためには、章組字を別の韻に入れなければならなかつただろう。そこで、残りの中声 i や i のなかで、より多く現れる i が選ばれ、章組字を im 韻に収めたと考える。

初母(莊組次清)に属する「慘堪讖」が Λm 韻ではなく im 韻に収められた理由はそれらの字が他の莊組字とは異なる字母韻に属しているためである。侵韻の莊組字の字母韻を調べて見ると、Λm 韻に入れられた莊組字はすべて「簪」字母韻に属するが、上述の 3 つの字は章組

字と同様「金」字母韻に属することが分かった。つまり、『正韻』の編者らはそれに基づき「埜堪讖」を im 韻に取りまとめた考えられるが、このことから、照 2・照 3 等字を分類する際、基本的には伝承音の傾向に従っているが、字数が少ない場合など、場合によっては他の基準に基づいて分韻することもあったと考えられ、またそういった場合に主に参考にしたのは字母韻であることが明らかになったと思う。

4.3.2 am 韻部

am 韻部は am 韻からなる。この韻には中古音の咸撰の 1 等・2 等韻が対応する。以下の<表 60>は am 韻部と咸撰の 1 等・2 等韻との対応関係を示したものであり、その次の<表 61>は各韻の伝承音の中声出現率を声母ごとにまとめたものである。

<表 60> am 韻部

中終声	撰	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
am	咸	覃	1	開		ɔ	m/p	牙、舌頭、齒頭、喉、半舌
am	咸	談	1	開		ɒ	m/p	牙、舌頭、齒頭、喉、半舌
am	咸	咸	2	開	r	æ	m/p	牙、舌上、喉、莊組
am	咸	銜	2	開	r	a	m/p	牙、喉、莊組

<表 61> 「am/ap」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
談開 1 咸 ¹⁸⁷	牙音 (16)	「a」 柑柑汔敢瞰榼磕 (7)
談開 1 咸	舌頭 (79)	「a」 擔擔擔聃菸毯榻塌搭談痰澹噉澹淡 (15)
談開 1 咸	齒頭 (12)	「a」 慚暫三 (3)
談開 1 咸	喉音 (28)	「a」 慙盍嗑 (3)
談開 1 咸	半舌 (22)	「a」 藍籃檻攬濫纜覽臘蠟蠟 (10)
覃開 1 咸	牙音 (49)	「a」 感紺閣蛤鴿龕堪戡坎欲勘 (11)
覃開 1 咸	舌頭 (87)	「a」 耽湛答荅貪探踏塔潭蟬薄曇禪菴南男納衲 (18)
覃開 1 咸	齒頭 (50)	「a」 匝咂參雜糝 (5) 「ʌ」 蠶糝 (2) 「i」 糝 (1)
覃開 1 咸	喉音 (74)	「a」 鷓庵暗闇菴含函涵銜頷撼憾感合 (14) 「i」 洽 (1)
覃開 1 咸	半舌 (15)	「a」 婪嵐 (2)
咸開 2 咸	牙音 (30)	「a」 緘 (1) 「iə」 鱗袂跣招 (4)
咸開 2 咸	舌上 (13)	「a」 劓湛賺 (3)
咸開 2 咸	照 2 (44)	「a」 斬蘸錘挿讒饑爍插敵 (9)
咸開 2 咸	喉音 (26)	「a」 黯咸鹹函陷 (5) 「iə」 狹 (1)

¹⁸⁷ am 韻には凡韻入声字が 1 字だけ「獨」収録されているが、「曷」字母韻である。

銜開 2 咸	牙音 (17)	「a」 監鑑鑑甲胛嵌巖 (7)
銜開 2 咸	照 2 (43)	「a」 懺衫鈔箠 (4)
銜開 2 咸	喉音 (29)	「a」 押壓鴨銜檻艦狎桺匣 (9)

咸摂には1等韻と2等韻がそれぞれ2つずつある。すなわち、覃韻と談韻(以上1等韻)のペア、咸韻と銜韻(以上2等韻)ペアがそれである。これらの韻は重韻の関係にある。しかし、伝承音の中声には、重韻どころか1等や2等の差さえ反映されていない。つまりほぼすべての中声がaで現れるのである。しかし『正韻』の編者らは重韻の違いや、1・2等の違いを中声表記に反映しようとしなかった。それは彼らが韓国語の母音体系が中国語のそれより単純であり、両国語の母音が1対1に対応しないということを知っていたためではないか。また咸韻の牙音字の場合、伝承音の中声がaの方より、iəの方が多く現れるにもかかわらず、それらの字をam韻に取りまとめた。このことから、彼らにとって1・2等と3・4等との区別ははっきりしなければならない問題であったが、1等と2等との区別や3等と4等との区別はそうではなかったということが分かる。

覃韻の場合、例外が比較的多く見られる。牙音・舌頭音・半舌音字の中声は例外なくaで現れるが、歯頭音字には、中声Λで現れる字が2字「蠶糝」、中声iで現れる字が1字「糝」見られる。さらに、喉音字にも中声iで現れる字が1字「洽」だけ現れるが、『正韻』においてはそれらの例外をすべて中声aに修正した。それは例外の比率が高くないためであろう。つまり、歯頭音の場合、都合8字のうち例外が3字あり、喉音の場合15字のうち例外が1字しかないため、伝承音にしたがって例外を修正したのである。のみならず、例外に見られる中声「Λ・i・i」は、すべてがam韻部に属している。しかし、am韻部には深摂が対応する。したがって、韻部を区別するため、咸摂に属する字をそこに入れることができなかったと考えられる。

咸韻の牙喉音字には例外が多く見られる。なかでも牙音字の場合、中声aで現れる字が1字しかない反面、iəで現れる字は4字もある¹⁸⁸。にもかかわらず『正韻』の編者らはそれらの字をiam韻に入れなかった。それは洪細を区別するためであろう。後述するが、iam韻には咸摂3等・4等字がまとめられている。そのため、咸韻の牙音字をiam韻に入れず、am韻にまとめて置いたと考えられる。喉音字の例外も同じ理由で修正したのであろう。

銜韻と談韻の場合、例外が全く見られない。正韻音は伝承音をそのまま受け入れたと考える。

¹⁸⁸ これに関連して、伊藤智ゆき(2007:171)は複数の音を持っていた可能性「招」、類推によるもの「𪗇𪗇」、原因不明「𪗇」に分けて説明した。また、喉音字である「狹」も多音字と解釈した。しかし、馬徳強(2008:71)によると、咸摂1等重韻に比べ、2等重韻の合流時期が少し遅かったという。あるいは、咸韻牙喉音の伝承音の中声がiəで現れるのは重韻の合流時期が遅かったことと多少関係があるかもしれない。

4.3.3 əm 韻部

ə m 韻部には ə m 韻・i ə m 韻が含まれる。この韻部には中古音の咸撰の 3 等・4 等韻が対応する。以下の<表 62>は ə m 韻部と咸撰の 3 等・4 等韻との対応関係を示したものである。

<表 62> ə m 韻部

中終声	撰	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
ə m	咸	塩	3	開	j	ɛ	m/p	牙、影母、曉母
ə m	咸	嚴	3	開	j	a	m/p	牙、喉
ə m	咸	凡	3	合	j	o	m/p	唇輕
i ə m	咸	塩	3	開	j	ɛ	m/p	知、精、章組、幫、影、云、以、来、日母
i ə m	咸	添	4	開		ɛ	m/p	牙、舌頭、齒頭、喉

以下の<表 63><表 64>は各韻の伝承音の中声出現率を声母ごとにまとめたものである。

<表 63> 「ə m/ə p」 韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
嚴開 3 咸	牙音(37)	「ə」 劔切怯嚴儼醜驗業鄴(9) 「i」 欠(1)
嚴開 3 咸	喉音(20)	「ə」 淹醜蔽脇(4) 「iə」 脇(1) 「i」 杵(1)
塩開 B 咸	牙音(18)	「ə」 檢檢驗黔儉(5) 「iə」 臉鉗(2) 「a」 芡(1)
塩開 B 咸	喉音(31)	「ə」 掩揜闡險嶮(5) 「a」 俺(1)
凡合 3 咸	唇輕(32)	「ə」 法凡帆範範犯梵(7) 「i」 乏(1)

正韻音の中声が ə で現れるのは咸撰 3 等韻である嚴韻の牙喉音字、塩 B 韻の牙喉音字、凡韻の唇輕音字である。

嚴韻と凡韻は開合の対を成す一組である¹⁸⁹。両韻は 3 等介音と主母音からなる 3 等韻である。しかし、両韻の伝承音のほとんどすべての中声が ə で現れ、3 等介音が反映されていない。『正韻』の編者らはそれを修正せず、そのまま韻書に載せた。このことから咸撰の 3 等韻を他の 3 等韻と同一に取り扱っていることが確認できる。

¹⁸⁹ 嚴韻には牙喉音字だけが現れ、凡韻には唇輕音字しか現れない。つまり、両韻は相補分布をなしている。

敵韻の例外を見ると、まず牙喉音の場合、i で現れる字が 2 字あり、iə で現れる字が 1 字ある。伊藤智ゆきによると(2007 : 174)「欠炊(him)」は「欽(him)¹⁹⁰」の類推であり、「脇」は「協(hiəp)¹⁹¹」の類推という。しかし、4.1.2において述べたように、『正韻』においては字形の類似による類推音を修正の対象と見なしていた。したがって、以上の 3 字の中声は修正せざるを得なかったと考えられる。のみならず、im 韻は ʌm 韻部に含まれるため、咸撰字が入れなかつただろう。

凡韻の伝承音には例外が 1 字だけ「乏(i)」見られる。声調別に見ると、すべての舒声字の中声が ə で現れ、入声字は 1 字が ə で(法)、1 字が i で現れる。つまり、入声字の中声には特定の傾向がないのである。それなのに凡韻の入声字を əm 韻に取りまとめた理由は韻部を区別するためであろう。

侵韻の場合、正韻音と伝承音を問わず重紐 A・B 類の違いが全く現れなかつたが、塩韻の伝承音には重紐の区別がきちんと反映されており、正韻音にもその違いが見られる。塩 B 韻の牙喉音字が əm 韻に入れられたのは伝承音の中声を受け入れた結果であろう。牙音字の場合、8 字のうち中声が ə で現れる字が 5 字であり、iə で現れる字が 2 字「臉鉗」、a で現れる字が 1 字「芡」ある。つまり、中声 ə の出現率が最も高いため、牙音字を əm 韻に入れたのである。例外の中声 iə は重紐 A 類との区別のため修正したと解釈できる。さらに中声が a で現れる「芡」や「俺¹⁹²」の場合、咸撰 1.2 等と区別するため修正したと解釈することができる。

<表 64> 「iəm/iəp」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
添開 4 咸	牙音(28)	「iə」兼縑兼頰鋏莢筴謙歉慊篋(11)
添開 4 咸	舌頭(70)	「iə」點玷店添忝帖貼甜恬簞牒蝶氈鮎拈念捻(17)
添開 4 咸	齒頭(10)	「iə」浹(1)
添開 4 咸	喉音(12)	「iə」嫌協挾俠(4)
塩開 3 咸	牙音(8)	「iə」炎曄鑑(3)云母
塩開 3 咸	舌上(28)	「iə」輒詔覘躡(4)
塩開 B 咸	唇重(9)	「iə」貶(1)
塩開 3 咸	齒頭(77)	「iə」漸接接睫籤塹妾漸(8)「ʌ」潛(1)
塩開 3 咸	照 3(73)	「iə」瞻沾沾占檐簪苦店苦攝鞞葉蟾涉(14)
塩開 3 咸	喉音(23)	「iə」鹽簷閻燄焰葉(6)「ə」葉(1)
塩開 A 咸	喉音(37)	「iə」壓壓襪厭厭(5)「ə」厭(1)「a」厭(1)

¹⁹⁰ 侵韻溪母。

¹⁹¹ 添韻匣母。

¹⁹² 伊藤智ゆき(2007 : 173)は「俺」の伝承音 'am^lを覃韻影母の「庵('am^l)」の類推と解釈したが、そうすると「掩闥」の伝承音が'am^R・'am^{L/R}となっている理由が説明しにくい。

塩開 3 咸	半舌 (39)	「iə」 廉簾漣鎌匱帘斂斂殮獵鬣 (11)
塩開 3 咸	半齒 (18)	「iə」 柎冉染染 (4)

iə 韻にまとめられたのは添韻の牙喉音・舌頭音・齒頭音字、塩韻の牙喉音・舌上音・齒頭音・章組・半舌音・半齒音字である。添韻の伝承音の中声はすべて iə で現れ、例外が全く見られない。塩韻の場合、齒頭音・喉音字に例外が若干見られるが、ほとんどすべての中声が iə で現れるため、両韻がともに iə 韻に収められたのである。

塩韻の齒頭韻字に伝承音の中声が Λ で現れる字が 1 字「潜」だけ現れるが、その中声は深撰との区別のためにも修正しなければならなかっただろう。喉音字には例外が 2 字あるが、すべてが多音字である。つまり「葉」の場合、伝承音の中声が ə や iə で現れ、「厭」の伝承音は iə のほか $\text{əm} \cdot \text{an}^{193}$ でも現れる。それらのうち中声 ə は重紐 B 類と区別するため修正したと考えられる。an は終声が韻尾 -n を写しているとしか考えられないため、基準音として選ばれなかっただろう。

4.3.4 まとめ

4.3 においては「簪甘箝」韻部に属する字の正韻音や伝承音を比較検討した。「簪甘箝」韻部には中古音の深撰と咸撰が対応する。両撰には合口韻が存在しないから、比較的単純な韻母から成り立っていると言えるし、そのため伝承音の中声との対応が整然としている。

『正韻』の韻部と撰との対応関係は次の通り。

Λ m 韻部：深撰

am・əm 韻部：咸撰

そして検討の結果、まず、唇音字を写した伝承音の中声に合口性が現れた場合、それを伝承音に基づき修正したことが明らかになった。つまり、唇音字を開口韻と見なしていたと考えられ、このことから合口字に合口性が反映されていない場合と開口字に合口性が加わっている場合は同一に扱っていることが証明される。

また、重紐 A・B 類を分韻する際にも、場合によって字母韻を参考にした可能性がうかがわれたが、伝承音に重紐の区別が見られない場合には、最初から重 A・B 類を分類しようとしなかったことが明らかになった。さらに、山撰 2 等と同様、伝承音には咸撰 1・2 の重韻の違いが全く反映されていなかったが、『正韻』の編者らがそれらの字を修正せず韻書に載せたことを再確認した。つまり、重紐であれ重韻であれ、たとえ中国音においてはきちんと

¹⁹³ 便宜上中終声だけを示した。

区別されていても、伝承音でその区別がつかない場合、編者たちは伝承音の方を重視したことが分かる。

修正の対象となった中声を類型別に表すと、次の通りである¹⁹⁴。

撰 開合	正韻音中声	伝承音中声
深撰	Λ i i	Λ i・ <u>u</u> ・i i・ <u>i</u> ・Λ
咸撰	a ə iə	a・ <u>iə</u> ④・ <u>ai</u> ・Λ・i・i ə・ <u>i</u> ・i・a・iə iə・Λ・a・iə

4.4 w終声

正韻音のうち終声-wを持つ韻部は都合2つある。これらの韻部はさらに4個の韻に分かれる。『正韻』の韻部や韻及びその代表字をまとめると次のとおりである。

<表 65> w終声類

韻部	韻	平	上	去
o	o	高	杲	誥
	io	驍	皎	叫
u	u	鳩	九	救
	iu	糶	糾	晝

『正韻』の韻部、正韻音の中声表記、中古音韻撰、『挙要』の字母音及び反切下字、訳訓音の中声をまとめると、次の通り。

<表 66> ㄩ[w]終声類

韻目	韻類	中声	中古音撰韻(等)	字母韻	反切下字	訳訓音中声
高	高	ㄩ o	效豪 效肴	高	刀交	ト ¹⁹⁵
	驍	ㄩ io	效宵 效蕭 效肴	驍驍交高	嬌堯遙交	トトト
鳩	鳩	ㄩ u	流侯 流尤	鳩鉤衷浮	侯尤	ト一

¹⁹⁴ ①音節制約、②韻部の区別、③開合の区別、④洪細の区別。下線は出現率が低いため修正した伝承音の中声を示す。

¹⁹⁵ 効(效)撰字や流撰字の訳訓音中声の下に付いている「ㄩ」は音価[w]を持っているが、便宜上表には中声だけを載せる。下同

	ㄹ	iu	流幽 流侯 流尤	ㄹ 鳩 鉤	尤幽侯	ㄹ 一
--	---	----	----------	-------	-----	-----

w 終声韻部には効撰・流撰字が収められている。効撰は四等が揃った撰であり、その構成が比較的簡単であるため¹⁹⁶、効撰の伝承音と正韻音を比較して見れば四等に対する編者らの認識をうかがうことができるかと予想される。効・流撰と『正韻』の韻の対応関係を見ると、効撰が ow 韻部に対応し、流撰が uw 韻部に対応する。2.3 において検討したように、両撰の正韻音の終声(w)は音価を持たないただのしるしに過ぎない。つまり、中国音の陰声韻尾-w は伝承音や正韻音の中声にすでに反映されていると考えなければならないのである。以下では中古音の韻母が伝承音にどういうふうに写され、正韻音は伝承音を如何に修正したかについて韻部ごとに検討する。

4.4.1 ow 韻部

ow 韻部には ow 韻・iow 韻が含まれている。両韻には中古音の効撰に対応する。効撰は豪・肴・宵・蕭韻からなる。4つの韻の伝承音は大体1等韻が他の2・3・4等韻と区別される傾向があり、正韻音も伝承音の傾向にしたがっている。以下の<表 67>は ow 韻部と豪・肴・宵・蕭韻との対応関係を示したものである。

<表 67> ow 韻部

中終声	撰	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
ow	効	豪	1	独		ɒ	u	牙、舌頭、唇重、齒頭、喉、半舌
ow	効	肴	2	独	r	a	u	唇重、崇母
iow	効	宵	3	独	j	ɛ	u	牙、舌上、唇重、喉、精組、莊組、来、日
iow	効	蕭	4	独		ɛ	u	牙、舌頭、齒頭、喉、半舌
iow	効	肴	2	独	r	a	u	牙、喉、知組、莊組

効撰字の伝承音の中声は1・2等(唇音・崇母)と2・3・4等が分かれている。これまで検討してきた内容から、『正韻』においては4つの韻が洪音(1・2等)と細音(3・4等)に分類されるだろうと予想したが、実際を見ると伝承音の傾向にしたがっていることが分かる。以下では韻ごとに伝承音と正韻音の中声を比較し、分韻の基準や修正のパターンについて調べる。

<表 68> 「ow」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
----	----	-----

¹⁹⁶ 山撰も四等がすべて揃っているが、重韻が現れるため、その構成が複雑と言える。

豪開 1 効	牙音 (82)	「o」 高膏篙皐棹羔銚囊皐藁藁詔告尻考拷槁犒敖熬熬熬熬傲敖熬昇 (27)
豪開 1 効	舌頭 (115)	「o」 刀舠切倒禱擣島到倒饕滔韜悖條討陶淘萄桃逃濤畿道稻導嚮蹈盜腦瑙惱 (31) 「io」 條洵臙 (3) 「a」 臙 (1)
豪開 1 効	唇重 (61)	「o」 寶保堡報袍抱暴菹毛帽媚冒耗 (13)
豪開 1 効	齒頭 (77)	「o」 糟遭早藻澡棗竈躁操草糙慄曹臙槽槽阜造搔臊纒掃噪譟燥掃 (26) 「u」 艘嫂 (2)
豪開 1 効	喉音 (66)	「o」 燻媪 ¹⁹⁷ 襖奧蒿薺好耗好豪壕毫號嗥浩昊顥號 (18) 「io」 燻 (1)
豪開 1 効	半舌 (32)	「o」 勞撈牢老勞滂 (6) 「io」 醪潦輶 (3) 「oi」 勞牢 (2)
肴開 2 効	唇重 (61)	「o」 包苞飽泡脬砲庖炮咆跑麇砲茅蝥犛貌 (17) 「io」 豹鮑茅卯 (4)
肴開 2 効	照 2 (7)	「o」 巢 (1)

正韻音の中声がoで現れる字は1等韻である豪韻の牙喉音・舌頭音・唇重音・齒頭音・半舌音字及び2等韻である肴韻の唇重音・崇母字である。それらの字の伝承音を見ると、ほぼすべての中声がoで現れる。つまり、このことから正韻音が伝承音に基づき分韻したことが明らかになる。

豪韻は1等韻であるが、韻母に主母音以外にも陰声韻尾が含まれているため、音声は二重母音に近かったと言える¹⁹⁸。しかし、伝承音のほとんどすべての中声がo現れ、単母音のように写されている。それに関連して河野六郎(1979: 441)は韻尾-i及び-uは母音であるため、主母音(V)と合体して明確を欠くことがあると述べた。また、韓国語の場合、中国語のように二重母音や三重母音を豊富に持つ言語ではなく、むしろそれとは逆の単母音の傾向が強い言語であるから、その合体は著しい。特に流撰及び効撰では単母音化が明白であると説明した。

しかし、韓国語と中国語の母音体系の差を考慮に入れると¹⁹⁹、以上の単母音化は当然のことであると考えられる。つまり、効撰・流撰に属する韻母は主母音と陰声韻尾-wからな

¹⁹⁷ 「媪」の伝承音は「' o」のほか「' on」でも現れる。これに関して伊藤智ゆき(2007: 160)は魂韻影母の「温」などの類推と見た。

¹⁹⁸ 麥耘(2009)は豪韻の主母音や陰声韻尾をouと推定し、平山久雄(1967)はauと推定した。

¹⁹⁹ 이기문(1990: 111, 114)は13世紀(B前期中世)・15世紀(A後期中世)韓国語の母音体系を次のように解釈した。

(B) | ㅏ ㅓ
ㅑ ㅕ ㅗ
ㅛ ㅜ

(A) | ㅑ ㅓ
ㅑ ㅓ
ㅑ ㅓ

り、現代音声学の用語をもって言うとその母音は下降二重母音に当たる。しかし、よく知られているように、訓民正音の中声字には-wで終わる母音を表す中声が存在せず、当然ながら当時の韓国語の母音体系には-iで終わる下降二重母音は存在したが、-wで終わる下降二重母音は全くなかった。つまり、両言語の音韻体系における差により主母音+wのような母音は単母音と受け取られるしかなかったと考えられ、『正韻』の編者らも両言語のそういった差をつかんでいたため、効撰と流撰の伝承音の中声を修正しなかったと解釈することができる。

上述の内容やこれまで検討してきた内容によると、伝承音における単母音化には主に3つの種類があり、単母音化した中声に対する『正韻』の編者らの扱い方にも3種類あることが明らかになる。まず、単母音化の種類はつぎのとおり。

- ㉑ 3等介音が中声に反映されていない場合
- ㉒ 合口介音が中声に反映されていない場合
- ㉓ 韻尾-wが中声に反映されていない場合

そのうち、㉑の場合、音声的には[io]と[o]、[ia]と[a]が区別されたものの、中声「io・ia・iu・iə」が単字であったため、3等字の伝承音が修正できなかったと考えられ、㉒の場合中声体系に‘闔關’の対を成す中声字があったため修正することが可能であったと解釈できる。しかし㉓の場合、両言語の音韻体系における差によりその母音が聞き取られること自体ができず、たとえそういう音声が聞き取れたとしても、それを表記する適当な中声字が存在しなかった²⁰⁰ため、修正する方法がなかったと考えられる。

ともあれすべての豪韻字及び肴韻字の一部の伝承音の中声がoで現れ、正韻音は伝承音の中声を受け入れているが、<表 68>を見れば分かるように例外がなくはない。以下においては伝承音の例外について韻ごとに調べる。

一方、麥耘(2009: 70, 77)は前期中古音と後期中古音の主母音(韻腹)をそれぞれ7個や8個と推定した。(括弧は異音を表す)

前期 u[u] o[o・ɔ] ɸ[ɸ] a[a・æ] ɛ[ɛ・e・æ] i[i] ə[ə・i]

後期 u[u・ʊ] o[o・ɔ] ɸ[ɸ・ɔ] a[a] ɛ[ɛ・e] i[i] ī[ī] ə[ə・i]

²⁰⁰ 崔世珍(1473-1542)の『翻譯老乞大』において用いられている‘国俗撰字’を見ると、流撰の侯韻を「iu 干」で、尤韻を「iu 干」で写しているが、それらの中声は陰声韻尾-wをきちんと表記するために工夫して作り出したものである。

豪韻の牙喉音や唇重音字の伝承音には例外がない²⁰¹。喉音字である「燠」の中声が io で現れるが、その字は多音字である。舌頭音字に例外が 4 つ「條洵臍(io)臍(a)」見られるが、そのうち「條洵」の伝承音の中声は io だけでなく o でも現れるため、議論の余地がない。また「臍」の伝承音を見ると、nio や nan で現れるが、nan はおそらく豪韻泥母ではなく臻摂 1 等韻である痕韻の泥母字を写していると思われる²⁰²。歯頭音字に 2 つの例外が「艘嫂(u)」見られるが、それらの字は類似した字形による類推とみなし修正した可能性が高い²⁰³。のみならず uw 韻には流摂が対応するため以上の伝承音の中声を修正せざるを得なかっただろう。

半舌音字には比較的例外が多く、5 字「醪潦輶(io)勞牢(oi)」見られる。そのうち「勞牢」の伝承音の中声は oi だけでなく o でも現れるため、例外と考えなくて良いと思う。「醪潦輶」の場合、字形による類推と判断され²⁰⁴、修正対象になっただろう。

肴韻の唇重音字には 4 つの例外「豹鮑茅卯(io)」が見られるが、唇重音字のほとんどの中声が o で現れるため、それに合わせて修正したと考えられる。興味深いのは莊組のうち唯一崇母字だけが ow 韻に入れられた点だ。伝承音の資料が 1 つだけ「巢(o)」残っているが、その中声が o で現れるため、伝承音にしたがって分韻した結果と考えられる。

<表 69> 「iow」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
蕭開 4 効	牙音 (32)	「io」梟微噉叫微(5)
蕭開 4 効	舌頭(97)	「io」貂凋瑯彫雕鷗烏弔釣糶眺齧跳調蝸條鱗調篠銚尿(21)「o」掉(上)掉(去)(2)
蕭開 4 効	齒頭(18)	「io」蕭簫蠅嘯(4)
蕭開 4 効	喉音(34)	「io」曉(1)「io」堯(1)疑母
蕭開 4 効	半舌(60)	「io」寮僚撩僚撩遼鷯寥了瞭療蓼鏢(13)
宵開 3 効	牙音 ²⁰⁵ (49)	「io」驕矯橋矯驕蕎橋驕(8B) 「io」躑(1A) 「io」鴉(1 云)
宵開 3 効	舌上(18)	「io」朝超晁朝潮趙兆(7) 「iu」趙(1)
宵開 A 効	唇重(52)	「io」標漂飄剽瓢藻妙(7)

²⁰¹ 「燠」は多音字であり、伝承音の中声が o や io で現れる。

²⁰² nan は『翻訳小学』『小学諺解』に見られ「臍酒」のように用いられるが、この場合「臍」は古の「暖」の字という。伊藤智ゆき(2007: 159)を参照。

²⁰³ 伊藤智ゆき(2007: 160)はそれらの字の伝承音を尤韻生母(流摂 3 等)である「搜」などの類推と解釈した。

²⁰⁴ 伊藤智ゆき(2007: 160)によると「醪」は蕭韻来母の「寥(rio)」の、「潦輶」は、「寮遼(rio^R)」などの類推という。

²⁰⁵ 46 字のうち、重紐 B 字が 36 字、重紐 A 字が 9 字、云母字が 3 字ある。

宵開 B 効	唇重(31)	「io」 鑣糖臙表苗描廟猫(8) 「iu」 猫(1)
宵開 3 効	齒頭(101)	「io」 焦鷓蕉椒鋤樵譙樵誚宵霄消銷銷瘠小笑肖(18)
宵開 3 効	照 3 (35)	「io」 昭招沼照詔詔麩燒少少韶召邵(13)
宵開 A 効	喉音(11)	「io」 腰要要(3)
宵開 B 効	喉音(20)	「io」 妖夭夭(3) 「in」 囂(1)
宵開 3 効	喉音(44)	「io」 遙搖謠陶輶昏鷓(7)
宵開 3 効	半舌(12)	「io」 療(1)
宵開 3 効	半齒(18)	「io」 饒饒燒堯擾繞遶(7)
肴開 2 効	牙音(59)	「io」 交郊蛟咬膠絞狡鉸教校窖覺骹磽巧齧咬樂(18)
肴開 2 効	舌上(30)	「io」 嘲饒撓鬧(4) 「o」 棹(1)
肴開 2 効	照 2 (43)	「io」 鈔炒抄梢鞘蛸筲稍(9) 「o」 爪策鞘蛸筲(6) 「oa」 抓 ²⁰⁶ (1)
肴開 2 効	喉音(50)	「io」 坳孝肴效(4) 「o」 髑(1)

次に、<表 69>に見られるように、正韻音の中声が io で現れる字は効摂 2 等韻である肴韻の牙音・舌上・照 2・喉音字、3 等韻である宵韻字、4 等韻である蕭韻字である。効摂 2・3・4 等韻字の伝承音の中声はほぼすべてが io で現れるため、正韻音が伝承音にしたがっていることが分かる。以下では伝承音の例外について述べる。

肴韻の牙音字には例外が見られず、喉音字も 1 字「髑(o)」を除けば例外がない²⁰⁷。舌上音字の場合例外が 1 字「棹(o)」あるが、他の舌上音字の伝承音にしたがって修正した。問題になるのは莊組字である。『正韻』では莊組に属する声母のうち、全濁の崇母字だけが ow 韻に収められ残りの莊・初・生母字はすべて iow 韻に入れられた。つまり、声母により字が分かれているのであるが、初・生母字の場合、中声が io で現れる傾向があるため、正韻音が伝承音に基づいていると考えて良いと思う。しかし、筆者の調査では、莊組の場合、3 つの伝承音資料のうち、2 つ「爪策」の中声が o で現れ、1 つ「抓」の中声が oa で現れることが明らかになった。つまり、伝承音に従えば莊組字は崇母字と同様 ow 韻に入れられなければならないのである。それに、すべての字母韻を見てもすべての肴韻莊組字が「高」字

²⁰⁶ 伊藤智ゆき(2007)の資料篇には「抓」の声調が上声となっているが、『正韻』には上声ではなく去声となっている。『広韻』には「抓」が 3 回現れるが、声調が異なっているだけで(平・上・去)すべてが肴韻莊母に属する字である。

²⁰⁷ 河野六郎(1979: 456-457)は肴韻の牙音字の中声が io で現れることに関連して、中国音における 2 等牙喉音の口蓋化によるものと考えられるが、他の声母字の中声まで io で現れることを考慮に入れると、韻母の主母音と韻尾(すなわち-au)が合体して-yo となることがあったのではないかと解釈した。また、伊藤智ゆき(2007: 160)も同様韻母の要素が合体することにより渡り音[i]が生じたと述べた。以上の説明は 2 等韻が介音を持たないと前提しているからこそ成立すると思われる。しかし本稿においては 2 等介音を認めているため、肴韻の伝承音の中声が io で現れる可能性が十分にあると考える。

母韻に属するため、その分韻の基準が全く分からない。ただ、例外が多く見られる崇母字を別途に考えれば、莊組字の中声が伝承音にしたがっていると言えるかもしれない²⁰⁸。

「抓」の伝承音は coa^R や koa^R である。両者のうち、前者は中国音に影響されたもの²⁰⁹と思われ、後者は字形による類推によるものと考えられる²¹⁰ため、その中声を修正せざるをえなかっただろうと思われる。

舌上音字には例外が1字「棹(o)」現れるが、伝承音に基づき修正した。

宵韻は3等韻であり、牙・喉・唇音は重紐A・B類に分かれる。しかし、<表69>を見れば分かるように、伝承音の中声には重紐の違いがほとんど反映されていない。正韻音はそういった伝承音の傾向を受け入れて中声を修正したと考えられる。さらに、舌上音字に多音字が1つだけ(「趙 io・iu」)見られることを除けば、他の声母字には例外が全く現れない。例外を見ると次の通り。

牙音字に例外が全く見られない反面、喉音字には1字だけ例外が現れる。すなわち「囁」の伝承音が in であるが、韻尾を見れば分かるようにその漢字音が宵韻字を写しているとは考えられない²¹¹。「囁」を除けば、すべての伝承音の中声が io で現れるため、正韻音が伝承音にしたがっていると言えるだろう。唇音字の場合、宵A韻字には例外が全くない反面、宵B韻の「猫」の中声が io の他に iu²¹²でも現れるが、多音字である以上「猫」の伝承音が宵韻を写していないとは言い切れない。例外を検討した結果、宵韻字の伝承音には重紐A・B類の差が現れないことが明らかになった。さらに、このことから伝承音に重紐の差が反映されていない場合、『正韻』の編者らは該当韻の重紐A・B類を区別しようとしなかったことがさらに証明されたと思う。

効摂4等韻である蕭韻字も ow 韻に入れられた。伝承音を見ると、ほぼすべての中声が io で現れるため、正韻音が伝承音を受け入れていることが分かる。舌頭字に例外が2字「掉掉(o)」見られるが、伝承音に基づき修正した。

²⁰⁸ 崇母字の場合、伝承音にも例外が多数見られるが、『正韻』においても慈母や邪母に分かれているなど例外的現象がしばしば見られる。また、中国語音韻学でも崇母は複雑な声母の1つと挙げられる。『広韻』では崇母字だったのに『集韻』では船母字(章組全濁)と変わった字もあり、『集韻』において船母が禪母(章組全濁)と合流したため、結局牀母(照組全濁)と禪母が入り乱れることになってしまった。有坂秀世(1936: 38-39)は漢字音を注音する際、正韻音を用いている諺解書において中古音の牀母が邪・禪母と同様 ss(ㄙ)で注音されたと指摘した。

²⁰⁹ 「或依漢音…」(『正韻』「序」2b)

²¹⁰ 이돈주(1990: 28)によると、 coa^R は中国音に影響された結果であり、 koa^R は麻韻見母合口である「抓」の類推と述べた。(伊藤智ゆき(2007: 161)から再引用)

²¹¹ 伊藤智ゆき(2007: 163)によると「囁」の伝承音は真B韻疑母の「囁(’ in^h)」の類推という。

²¹² iuw 韻には流摂が対応するため効摂字が入れない。

効摂は四等が揃っている摂であるため、効摂の正韻音を正確に分析すれば、編者らが1・2・3・4等をどのように理解し、漢字音の表記にその理解や認識を如何に生かしたかを解明することができるかと予測した。上述した内容に基づけば1・2等や3・4等に分かれるだろうと予想したが、実際を見るとそうではなかった。つまり『正韻』において洪音と細音を分類する傾向があることは確かであるが、重紐や照組の場合と同様、それに対する区分は伝承音における洪細の区分が前提になると言える。

4.4.2 uw 韻部

uw 韻部はuw 韻・iuw 韻からなる。両韻には中古音の流摂が対応する。流摂には1等韻の侯韻や3等韻の尤韻・幽韻²¹³があるが、尤韻・幽韻は重韻の関係²¹⁴にある。以下の〈表70〉はuw 韻部と侯・尤・幽韻との対応関係を示したものである。

〈表70〉uw 韻部

中終声	摂	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
uw	流	侯	1	独		ə	u	牙、唇重、齒頭、喉、端、透、定、半舌
uw	流	尤	3	独	j	ə	u	牙、唇、莊組、影母
iuw	流	尤	3	独	j	ə	u	知組、精組、莊組、曉母、以母、半舌、半齒
iuw	流	幽	3	独	j	i	u	牙、唇重、喉
iuw	流	侯	1	独		ə	u	泥母

流摂の1等韻は泥母を除けばすべてがuw 韻にまとめられている。3等韻のうち尤韻はuw 韻とiuw 韻に分けて入れられている反面、幽韻の場合すべての字がiuw 韻に収められている。1等韻の侯韻と3等韻の尤韻は同一の主母音を持っており²¹⁵、尤韻・幽韻が重韻の関係にあることを考えれば、ある程度予想される結果と思われる。以下では流摂の正韻音と伝承

²¹³ 韻図において幽韻は4等欄に置かれているが、陸志韋(1947)、董同龢(1968)、李新魁(1984)、麥耘(2009)などほとんどの学者らが幽韻を3等韻とみなしている。平山久雄(1967)は幽韻を4等韻と述べたものの、幽韻の唇音が尤韻の唇音と重紐のペアをなすとした。

²¹⁴ 龍宇純(1970)は幽韻の介音を重紐A類と同様-jiと推定し、李新魁(1984)は尤韻・幽韻を重紐B・A類とみなした。しかし、韻書や韻図において両韻が1つの韻となっていないことに基づけば、両韻が重紐の関係にあるとは到底考えにくい。

²¹⁵ 麥耘(2009)や平山久雄(1967)は共に侯韻・尤韻の主母音をəに推定した。のみならず、他の学者らの再構音を見ても、両韻についての見解はほぼ一致している。

音を韻ごとに比較、検討する。次の〈表 71〉〈表 72〉は伝承音の中声の出現頻度を声母ごとにまとめたものである。

〈表 71〉 「uw」 韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
尤開 3 流	牙音(69)	「u」 鳩九久韭救廐疚究丘糗求球毬裘仇臼舅咎舊柁牛(21) 「iu」 九(1)
尤開 3 流	云母(18)	「u」 尤疣右友佑祐又(7) 「iu」 有囿(2)
尤開 3 流	唇輕(39)	「u」 不缶不否富副覆浮浮浮浮浮浮浮(15)
尤開 3 流	明母(29)	「o」 謀矛鏊牟眸麴(6)
尤開 3 流	照 2(46)	「u」 縑緞箒搜搜瘦蒐瘦愁(9) 「iu」 緞鏊(2)
尤開 3 流	影母(13)	「u」 憂優擾塵(4)
侯開 1 流	牙音(76)	「u」 鈎箒溝溝苟苟苟垢菁構購觀雛穀疆樞口叩鈿寇穀偶耦藕藕(25) 「o」 叩扣(上声)扣(去声)(3)
侯開 1 流	舌頭(43)	「u」 斗料蚪鬪偷透頭投穀窰廡豆荳餛豆寶(16) 「o」 兜鏞透頭(4) 「iu」 鏞(1)
侯開 1 流	唇重(49)	「u」 剖杯衰部戊茂淋貿(8) 「o」 部母拇敵某莽牡姆(8) 「io」 敵(1)
侯開 1 流	齒頭(45)	「u」 走奏腠叟叟藪漱嗽(8) 「o」 漱(1)
侯開 1 流	喉音(55)	「u」 謳鷗歐歐嘔嘔吼侯喉喉猴猴厚后後侯埃餗逅(19) 「hol(hil)」 篻(1)
侯開 1 流	半舌(33)	「u」 婁樓樓樓樓樓樓樓樓樓樓(11)

正韻音の中声が u で現れる字は 1 等韻の侯韻の牙喉音・舌頭・唇重音・齒頭音・半舌音字、3 等韻の尤韻の牙音・云母・唇輕音・明母・影母・壯組字である。伝承音を見ると、唇音字を除けば、ほぼすべての中声が u で現れる。つまり効撰と同様二重母音に近かった中国音の韻母が単母音化しているのである。しかし、効撰に比べ侯韻・尤韻の伝承音には例外がより多く見られる。なかでも侯・尤韻の明母字のほとんどすべての中声が o で現れること²¹⁶や、侯韻字に中声 o や io で現れる例外が多く見られることが目立つ²¹⁷。

侯韻は半舌音字を除けば、すべての声母に例外が現れる。牙音には中声 o で現れる字が 2 字「叩扣」見られる。そのうち「叩」の中声は u でも現れるため扱わなくて良いだろう。そ

²¹⁶ 河野六郎(1979: 486-488、502)は伝承音における尤韻・侯韻明母の模韻化に関連して『慧琳音義』において尤韻・侯韻明母が模韻に合流したことを指摘しながら、伝承音がそういった音変化を反映していると解釈し、中声 o で現れる明母字を c 層に置いた。

²¹⁷ 河野六郎(1979: 486)は侯韻の一部の中声が o で現れるのは中国音-u を反映しているためと解釈した。以上の解釈は侯韻が-u(『切韻』時期)>-au(唐代)のように変化したという李栄(1956)の見解に基づいている。しかし、李栄の主張は侯韻の伝承音が u で現れることを根拠としている。さらに、彼の見解は韓国語母音体系に au といった二重母音が存在しなかったことを考慮していないということで최영애(2000: 282)により批判された。

うすると牙音字には例外が1字しかないということになるが、ow 韻には効摂が対応するため流摂字が入れられなかったと考えられる。舌頭音字のうち3字「兜透頭」の中声がoで現れ、「鋤」の中声はo及びiuで現れる。4字のうち「透頭」の中声はuでも現れる。

「兜」の中声は「扣」と同様韻部の区別のため修正したと考えてよい。「鋤」の場合、韻部の区別のため修正するほかに、字形による類推²¹⁸と判断され修正の対象になったと解釈することもできる。

唇重音字には例外が最も多く見られるが、8字「部母拇敵某莽牡姆」の中声がoで現れ、そのうち「敵」の中声はioでも現れる。他の声母の場合、ほとんどの中声がuで現れるのに対して、唇重音の場合、中声oで現れる字がより多く見られる。にもかかわらず、唇重音字をow 韻部に入れなかったのは韻部を区別するためであっただろう。

歯頭音字のうち「漱」の中声がuのほかにoでも現れる。喉音字の「篋」の伝承音はhol(hil)である。「篋」の伝承音は侯韻字を写しているとは見えないため²¹⁹、それについては述べない。

尤韻の場合、明母を除けば、中声がoで現れる例外がない²²⁰。さらに、唇軽音・喉音にも例外が1字も見られない。尤韻の例外を声母ごとに見ると次の通り。

牙音字には例外が1字「九(iu)」見られるが、<表 71>を見れば分かるように「九」の中声はiuのほかにuでも現れる。中古音の韻母との対応関係から言えば、中声iuの方が3等介音や韻尾(或いは主母音+韻尾)を正しく写していると考えられる。しかし、ほとんどすべての中声がuで現れるため「九」の伝承音もそれに合わせて修正したのであろう。その他にも中声iuを中国音に影響された発音と判断し、修正した可能性をも考えうる²²¹。

²¹⁸ 伊藤智ゆき(2007:165)は「鋤」が眞韻の「愉榆」など兪声字とのcontaminationと見られると述べた。

²¹⁹ 伊藤智ゆき(2007:165)は「篋」の伝承音について、『改刊法華経諺解』に載っている伝承音はhol(もしくはhil)のように見えると述べた。また、「篋」は楽器の名前であり、その伝承音がhilであったならば、同じく楽器の名前である臻韻生母「瑟 sil」と関連性があるかもしれないと述べた。

²²⁰ 侯韻の伝承音の中声がoで現れることに関連し、伊藤智ゆき(2007:165)は強い円唇性韻尾-uの影響で侯韻əuの主母音がほとんどoに近く聞こえた音があった可能性もあると解釈した。尤韻の伝承音に中声oで現れる例が少ない事実は以上の見解を裏付ける根拠になると考える。つまり、尤韻の韻母には侯韻と同じ主母音と韻尾が含まれるが、尤韻は3等韻であるため、侯韻とは異なり介音-iをも持つ。したがって、侯韻əuと尤韻iəuの間にはわずかの差が存在したと思われる、その音声の違いが伝承音に反映されたと考えられる。

²²¹ これに関連して伊藤智ゆき(2007:167)は『論語諺解』において「九」が幽韻見母の「糾」の意味で用いられたが、そういう場合「九」の音をkiu^hで示していると説明した。しかし「九」の訳訓音がkiwであることを考えれば、あるいはkiu^hは中国音を写したものであるかもしれない。

云母の場合、大多数の中声が u で現れるが、例外が 2 字「有囿(iu)」現れる。河野六郎(1979: 486)によると、尤韻牙喉音字のうち中声が -iu で現れるものは近世音形という。これらの字の訳訓音の中声は -iw で現れるため、確かに中国音に影響された可能性もある。しかし、喉音の場合、ほとんどすべての中声が iu であるため iuw 韻に取りまとめられたが、牙音の場合、中声 u で現れる字ははるかに多いため、「有囿」は uw 韻に入れられた。

壮組字の「緘齧(iu)」の中声が iu で現れる。〈表 71〉・〈表 72〉を見れば分かるように、尤韻照 2・3 字の中声はそれぞれ u と iu に分かれて現れる傾向がある。したがって、尤韻の照組字は等により区別すべき対象であっただろう。つまり、例外の 2 字は章組字との区別のため uw 韻に収められたと考えられる。

尤韻明母のすべての中声は o で現れる。伝承音に従えば、それらの字を ow 韻に入れなければならないが、尤韻は流撰に属する韻であり、流撰は uw 韻部にしか収められないため、明母の中声をも u に修正したと言える。つまり、このことから、撰の区別は開合の区別とともに伝承音より優先されたと推測できる。

〈表 72〉 「iuw」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
幽開 3 流	牙音(16)	「iu」糾(1)
幽開 3 流	唇重(8)	「iu」繆(1)
幽開 3 流	喉音(11)	「iu」幽幻(2)
尤開 3 流	舌上(52)	「iu」輒肘晝丑柎儔籌稠紬紉胄宙紐扭鈕(16)
尤開 3 流	齒頭(61)	「iu」酒秋楸鶯鞦鰵鶯修羞饒秀繡宿囚泓岫袖(17)「iui」儗就(2)
尤開 3 流	照 3(46)	「iu」周調州洲舟箒祝呪收首守手狩獸讎酬受壽授售(20) 「iui」醜臭(2)
尤開 3 流	喉音(81)	「iu」休由油猷猶輶攸悠旂游遊繇酉莠誘牖柚黽(19) 「u」朽嗅(2)
尤開 3 流	半舌(62)	「iu」雷榴溜鸛流旋劉柳溜溜溜溜(12)
尤開 3 流	半齒(23)	「iu」柔(1)
侯開 1 流	泥母(16)	「iu」醜穀(2)

正韻音の中声が iu で現れるほとんどすべての字は流撰の 3 等韻である。詳しく言えば、幽韻の牙音・喉音・唇音字、尤韻の舌上音・齒頭音・章組・喉音・半舌音・半齒音字の中声が iu で現れ、例外的に、1 等韻である侯韻の泥母字の中声も iu で現れる。

侯韻の場合、泥母を除いたすべての侯韻字が uw 韻に入れられており、泥母字だけが 3 等韻と一緒に iuw 韻に取りまとめられている。泥母字の伝承音を見ると、残っている資料は少ないがすべての中声が iu で現れることが分かる。つまり、1 等の侯韻には 3 等介音が含まれていないのに伝承音の中声はまるで 3 等介音があるように現れるのである。しかし、『正韻』の編者らは伝承音にしたがって侯韻字を分韻した。これまで検討してきた内容に照らして見ると、正韻音の分韻の基準が伝承音に基づいていると見られるため、侯韻泥母字が iuw 韻に置かれているのは一見当然のこのように見える。しかし『正韻』の全般にかけて 1 等韻字の中声表記に [+起於 1] の中声が用いられた場合は侯韻泥母字の例しかない。なお、字母韻を調べたところすべての侯韻舌頭音字が「鉤」字母韻に属していることが明らかになっ

た。それに基づけば侯韻字の分韻は字母韻を考慮に入れた結果ではないと言えるだろう。つまり、侯韻泥母字は伝承音に基づいて iuw 韻に入れられたと考えられ、このことから、『正韻』の編者らが標準となる中声を定める際、他の何よりも伝承音を重視したことが確かめられる。

尤韻字の伝承音の中声はほぼすべてが iu で現れる。舌上音・半舌音・半歯音字の場合、例外が全く現れず、歯頭音・章組・喉音字に例外が 2 つずつ見られる。まず、喉音字から見ると、尤韻の喉音字は影母字が uw 韻に、曉母・以母字が iuw 韻に入れられている。影母・以母字には例外がないため、正韻音が伝承音にしたがっていると考えてよい。しかし、曉母の場合、残っている伝承音 3 字「休(iu)朽嗅(u)」のうち 2 字の中声が u で現れ、iu で現れる字は 1 字しかない。それなのにすべての曉母字を iuw 韻に入れたのは(資料が残っていないため断言することはできないが)収録字のうち伝承音の中声が iu で現れる字がより多かったためではないだろうか。『正韻』に収録されている尤韻曉母字は都合 16 字である。すなわち「休麻葆佺髹貅咻(hiu)煦朽黝嗅臭(hu)髻罌畜猪(X²²²)」であるが、これらの字の現代韓国漢字音には中声 hui で現れる字が 7 字あり、hu で現れる字が 5 字ある。さらに、字形を見ても、字形に「休」が含まれる字の伝承音は hui であった可能性が高いと思われる。以上に基づき 16 字のうち 8 字の中声が iu であったと仮定すれば、曉母字は伝承音の傾向にしたがって iuw 韻に入れられたと解釈できるかもしれない。また、伝承音の中声を考慮に入れずに、曉母字を iuw 韻に入れた事実だけを考えると、3 等韻字をなるべく中声 iu で写そうとした編者らの意図がうかがわれる。

歯頭音や章組の場合、中声 iui で現れる字が 2 字ずつ見られる²²³。すなわち「僂就(歯頭)、醜臭(章組)」。尤韻は -i 韻尾を持たないにもかかわらず、以上の 4 字の中声が iui で現れる原因は明らかではないが、編者らは中声 iui を iu に修正した。それは例外の数が少ないためでもあり、その上中声 iui の i を余計な部分とみなしたためでもあろう。

幽韻字の伝承音には例外が全く現れず、正韻音もそれを受け入れていると言える。

4.4.3 まとめ

以上で「高鳩」韻部に属する字の正韻音を伝承音と比較し、正韻音の分韻の基準について検討した。両韻部のうち「高」韻部には中古音の効摂が「鳩」韻部には流摂がそれぞれ対応する。つまり、『正韻』において効摂の韻母は中声 o か io で現れ、流摂の韻母は中声 u 及

²²² 尤韻に当たる伝承音は見当たらない。

²²³ 伊藤智ゆき(2007: 129)は虞韻・支韻合口・尤韻で初声が c^h である場合に限って中声 iu とともに iui が現れるといいながら、 c^hiui は声母の影響により前舌化、狭母音化した、口蓋化の強い[y]を表していると述べた。

び iu で現れる。当然ながら 1 つの韻部に両摂が混ざり合っただけで入れられた場合は全くない。例えば、検討の結果、侯韻・尤韻の明母の中声が u ではなく o で現れるにもかかわらず、それらの中声をすべて u に修正したことが分かったが、これによって 1 つ韻部に対応する摂が決まれば、他の摂が入られる場合はなかったということが明らかになった。

なお、開合や摂の区別を除けば、分韻する際伝承音が最も重視されたことが以下の 3 つにより再確認できた。

まず、効摂の 4 つの韻が洪音(1・2 等)と細音(3・4 等)に分かれると予想されたが、実際にはそうではなく、完全に伝承音の中声に基づいて字が分類されたことが分かった。ただ、洪音・細音を区別しようとする傾向は確かにあると考えられる。

次に、効摂 3 等の宵韻は重紐韻であるが、調べたところ伝承音には重紐 A・B 類の差が全く現れていなかった。正韻音はそういった伝承音の傾向にしたがって重紐を区別しなかった。

さらに、侯韻の舌頭音字の伝承音は声母により u 或いは iu で現れるが、正韻音も伝承音に基づき端・透・定母を uw 韻に泥母を iuw 韻に入れた。

w 終声韻部の伝承音は比較的整然としていると言える。ただ、効摂と流摂は-w 韻尾で終わる韻の集まりで、-i 韻尾を伴っていない韻であるのに、伝承音にはまるで-i 韻尾を写したように見える例外、すなわち「oi・iui」が多少あったが、『正韻』ではそれらの中声をすべて修正した。修正の対象となった中声を類型別に表すと、次の通りである²²⁴。

摂 開合	正韻音中声	伝承音中声
効摂	ow	o・ <u>io</u> ④・a・u・oi
	iow	io・ <u>o</u> ④・ <u>iu</u> ²²⁵
流摂	uw	u・ <u>o</u> ②・ <u>iu</u>
	iuw	iu・ <u>iui</u>

4.5 ø 終声

『正韻』の韻部のうち、最も多様な韻部が含まれており、最も多い字が収められている韻部が終声-ø を持つ韻部である。-ø 終声韻部は 9 つの韻部に分かれ、それらの韻部はさらに

²²⁴ ①音節制約、②韻部の区別、③開合の区別、④洪細の区別。下線は出現率が低いため修正した伝承音の中声を示す。

²²⁵ iow 韻に中声 oa で現れる例外が見られるが、表には載せなかった。それらの伝承音は(中国音による)類推と考えられる。

19 個の韻に分かれる。正韻音の表記を見ると、すべての字が終声-ø(°)で終わるが、その終声は 4.4 で検討した-w(ㅁ)終声と同じく音価がないただの表記に過ぎない。『正韻』の韻部や韻及びその代表字をまとめると次のとおりである

<表 73> ø 終声類

韻部	韻	平	上	去
Λ	Λ	賞	紫	恣
	i	祇	企	棄
	Λi	胎	待	戴
	ii	羈	己	寄
oi	oi	傀	隗	儻
ai	ai	佳	解	蓋
	oai	乖	掛	卦
ui	ui	媯	軌	媯
	iui	規	癸	季
iæi	iæi	雞	啓	鬪
	iuiæi	圭		桂
o	o	孤	古	顧
a	a	歌	哿	箇
	ia	迦	姐	借
	oa	戈	果	過
u	u	拘	矩	屨
	iu	株	駐	駐
ø	ø	居	舉	據
	iø	豬	貯	著

次の<表 74><表 75>は『正韻』の韻部、正韻音の中声表記、中古音韻撰、『挙要』の字母音及び反切下字、訳訓音の中声を示したものである。ただ-ø 終声韻部には中古音のうち-i 韻尾を持つ韻と韻尾を持たない韻が一緒に対応するため、説明の便宜上『正韻』の韻部を中古音の韻尾ごとに分けて表に載せた。

<表 74> o[ø]終声類(i 韻尾類)

韻目	韻類	中声	中古音撰韻(等)	字母韻	反切下字	訳訓音中声
賞	賞	・ Λ	止支 止脂 止之	賞	支夷之	一 ㅋ
	祇	i	止支 止脂 止之 止微	羈媯雞	支夷之非宜	ㅋ ㄱ
	胎	· Λi	蟹哈 蟹灰	該媯	來回	ㅁ ㄱ
	羈	ㄱ ii	止支 止脂 止之 止微	羈賞	宜夷之希	ㅋ 一
傀	傀	ㅁ oi	蟹灰 蟹泰	媯	回外	ㄱ
佳	佳	ㅁ ai	蟹佳 蟹皆 蟹哈 蟹泰 蟹夬	該佳	佳皆來蓋邁	ㅁ ㅁ ㄱ
	乖	ㅁ oai	蟹佳 蟹皆 蟹夬	乖	媯懷快	ㅁ ㅁ

媯	媯	ㄱ ui	止支 止脂 止微 蟹祭	媯規靡	爲佳非芮	ㄱ
	規	ㄴ iui	止支 止脂	規媯乖惟	規佳	ㄱ
雞	雞	ㅋ iəi	蟹齊 蟹祭 蟹廢	雞羈	奚例廢刈	ㅋ
	圭	ㅁ iuiəi	蟹齊 蟹祭 蟹廢	規媯	哇芮廢	ㄱ

止摂と蟹摂は『正韻』の $\Lambda \cdot oi \cdot ai \cdot ui \cdot iəi$ 韻部に対応する。大体、止摂が $\Lambda \cdot ui$ 韻部に、蟹摂が $oi \cdot ai \cdot iəi$ 韻部に対応する傾向はあるが、蟹摂の一部が之摂と同一の韻部に置かれている場合がある。両摂は収噫韻尾²²⁶を持っている韻の集まりである。止摂の韻尾に対する、今の学者らの見解は一致していないが、『正韻』における分韻結果に基づけば、少なくとも編者らは止摂が蟹摂と同様-i 韻尾を持っていると認めた可能性が高い。

<表 75> o[∅]終声類(∅ 韻尾類)

韻目	韻類	中声	中古音摂韻(等)	字母韻	反切下字	訳訓音中声
孤	孤	ㄊ o	遇模 遇魚	孤	胡居	ㄊ ㅍ
歌	歌	ㄷ a	果歌 果戈 仮麻 ₂	歌嘉牙戈	何加禾	ㄷ ㅍ ㄷ ㄱ
	迦	ㅌ ia	果戈 ₃ 仮麻 ₃	迦嗟	遮伽	ㅌ ㅋ
	戈	ㄷ oa	果戈 仮麻 ₂	戈瓜癩歌	禾瓜鞞	ㄱ ㅍ ㄷ
拘	拘	ㄱ u	遇虞	居孤	俱	ㅍ ㄱ
	株	ㅍ iu	遇虞	居	俱	ㅍ ㄱ
居	居	ㄷ ə	遇魚	居	居	ㅍ
	豬	ㅌ iə	遇魚	居	居	ㅍ

中古音の遇摂、果摂、仮摂は $o \cdot a \cdot u \cdot ə$ 韻部に対応する。止摂と蟹摂の場合、1つの韻部に両摂が入り混じっている場合があるのに対して、上述の3摂と『正韻』の韻部の対応は整然としている。それは1つの摂に属する韻の数が少なく、それらの韻の四等が重なる場合

²²⁶ 明代に曲韻家らにより使われ始まった韻尾の名称の1種。「直音、収噫、収鳴、抵嘯、穿鼻、閉口、満口、撮口」のうち直音は∅ 韻尾、収噫は-i 韻尾、収鳴は-u 韻尾、抵嘯は-n 韻尾、穿鼻は-ŋ 韻尾、閉口は-m 韻尾、満口は韻尾をも持たず主母音が u である‘合口直音’、撮口は韻尾を持たず主母音が ü である‘撮口直音’を示す。『正韻』の∅ 終声韻部に対応する5つの摂のうち遇・果・仮摂が直音に属し、蟹摂が収噫に属する。止摂が直音に属するか収噫に属するかについての学者らの見解は一致していない。『韻学驪珠』(1792)では止摂を直音に収めている反面、薛鳳生(1985: 41)は止摂を蟹摂と同様収噫に属すると解釈した。一方、Karlgren(1940: 489-493)は支韻を jie に、脂・之韻を ji に微韻を jei に推定したが、それは‘同じ韻尾を持ち、類似する主母音を持つ’という‘摂’の基本概念に外れる結果となってしまった。麥耘(2009)も微韻だけを韻尾-i を持つ韻と解釈し、他の3つの韻には韻尾がないとしている。本稿では薛鳳生と同様両摂を収噫に属する摂と分類する。

があまりないためであろう²²⁷。詳しく言えば、遇撰には3つの韻が含まれており、果撰と仮撰にはそれぞれ1つの韻しかない²²⁸。それに果撰の歌韻や仮撰の麻韻は相補分布をなすため、両撰は1つの撰と見ることができる²²⁹。『正韻』では、遇撰がo・u・ə韻部に、果・仮撰がa韻部に分けて入れられた。以下においては各韻部の正韻音と伝承音を比較検討する。

4.5.1 Δ 韻部

Δ 韻部にはΔ 韻・i 韻・Δi 韻・ii 韻の4つの韻が含まれる。中古音の止撰と蟹撰がΔ 韻部に対応する。止撰は支・脂・之・微韻からなるが、4つの韻の開口がすべてΔ 韻部に収められている。また蟹撰の場合、1等韻である哈韻や灰韻がΔ 韻部に入れられた。以下の<表76>はΔ 韻部と上述した6つの韻との対応関係を示したものである。

<表76> Δ 韻部

中終声	撰	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
Δ	止	支	3	開	j	e		齒頭、生母
Δ	止	脂	3	開	j	i		齒頭、生母
Δ	止	之	3	開	j	i		齒頭、崇母、生母、俟母
i	止	支	A	開	j	e		牙、舌、唇重、喉、章組、来母、日母
i	止	脂	A	開	j	i		牙、舌、唇重、喉、章組、来母、日母
i	止	之	3	開	j	i		知組、章組、以母、来母、日母、崇母(平)
i	止	微	3	合	jw	ə	i	唇軽
Δi	蟹	哈	1	開		o	i	齒頭、喉、端、透、定、来母
Δi	蟹	灰	1	合	w	u	i	唇重
ii	止	支	B	開	j	e		牙、喉、初母

²²⁷ 止撰に属する4つの韻はすべて3等韻であり、蟹撰には開合の対になる韻を1つの韻と数えても8つの韻が属している。さらに蟹撰にも3等韻があるなど、両撰の構成は最も複雑と言える。

²²⁸ 果撰には歌韻と戈韻があるが、両韻は開合一組であり、『切韻』や『広韻』(王三本)ではそれらの韻を分けなかった。戈韻には1等以外に3等韻字(伽迦など)もあるが、その数が余りにも少なく、それらの字の反切下字はすべてが例外反切と扱われているため、果切の歌・戈韻は開合の対になる1等韻と考えてよい。최영애(2000: 279)参照。

²²⁹ 董同龢(1968: 174)は果撰の戈韻に載っている「伽迦」などの字が仏經の翻訳過程で新しく作られた字であるため、それらの字さえ除けば果撰と仮撰を1つの撰にすることができると述べた。また、최영애(2000: 280)によると、『四声等子』(元代)以降のすべての韻図には両撰が合わさって載っているという。

ii	止	脂	B	開	j	i		牙、喉
ii	止	之	3	開	j	i		牙、喉、莊母、初母
ii	止	微	3	開	j	ə	i	牙、喉

Λ 韻部には止撰と蟹撰が一緒に収められているが、韻ごとに見ると、Λi 韻に蟹撰が、残りの Λ 韻・i 韻・ii 韻に止撰が対応する。正韻音の中声に止撰に属する 4 つの韻の音声的差異は全く反映されておらず、声母及び重紐 A・B 類の違いだけが現れる。つまり、Λ 韻には支韻・脂韻・之韻の歯頭音字や壮組字の一部が取りまとめられ、i 韻や ii 韻には重紐 A 類や B 類がそれぞれ収められたのである。それは言うまでもなく伝承音の傾向にしたがっているであろう。以下では正韻音と伝承音の異同を韻ごとに調べる。

<表 77> 「Λ」 韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
支開 3 止	歯頭(75)	「Λ」 質髭紫咎雌此刺疵馘漬斯撕鶻廝徒璽賜(17) 「Λi」 此(1) 「i」 漬(1) 「ii」 廝(1)
支開 3 止	照 2(33)	「Λi」 屨(上)屨(去) 「iəi」 屨(上)屨(去) 「ii」 釃筵(2) 「oai」 纏(1)
脂開 3 止	歯頭(55)	「Λ」 咨諮資姿姊恣次資瓷自私死四泗駟肆(16) 「Λi」 齋(1) 「i」 兕(1)
脂開 3 止	照 2(4)	「Λ」 師獅(2)
之開 3 止	歯頭(78)	「Λ」 孳滋鎡籽薰子仔慈鷺鷓茲字忒思絲司筭伺詞祠辭似姁耜祀寺 嗣飼食(29) 「Λi」 梓(1) 「i」 寺(1) 「ii」 偲總蔥(3)
之開 3 止	照 2(23)	「Λ」 史使(上)士仕俟事(6) 「i」 使(去)栝(2)

正韻音の中声が Λ で現れるのは支・脂韻の歯頭音・生母字や、之韻の歯頭音・崇・生・俟母字である²³⁰。上述した字の伝承音を見ると、支韻の生母を除けば、中声が Λ で現れる傾向が多い。しかし、支・脂・之韻がすべて 3 等介音を持ち、主母音も前舌母音か中舌母音に推定された²³¹事実を考えれば、止撰歯音字の中声が Λ で現れるのは非常に興味深い現象である。この現象は、いわゆる止撰歯音字の‘舌尖音化’と関わりがあると考えられる。麥耘(2009: 79-80)によると止撰歯音字に舌尖音化が生じ、後期中古音時期になると、精組字はすでに 1 等韻になり(『切韻指掌圖』には‘咨疵慈思’などの精組字を 1 等欄に置いてある

²³⁰ しかし、支韻壯母・之韻崇母字は i 韻に、支韻初母・之韻莊母初母字は ii 韻に収められた。

²³¹ 麥耘(2009)は支・脂・之韻の主母音を各々 ε・i・ə と推定し、平山久雄(1967)は ə・ɪ・ǝ と推定した。

²³²)、壮組字の主母音も[i]ではなかったという。신아사(2009 : 160)は止摂の音変化の段階を次の4つにまとめた。

- (1) 支・脂・之・微韻の合流
- (2) 重紐B類が3等韻に、A類が4等韻にそれぞれ合流
- (3) 齒頭・正齒2等字の主母音の舌尖音化
- (4) 蟹摂開口3・4等字や合口1・3・4等字が止摂に合流

そして、3・4つ目は宋代から元代までのどこかで起きた変化と見なし、齒音字の伝承音が中国近代音を反映していると述べた。この見解は有坂秀世(1973)²³³・河野六郎(1979 : 479-481)²³⁴の見方と一脈通じる。

その反面、박병채(1986 : 190)は止摂齒音字の伝承音が『切韻』より古い時期、すなわち上古音の反映と述べた。つまり、支・脂・之韻の上古音の主母音は中舌の[ə]と考えられるが²³⁵、中性Λがそれを写していると解釈したのである。

一方、伊藤智ゆき(2007 : 150-153)は止摂の精組・壮組字は-Λ・-ii・-i²³⁶の3通りで現れるとし、そのうち中声-Λについて次のように解釈した。つまり、精組・壮組字は「子音+母音」という音節としてより、[tsz₁][sz₁]のように聞き取られたと考えられるが、この場合中声Λは挿入母音の役割を果たしたと見られるということである。

²³² その反面『韻鏡』にはそれらの字が4等韻欄に置かれているため、2種の韻図におけるこういう差異は中国音の変化をよく表していると言える。

²³³ 有坂秀世(1957 : 297)は唐代以前の中国音を伝承音の母胎音と考えられない根拠の1つとして止摂齒音字の伝承音の例を挙げた。つまり、『切韻指掌図』や『中原音韻』(1324)では齒音字が他の声母字と区別されたことに対して、慧林の『一切経音義』においては両者がまだ区別されていないが、このことによると齒音字が分かれた時点が唐代以降であることが明らかになるとした。

²³⁴ 河野六郎(1979)は齒頭音や壮組字の中声Λが後世の-ɿ(voyelle apicale)を写していると述べながら、止摂の伝承音をc層(近代音)に置いた。

²³⁵ 박병채(1986)はKarlgren(1940)の上古音再構音を用いている。すなわち、支韻*-i_əg(*-i_əi)、脂韻*-i_əd(*-i_əi)、之韻*-i_əg。しかし、支韻・脂韻の場合、*-i_əi > -i_əiの変化を前提としなければならない。

²³⁶ なお、伊藤智ゆき(2007 : 150、151)は3つの中声のうちiは介音の口蓋性がまだ失われていない状態を表し、iとiiはともに韻尾-iを保たれていた状態を表すと述べながら、両者が中声Λより古い段階を表しているとした。

ともかく止摂歯頭音字と壯組字一部の伝承音は独特の現れ方を示しているが、以上の〈表 77〉から正韻音がそういった伝承音の傾向をそのまま受け入れたことが確認できる。韻ごとに見ると、支韻歯頭音字には例外が 3 字、「此(Λi)・漬(i)・廝(ii)」見られるが、すべてが多音字である。脂韻歯頭音字には例外が 2 字「齋(Λi)・兕(i)」あるが、それらの 2 字を除いた 16 字の中声がすべて Λ で現れるため、伝承音の傾向に合わせて修正しただろう。脂韻の生母字には例外がない。之韻の歯頭音字に例外が 5 字「梓(Λi)・寺(i)・偲總惹(ii)」見られる。例外のうち「寺」字の中声は Λ でも現れるが、調べたところ「寺」が i 韻にも置かれていることが分かった。したがって『正韻』に「寺」のすべての伝承音が反映されていると言えるだろう²³⁷。そのほかに、中声 Λi や ii で現れる字²³⁸は伝承音に基づき修正したと考えられる。之韻壯組字に例外が 2 字「使栝(i)」あるが『正韻』では 2 字の中声を伝承音にしたがってすべて Λ に修正した。つまり、止摂の歯頭音字や壯組字の正韻音は伝承音を受け入れているとと言えるだろう。

しかし、支韻生母の場合、伝承音の中声が Λ で現れる字が全くないにもかかわらず、それらの字を Λ 韻に入れたのが疑問に感じられる。詳しく言えば、「屨(上)屨(去)」の中声は Λi・iəi で現れ「釃篋」の中声は ii で「纏」の中声は oai²³⁹で現れる。これらの例外のうち、中声 oai は開合の間違いであり、中声 iəi は洪細の区別のため、修正しなければならなかっただろう。そうすると Λi もしくは ii が基準音と選ばれなかった理由は何であろうか。支韻初母字が ii 韻に入れられたことを考えれば、ii が基準音にならなかった理由はなおさら分かりにくい。さらに、すべての支韻壯組字は「賁」字母韻に属するが、壯組字をあえて清濁により分類した理由は何であろうか。このことについて以下の 2 つの理由が考えうる。

まず、伝承音において支・脂・之韻の違いが全く現れないという事実を考慮に入れ、支・脂・之韻の生母字の中声をまとめて見ると、中声の出現頻度は Λ(4)・Λi(2)・iəi(2)・ii(2)・i(1)・oai(1) のようである。これによると Λ の出現率が圧倒的に高いとは言えないが、伝承音の中声が Λ で現れる傾向があることは確かであると言える。つまり『正韻』の編者らはそういった伝承音の傾向に基づき支韻生母字を修正したと推測される。

次に、当時の支韻生母字のうち伝承音の中声が Λ で現れる字が多かった可能性が考えられる。『正韻』には 33 字²⁴⁰の生母字が収録されているが、そのうち伝承音の残っている字は 5

²³⁷ 김철헌(1959 : 67)は止摂歯上音字の正韻音の中声(韻母)が Λ と i を混用する理由について中国の古官話に影響された結果と解釈した。

²³⁸ 伊藤智ゆき(2007 : 150、153)によると「梓」は哈韻精母「宰」の類推、上声の「惹」は平声の「偲總」の類推という。

²³⁹ ただ、「纏」は蟹摂 2 等生母でもあり、『正韻』において ai 韻にも載っているが、oai は開合を間違って写した例外かもしれない。

²⁴⁰ すなわち「釃麗灑廝襪襪籠筭徒躑躅屨釃纏縱灑洒曬睺鞞鞞徒徒籠澁鞞屨灑洒曬釃靚」

字しかない。しかし、調べたところ 33 字のうち現代韓国漢字音の中声が a で現れる字が 8 字「籬篔躑躅躑躅躑躑」になるということが分かった²⁴¹。中世の ʌ(・)が a(卜)に合流した²⁴²事実に基づけば、生母字の中声が ʌ で現れる傾向があった可能性が全くないとは言い切れないだろう。もちろん、こういう場合、中声が a で現れる 8 字の漢字音が韻書音に影響された可能性をも考えなければならないし²⁴³、今現代漢字音が確認できない字も沢山残っているため、支韻生母字の中声が ʌ であったと考えるのはあくまでも推測に過ぎない。

<表 78> 「i」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
支開 A 止	牙音(21)	「i」岐(1)
支開 3 止	舌上(49)	「i」知蜘蛛知魑馳池(7)
支開 A 止	唇重(70)	「i」卑筭裨俾裨筭臂辟譬辟脾婢避辟彌弭彌(17)
支開 B 止	唇重(64)	「i」陂罌碑彼鉞披皮疲被髮被靴糜靡靡(15)「a」糜(1)
支開 3 止	照 3 ²⁴⁴ (118)	「i」 支枝肢扃梔祗樁紙砥只咫伎眵侈施繩弛豕翅施啻匙是諶氏(26) 「iəi」舐(1)
支開 3 止	喉音(48)	「i」移屨施區易施(6)
支開 3 止	半舌(46)	「i」離籬璃罇離(5)
支開 3 止	半齒(8)	「i」爾邇(2)「ʌ」兒(1)
脂開 A 止	牙音(6)	「i」棄耆髻(3)「ii」祁(1)
脂開 3 止	舌頭(3)	「i」地(1)
脂開 3 止	舌上(75)	「i」致躑躅絺緹遲雉稚治尼(10)
脂開 A 止	唇重(52)	「i」七妣毗比鈇琵琶鼻(8)「ʌi」寐(1)
脂開 B 止	唇重(69)	「i」悲鄙祕嚮邳備眉涓麋美媚(11)「ʌi」魅(1)「ii」圮(1)
脂開 3 止	照 3(44)	「i」脂祇旨指底至摯鴟尸鳴屍著矢屎視示諡嗜(18)「ʌi」鴟(1)
脂開 3 止	喉音(37)	「i」伊夷莢姨彝(5)
脂開 3 止	半舌(17)	「i」犁犁履利蒞(5)
脂開 3 止	半齒(7)	「i」二貳馱(3)
之開 3 止	舌上(33)	「i」置癡恥治持痔值植(8)

²⁴¹ しかし、現代漢字音が確認できるのは 19 字しかない。

²⁴² 母音 ʌ(・)の他母音への合流(消失)過程は非語頭音節の場合や語頭音節の場合がそれぞれ異なっている。つまり、第 2 音節の ʌ(・)は i(一)に合流し、第 1 音節の ʌ(・)は a(卜)に合流したのである。李基文(1990 : 117-121)参照

²⁴³ 「籬篔」の場合、その可能性が高いと考えられる。

²⁴⁴ 章組字以外に壮母字が 1 字だけ「第」収録されているが、伝承音が確認できない。

之開 3 止	照 3 ²⁴⁵ (70)	「i」 之芝止芷沚址趾志誌識瘧蚩嗤齒熾詩始試弒時埒市恃侍闈 (25)
之開 3 止	以母 (27)	「i」 飴怡貽頤以已苾異 (8)
之開 3 止	半舌 (26)	「i」 犛狸嫠狸里理鯉俚裏李吏 (11)
之開 3 止	半齒 (35)	「i」 而榘耳餌珥 (5)
微合 3 止	唇輕 (96)	「i」 非誹扉飛匪筐樞沸菲妃斐俳費肥淝腓菲翡荆微薇尾未味 (24) 「 Δ i」 緋 (1)

正韻音の中声が i で現れる字は支 A・脂 A 韻の牙音・唇音字、支 B・脂 B 韻の唇重音字、支・脂・之韻の喉音・舌上音・半舌音・半齒音・章組字、微韻の唇軽音字である。支韻・脂韻は重紐韻であり、伝承音には重紐 A・B 類の差がきちんと反映されている²⁴⁶。つまり A 類の中声は i で、B 類の中声は ii で現れる傾向が見られるのである。『正韻』では伝承音の傾向に基づき重紐を分類している。以下ではまず重紐及び伝承音における重紐の現れ方について調べ、次に伝承音の例外について述べる。

重紐とは 3 等韻である「支・脂・祭・真・諄・仙・宵・侵・塩」韻において唇・牙・喉音字が 2 セットの反切下字を持っており、韻図でそれらの 2 セットがそれぞれ 3 等・4 等欄に分かれていることを示す。3 等韻に入れられた韻を重紐 3 等韻または重紐 B 類、4 等韻に置かれている韻を重紐 4 等韻または重紐 A 類と呼ぶ²⁴⁷。章炳麟(1976)・王力(1984)²⁴⁸など、重紐の存在を否定する派もいるが、今はほぼすべての研究者がその現象に注目している。しかし、重紐の違いがどこにあるかに関する見解は人それぞれである。以下において代表的な研究をまとめておく。

三根谷徹(1953)、李新魁(1984)は重紐の差が声母にあると解釈したが、前者が声母の口蓋化要素/j/の有(A類)無(B類)をもって重紐を説明したことに対して、後者は唇化音声母(k^w-, p^w-, x^w-, ʔ^w-等々)を持つか(B類)否か(A類)により重紐が区別されると解釈した。これらの解釈によれば、舌・齒音字の拗介音問題をも説明できるようになる。

陸志韋(1947)や王静如(1948)によると、声母と介音の違いにより重紐 A・B 類が分けられるという。つまり、重紐 A 類の唇・牙・喉音は円唇性がない声母であり、介音は i である反面、重紐 B 類の唇・牙・喉音は円唇性を持ち、介音が ɿ であると解釈した。なお、陸志韋(1947: 24-29)は B 類は壯組・知組・来母と同類になり、A 類は残りの舌音・齒音と同類になると述べた。

董同龢(1948)は重紐の生じた原因が主母音にあると述べた。A・B 類が上古音においてそれぞれ異なる韻部に属しており、中古音では 1 つの韻となったが、両者の主母音が異なっ

²⁴⁵ 章組以外に崇母字が 2 字「茬荏」載っているが伝承音は残っていない。

²⁴⁶ ただ、唇音の場合、重紐 A・B 類を問わず A 類のように現れる。

²⁴⁷ 重紐 A・B 類という用語は周法高(1948)により使われ始めた。

²⁴⁸ Karlgren も重紐については別に言及していない。

いたと解釈した。それに対して張琨(1987)はA・B類の主母音の間には高母音：低母音或いは前舌母音：奥舌母音の差があると説明した。

有坂秀世・河野六郎(1939)など、数多くの研究において重紐を介音の違いと解釈している。有坂秀世・河野六郎はA類の介音を口蓋的 i_1 、B類の介音を非口蓋的 i と推定したが²⁴⁹、その他、李榮(1956)はA・B類の介音を $[j] : [i]$ と推定し、麥耘(2009)は $-j- : -rj^{250}-$ と解釈した。学者らの再構音の音価が一致してはいないが、両者の間の音声的差には、一定のパターンが見られる。

伝承音における重紐A・B類の反映の特徴を見ると、まず支・脂・際・真・仙・塩韻の伝承音にはその違いが現れるが、諄・宵・侵韻の伝承音には重紐の差が全く反映されていない。また、伝承音に基づけば重紐の違いは介音 j の有無にあると思われる。さらに、唇・牙・喉音のうち唇音字にはその区別が現れず²⁵¹、최영애(1999 : 54)によると、全体的に喉音影母字に重紐の差が最もはっきりと現れるという。なお、各韻別伝承音の中声を見ると次の通り²⁵²。

	支脂韻 開口	真韻 開口	祭韻 開口	仙塩韻 開口	支脂祭韻 合口	真韻 合口	仙韻 合口
A類	i	i	iəi	iə	iu・iəi	iu	iə
B類	ii	i	əi	ə	ui・uəi	u	uə

ところで、興味深いのは之韻の伝承音が声母により i と ii に分かれて現れることである。詳しく言えば、之韻は重紐の区別がない普通3等韻²⁵³であるが、之韻の舌上音・以母・半舌音・半齒音の中声はA類と同様 i で現れ、牙音・影母・曉母・壯組字の中声はB類のように ii で現れるのである。その理由として次の2つが考えられる。

まず、止撰の伝承音が中国音の変化を写していると解釈することができる。切韻音では細かく分かれていた4つの韻が、慧琳音においてはすべて合併してしまった。止撰の伝承音について河野六郎(1979 : 479)は次のように述べている。「しからば朝鮮音では如何という

²⁴⁹ 平山久雄(1967)は一応有坂秀世・河野六郎説を受け入れてはいるが、三根谷徹(1953)の説によれば、舌音・齒音をまでより合理的に説明することができるとしている。また、B類の介音を i と推定した。

²⁵⁰ 実際の音声は $[r_1]$ に近い。麥耘(2009 : 68)

²⁵¹ それに反してベトナム漢字音では唇音字に重紐の区別が反映されている。つまり、A類の唇音は $t- \cdot t^h- \cdot j- \cdot ny-$ のように舌音化する傾向が多いが、その反面、B類の場合 $p^h- \cdot b- \cdot m-$ のように唇音の性質が保たれているのである。平山久雄(1967)参照

²⁵² 최영애(1999 : 55-56)参照。ただ、表記は原文では허용(1985)にしたがっているが、本稿では伊藤智ゆき(2007)に基づき修正した。

²⁵³ 平山久雄(1967)はC類という。

に、ここでも切韻の細かい種別、支・脂・之・微の別は全く認められず、甲・乙²⁵⁴の対立のみが鮮かである。²⁵⁵」このように、伝承音の母胎音を唐代長安音と仮定すれば、之韻の伝承音が中国音の変化を反映していると解釈することができるだろう。ただ、この場合、重紐の対立がない舌歯音が2通りに分かれるのが問題になるが、平山久雄(1967)によると、舌歯音声母の場合、壮組と合わさる韻母はB類の介音に近い介音を持ち、それ以外の舌歯音を伴う場合にはA類介音に近い介音を持つという²⁵⁶が、壮組がB類と、その他の舌歯音がA類と一緒に群を成しているのはそのためではないか。

しかし、一方では、之韻はそれと音声が非常に類似していた支・脂・微韻と同様 i(l) と聞き取られるしかなかったが、声母の性質に影響され、2種の中声で現れるようになった可能性が考えられる。これまで他の韻部について調べながら、複数の中古音の撰が『正韻』では1つの韻部に対応することを何度も確認することができた。繰り返して言うが、それは中古音に多様な母音の組み合わせが存在した反面、韓国語の母音体系は比較的単純であったためである。止撰の場合4つの韻がすべて3等韻であるが、麥耘(2009)と平山久雄(1967)は4つの韻を次のように推定した。

支韻 脂韻 之韻 微韻

²⁵⁴ 甲・乙はA類・B類に当たる。

²⁵⁵ 河野六郎(1979: 480)はさらに、その対応を表にした。(再構音は省略する)

	切韻	慧琳	朝鮮音(伝承音)
開口	支 ^甲 ・脂 ^甲 ・之 ^甲	脂 ^甲	ㅣ
	支 ^d ・脂 ^d ・之 ^d	脂 ^{d乙}	、
	支 ^乙 ・脂 ^乙 ・之 ^乙 ・微	脂 ^乙	ㄱ
合口	支 ^甲 ・脂 ^甲	脂 ^甲	ㅍ・ㅑ
	支 ^乙 ・脂 ^乙 ・微	脂 ^乙	ㅑ・ㅓ

²⁵⁶ これに関連して陸志韋(1947)は重紐の対立がない3等韻の唇・牙・喉音(以母除外)はB類と同類の介音を持ち、舌歯音声母の場合、精組・章組・半歯音・以母はA類の介音を、壮組・云母はB類の介音を、知組・半舌音は両方とも関わりがあるが、一応B類に分類しておくとして述べた。

麥耘(2009)	j ²⁵⁷ e	ji	iə	iəi
平山久雄(1967)	iě	i	iəi	iəi

再構音を見ると、4つの韻母は前舌高母音的要素を必ず1個含んでいることが分かる。したがって、それらの韻は母音*i*としか聞き取られなかったと思われる。しかし、牙音・壯組・喉音(以母除外)字の場合、声母の調音位置が、章組・舌上・以母²⁵⁸・半舌音・半齒音のそれより比較的後ろにあったため、母音がそれに引かれて*i*ではなく*ii*のように聞き取られたと考えられる。なお、この解釈に基づけば、微韻の伝承音が唇音字の場合A類と同様中声*i*で現れ、牙喉音字の場合B類と一緒に中声*ii*で現れる理由も同じく説明できるだろう。言い換えれば、之韻・微韻の伝承音は重紐とは関係なく声母により2種に分かれて現れると考えられる。

これまで、重紐及び伝承音に見られる重紐の特徴について探ってみたが、伝承音の中声に*i* : *ii*の対立が見られるのは、重紐の対立だけでなく声母に影響された結果である可能性がうかがわれた。しかし、止摂の4つの韻が合併した後の中国音を受け入れた可能性も考えられる。以下では例外について韻ごとに調べる。

壯組字を除けば、止摂の伝承音には例外がそれほど多く見られない。まず、支韻の例外を見ると、唇重音に1字「麤(a)」の例外が見られる。しかし「麤」の中声はaのほかに*i*でも現れる²⁵⁹。したがって、16字の唇音字の中声がすべて*i*で現れると考えて良いだろう。章組字にも例外が1字「舐(iəi)」あるが、それを除けば26字の中声が*i*で現れる。したがって「舐」の中声は伝承音の傾向に基づき修正したと考えられる。さらに、伊藤智ゆき(2007: 153)によると「舐」が齊韻端母の「抵邸」などの類推というが、字形による類推と判断され修正したかもしれない。半齒音字の伝承音資料は3つ残っており(『正韻』収録字数は8字)、そのうち「兒」の中声が Δ で現れる。これもやはり伝承音に合わせて修正したと見るしかないだろう。

脂韻牙音字のうち「祁」の中声が*ii*で現れるが、これは重紐の区別のため修正しただろう。唇音の場合、中声が Δi で現れる字が2字「寐・魅」、*ii*で現れる字が1字「圮」見られ。いずれにせよ伝承音の傾向にしたがって修正したと考えられるが、「寐・魅」の場合、類推(灰韻明母の「妹昧」と見られるため、修正せざるを得なかったとも思われる。「圮」の中声はまれに重紐B類の介音を写していると見られるが、伝承音に合わせて修正した。章組字の例外「鴟(Δi)」の中声は*i*でも現れる。

之韻字には例外が1字も見られない。微韻字に中声が Δi で現れる字が1字「緋」あるが、伝承音にしたがって修正した。

<表 79> 「 Δi 」韻類の韓国漢字音の中声

²⁵⁷ 重紐A類の介音のみ提示する。

²⁵⁸ 麥耘(2009: 56)は以母を零声母或いは*jに推定することができると述べた。

²⁵⁹ ただし『正韻』には1回しか現れない。

韻母	七音	伝承音
哈開 1 蟹	舌頭(65)	「 Δi 」 戴胎台貸態臺擡苔矣待殆怠代袋黛玳(16)
哈開 1 蟹	齒頭(55)	「 Δi 」 哉栽災菑宰載再載採彩綵菜裁才材財在塞賽(19) 「 Δ 」 哉才纜(3) 「ii」 猜顛(2) 「ai」 賽(1)
哈開 1 蟹	喉音(35)	「 Δi 」 埃愛海醞孩頰(6) 「ai」 埃(1)
哈開 1 蟹	半舌(17)	「 Δi 」 來棘(2)
灰合 1 蟹	唇重(100)	「 Δi 」 杯背(幫)輩坏醅配裴倍(去)焙玫梅酶莓每媒煤每妹昧(19) 「ai」 倍(上)背(並)悖(3) 「o」 瑁(1)

次に、<表 79>に見られるように、 Δi 韻に収められた字は蟹撰 1 等韻である哈韻の舌頭音・齒頭音・喉音・半舌音字、灰韻の唇重音字である。蟹撰の場合、1・2 等韻が ai 韻に、3.4 等韻が iai 韻に対応する傾向があるが、哈・灰韻だけが Δi 韻に入れられたことが目立つ。これらの字の伝承音を見るとほとんどすべての中声が Δi で現れるが、中声 Δi は主母音と -i 韻尾からなる哈韻²⁶⁰の韻母をきちんと写していると考えられる。さらに、『正韻』では伝承音の傾向に合わせて例外を修正している。このことは -w 韻尾の場合と全く対照的と言える。4.4 において述べたが、韓国語に -w で終わる二重母音が存在せず、当然ながら訓民正音の中声体系にもその母音に当たる中声が無かった。そのため韻尾 -w が写されなかった場合に、それらの中声は修正の対象にならなかったのである。その反面、韓国語母音体系には比較的多様な重母音が存在し、訓民正音にもそれらの母音に当たる中声字が揃っていた。すなわち‘與 1 相合字’「 $\Delta i \cdot ii \cdot oi \cdot ai \cdot ui \cdot \ddot{a}i$ 」²⁶¹ がそれであるが、それらの中声があったからこそ、-i で終わる韻母をも表記することができたのである。にもかかわらず、哈韻字の伝承音には例外が比較的多く見られる。それは哈韻が同じ 1 等韻である泰韻と重韻の対をなしているためだろう²⁶²。以下では例外について述べる。

まず、齒頭音字に都合 6 つの例外が見られ、中声 Δi 以外にも Δ で現れる字が 3 字「哉才纜」、ii で現れる字が 2 字「猜顛」²⁶³、ai で現れる字が 1 字「賽」ある。中声 Δ には韻母の要素のうち韻尾 -i が反映されていないと思われ、中声 ii は主母音を間違えて写した結果と見られる。また、中声 ai は泰韻との混同形と考えられる。しかし、いずれにせよ Δi より

²⁶⁰ 麥耘(2009)は哈韻開口を oi(前期)、oi(後期)に、平山久雄(1967)は Δi と推定した。

²⁶¹ 他にも「ioi・iai・iui・iai・oai・uai・ioiai・iuiiai」がある。

²⁶² 蟹撰には重韻関係にある韻が 5 つ含まれている。重韻については ai 韻部で調べる。

²⁶³ 伊藤智ゆき(2007:133)は中声 Δ と ii を止撰開口精組・壯組との混同形かもしれないと解釈し、その理由について次のように述べている。「もし哈韻の主母音が短母音だったならば(Karlgren(1940:478-483))、主母音の発音は非常に弱く発音されたと考えられるため、止撰開口精組・壯組と聞き間違えることもあり得るだろう。」確かに、Karlgren(1940:478-483)は「哈(灰)泰」「皆佳夫」「刪山」「覃談」「咸銜」の違いが主母音の長短により生じたと解釈しているが、哈韻の主母音を短母音に、泰韻の主母音を長母音に解釈した。さらに、主母音の長短説を説明するために、伝承音において蟹撰 1・2 等韻の中声が $\Delta i : ai$ に現れる事実を用いているが、 Δi と ai の間には長短の差ではなく音声の違いだけがある。

出現頻度が高い中声が存在せず、その上「哉才・賽」の場合、中声が Δi でも現れるため、編者らはそれらの例外をすべて Δi に修正しただろう。喉音字に例外が1字「埃」だけ見られるが、その中声が Δi 及び ai で現れるため、議論は省略する。

唇音字には中声が ai で現れる例外が3つ「倍背悻」あり、 o で現れる字が1字「瑁」見られる。 ai は泰韻合口との混同形である可能性がある。「瑁」の場合、灰韻明母の「莫佩切」以外にも豪韻明母の「莫報切²⁶⁴」の音も持っており、『正韻』に Δi 韻だけでなく o 韻にも収録されている。

<表 80> 「ii」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
支開 B 止	牙音 (97)	「ii」羈劓寄倚踦綺奇騎琦伎妓錡宜儀蟻義誼議 (18) 「i」技芰 (2)
支開 B 止	喉音 (39)	「ii」猗欹倚椅戲 (5)
脂開 B 止	牙音 (22)	「ii」飢肌冀驥器跽劓 (7) 「uəi」几机 (2)
脂開 B 止	喉音 (12)	「ii」懿 (1)
之開 3 止	牙音 (83)	「ii」姬箕錡棋基己紀記欺起杞亟期淇麒旗蘄忌疑擬 (20) 「i」其淇 (2) 「ii」矣 (1)
之開 3 止	壯・初母 (33)	「ii」縉輻 (2) 「 Δi 」滓 (1) 「 Δ 」截鍾廁 (3) 「i」廁 (上・去) (2)
之開 3 止	喉音 (36)	「ii」醫噫意薏嬉熙喜 (7)
微開 3 止	牙音 (53)	「ii」機璣饑鞮譏幾蟻幾既豈氣祈璣沂毅 (15)
微開 3 止	喉音 (37)	「ii」衣依辰儗衣稀豨希餼 (9)

次に、<表 80>に見られるように、正韻音の中声が ii で現れる字は支 B 韻牙喉音字、脂 B 韻牙喉音字、之韻牙喉音・壯組字、微韻牙喉音字である。伝承音を見ると、韻の種類にかかわらず牙喉音字の場合、例外があまり見られない。その反面、之韻の壯母・初母字は基準音の中声 ii より、他の中声の出現率が高い。各韻の例外を見ると次の通り。

『正韻』には牙喉音字以外に初母字が5字「差嗟差鞏簷」収録されているが、伝承音が残っていない²⁶⁵。それらの字の現代韓国漢字音は「差($c^h a \cdot c^h i \cdot c^h ai$)嗟($c^h a \cdot c^h i$)鞏($c^h a \cdot c^h i$)鞏($c^h ai$)簷(なし²⁶⁶)」で現れ、3種の中声のなかでは a や i が多く現れると言える。現代音の中声 a は中世の a もしくは Δ から変化したものと思われ、中声 i は i 或いは ii から

²⁶⁴ 伊藤智ゆき (2007 : 133) は「瑁」を豪韻明母の「冒帽」の類推と解釈したが、「瑁」は本来豪韻明母字でもある。

²⁶⁵ 伊藤智ゆき (2007) の資料表には載っていないが『李朝語辞典』に収録されている「差備」の音が「 $c\Delta pi$ 」である。

²⁶⁶ ただ、「簷」は「鞏」の異体字である。

²⁶⁷、ai は ai から各々変化したものと推測できる。ところで、筆者の調査では「差嗟差𦵏」が『正韻』の ii 韻だけでなく、a 韻や ai 韻にも収録されていることが明らかになった²⁶⁸。すなわち「差(ii・a・ai 韻)嗟(ii・a 韻)𦵏(ii・a 韻)𦵏(ii・ai 韻)簾(ii 韻)」。これらの正韻音を現代音と比べれば、まず、現代音の中声 a・ai はそれぞれ『正韻』の a・ai 韻の漢字音を引き継いでいるものと言えるだろう。したがって残りの現代音の i は ii 韻の漢字音を受け継いでいると考えられるが²⁶⁹、そうすると「差嗟差𦵏簾」の 15 世紀の中声は i 或いは ii であったと推察され、それらの字が ii 韻に入れられた理由を突き止めることができる。つまり、もし伝承音の中声が ii であったとすれば、正韻音が伝承音をそのまま受け入れたことになる。また、i であったと仮定すれば、章組字と区別するため中声を修正したと解釈することができるだろう。さらに、「差嗟差𦵏簾」の字母韻を調べた結果、Λ 韻に入れられた支韻生母(壯組全濁)と同様「𦵏」字母韻に属することが明らかになった。言い換えれば、『正韻』の編者らは同一の字母韻に属している支韻壯組字をあえて Λ 韻(生母)と ii 韻(初母)に分けて入れたということになる。それは伝承音(ii もしくは i)を反映した結果としか考えられないだろう。ただ、生母字の伝承音のうち中声が Λ で現れる字が 1 字もなかったことを考慮すると、支韻壯組字の分韻基準について何とも断言することはできないと思う。

支韻牙音字に例外が 2 字「技芰(i)」現れるが、重紐 A 韻との混同形だろう。例外の数が少なく、全体 20 字のうち 18 字の中声が ii で現れるため、それに基づき例外を修正したと考えられる。

脂韻牙音字の場合、ほぼすべての中声が ii で現れるが、例外が 2 字「几机(uəi)」見られる。uəi は例外が少ないため修正の対象になっただろう。しかし、その他にも uəi の場合、開合を間違っ反映している²⁷⁰ため修正したと解釈することもできる。

一方、支韻・脂韻喉音字のすべての中声は ii で現れ、例外が 1 字も現れない。ただ、興味深いのは、支・脂韻牙音字のうち正韻音の中声が ii で現れる字は「羈」字母韻に、中声が i で現れる字は「雞」字母韻にそれぞれ属しているのに対して、両韻の喉音字の場合、重紐 A・B 類がともに「羈」字母韻に入れられている事実である。にもかかわらず、喉音字を ii 韻と i 韻に分けて取りまとめたのは、伝承音の傾向を受け入れた結果である。

之韻牙音字に例外が 2 字「其淇(i)」見られるが、そのうち「淇」の中声は ii でも現れる。したがって「其」だけが例外になるが、ほぼすべての牙音字の中声が ii で現れるため修正しただろう。之韻喉音字には例外が見られない。

之韻壯組字の場合、崇・生・俟母字が Λ 韻に入れられた反面、壯・初母字は ii 韻に取りまとめられた。しかし、壯・初母字の伝承音を見ると「緇輜(ii)、滓(Λi)、𦵏鍾廁(Λ)、廁

²⁶⁷ 止摂字の伝承音の中声 ii は現代漢字音では少数の例外(疑・意等々)を除けば、すべて i で現れる。

²⁶⁸ a 韻や ai 韻に属する字の初声は「𦵏(𦵏)」を除けばすべてが c^h(ㄙ)である。

²⁶⁹ もちろん現代漢字音が韻書の漢字音を引き継いでいる可能性もある。

²⁷⁰ uəi という中声字自体が合口性を伴っていることだけでなく、脂韻合口の伝承音を見ると、中声が uəi で現れる例が沢山見られる。

(i)」のように現れ、中声が ii で現れる字が多いわけでもないのに、『正韻』の編者らはそれらの字を ii 韻に分類した。且つ、すべての之韻壯組字は「賃」字母韻に属するため、一体何を基準として壯組字を分けたのかが分かりにくい。ところで、そのことに関連し、조운성 (2011B : 84) は壯組の摩擦音と破擦音の音変化が間をおいて起きた可能性を示すと述べた。その上、止摂歯音字の訳訓音を見てもそういう傾向が見られる。拙稿(2010 : 29)は『訳訓』において歯頭音字の中声は i(一)で、正歯音字の中声は i(l)で写されたが、ただ、正歯音の章組の場合、すべての中声が i(l)で現れる反面、壯組字の中声表記には i(一)と i(l)が共に現れると指摘した。さらに、壯組字の正韻音と訳訓音を比較した結果、正韻音の中声が Δ で現れる字は訳訓音の中声が i(l)で現れ、正韻音の中声が ii で現れる字の訳訓音の中声は i(一)で現れる傾向があるということを明らかにした。伝承音が残っている字の訳訓音の中声を示すと次の通り²⁷¹。

字	伝承音の中声	訳訓音の中声
「緇輜」	ii	i
「滓」	Δ i	i
「截廁」	Δ	i

以上のことに基づけば、当時の中国音に変化が起っていたことは確かであり、『訳訓』の編修にも加わった『正韻』の編者らなら当然ながらそういう変化について気付いていたと推測される²⁷²。つまり、之韻壯・初母字を ii 韻に入れたのはそういう階段的变化を示そうとした意識の反映ではないか。言い換えれば、精組や章組字の伝承音に例外がそれほど多く見られないのに反して、壯組字の場合、多くの多様な例外が見られるが、編者らは壯組字を Δ 韻と ii 韻に分けて入れることで、伝承音のそういう傾向を見せようとしたと思われる。しかし、ここで注意すべきことは、壯組字を 2 つの韻に分けたのは中国音の変化を反映した結果ではなく、あくまでも伝承音に見られる特徴を反映した結果という点である。

ただ、壯・初母や崇・生・俟母を分けた基準は明らかではないが、強いて言えば、伝承音の傾向を反映していると言えるかもしれない。之韻壯組字の伝承音をさらに声母ごとに分けて見ると、崇母の中声は「 Δ (3)、i(1)」で、生母の中声は「 Δ (2)、i(1)」で、俟母の中声は「 Δ (1)」で現れるのに対して、壯組の中声は「緇輜(ii)、滓(Δ i)、截鐻(Δ)」で、初母の伝承音の中声は「廁(Δ)、廁(i)²⁷³」で現れる。つまり、壯母の場合、中声 ii の出現率が Δ の

²⁷¹ 「鐻」の訳訓音は見当たらない。なお「廁」の伝承音の中声は Δ と i が共に現れるが訳訓音は 1 つしかない。

²⁷² 김철현 (1959 : 67) は正韻音の中声が Δ で現れる字が古官話音の訳音と解釈したが、もしその見解が正しければ、「滓截廁」などの訳訓音の中声が i で現れる字はすべて Δ 韻に入れられたはずである。

²⁷³ 「廁」の伝承音は全部で 3 通りである。すなわち「 $c^h\Delta H \cdot c^hiH/R$ 」

それと一緒にあり、初母は i の方がより多く現れるため、壮・初母を崇・生・俟母とは異なり ii 韻にまとめておいたのではないだろうか。

中声 Δ 以外の例外を見ると、中声 Δi は蟹摂 1 等韻との区別のため、中声 i は章組と区別するため修正したとも考えられる。

微韻の牙喉音字も ii 韻に収められたが、例外が全く現れない。したがって伝承音に基づいていると見て良いだろう。

4.5.2 oi 韻部

oi 韻部は oi 韻 1 つからなり、この韻部には中古音の蟹摂 1 等合口韻が対応する。以下の〈表 81〉は oi 韻部と両韻との対応関係を示したものである。

〈表 81〉 oi 韻部

中終声	摂	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
oi	蟹	灰	1	合	w	u	i	牙、舌頭、齒頭、喉、半舌
oi	蟹	泰	1	合	w	ɒ	i	牙、舌頭、齒頭、喉、半舌

灰韻は哈韻の合口であるため、灰韻と泰韻合口は重韻の関係にあると言えるが、『正韻』ではそれに構わず、両韻を一緒に oi 韻に入れた。また、哈韻が Δi 韻に収められたことから、灰韻は oi 韻に対応するだろうと十分予想されたが、泰韻合口の場合、開口の中声表記にかかわらず伝承音にしたがって oi 韻に取りまとめられたことが目立つ。次の〈表 82〉は伝承音の中声の出現頻度を声母ごとにまとめたものである。

〈表 82〉 「oi」韻部の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
灰合 1 蟹	牙音 (37)	「oi」傀恢魁塊 (4) 「ui」桅 (1) 「ai」礎 (1) 「ii」礎 (1)
灰合 1 蟹	舌頭 (58)	「oi」鎚摧腿退頹魁餒 (7) 「 Δi 」對確隊内 (4) 「im」確 (1)
灰合 1 蟹	齒頭 (39)	「oi」崔催衰摧 (4) 「ai」碎 (1) 「iu」焠 (1)
灰合 1 蟹	喉音 (48)	「oi」隈煨偎灰賄悔誨悔回迴茴槐 (13)
灰合 1 蟹	半舌 (37)	「oi」雷疊儻耒 (4) 「 Δi 」耒 (1)
泰合 1 蟹	牙音 (18)	「oi」儉檜膾外 (4)
泰合 1 蟹	齒頭 (8)	「oi」最 (1)
泰合 1 蟹 ²⁷⁴	喉音 (12)	「oi」會繪 (2)

²⁷⁴ 泰韻舌頭音字(泥母除外)が 13 字「殺投脫脫稅駢脫兌(透)兌(定)靛銳別奪」が載っているが、伝承音が残っていない。さらに、半舌音字が 1 字「酌」収録されているが、伊藤智ゆき (2007)

正韻音の中声が oi で現れる字は灰韻の牙音・舌頭音・齒頭音・喉音・半舌音字、泰韻の牙音・齒頭音・喉音字である。哈韻の場合舌頭音(泥母除外)・齒頭音・喉音・半舌音字が ㄥ 韻に取りまとめられた反面、灰韻はすべての声母が oi 韻に入れられた点が興味深い。両韻の伝承音のほとんどすべての中声が oi で現れるが、なかでも泰韻の伝承音には例外が全く見られない。以下では灰韻の例外について調べる。

まず、牙音字には都合 3 つの例外、すなわち「桅(ui)、礎(ai・ii)²⁷⁵」が見られるが、伝承音に中声が oi で現れる字がより多いため修正したと考えられる。舌頭音字に 5 つの例外「對確隊内(ㄨi)、確(im)」があるが、そのうち「確(t^him)」は灰韻と考えられない²⁷⁶。「對確隊内」の中声は合口性が反映されていないため修正しただろう。齒頭音字に例外が 2 字「碎・焯」見られる。「碎(ai)」の場合、表記に合口性が現れず、さらに主母音をも間違っ
て反映しているため修正せざるを得なかっただろう。なお「焯(iu)」の中声はまず、3 等韻でもないのに表記に 3 等介音が写されており、韻尾-i が反映されていない。また主母音が間違っ
て写されているため修正したと考えられるが、それに、字形による類推²⁷⁷であるため修正した可能性を
もあり得る。半舌音字に例外が 1 字「耒(ㄨi)」あるが、その字の中声は oi でも現れる。中声 ㄨi は合口性が反映されていないため修正しただろう。

4.5.3 ai 韻部

ai 韻部には ai 韻や oai 韻が含まれる。中古音の蟹摂 1・2 等韻がこの韻部に対応するが、重韻の関係にある 5 つの韻(哈・泰韻、皆・佳・夬韻)がすべて ai 韻部に配属している点が特徴的である。ai 韻部と蟹摂 1・2 等韻の対応関係を示すと次の通り。

<表 83> ai 韻部

「資料篇」には「酌」の伝承音が載っていない。権仁瀚(2009)によると『新增類合』(1576)に「酌」の音が「roi」となっているという。

²⁷⁵ 『正韻』に「桅」は 1 回、「礎」は 2 回(oi 韻平声・去声)現れ、oi 韻以外の韻には現れない。伊藤智ゆき(2007 : 136)は 3 字をすべて類推と解釈した。「桅」は支韻疑母の「危」の類推など。

²⁷⁶ 伊藤智ゆき(2007 : 137)によると「確(t^him)」は侵韻知母の「砧(t^him)」の音で読んだものという。さらに「確」は灰韻端母の反切「都隊切」しかなく、『正韻』においても oi 韻にしか載っていない。

²⁷⁷ 伊藤智ゆき(2007 : 137)は「焯」を脂韻生母の「率」か、脂韻心母の「粹」の類推と解釈した。しかし、そうすると「碎」の中声がなぜ ai で現れるのかが分かりにくい。

中終声	摂	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
ai	蟹	皆	2	開	r	æ	i	牙、唇重、喉、莊組
ai	蟹	佳	2	開	r	æ	(i)	牙、舌、唇重、喉、莊組
ai	蟹	泰	1	開		ɒ	i	牙、舌頭、唇重、齒頭、喉、半舌
ai	蟹	夬	2	開	r	a	i	唇重、徹母、崇母、影母
ai	蟹	哈	1	開		o	i	牙、泥母
oai	蟹	皆	2	合	rw	æ	i	牙、喉
oai	蟹	佳	2	合	rw	æ	(i)	牙、喉
oai	蟹	夬	2	合	rw	a	i	牙、初母、匣母

中声 ai と oai は開合の対をなす。2等韻の場合、開・合口が一緒に ai 韻部に入れられているため、中古音の開合と正韻音の開合が 1 対 1 の対応をなしている。その反面 1 等韻の場合、開口は ai 韻と ai 韻に分かれており、合口は ai 韻の合口である oi に収められている。中古音と正韻音の対応が整然としていない。以下の〈表 84〉は蟹摂 1・2 等開口の伝承音の中声出現頻度をまとめたものである。

〈表 84〉 「ai」 韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
佳開 2 蟹	牙音(14)	「ai」 街崖涯暄(4) 「ai」 懈癡(2) 「a」 佳(1)
佳開 2 蟹	舌頭(6)	「ai」 嫻(1)
佳開 2 蟹	唇重(16)	「ai」 派牌簿稗賣(5) 「a」 罷(1) 「ai」 買(1)
佳開 2 蟹	照 2(27)	「ai」 趾債釵灑洒(5) 「a」 釵差(2) 「ai」 疵(1) 「ii」 柴(1) 「oai」 灑洒(2)
佳開 2 蟹	喉音(24)	「ai」 矮(1) 「ai」 隘鞋蟹解(4) 「iəi」 鞋(1) 「a」 蟹解(2)
皆開 2 蟹	牙音(42)	「ai」 楷介价芥疥蹻駮(7) 「ai」 皆楷荖痄楷措駮(7) 「iəi」 階戒誠界犗(5)
皆開 2 蟹	唇重(19)	「ai」 拜排埋霾(4)
皆開 2 蟹 278	照 2(14)	「ai」 殺(1) 「ai」 齋(1) 「ii」 豺(1) 「iəi」 儕(1) 「oai」 殺(1)
皆開 2 蟹	喉音(18)	「ai」 挨噫(2) 「ai」 骸駭(2) 「iəi」 薙(1)
哈開 1 蟹	牙音(47)	「ai」 概愷鎧慨礙(5) 「ai」 改開咳(3)
哈開 1 蟹	舌頭(10)	「ai」 乃孺奈(3)
泰開 1 蟹	牙音(14)	「ai」 蓋丐艾(3)
泰開 1 蟹	舌頭(18)	「ai」 泰太大汰鈇柰(6) 「ai」 帶(1)
泰開 1 蟹	唇重(17)	「ai」 沛(1)
泰開 1 蟹	齒頭(3)	「ai」 蔡(1)
泰開 1 蟹	喉音(9)	「ai」 害(1)

²⁷⁸ 照 2 字のほかに、心母字が 2 字あるが、伝承音がない。

泰開 1 蟹	半舌 (9)	「oi」 頼瀬瀬賚 ²⁷⁹ (4) 「a」 癩 (1) 「oai」 癩 (1)
夬開 2 蟹	舌上 (4)	「ai」 薑 (1)
夬開 2 蟹	唇重 (7)	「ai」 敗唄邁 (3) 「a」 敗 (1) 「iæi」 敗 (1)
夬開 2 蟹 280	喉音 (3)	「ai」 餲 (1)

正韻音の中声が ai で現れる字は佳韻・皆韻・夬韻の開口や哈韻の牙音・舌頭音・半舌音字、泰韻の牙音・舌頭音・唇重音・齒頭音・喉音・半舌音字である。2等韻のすべての開口が ai 韻に入れられた反面、1等韻は声母により分かれるているが、それはおそらく伝承音の傾向にしたがって分韻した結果であろう。5つの韻の伝承音を見ると、幾つかの例外を除けば、中声が ai で現れる傾向が確かに見られる。しかし上表を見れば分かるように他の撰、例えば咸撰・山撰などの伝承音に比べ、例外が多く現れる。その理由は次の2通りが考えられる。まず、当時韓国語の母音体系に offglide が存在したため(さらにそれらの母音はいわゆる‘與 1相合字’をもって表記することができた)、他の韻母より、-i 韻尾を持つ蟹撰に当たる韻母が比較的正確に聞き取られたと考えられるが、多様な二重母音が存在しただけ選択肢が広がり、人により異なる母音と聞き取れた可能性があると思われる。次に、蟹撰の伝承音に重韻の名残が残っていることかもしれない。つまり、さまざまな二重母音が存在したので、できるだけ重韻の違いを表そうとした結果、例外が多くなったと解釈することができるだろう。それでは、まず伝承音に現れる重韻の特徴について探り、次に蟹撰 1・2 等韻の伝承音と正韻音を比較検討する。

重韻とは同撰に開合や等を同じくする韻が 2 つ以上ある場合を言う。重韻²⁸¹には「哈(灰)泰」「皆佳夬」「庚耕」「東冬」「刪山」「覃談」「咸銜」の 7 つのペアがある。しかし、蟹撰 1・2 等韻を除けば、伝承音に重韻の差が現れる韻がない。その理由は上述したように韓国語の母音が多様ではなかったためであろう。例えば、まず「庚耕」韻の場合、中声が ai と iæi に分かれる傾向が見られるが、梗撰の伝承音を見ると、重韻同士の差より 2 等と 3・4 等韻の差がずっとよく反映されている。また、「東冬」韻の伝承音の中声は両韻がともに o で現れるが、中声体系において o に類似している中声、すなわち u や i はそれぞれ通撰 3 等韻や曾撰字に対応するため²⁸²、「東冬」韻の表記に用いられなかっただろう。「刪

²⁷⁹ 「賚」の場合、『広韻』には哈韻にしか載っていないが、『集韻』には泰韻にも収録されている。『正韻』には泰韻字が載っている。

²⁸⁰ 崇母字が 2 字収録されている。

²⁸¹ 薛鳳生(1996B: 46)によると『切韻』時代には重韻といった現象が存在しなかったが、韻図時期になって 2 つの韻が近くなり、同撰の同一の等に置かれるのが重韻であるという。Karlgren(1940)は重韻の差が主母音の長短にあると述べたが、重韻の違いは主母音にあるというのが定説である。さらに、それを裏付ける根拠としてよく用いられているのが蟹撰 1・2 等韻の伝承音である。

²⁸² 中声 o は ɔ 終声韻部にそれほど多く現れないため、外した。

山」(山撰)「覃談」「咸銜」(以上咸撰)のすべての中声は a で現れるが、中声 a に近い Λ は臻撰と侵撰に対応するため、上述の 6 つ韻の表記に使えなかったと考えられる。その反面、韓国の中声体系には‘與「相合字」があったため、-i 韻尾を伴う韻、すなわち「吟(灰)泰」「皆佳夬」韻などを比較的正確に写すことができたと思われる。結果、伝承音に蟹撰 1・2 等韻の重韻の差がよく反映されたと考えられる。一方、これに関連して河野六郎(1979 : 455)は吟韻と泰韻開口が大体 $\Lambda i : ai$ の対立をなしているように見えるが、吟韻に中声 ai で現れるものも多く、 Λi と ai の区別は諧声群により決まっているように見られる点、両韻合口の伝承音の中声 oi : oai のような区別を見せず、ほぼすべて oi で現れる点を持って、吟韻と泰韻の伝承音が重韻の差ではなく層の違いを反映していると解釈した。さらに、 Λi の Λ を i の前で a が変容した結果と説明した。その反面、伊藤智ゆき(2007 : 132)は伝承音における Λi と ai の対立は重韻の差を反映しているとするのが妥当であると述べながら、中国語方言においても蟹撰の開口韻と合口韻の音変化が並行的ではないと指摘し、開口・合口韻の違いが生じることは不自然なことではないとした。そして、蟹撰 1 等韻について「 $-\Lambda i$ と $-ai$ 、 $-oi$ と $-oai$ が合流した 1 等重韻を段階的に写したものとするのは適当ではなく、これらの韻は開口では区別され、合口では合流していたとするのが妥当であろう」としたが、蟹撰 1・2 等重韻の合流時期は次の通りである²⁸³。

	玄応音	何超音	慧琳音 ²⁸⁴
1 等開口	区別あり	区別なし	区別なし
1 等合口	区別あり	区別あり	区別なし
2 等開口	区別あり	皆韻・夬韻合流	区別なし
2 等合口	皆韻・夬韻合流	皆韻・夬韻合流	区別なし ²⁸⁵

²⁸³ 馬徳強(2008 : 70-71)参照

²⁸⁴ 3 種の韻はそれぞれ玄応の『一切経音義』(649)、何超の『晋書音義』(747)、慧琳の『一切経音義』(807)の音韻体系を指す。

²⁸⁵ 蟹撰 1・2 等韻合口の訳訓音及び伝承音の中声は次の通り。

等	韻母	訳訓音中声	伝承音中声
1 等	灰 : 泰	ꠞꠞ : ꠞꠞ	ꠞꠞ : ꠞꠞ
2 等	皆 : 佳 : 夬	ꠞꠞꠞ : ꠞꠞꠞ : ꠞꠞꠞꠞ	ꠞꠞꠞ : ꠞꠞꠞꠞ : ꠞꠞꠞꠞ

以上を見ると、1等韻の場合、開口韻の方がより早い時期に合流したことが明らかになる。したがって蟹摂1等韻の伝承音に開口・合口韻が異なって反映されていることが重韻の合流時期と関係あるとは考えにくい。その理由はおそらく合口介音の有無にかかわっていると思われる。言い換えれば、開口韻の場合、主母音と韻尾からなるため、その音声が比較的明確に聞こえた可能性が高い。その反面、合口韻には合口介音がさらに加わって開口韻に比べればより複雑な母音となったため、合口介音と主母音の部分が*o*に、韻尾が*i*に聞き取られた結果1等韻合口の伝承音の中声が*oi*になったのではないだろうか。

一方、2等韻合口の伝承音の中声は皆韻：佳・夬韻が*oi : oa*²⁸⁶で現われるが、1等韻合口の伝承音とは異なり、重韻の差が反映されているように見える。その理由としてまず、2等韻の主母音同士の音声差が、1等韻のそれより多かった可能性が考えられる。麥耘(2009)と平山久雄(1967)の蟹摂1・2等韻の再構音は次の通り。

	哈韻	泰韻	皆韻	佳韻	夬韻
麥耘(2009)	<i>o</i>	<i>ɒ</i>	<i>ɛ</i>	<i>æ</i>	<i>a</i>
平山久雄(1967)	<i>ʌ</i>	<i>ɑ</i>	<i>e</i>	<i>a</i>	<i>a</i> ²⁸⁷

麥耘(2009)の再構音に従えば、1等韻の主母音が異なっているが、両者に合口介音-wが付けば、2つの音声等しくなる可能性が高いと思われる。しかし、2等韻の主母音はそうではない。なお、平山久雄(1967)によれば、2つの1等韻と皆韻が奥舌母音に近く、佳・夬韻が前舌母音に近いが、それらの主母音に合口介音が加わると、哈・泰・皆韻の音声が同じくなり、佳・夬韻の中声が似てくる可能性が高いと考えられる。

次に、1等韻は合口介音しか伴わないが、2等韻は合口介音のほかに2等介音をも持つため、主母音の音声の差が比較的是っきりと聞き取られたかもしれない²⁸⁸。

馬徳強(2008)によると、1等韻合口がより早い時期に合流したというが、訳訓音の中声を見ると、逆に1等韻に区別がなくなり、2等韻は区別を保っている。ただ、2等韻の場合、皆・夬韻が早い段階に合流したというが、2等韻の訳訓音の中声がそれを反映しているように見える。

²⁸⁶ 中声 *oa* は本来 *oai* から韻尾の*-i* が写されなかった形であろう。

²⁸⁷ 平山久雄(1967)は佳韻と夬韻がそれぞれ異なる韻尾を伴うと推定した。すなわち、佳韻：夬韻は *ai : ai*

²⁸⁸ 平山久雄(1967)は中古音を推定する際、2等介音を設けなかったが、4.1.1で述べたように、最近の研究は2等介音を認めている。

ただ、以上の解釈はいずれにせよ中国音の再構音に頼っているため、中国語音韻学界の成果により解釈が変わることができるという問題を抱えている。次は蟹撰 1・2 等韻の伝承音と正韻音について調べる。

佳韻の牙音・唇重音・壮組字の場合、中声が ai で現れる字が多いため、ai が基準音になったと考えられる。例外を声母ごとに見ると、牙音字に例外が 3 字「懈麻²⁸⁹(λ i)、佳²⁹⁰(a)」、唇重音字に 2 字「罷(a)、買(λ i)」現れる。基準音から見れば、中声 a には韻尾が写されなかったと思われ、中声 λ i は主母音が間違っ て写されたと言える。したがってそれらの中声を修正しただろう。壮組字には比較的例外が多く見られる。すなわち「釵差(a)、疵(λ)、柴(ii)、灑洒(oai)」。「釵差²⁹¹」の中声には韻尾が反映されておらず、「疵」の中声には主母音が間違っ て写され且つ韻尾も反映されていない。さらに「柴²⁹²」は主母音が「灑洒」は開合が間違っ ているためそれぞれ修正しただろう。ただ「灑洒」の中声は ai でも現れる。問題なのは喉音字である。伝承音のうち中声が ai で現れる字が 1 字「矮」しかなく、中声 λ i で現れる字が 4 字「隘鞋蟹解」もある。のみならず「鞋(i λ i)、蟹解(a)」のような例外も見られる。しかし、中声 a の場合韻尾が反映されていないと見られるため「蟹解」は中声 ai に近いと解釈することができるかもしれない。また「鞋」の中声は λ i と i λ i が両方現れるが、i λ i はおそらく中国音に影響された²⁹³結果と思われるため、基準音と選ばれなかっただろう。そうすると、結局佳韻喉音字の基準音となれる中声には ai(「矮蟹解」)や λ i(「隘鞋蟹解」)が残ると思われる。しかし、見れば分かるようにどちらも圧倒的に多く現れるとは言えない。こういう状況で編者らはおそらく字母韻を参考にした可能性が高いと思われるが²⁹⁴、字母韻を見ると、蟹撰 1・2 等韻が大体「該」字母韻に属する反面、皆韻・佳韻の牙喉音字だけが「佳」字母韻に属することが分かる。つまり、編者らは字母韻に基づき佳韻喉音字を ai 韻に入れたと推測される。ただ、今のところ確認できない伝承音の中声が ai で現れた可能性もなくはない。

皆韻牙喉音字はおそらく佳韻喉音字と同じ理由で ai 韻に入れられたと考えられるが、皆韻牙喉音字には中声 ai や λ i 以外にも、中声が i λ i で現れる例外が「階戒誠界牯(以上牙音)、薤(喉音)」見られる。それらの例外は中国音の影響によるものであるため修正した

²⁸⁹ 伊藤智ゆき(2007:138)は 2 字が「解 h λ i^l」の類推と解釈した。

²⁹⁰ a 韻に収録された字は麻韻見母の「居牙切」であると思われるが(『広韻』にはなく『集韻』に収録されている)、あるいは伝承音の ka はそれを表しているかもしれない。

²⁹¹ しかし、「差」の場合、複数の反切(佳韻・麻韻など)があり、『正韻』にも 6 回現れる。

²⁹² 伊藤智ゆき(2007:139)が指摘したように、『集韻』支韻に「柴」が載っているが、中声 ii はそれを反映しているかも知れない。

²⁹³ 伊藤智ゆき(2007:139)は「鞋」などの蟹撰字の伝承音が近世中国語以前に生じた牙喉音 2 等の口蓋化を反映した形と解釈したが、訳訓音の中声を見ても、蟹撰 1 等韻は ai で現れる反面、2 等韻の中声は iai で現れる。

²⁹⁴ 4.2 でも述べたが、収録字が少なく、伝承音に特定の傾向が見られない場合に字母韻により分韻したと推察される。

ろう。唇重音字の中声はすべて Δi で現れ、壮組字の場合牙喉音字と同様伝承音に特定の傾向が見られない。しかし編者らは、字母韻に構わずすべての字を ai 韻に入れたが、その理由は分かりにくい。

夬韻の場合、舌上音・喉音字には例外が見られず、唇重音字に例外 1 字だけ見られる。すなわち「敗」の中声が a と $i\Delta i$ で現れる²⁹⁵が、「敗」の中声は ai でも現れるため、例外がないと考えてよいだろう。

哈韻牙音字は都合 47 字収録されているが、伝承音を見ると、中声が ai で現れる字が 5 字見られ、 Δi で現れる字が 3 字確認される。中声 ai の出現率ははるかに高いとは言えないが、 Δi より多く現れることは確かであるため、哈韻牙音字は伝承音の傾向に基づいて修正したと考えられる。

泰韻の場合、舌頭音字や半舌音字に例外がある。だが、舌頭音字の場合、ほぼすべての中声が ai で現れるため、正韻音が伝承音を受け入れたと解釈できる。一方、半舌音字の場合、「頼瀨癩賚」の中声が oi で現れ、そのうち「癩」の中声が a と oai でも現れる。つまり、a を除けばすべての中声が開合を間違っ反映しているのである。最も多く現れる中声である oi から合口性を外すと、 Δi になるが、編者らは半舌音字を ai 韻に収めた。それは泰韻の他の声母字を ai 韻に入れたことに影響された結果かもしれない。

以上で蟹撰 1・2 等韻の修正基準について探ってみた。結果を簡単にまとめると、正韻音が伝承音にしたがっていることは確かであるが、伝承音に別に傾向が見られない場合には字母韻を参考にしたと推測される。

<表 85> 「oai」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
皆合 2 蟹	牙音(15)	「oi」乖怪壞贖(4) 「uoi」贖(1)
皆合 2 蟹	喉音(8)	「oi」懷淮壞(3) 「uoi」壞(1)
佳合 2 蟹	牙音(15)	なし
佳合 2 蟹	喉音(8)	「oa」畫(1)
夬合 2 蟹	牙音(15)	「oi」快(1)
夬合 2 蟹	初母(1)	嘷 なし
夬合 2 蟹	喉音(4)	「oa」話(1)

正韻音の中声が oai で現れる字は蟹撰 2 等韻合口である。2 等韻開口が ai 韻に入れられたことから、合口が oai 韻に収められると十分予想できる。興味深いのは伝承音の中声が合口性を反映しているにもかかわらず、すべての中声を修正した点である。つまり、皆韻の伝承音は主に oi で現れ、佳韻・夬韻の中声は oa で現れるが、『正韻』の編者らはそれらの中声をすべて oai に修正したのである。ところで、字母韻を見ると、1 等韻合口は「嬌」字母韻に、2 等韻合口は「乖」字母韻に属することが分かる。このことに基づけば、字母韻によ

²⁹⁵ 伊藤智ゆき(2007: 140)が指摘したように、a は戈韻滂母、 $i\Delta i$ は廢韻非母を写していると考えられる。しかし、『正韻』には夬韻に当たる字しか収録されていない。

り1・2等合口を分けたと言えるかもしれない。だが、「嬌」字母韻に止撮合口韻も属することを考えれば、編者らが専ら字母韻により合口韻を分けたとは考えにくい。したがって、蟹撮2等韻に限り伝承音ではなく字母韻に合わせて分韻したと解釈する方がより妥当だろうと思う。それはおそらく収録字の数が少ないためだろうと思われる。つまり、1等韻合口の場合200を越える字が収録されているが、その反面2等韻は収録字があまりにも少ない。それで編者らが分韻の際、字母韻を参考にした可能性があると考えられる。さらに、他の撮とは異なり蟹撮字の場合それを表記する中声が多数存在したことも、原因の1つとなるかもしれない。一方、1等合口の基準音をoiに、2等合口の基準音をoaiに定めたのは、ほぼすべての1等合口の中声がoiで現れ、2等開口の中声がaiで現れる傾向があるためと考えられる。

<表 85>を見ると、中声がuəiで現れる字が2字、oaで現れる字が2字見られるが、uəiの場合音節制約のためと解釈することができるだろう。なお、中声oaをoaiに修正した理由は次の二通りが考えられる。

1つは韻部を区別するためと考えられる。後述するが、oa韻には果撮と仮撮の合口が入られた。したがって、それらの字と区別するために蟹撮字をoai韻に取りまとめた可能性がある。

もう1つは蟹撮に含まれる韻が韻尾-iを伴っているため、それを表記に反映するために伝承音の中声を修正した可能性が考えられる。

4.5.4 ui 韻部

ui 韻部はui 韻とiui 韻からなる。中古音の止撮・蟹撮の合口がこの韻部に対応する。韻ごとに見ると、止撮の支・脂・微韻及び蟹撮の祭韻がui 韻に、支・脂韻がiui 韻に収められたが、その対応関係をまとめると、次の<表 86>になる。

<表 86>ui 韻部

中終声	撮	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
ui	止	支	B	合	jw	e		牙、喉
ui	止	脂	B	合	jw	i		牙、喉、知母(去)
ui	止	微	3	合	jw	ə	i	牙、喉
ui	蟹	祭	3	合	jw	ɛ	i	見母、云母
iui	止	支	A	合	jw	e		牙、舌上、喉、精、章、莊組、来、日母
iui	止	脂	A	合	jw	i		牙、舌上、喉、精、章、莊組、来、日母

上表からui 韻部に止撮合口の重紐韻が対応することが確認できる。止撮開口の重紐については4.5.1において触れておいたが、手短にまとめると次の通り。伝承音で大体重紐B類の中声がiiで現れ、重紐A類の中声がiで現れるが、正韻音が伝承音をそのまま受け入れたことを確認した。さらに、重紐とは関係がない之韻や微韻の中声も声母によりiiとiに

分かれて現れるが、正韻音にもそういった伝承音の特徴があるということが確認できた。開口の4つの韻が重紐及び声母により ii 韻や i 韻に分けて入れられたのに対して、合口は支・脂韻だけが重紐により ui 韻と iui 韻に分かれ、微韻の場合、すべての字が ui 韻に収められた(之韻には合口韻がない)。また、蟹摂の祭韻が ui 韻に入れられたことも ui 韻部の特徴の1つである。支・脂・微・祭韻の伝承音の中声出現頻度をまとめると次の通り。

<表 87> 「ui」 韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
支合 B 止	牙音 (29)	「ui」 滂危(2) 「uəi」 詭妓跪(3) 「i」 度(1)
支合 3 止	云母(7)	「ui」 爲(1)
支合 B 止	喉音 (27)	「ui」 萎委餒(3) 「uəi」 毀燬毀(3)
脂合 B 止	牙音 (45)	「ui」 龜喟(2) 「uəi」 軌筵匱櫃饋蕢簣(7) 「u」 晷(1) 「oi」 愧(1) 「iu」 達(1)
脂合 3 止 296	云母(2)	「ui」 位(1) 「iu」 帷(1)
微合 3 止	牙音 (12)	「ui」 歸鬼貴魏(4) 「oi」 巍(1)
微合 3 止	云母(20)	「ui」 韋嶂違闈圍偉暉葦胃謂蝟緯彙(13)
微合 3 止	喉音 (34)	「ui」 威威尉慰暉揮揮諱(8) 「uəi」 虺卉(2) 「oi」 畏(1)
祭合 3 蟹 297	云母(10)	「ui」 衛(1)

正韻音の中声が ui で現れる字は支韻・脂韻・微韻の牙喉音字及び祭韻の喉音字である。蟹摂の 3・4 等韻合口のほぼすべてが iuiəi 韻に収められたが、祭韻合口云母字だけが ui 韻に入れられたのが興味深い。それは伝承音に基づき分韻した結果だろう。支韻・脂韻・微韻字の伝承音を見ると、大体中声が ui か uəi で現れるが、その他に u・iu・i・oi で現れる例外も若干見られる。韻ごとに見ると、支韻・脂韻の中声が主に uəi で現れ、微韻の中声は ui で現れる傾向が強い。しかし『正韻』の編者らはそれらの中声をすべて ui に修正した。重紐 B 類字開口の中声が ii で現れることに基づけば、中声 ii の合口である ui を基準音と定めたのは当然のことであり、微韻・祭韻の場合、ほぼすべての中声が ui で現れるため特に問題とならない。しかし、支韻・脂韻の場合、中声が uəi で現れる例が非常に多く見られ、なかでも脂韻牙音字の中声は uəi の方が ui よりはるかに多く現れる。にもかかわらず、編者らは uəi 韻を立てず、その中声をすべて ui に修正してしまったのである。その理由はおそらく音節制約にかかわっていると考えられる。

伝承音(特に止摂合口の伝承音)には 中声が uəi で現れる字が少なくない。しかし、正韻音を見ると全般にわたって中声 uəi が全く現れない。このことから ig 韻部において əŋ(ək) という音節が許されなかったのと同様 0 終声韻部では中声 uəi が認められなかったと推測さ

²⁹⁶ 牙喉音のほかに知母字が 1 字「鞞」載っているが、伝承音が残っていない。

²⁹⁷ 祭韻の牙音字が 10 字あるが、伝承音が 1 つも残っていない。

れる²⁹⁸。伝承音に中終声が ək で終わる音節がしばしば現れるにもかかわらず、『正韻』では中声 ə をすべて i に修正した。その理由について本稿では、舒声字の伝承音のうち中声が ə で現れる字が全くなかったため、əŋ(ək) 韻を立てることができなかったと解釈した²⁹⁹。しかし、止摂は陰声韻だけで構成されており、舒声・入声の対立のない摂である。そうすると『正韻』で中声 uəi が許されなかった理由は何であろうか。それは止・蟹摂³⁰⁰の伝承音に中声 uəi と開合の対をなす中声 əi がめったに現れないからと思われる。両摂の伝承音には中声が əi で写された字が 3 字³⁰¹しか見られない。したがって編者らにはそれらの 3 字のため 1 つの韻を立てる必要性が感じられなかった可能性が高い。実際に『正韻』に əi 韻は立てられなかったが、それこそ正韻音体系において中声 uəi が許されない原因になったのではないか。要するに、əŋ 韻と əi 韻は伝承音にその音節がなかったため(əi の場合ごく稀であったため)、独立した韻として立てられなかったと考えられ、それは ək 韻・uəi 韻が立てられない結果をもたらしたと解釈できる。次は各韻の例外について検討する。

支韻の伝承音の場合、中声 ui や uəi がほぼ等しく現れるが、uəi を修正した理由は上述した通り。牙音字に中声が i で現れる例外が 1 字「度」だけ見られるが、表記に合口性が反映されていないため修正したのだろう。

脂韻の伝承音を見ると、ui・uəi のほかに中声 u(晷)・iu(逵帷)・oi(愧)で現れる例外が見られる。u の場合、韻母の要素、すなわち 3 等介音＋合口介音＋主母音のうち合口介音だけが中声表記に反映されたと見られる。したがって、u は少数例でもあり、且つ当時訓民正音の中声体系に上述した韻母を正確に写す中声が存在したため修正したと考えられる。oi はおそらく蟹摂 1 等韻と区別するため、iu は重紐 A 類との区別のためそれぞれ修正したと推測される。

ところで、微韻の伝承音には例外が少ないのに、支韻・脂韻の伝承音に例外(uəi・oi など)が多く現れる理由は何であろうか。それは微韻と両韻の音声の間に何らかの差が存在したために違わないだろう。以下ではその理由を突き止めるために、支・脂・微韻合口の再構音や、それらの伝承音について詳しく検討する。まず、各韻の伝承音を声調ごとに示すと次のとおり。

<表 88> 支・脂・微韻の伝承音の中声比較

²⁹⁸ əŋ(ək) が ŋ 終声韻部に限り許されなかったことに対し、中声 əi 及び uəi は終声の種類を問わず現れない。

²⁹⁹ 4.1.1 参照

³⁰⁰ 『正韻』の韻部と十六摂の対応関係を見ると、蟹摂の一部が止摂と混ざっている。すなわち、ɿ 韻部に止摂開口韻と一緒に蟹摂 1 等開口韻が入っていることや、ui 韻部に止摂合口韻と蟹摂祭韻合口が入っていることなど。このことから、両摂同士は出入りが自由であって、編者らも両摂を同じ類として扱ったと推察されるため、止摂について述べる際には蟹摂をも一緒に扱うことにする。

³⁰¹ 蟹摂祭韻牙喉音字「掲偈(牙音) 謁(喉音)」

声調 韻	平声	上声	去声	中声出現率
支	滄危爲 (ui ^L) (3/3 ³⁰²)	詭(危+鳥)歧跪(kuəi ^R) 毀燬(huəi ^R) (6/9) 委(ui ^R) 餽(ui ^H) (2/9) 度(ki ^R) (1/9)	萎(ui ^R) 爲(ui ^{R/H}) (2/3) 毀(huəi ^R) (1/3)	ui 0.46 (7/15) ³⁰³ uəi 0.46 (7/15) i 0.06 (1/15)
脂	龜(kui ^L) (1/3) 達(kiu ^L) 惟(iu ^L) (2/3)	軌簋(kuəi ^R) (2/3) 晷(ku ^R) (1/3)	愧(koi ^R) (1/8) 喟位(ui ^H) (2/8) 匱櫃篲黃饋(kuəi ^R) (5/8)	uəi 0.5 (7/14) ui 0.21 (3/14) iu 0.14 (2/14) oi 0.07 (1/14) u 0.07 (1/14)
微	威蟻章幃闈圍(ui ^L) 違(ui ^{L/H}) 暉揮揮(hu i ^L) (11/12) 巍(oi ^L) (1/12)	鬼(kui ^R) 葦暉(ui ^R) 偉(ui ^{L/R}) (4/6) 卉虺(huəi ^R) (2/6)	貴(kui ^R) 彙諱(hui ^H) 胃蝟緯(ui ^H) 魏謂(ui ^{R/H}) 尉(ui ^R) 慰(ui) (10/11) 畏(oi ^R) (1/11)	ui 0.86 (25/29) uəi 0.07 (2/29) oi 0.07 (2/29)
中声 出現 率	ui 0.83 (15/18) oi 0.16 (3/18) iu 0.11 (2/18)	uəi 0.55 (10/18) ui 0.33 (6/18) u 0.055 (1/18) i 0.055 (1/18)	ui 0.63 (14/22) uəi 0.27 (6/22) oi 0.09 (2/22)	

止摂B類合口の伝承音に関連して、河野六郎(1979: 484)はB類合口の中声は主に ui で現れるが、上去声では uəi も見られると述べながら、このことはA類合口の中声が iəi か iuiəi で現れることと平行的に考えるべきものとした。なお、伊藤智ゆき(2007: 157)も止摂B類の中声が平声では -ui、上去声では -uəi で現れる傾向があると述べた。つまり、伝承音が ui と uəi に分かれるのは声調によるものと解釈したのである。

しかし、上表を見ると、上声の場合確かに uəi が多く見られるが、平声・去声の場合そうではないことが明らかになる。そこで、各韻の中声出現頻度を調べてみた結果、脂韻の場合、伝承音の半分が uəi で現れるが、最も多様な例外が見られ、支韻は ui や uəi が同率で現れることが分かった。さらに、微韻の伝承音には ui が圧倒的に多く現れることを確認した。このことを参考にすれば、止摂B類合口の中声は韻母の平仄ではなく、韻の種類により異なると解釈する方がより妥当だろうと思う。

そうすると、3つの韻にはどういった違いがあるだろうか。韻書や韻図によれば、止摂に関して今のところ確認できるのはそれらの韻が前期中古音においてはそれぞれ分かれていたが、後期中古音では合併したという事実しかない。だが、中古音の再構音が様々な研究者により推定されているため、それらの資料を利用すれば、支・脂・微韻の差異が見えてくるか

³⁰² 括弧内の数値は該当中声が現れる回数を示す。

³⁰³ 出現率が高い順に並べた。

も知れない³⁰⁴。したがって、まずは再構音³⁰⁵に基づき、支・脂・微韻の間にどういう違いがあったを探る。代表的な再構音を示すと次のとおり。

	麥耘(2009)	平山久雄(1967)	伝承音の中声
支韻	^r jwɛ ³⁰⁶	yĕ	(ui0.46、uəi0.46、i0.06)
脂韻	^r jwi	yi	(uəi0.5、ui0.21、iu0.14、oi0.07、u0.07)
微韻	jwəi	yə̃i	(ui0.86、uəi0.07、oi0.07)

3つの韻の共通点は合口介音を伴い、高母音の主母音か韻尾を持つという点である。したがって、それらの韻母の音声は[uj]或いは[wi]に近い母音であったと推測される。だが、韻母の要素のうち主母音だけが単独で1つの音節をなすことができるという点を考慮に入れば、支韻・脂韻の場合介音が、微韻の場合韻尾がそれぞれ glide に成りやすいと思われる。だとすると、前者の音声は[wi]に、後者の音声は[uj]に類似していた可能性が高いと推察される。

ところで、この場合問題になるのは、[uj] は中声 ui で写せばよかっただろうが、当時 [wi] を表記する方法がなかったということである。現代韓国語では[wi]を(あるいは[y]をも)ui で表記するが、中期韓国語(15・6世紀)で中声 ui は母音[uj]に対応する文字であった。つまり、当時は[wi]を表記するための中声字がなかったのである³⁰⁷。しかし、そういっ

³⁰⁴ 再構音は研究者により異なるが、止撰の場合学者らの意見がほぼ一致している。支・脂・微韻の再構音をまとめてみると次の通り。

	Karlgren	董同龢	李榮	王力	邵榮芬	최영애
支 B 合口	(j)wiĕ	jwĕ	iwe	īwe	iwe	iwe
脂 B 合口	(j)wi	jwĕi	wi	wi	iwi	iwei
微韻合口	(j)wĕi	jwəi	iwəi	īwəi	iwəi	iwəi

권혁준(2014:135)参照

³⁰⁵ 本稿で用いるのは前期中古音の再構音である。河野六郎(1979)では伝承音の母胎音が慧琳音(後期中古音)であるとしているが、それに基づけば、止撰の伝承音が韻ごとに異なっていることが説明しにくい。伝承音の母胎音は本稿における研究対象でないため、これ以上言及しない。

³⁰⁶ 麥耘(2009)は重紐 A・B 類の介音をそれぞれ j・^rj と推定した。

³⁰⁷ さらに、学者によっては15世紀の韓国語に[wi]という二重母音がなかったと解釈する場合もある。説明のために、以下では母音[wi]に関するこれまでの研究をまとめておく。

まず、[wi]を認めない見解として代表的に허웅(1952・1968)、김완진(1972)などが挙げられる。허웅(1968:614)は15世紀韓国語で glide w の後に来られる母音は ə 及び a しかなかった

た状況でも、その音声を正しく表記しようとする試みはあったと見られる。それに関連して、李基文(1990 : 45, 46)は ‘chi β i > chiui’ ‘tə β i > təui’ ‘ti β i > tiui’ の ui が [wi] に当たると考えられるとし、『杜詩諺解』() に -tiui 以外にも -tiuəi (디워), -tioi (디외) が見られるが、それは、当時の中声体系に [wi] という音声を写す適当な中声が無かったため、いろいろな中声をもってその音声を表記しようとした結果だろうと指摘した。この説明によると、[wi] を ui · uəi · oi で写すこともできたと推測される。

本題に戻って、[uj] は常に ui で写された反面、[wi] は多様な中声で表記された事実を考えに入れると、止摂合口韻の伝承音について次のような解釈ができると思われる。つまり、微韻韻母の音声は [uj] に類似していたため、伝承音の中声が主に ui で現れ、しかも例外も少なかったが、支韻・脂韻韻母の音声は [wi] に近かったため、中声が ui だけでなく uəi · oi でも現れたのではないか。それに、こういう解釈は上述した中古音の再構音に照らしてみてもつじつまが合うと思う。だが『正韻』の編者らは支・脂韻と微韻のそういった違いに関わらず、3つの韻を ui 韻に取りまとめた。それは uəi 韻が存在しなかったためであろうが、同時に彼らが [wi] と [uj] を区別して表記する必要がないと考えていた可能性も考えられる。つまり、あるいは彼らにとって [wi] と [uj] は 1つの音素の異音と認識されていたかもしれない³⁰⁸。

ところが、ui_g 韻部と ui 韻部に現れる中声 ui はそれぞれ異なる役割を果たしていると思われる。中声 ui は『正韻』全般にかけて 2箇所、すなわち ui_g 韻部及び ui 韻部に現れる。ui_g 韻部には曾撰 1等韻合口だけが対応する。しかし、実際のところ登韻合口の伝承音の中声は大体 u で現れる傾向が高かった。にもかかわらず、それらの字は ui_g 韻部に入れられたが、検討の結果、それは通撰字との区別のためということが分かった³⁰⁹。したがって、ui_g 韻部で ui は音素文字の機能、すなわち弁別機能と音声表記機能のうち弁別的機能だけを果たしているから見なければならない。その反面、ui 韻部に現れる中声 ui は特定の音声を表記しているため、弁別機能と音声表記機能をともに果たしていると言える。このことは『訳

と述べながら、[uj] があったため、[wi] が存在しなかったと説明した。なお、김완진(1972) は β i > wi のような変化が最も自然であるとしながらも、15世紀に [wi] という母音を音声として実現することができなかったと述べた。以上の見解は文字と音声の 1対1対応をなすということを前提としている。そのため、[wi] の存在を認めることがさらに一層できなかったと思われる。

一方、이기문(1990 : 128) は [wa] や [wə] の存在を認めれば、[wi] の存在を否定する理由がないとしながら、β i > wi の例に限り、ui を [wi] に解釈し、その根拠として副動詞語尾 -ti β i の変化形を引いている。이기문(1990) の他に 최세화(1976)、육효창(1989)、박창원(2010) など 15世紀の韓国語母音体系に [wi] が存在したと認めている。だが、[wi] の存在を認めるか否かにかかわらず、中声 ui の音価に関しては、皆 ui は [uj] を表記するための文字という立場を取っている。(박창원(2010) 除外) 本稿では [wi] が存在したという以上の研究と見解を同じくする。

³⁰⁸ これに関連して 김무림(1996 : 127-128) は『正韻』において oi(+) · ui(+) は i() の合口でないため、ui に対応する音声は [wi] ではなく [uj] であると解釈した。しかし、それは [wi] と [uj] が異音関係になれないことを前提としているから得られた結論と思われる。

³⁰⁹ 4.1.2 を参照されたい。

訓』にも見られる現象である。『訳訓』において中声 ui は灰韻・庚韻字の中声表記に使われたが、4.1.2において検討したように庚韻の場合、ui が弁別機能だけを果たしている。それに対して、灰韻に使われた ui はその音価を正確に表記している。つまり、『正韻』の uig 韻部と『訳訓』の庚韻に現れる中声 ui が同一の性質を持っており、『正韻』の ui 韻部と『訳訓』の灰韻に用いられている中声 ui の性質が一緒であると考えられる。

一方、微韻牙喉音字に中声 uəi で現れる字が 2 字、oi で現れる字が 2 字見られるが、すべて ui に修正した。祭韻字には例外がない。

<表 89> 「iui」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
支合 A 止	牙音 (16)	「iu」規堆闕窺跬(5)
支合 3 止	舌上 (15)	「iu」錘(1)
支合 3 止	齒頭 (28)	「iu」髓隨隋(3) 「iuiəi」嘴(1)
支合 3 止	照 3 (25) ³¹⁰	「iu」捶吹炊垂睡(5) 「iuiəi」捶篋惴(3) 「iui」吹炊(2) 「iə」瑞(1) 「iəi」瑞(1)
支合 A 止	喉音 (24)	「iu」恚觸(2) 「əi」恚(1)
支合 3 止	半舌 (3)	「iu」累(1) 「i」羸(1)
支合 3 止	半齒 (5)	「iəi」藥(1)
脂合 A 止	牙音 (15)	「iu」葵(1) 「iəi」癸季(2)
脂合 3 止	舌上 (16)	「iu」追椎錘墜隊(5)
脂合 3 止	齒頭 (48)	「iu」綏萎雖遂燧綫穗(7) 「io」隹(1) 「iuiəi」萃悴(2) 「iui」醉翠(2)
脂合 3 止	照 3 (16)	「iu」萑錐推出水誰睢(7) 「io」隹錐(2)
脂合 3 止	照 2 (5)	「iu」帥(1) 「oi」衰檄(2)
脂合 3 止	喉音 (21)	「iu」惟維唯遺唯墮遺(7)
脂合 3 止	半舌 (41)	「iu」縲纒壘類淚(5) 「oi」誅(1) 「u」淚(1)
脂合 3 止	半齒 (10)	「iu」綏(1)

正韻音の中声が iui で現れる字は支韻・脂韻の重紐 A 類合口の牙喉音字及び、舌齒音字である。両韻の伝承音の中声を見ると、iu で現れる字が最も多い。両韻はともに 3 等介音・合口介音・主母音からなる韻であるが、伝承音の中声 iu はどう見ても 3 つの要素のうち 3 等及び合口介音だけを反映していると見られる。それはおそらく伝承音に二重・三重母音を単母音化する傾向があることと関係があるだろう。にもかかわらずそれらの中声を iui に修正したのは iu 韻部と区別するためであろう。だが、その他にも中声 iu が支韻・脂韻の主母音を反映しなかったと判断し、iu の後に主母音を表す i を加える方法で修正したと解釈することもできる。止撰重紐 A・B 類の中声が iui と ui に区別されているのは、他の重紐韻、例えば仙韻 A・B 類の中声が ə : iə の対立を表していることと一脈通じる。以下では各韻の例外を声母ごとに調べる。

³¹⁰ 初母字が 2 字含まれる。

支韻の牙音・舌上音には例外が見られない。齒頭音字に中声が iuiəi³¹¹で現れる字が1字だけ「嘴」があるが、中声 iuiəi は蟹撰 3・4 等韻に対応するものであるため、iui へ修正したと考えられる。章組字の場合、例外が比較的多いが、「吹炊」の中声が iu の他に iui でも現れる点が目立つ。また、中声が iuiəi で現れる字が3字「捶篋」見られ、「瑞」の中声は iə と iəi で現れる。中声 iə・iəi は共に合口性を写していないため、修正の対象になっただろうが、それらの伝承音の中声が基準音と選ばれず修正されたもう1つの理由は韻部を区別するためと考えられる。すなわち中声 iə は ə 韻部に属し、中声 iəi は iəi 韻部に属するため、修正しなければならなかったと解釈できる。喉音字の例外「恚(iəi)」や半齒音字の「藁(iəi)」の伝承音の以上の理由で修正したと考えられる。半舌音字の伝承音は2字残っているが、例外の「羸(i)」は合口性を反映しなかったため修正した。

脂韻の舌上音・喉音・半齒音字には例外がない。牙音字の場合、中声が iu で現れる字が1字しかなく、中声が iəi で現れる例外が2字「癸季」見られるが、iəi が基準音と選ばれなかった理由は支韻章組字の場合と同様である。齒頭音字に多様且つ多数の例外が見られる。すなわち、「隹(io)、萃悴(iuiəi)、醉翠(iui)」。例外のうち中声 iuiəi や iui を修正した理由は上述のとおり。ただ、io の場合、o 韻部と区別するため修正したのだろう。つまり、o 韻部に io 韻は存在しないが、その韻部には遇撰が対応するため、止撰字が入れなかったのである。章組字の例外「隹錐(io)」も同様に解釈できる。壯組字の場合、中声が iu で現れる字「帥」より、oi で現れる字が「衰襖」多く見られるが、これもやはり蟹撰1等合口韻と区別するために修正したと考えられるが、これに基づけば、『正韻』に洪音と細音を区別しようとする傾向があったことは確かであると見られる。半舌音字に「誄(oi)、淚(u)」の例外が現れるが、多数の字の中声が iu で現れるため、それらの例外を修正したのだろう。

4.5.5 iəi 韻部

iəi 韻部には iəi 韻・iuiəi 韻が含まれる。中古音の蟹撰 3・4 等開口・合口韻がこの韻部に対応する。その対応関係を表にすると次の通り。

<表 90> iəi 韻部

中終声	撰	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
iəi	蟹	齊	4	開		ε	i	牙、舌頭、唇重、齒頭、喉、半舌
iəi	蟹	祭	3	開	j	ε	i	牙、舌上、唇重、喉、精、章組、来母

³¹¹ 中声 iuiəi は止撰・蟹撰合口にしか見られないが、主に齒音の声母字に現れる。それについては iəi 韻部で検討する。

iəi	蟹	廢	3	開	j	o	i	疑母
iəi	蟹	廢	3	合	jw	o	i	唇輕
iuiəi	蟹	齊	4	合	w	ε	i	牙、喉
iuiəi	蟹	祭	3	合	jw	ε	i	齒、知母、以母、日母
iuiəi	蟹	廢	3	合	jw	o	i	喉

蟹摂3・4等韻である祭韻・廢韻・齊韻の開口が iəi 韻に、3つの韻の合口が iuiəi 韻に取りまとめられた。祭韻合口の場合、云母字を除けば、すべての声母字が iuiəi 韻に入れられた。各韻の伝承音の出現頻度を声母ごとに示すと次の通り。

<表 91> 「iəi」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
齊開 4 蟹	牙音(38)	「iəi」雞稽筭計繼繫髻薊溪瀾啓稽契(13)
齊開 4 蟹	舌頭(159)	「iəi」 低抵堤邸抵底帝諦蒂嚏鵝體涕替涕題提提啼蹄涕梯鶉弟涕遞 第弟涕涕涕髻速棟禰泥(39) 「iə」低邸詆抵底(5) 「i」提泥禰(3)
齊開 4 蟹	唇重(45)	「iəi」閉嬖陛陛(4) 「i」篋鏡批鞞鞞迷米(7)
齊開 4 蟹	齒頭(43)	「iəi」齋壘擠濟霽切砌齊齋齋洗細(13) 「iə」妻(平)妻(去)西栖棲犀壻(7) 「Λi」齋(1) 「Λ」沛(1) 「ii」嘶嘶(2)
齊開 4 蟹	喉音(50)	「iəi」翳噎醯兮龔蹊系(7) 「iə」兮(1) 「Λi」奚(1)
齊開 4 蟹	疑母(21)	「iəi」鯢輓麿貌覓詣睨羿(8)
齊開 4 蟹	半舌(51)	「iəi」犁藜梨鸚禮醴醴盞儷槓荔隸(12) 「iə」黎藜瓊醴麗儷戾荔(8)
祭開 3 蟹	牙音(20)	「əi」揭偈(2)
祭開 3 蟹	舌上(6)	「iəi」滯彘(2)
祭開 3 蟹	唇重(16)	「iəi」蔽敝弊袂(4)
祭開 3 蟹	齒頭(5)	「iəi」祭際際(3)
祭開 3 蟹	照 3(33)	「iəi」制製世貫勢誓逝(7) 「iə」勢誓逝筮噬(5)
祭開 3 蟹	喉音(24)	「iəi」曳裔勣(3)
祭開 3 蟹	疑母(8)	「iəi」藝(1)
祭開 3 蟹	半舌(19)	「iəi」例礪(2) 「iə」厲勵蠣腐(4)
廢開 4 蟹	牙音(4)	「iəi」乂(1) 「ai」刈(1)
廢合 4 蟹	唇輕(11)	「iəi」廢肺吠(3)

<表 91>を見れば分かるように、蟹摂3・4等韻字の伝承音の中声はほぼすべて iəi で現れる。したがって、祭韻・廢韻・齊韻の正韻音が伝承音に基づいていると解釈して良いだろう。以下では伝承音に見られる例外を韻ごとに調べる。

まず、廢韻を見ると、唇輕音字の場合例外がない。牙音字の傳承音が2つ残っているが、中声が iəi で現れる字が1字「乂」、中声が ai で現れる字が1字「刈(ai)³¹²」見られる。両者のうち iəi が基準音と選ばれたのは洪細を区別するためであると思われるが、河野六郎(1979: 464)が指摘したように、ai が「艾(ai)」の類推と判断して iəi に修正した可能性もある。調べたところ『集韻』の廢韻に「艾・刈・乂」が収録されており、「艾」は泰韻にも載っていることを確認した。一方「艾」は『正韻』において iəi 韻と ai 韻に現れる。したがって編者らが「刈」の中声 ai を「艾」の類推と考えたと推測され、そこで「刈」の傳承音を修正したと考えられる。

次に、祭韻の傳承音の中声は iəi の他に əi や iə が現れる。3種の中声のうち最も多く見られるのが iəi である。したがって祭韻の正韻音も傳承音を受け入れていると言える。一方 əi は3等介音-i-が反映されていない。iə は韻尾-i が写されていないと考えられるが、編者らはこれらの中声をすべて iəi に修正した。声母ごとに例外を見ると、舌上音・唇重音・齒頭音・疑母字には例外がない。章組字の場合、中声が iə で現れる字がずいぶん多く見られるが、例外の「勢誓逝筮噬」のうち「勢誓逝」の中声は iəi でも現れ、さらに、『正韻』の iə 韻には遇撮が対応するため、韻部を区別するためでも中声 iə を修正せざるを得なかったと考えられる。半舌音字の場合、中声が iəi で現れる字より iə で現れる字が多いが、章組字と同じ理由で修正しただろう。

牙音字の場合、すべての傳承音の中声が əi で現れる。にもかかわらず、əi をすべて iəi に修正した。そればかりか編者らは『正韻』に əi 韻自体を立てなかった。それは傳承音の全般にわたって中声が əi で現れる字が余りにも少ないためであろう。つまり、4.5.4において述べたように、中声が əi で現れる字は3字「揭偈謁」しかない。したがって、編者らには極少数の例のため、1つの独立した韻を立てることが非効率的であると感じられたかもしれない。つまり、əi 韻を立てなかったのは、韻書を作る際、漢字音を正確に注音する作業も大事であるが、同時に体系の効率性をも考慮しなければならないことを考えれば当然の結果だろうと思われる。祭韻喉音字の例外「謁(əi)」も以上の理由で修正したと解釈してよいだろう。

齊韻は4等韻であるため、3等介音を伴わず³¹³、主母音と陰声韻尾からなる。しかし、齊韻の傳承音を見ると、半分以上の中声が iəi で現れ、その上 iə で現れる字も沢山見られ

³¹² 「刈」の中声 ai について、河野六郎(1979: 464)は「艾」の類推である可能性や、或いは廢韻が -i₂ei でった段階を表している可能性が考えられると述べた。その反面、伊藤智ゆき(2007: 145)は「刈」には「艾」のような泰韻相当の字音があったと考えられるとした。

³¹³ Karlgren(1940)は4等韻の介音を -i と推定した。趙元任、王力なども Karlgren と見解を同じくしている。一方、4等韻が介音を伴わないという説は最初に Maspero(1920)により提起された。さらに、河野六郎(1939)は、青・先・添・蕭・齊韻の主母音をすべて e と推定し、4等韻を

る。iəi の場合、まるで3等介音を写しているかのように感じられる³¹⁴。つまり iə が介音＋主母音を、i が陰声韻尾をそれぞれ反映していると思われるのである。しかし、編者らは韻母の構成要素にこだわらず、伝承音の傾向を受け入れ、蟹撰3・4等韻の開口字を iəi 韻に取りまとめた。一方、iə の場合、3等介音と主母音だけを反映しており、陰声韻尾が写されていない。『正韻』の編者らは中声 iəi を齊韻の基準音として選んだが、それはやはり伝承音の傾向を受け入れた結果と言えらる。例外を見ると次の通り。

牙音字には例外が全く見られない。舌頭音字に「低邸詆抵底(iə)提泥禰³¹⁵(i)」のような例外が現れるが、iə は表記に陰声韻尾が反映されず、i³¹⁶はそこからさらに中声が単母音化した形だろう。つまり、いずれにせよ伝承音の単母音化の傾向を表していると考えられる。ところで、例外のうち「詆泥」を除けば、残りの6字の中声は iəi でも現れる。そうすると、舌頭音字の中声はほぼすべてが iəi で現れると言えらる。したがって「詆泥」の中声は伝承音に基づき修正したと解釈できる。唇重音字の場合、基準音である iəi より、i で現れる字がずっと多く見られる。すなわち「閉嬖陞檉(iəi)、篋鏡批鞞鞣迷米(i)」にもかわらず、編者らは中声 i を iəi に修正したが、それは洪細を区別するためであろう。さらに、そういった修正の結果から、やはり‘與 l 相合字’をもって写せる音であれば、なるべく正確に表記しようとした彼らの考えがうかがわれる。齒頭音字には様々な例外が見られ

介音を持たない韻と解釈した。また、李栄(1956)李新魁(1986)藤堂明保(1957)等々も有坂の説と見解を一緒にする。최영애(2000:259-261)参照。

一方、河野六郎(1979:444,445)によると、慧琳音において4等韻は重紐A類に合流したという。さらに河野六郎は切韻より慧琳音義反切への推移を表に示したが、4等韻だけを抜粋して示すと次の通り。

青・清→清韻、先・仙A韻→仙A韻、添・塩A韻→塩A韻、蕭韻・宵A韻→宵A韻、齊韻・祭A韻→祭A韻

つまり、伝承音が後期中古音を母胎音としていると仮定すれば、4等韻の伝承音の中声が iə・io で現れる理由が納得できる。

³¹⁴ 5種の4等韻の伝承音を見ると、ほぼすべての中声がいわゆる‘起於 l’で写されていることが分かるが、それが4等韻と重紐A類が合流した後の中国音を反映しているものか、それとも他の3等韻と区別した結果そうなったのかについてはまだ断定することができないだろう。

³¹⁵ ただ、「禰」の伝承音は miəi^R・mi^Lであるが、伊藤智ゆき(2007:143)はそれを支韻明母「彌 mi^L」の類推と解釈した。

³¹⁶ 河野六郎(1979:413,499)は齊韻の中声が i で現れることに関連して、それらの伝承音が d 曾の中国音を反映していると解釈したが、一部の唇音字に限り止撰字の類推と説明した。

る。すなわち「妻妻西栖棲犀壻(iə)、齋(ɿi)、沛(ɿ)、嘶嘶(ii)³¹⁷」。しかし、全体的に iəi で現れる字がより多いため、例外を iəi に修正したと考えられる。ただ「齋(cɿi)」の場合、脂韻精母の反切を、「嘶(sii)」の場合、支韻心母の反切をも同時に持っており³¹⁸、『正韻』においてその2字は iəi 韻だけでなく ɿ 韻にも収録されている。このことを考慮に入れると、正韻音が2通りの伝承音をすべて受け入れていると言えるかもしれない。喉音字に例外が2字「兮(iə)、奚(ɿi)」見られるが、「兮」の中声は iəi でも現れる。したがって、「奚」だけが例外となるが、編者らはその字の中声を伝承音に基づき修正した。半舌音字には中声が iəi で現れる字が12字あり、iə で現れる字は8字ある。しかし、例外の8字のうち4字「藜醴麗荔」の中声は iəi でも現れる。したがって、半舌音字の中声も大体 iəi で現れる傾向があると考えられ、正韻音がその傾向を受け入れたと言えるだろう。

<表 92> 「iuiəi」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
齊合 4 蟹	牙音(18)	「iəi」桂(1)「iu」圭闈(2)
齊合 4 蟹	喉音(23)	「iəi」慧惠(2)「iu」哇(1)
祭合 3 蟹	齒頭(8)	「iəi」歲(1)
祭合 3 蟹	照 3(10)	「iəi」稅稅蛻說(4)「iuiəi」贅(1)
祭合 3 蟹 319	照 2(4)	「iuiəi」毳(1)
祭合 3 蟹	喉音(4)	「iəi」睿(1)
廢合 4 蟹	喉音(11)	「iəi」穢濼(2)「uəi」喙(1)

正韻音の中声が iuiəi で現れる字は蟹摂 3・4 等韻の合口である。齊・祭・廢韻の伝承音の中声は概ね iəi で現れるが、その他、iu・iuiəi・uəi でも現れる。それらのうち中声 iəi は合口性が反映されなかった形であるため、編者らは中声 iəi に合口声を加えて iuiəi に修正したと考えられる。これは『正韻』の編者らが合口韻の中声を修正する際、常に用いたやり方である。つまり、蟹摂合口字の場合も伝承音を受け入れそこに合口性だけを加える方法で修正したのである。中声 iu は齊韻牙喉音字「圭闈(牙)哇(喉)」の伝承音にしか見られないが、iu 韻にはすでに遇摂眞韻が対応するため、中声 iu を修正するしかなかっただろう。中声 uəi の場合、上述したように正韻音全般にかけて uəi は現れず、編者らはこの中声で写された伝承音をすべて修正した。「喙(uəi)」の中声は他の廢韻喉音字「穢濼」の中声が iəi で現れるため、それらの中声と一緒に iuiəi に修正しただろう。

³¹⁷ 伊藤智ゆき(2007:143)は「齋(ɿi)、沛(ɿ)、嘶嘶(ii)」について、それぞれ皆韻壯母「齋 cɿi^L」、脂韻精母「姉 cɿ^R」、支韻心母「嘶 sii^L」の類推と述べた。

³¹⁸ ただ「齋(cɿi)」の2種の反切は『広韻』にもすべて見られるが、「嘶(sii)」の場合『広韻』には齊韻にしか現れず、『集韻』に2通りの反切が現れる。

³¹⁹ 知母が6字、日母字が5字ある。

興味深いのは照組字の中声が正韻音の中声と同様 *iu**iəi* で現れることである。ただ、*iu**iəi* に当たる音声は実際に存在したかについては大きな疑いが残されている³²⁰。これに関連して福井玲(2012: 20-21)は *iu**iəi* が *iu*・*iə*・*i* の合体した形であり、これに対応する音声は2音節ではなく1音節であると述べた³²¹。また、16世紀の文献のうち漢字学習書である『訓蒙字会』(1527)だけでなく仏教関連文献である『真言勸供諺解』(1496)や儒教関連文献である『翻訳小学』(1518)『小学諺解』(1588)にも *c^hiu**iəi* という音節が見られることに基づけば、*iu**iəi* という音声は実際したと考えられると述べた。

以上の文献に見える伝承音 *c^hiu**iəi* が正韻音の影響によるものと思うかもしれないが、伝承音が *c^hiu**iəi* で現れる字には蟹摂合口字だけでなく止摂合口字もある。つまり、支韻・脂韻合口の歯音字の伝承音にも中声が *iu**iəi* で現れる字が「嘴捶篋惴萃悴」6字あるのである³²²。しかし、『正韻』で上述した6つの字は *iu**i* 韻に入れられたため、それらの伝承音の中声が正韻音に影響されたとは考えにくい。

これまで、止摂と蟹摂について検討してきた。伝承音を受け入れる傾向が高いのは他摂と同様であったが、特徴的なのは、伝承音で単母音化の傾向が少なかったこと、さらに『正韻』においても中国音をなるべく正確に写そうとしたということである。その原因としてやはり韓国語の母音体系に中国音に対応できる *-i* で終わる母音が多く存在し、また、それを表記する中声が多かったということが考えられる。

³²⁰ 正韻音が実際に存在した音節ではなく漢語或いは漢字音を正確に表記するため作られた架空の体系と述べる際、根拠としてよく挙げられる例には次のようなものがある。すなわち、初声のなかでは全濁声母を表記するための *kk*(^ㄱ)*tt*(^ㄷ)*pp*(^ㅍ)*ss*(^ㅅ)*cc*(^ㅈ)*hh*(^ㅎ)及び?^(ㄴ)が挙げられ、中声のなかでは *iu**iəi*(^ㅁ)や *iu**iə*(^ㅂ)が挙げられ、終声のなかでは *w*(^ㅁ)および *l?*(^ㄹ)が挙げられる。

³²¹ 上掲論文では、*iu**iə* 及び *iu**iəi* の *iu* が単母音であり、その音声は中国音の撮口介音に当たると述べ、*iu*・*j*・*w* が含まれた母音の例を次のように挙げた。

j ㅈ : *je*[*jə*] ㅊ : *jei*[*jəi*]或いは[*jei*]

w ㅁ : *we*[*wə*] ㅂ : *wei*[*wəi*]

q ㅁ : *qe*[*qə*] ㅂ : *qei*[*qəi*]或いは[*qei*]

³²² 伊藤智ゆき(2007: 146, 155)は蟹摂・止摂合口歯音字の伝承音 *c^hiu**iəi* の中声が [*-y**iəi*] 及び [*-y**iəi*] (或いは [*-y**iə*˘*i*]) を表していると解釈した。

4.5.6 o 韻部

o 韻部にはo 韻だけが含まれる。この韻には中古音の遇摂に属する字が入れられた。遇摂は1等韻である模韻や3等韻である虞韻・魚韻からなるが、3種の韻のうち模韻と魚韻がo 韻に対応する。以下の<表 93>はo 韻部と模韻・魚韻との対応関係を示したものである。

<表 93> o 韻部

中終声	摂	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
o	遇	模	1	独		u		牙、舌頭、唇重、齒頭、喉、半舌
o	遇	魚	3	独	j	u		莊組

o 韻には模韻と魚韻が対応する。しかし、模音の場合声母にかかわらずすべての字がo 韻に入れられた反面、魚韻の場合莊組字だけがo 韻に入れられ、莊組を除いた声母字はすべてo 韻部に取りまとめられた。各声母別伝承音と正韻音の中声を表にすると次の通り。

<表 94> 「o」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
模合1遇	牙音(112)	「o」孤觚姑沽姑辜古估牯罟鼓瞽股殺粘蠱賈顧雇固錮故枯苦庫袴吾梧颯吳五伍午誤悟晤梧忤寤(39)「io」梧(1)「ə」晤(1)
模合1遇	舌頭(86)	「o」都覩睹土兔菟吐徒途塗屠圖度渡鍍奴拏怒弩努(20)「u」妒蠹杜(3)
模合1遇	唇重(78)	「o」逋哺補圃布圃浦溲怖蒲菹步捕哺哺輔模姥莽暮慕(22)「u」鋪(平)鋪(去)簿(3)「io」墓(1)「ki」姥(1)
模合1遇	齒頭(45)	「o」租祖粗措厝錯醋粗祚阼蘇酥素嗟訴愬塑(17)「u」作麤(2)
模合1遇	喉音(97)	「o」烏朽於嗚汗洿惡呼虎琥辱胡筍湖瑚翻糊鵠乎壺弧狐瓠戶護互栻(27)
模合1遇	半舌(48)	「o」盧蘆爐櫨鱸鱸鱸顱瓠魯櫓虜鹵滷路露鷺輅(19)「oi」賂(1)
魚合3遇	照2(50)	「o」菹阻俎初楚礎助蔬疏疎梳所疏(13)「ə」鉏(1)

正韻音の中声がoで現れる字は模韻・魚韻字である。<表 94>からo 韻に入れられた字のほとんどすべての伝承音の中声がoで現れることが確認できる。各韻の例外を見ると次の通り。

模韻の牙喉音字の伝承音のすべての中声はoで現れる。牙音字の「梧・晤」の中声がoの他に、「io(梧)・ə(晤)」でも現れるが³²³、編者たちは「梧・晤」の伝承音のうち中声oしか

³²³ 「梧」や「晤」はすべて『訓蒙字会』にしか載っていない字である。伊藤智ゆき(2007: 124)によると、「梧」の伝承音のうちio^hという音はおそらくその字に付いている訓、すなわち

受け入れなかった³²⁴。それは上述した2字を除いた他の牙音字の伝承音の中声がoで現れるためと考えられる。ただ、中声ioの場合、1等韻を写しているとはとても考えにくいいため修正したと解釈することもできる。

唇音字の伝承音には最も多様な例外が見られる。伝承音が残っている27字のうち22字の中声がおで現れ、3字「鋪(平)鋪(去)簿」の中声がuで、1字「墓」の中声がioで、1字「姥」の中声がiで現れる。5つの例外の中声をoに修正したのは伝承音の傾向を考慮した結果と考えられる。ただ、中声ioについては上述のとおり。

興味深いのは『正韻』に「鋪」が都合3回、o韻に2回(p^ho・p^ho^h)u韻に1回(p^hu)、現れることである。o韻に属するものは中古音の模韻滂母字であり、u韻に属するものは虞韻敷母字であるが³²⁵、模韻滂母字「鋪」の伝承音p^huは虞韻敷母字「鋪」に影響されたかもしれない。

舌頭音字の「妒蠹杜」、齒頭音字の「作麤」の伝承音の中声がuで現れる³²⁶。しかし、それらの5字を除けば、舌頭音字と齒頭音字の伝承音のすべての中声はoで現れる。つまり、上述した5字の中声は伝承音の傾向によりuからoに修正されたと考えられる。

半舌音字の伝承音は1字「賂oi³²⁷」を除けば、すべての中声がoで現れる。「賂」の中声は伝承音の傾向に合わせてoに修正したのだろう。

mə^hkui^hの音節末音-iに同化した異音表記という。また、「賂」の伝承音である'o^Rは「語'o^R」の類推と述べている。

³²⁴ 『東国正韻』において「梧」はo韻に1回(上声)、o韻に2回(平声・去声)現れる。これは『集韻』を反映した結果と思われる。その反面、「賂」はo韻にしか現れない。

³²⁵ 『広韻』や『集韻』で「鋪」を調べた結果、『広韻』には3回(模韻滂母2回・虞韻敷母1回)、『集韻』には4回(模韻滂母2回・模韻幫母1回・虞韻敷母1回)現れることが分かった。『正韻』の収録字は『広韻』の収録字と一致している。

³²⁶ <表94>を見れば分かるように、模韻字の伝承音のほとんどすべての中声がoで現れ、例外はu(8)io(2)oi(1)o(1)i(1)の順に現れる。つまり、中声uで現れる例外が最も多いのである。その原因について伊藤智ゆき(2007:123-124)は次の3つを挙げて説明している。

- ① 中国音において模韻の音価が[o]から[u]に変わっていたことを反映している。
- ② 音声的に/o/と/u/の区別がなく、模韻は音声的にその双方で現れていたことを反映する。
- ③ 模韻の音価は[o]ではなく[ou]もしくは[uo]であった。そのため原則的には中声oで写されたが、uで写されることもあった。

³²⁷ 「賂」の中声がoiで現れることに関連し、河野六郎(1979:491)がi添加形と解釈した反面、伊藤智ゆき(2007:124)は灰韻曉母の「賂hoi^R」によるcontaminationである可能性があると述べている。

『正韻』において遇摂の3等韻である魚韻はo韻部とə韻部に分けられている。o韻部には莊組字だけが入れられているが³²⁸、それは「鉏(a)」を除けばすべての莊組字の伝承音の中声で現れるためだろう。このことから『正韻』における分韻の基準が伝承音の傾向に当たっていることがさらに明らかになる。

4.5.7 a韻部

a韻部はa韻、ia韻、oa韻からなる。この韻部には中古音の果摂と仮摂が対応する。果摂は歌韻と戈韻からなり、仮摂は麻韻からなるが、a韻部と歌韻・戈韻・麻韻との対応関係を示すと次の通り。

<表 95> a韻部

中終声	摂	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
a	果	歌	1	開		ɒ		牙、舌頭、齒頭、喉、半舌
a	果	戈	1	合	w	ɒ		唇重
a	仮	麻	2	開	r	a		牙、舌上、唇重、喉、莊組
ia	果	戈	3	開	j	ɒ		牙
ia	仮	麻	3	開	j	a		精組、章組、以母、日母
oa	果	戈	1	合	w	ɒ		牙、舌頭、齒頭、喉、半舌
oa	果	戈	3	合	jw	ɒ		群母、曉母
oa	仮	麻	2	合	rw	a		牙、喉、知母、莊母

a韻部と果摂・仮摂の対応を見ると、a韻部に1・2等韻が、ia韻には3等韻が、oa韻には1・2・3等の合口韻がそれぞれ取りまとめられている。他の摂とは異なり、洪音(1・2等)と細音(3・4等)の区別が整然としているのが特徴的である。次の<表 96>は果摂・仮摂の1・2等開口の伝承音の中声出現頻度をまとめたものである。

<表 96> 「a」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
歌開1果	牙音(50)	「a」歌哥柯珂可珂珂莪峨蛾鶯我餓(13)「ai」箇(1 ³²⁹)

³²⁸ 河野六郎(1979: 494, 503)が中声oで現れる莊組字がc層に属し、əで現れる字がb層に属すと解釈したのに対し、伊藤智ゆき(2007: 126-127)は「鉏(a)」を例外と解釈し、中声oで現れる莊組字を主要母胎層としている。

³²⁹ 伊藤智ゆき(2007: 112)は「我」の伝承音を'a^Rと'ai^R、二通りあると述べている。しかし、『資料篇』を見ると'ai^Rは『翻訳小学』にしか現れない。さらに、戈韻の「魔」の伝承音

歌開 1 果	舌頭(74)	「a」 多他拖駝陀跏酤鮎鼉馱舵爹那儼(14)
歌開 1 果	齒頭(49)	「a」 左佐蹉磋搓齶娑沙(8) 「oa」 左佐(2)
歌開 1 果	喉音(31)	「a」 阿訶呵何荷河荷賀(8)
歌開 1 果	半舌(14)	「a」 羅蘿籬籬(4)
戈合 1 果	唇重(44)	「a」 波播簸頗坡玻頗破婆摩磨魔劇麼磨(15)
麻開 2 仮	牙音(63)	「a」 嘉加笳茄枷跏痂枷葭家假假笄駕稼嫁假價賈牙芽衙雅研(24) 「ia」 家(1)
麻開 2 仮	舌上(25)	「a」 打咤茶拏(4)
麻開 2 仮	唇重(47)	「a」 巴芭芭把靶弮孺葩肥杷怕杷爬琶麻蟆馬罵(18) 「ai」 霸壩罵(3)
麻開 2 仮	照 2(54)	「a」 鮓詐榨又杈鞞差汊砂紗鯊槎乍(13) 「ia」 榧(1) 「ai」 詐乍(2)
麻開 2 仮	喉音(50)	「a」 鴉瘧亞罇遐霞瑕蝦蝦下(上)夏(上)廈暇下(去)夏(去)(15) 「ia」 下(去)1)

正韻音の中声が a で現れる字は果摂の歌韻開口、戈₁韻合口の唇音字、そして仮摂の麻₂韻開口である。〈表 96〉から分かるように正韻音は伝承音をそのまま受け入れている。

「序」では言及していないが、果摂・仮摂も江摂・宕摂と同様前期中古音時期には両者が分かれていたが『四声等子』以降の韻図においては区別がなくなっている³³⁰。なお、学者たちの再構音を見ても果摂・仮摂に属する韻らの主母音は非常に類似している³³¹。したがって、両摂の伝承音の中声が共に a で現れるのは当然のことであり、同時に編者たちも果摂・仮摂を1つの韻部に入れて良いと思っただろう。韻ごとに例外を見ると次の通り。

歌韻の舌頭音・喉音・半舌音字の場合、すべての伝承音の中声が a で現れるため議論の余地がない。歯頭音字の場合、都合 8 字のうち 2 字「左佐」の伝承音が ca の他に coa でも現れる。伊藤智ゆき(2007)の『資料篇』によると「左」の伝承音が ca で現れる文献には『大学諺解』『中庸諺解』『論語諺解』『改刊法華経諺解』があり「佐」の伝承音が ca で現れる文献は『改刊法華経諺解』しかない。それに諺解類のうち伝承音を反映している可能性が最も高い『小学諺解』や『翻訳小学』には「左佐」の音がすべて coa となっている。つまり、正

も同じく ma^lと mai^lがあるとしているが、mai^lは『四法語諺解』にしか見られない。そこで本稿においては 2 字の中声 ai を数えなかった。

³³⁰ 최영애(2000 : 280)による。

³³¹ 歌韻麻韻の再構音

	麥耘(2009)	平山久雄(1967)	최영애(2000)
歌(戈)	v	a	a
麻	a	a	a

韻音に影響されたと思われる『改刊法華經諺解』の漢字音が ca で現れる点³³²、『小学諺解』などに2字の音が coa となっている点を考えに入れると、「左佐」の伝承音は coa であった可能性が高い。つまり「左佐」が開口字であるにもかかわらず、伝承音の中声には合口性が余計に加わっているのである。しかし、編者たちは開合を正確に区別するため2字の中声を oa から a へ修正した。

牙音字の伝承音を見ると14字のうち1字「箇」の中声が ai で現れる。歌韻は介音や韻尾を伴わず主母音だけからなる韻であるが、「箇」の伝承音を見ると、まるで中声に韻尾-i が反映されているように見えるのである。このような韻尾-i の添加現象は歌韻だけでなく麻₂韻・模韻・魚韻・虞韻・豪韻・尤韻など、いわゆる陰声韻(陽声韻尾や入声韻尾を伴わない韻)の伝承音によく見られる現象である。しかし、『正韻』の編者らはそういう例外を他の伝承音の傾向にしたがって修正した。当然ながら「箇」の中声をも ai から a に修正した。

麻₂韻の牙喉音・舌上音・唇重音・莊組字の正韻音の中声は a で現れる。舌上音字の伝承音には例外が見られない。牙音字の「家」や喉音字の「下」の中声が a の他に ia でも現れるが、2字を除けばすべての牙喉音字の伝承音の中声が a で現れるため「家下」の中声を a に修正したのである。

唇重音字である「霸壩罵」、莊組字である「詐乍」の伝承音の中声が ai で現れ、韻尾-i の添加現象が見られるが「詐乍」の中声は a でも現れるため、議論の余地がない。「霸壩罵」は他の唇重音字の中声が a で現れるため ai から a へ修正したと考えられる。莊組字の「檀」の中声が ia で現れるが、その字を除けば、他の莊組字の中声が a で現れるため修正されたのである。

<表 97> 「ia」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
麻開 3 仮	齒頭(31)	「ia」借且藉些寫卸瀉邪斜謝(10)「a」嗟(1)「iə」置姐(2)
麻開 3 仮	照 3(40)	「ia」遮者赭柘蔗炙車奢賒捨舍赦闇蛇社射麝(17)
麻開 3 仮	喉音(17)	「ia」邪耶爺野也冶夜(7)
麻開 3 仮	半齒(3)	「ia」若(1)
戈開 3 果	牙音(4)	「a」迦伽(2)

正韻音の中声が ia で現れるのは麻₃韻と戈₃韻開口字である。麻₃韻字の場合、齒頭音字を除けば他の声母字の伝承音の中声が漏れなく ia で現れ、齒頭音字の場合も例外が若干見られるが、ほぼすべての中声が ia で現れる。つまり麻₃韻も伝承音にしたがって分韻したことが明らかになる。例外を見ると「嗟」の中声が a で、「置姐」の中声が iə で現れる。伊藤智ゆき(2007: 118)は「嗟 c^ha^l」を「差 c^ha^l」の類推とし、「置 ciə^l姐 ciə^l」は中国音を反映していると解釈した。「置姐」が『訓蒙』にしか現れないことを考慮に入れば2字の伝承音が新しい時代の中国音を写している可能性が高いと思われる。しかし、上述した3字の例外は伝承音の傾向によりすべて ia に修正された。

³³² 伊藤智ゆき(2007: 113)は『改刊法華經諺解』の ca が正韻音を反映している可能性があり、『大諺』『中諺』『論諺』の「左 ca」が「訂正傾向」によるものと見られると述べている。

興味深い事実は戈₃韻開口に当たる「迦伽」の伝承音の中声が a で現れるにも関わらず、それらの字を ia 韻に入れたことである。このことは四等に基づき分韻した結果と思われる。つまり戈₁韻字が a 韻に取りまとめられたため、3 等介音を伴う戈₃韻字は ia 韻に収められるのが正しいかも知れない。さらに ia 韻に入れられた戈₃韻字はすべて「迦」字母韻に当たるが、それは拗音開口の字母韻である³³³。しかし『正韻』の全般を見ると四等の差より伝承音を重視する傾向が見られる。例えば、蒸韻(曾撰 3 等)が登韻(曾撰 1 等)と一緒に iŋ 韻に入れられたことや、東₃韻や鍾韻(以上通撰 3 等)が東₁等と冬韻(以上通撰 1 等)と同様 oŋ 韻に収められたことは伝承音の傾向を受け入れた結果と言える。したがって、戈韻 1・3 等を伝承音ではなく四等により分韻した理由は到底納得しにくい。ただ、「迦伽」が仏教用語として使われる字であるため、積極的に修正を加えた可能性があり得る。4.2 において言及したように、中声を修正する際伝承音の傾向を重視したことは確かであるが、収録字が不足しているときには、中国音(なかでも『韻会』の字母韻)を参考にして分韻する場合もあった。例えば、仙 A 韻の牙音字の場合など。調べたところ『広韻』を見ると戈₃韻開口には 6 字³³⁴しか載っていないが、そのうち『正韻』には 4 字「迦祛伽茄」が収録されていることが分かった。つまり、戈₃韻開口字はとても少ないと言えるのである。そのため伝承音ではなく中国音に合わせて分韻したのではないだろうか。

<表 98> 「oa」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
麻合 2 仮	牙音 (36)	「oa」瓜駙蝸寡鈞袴袴瓦 (8)
麻合 2 仮	舌上 (3)	「oa」槌槌 (2)
麻合 2 仮	喉音 (23)	「oa」窪蛙花化華譚蹠蹠華樺獲 (11)
戈合 1 果	牙音 (36)	「oa」戈鍋果菓裹過科蝌窠課臥 (11)
戈合 1 果	舌頭 (51)	「a」朶唾唾惰墮惰掬懦糯 (9)
戈合 1 果	齒頭 (25)	「oa」剉挫坐坐座鎖 (6) 「a」坐座蓑梭鎖 (5)
戈合 1 果	喉音 (38)	「oa」倭渦窩火貨和禾禍和 (9)
戈合 1 果	半舌 (31)	「a」螺稷裸蓐瘰 (5) 「o」騾 (1)
戈合 3 果	牙音 (1)	「a」癩 (1)
戈合 3 果	喉音 (5)	「oa」靴 (1)

oa 韻には麻₂韻の合口や戈韻 1・3 韻の合口が対応する。<表 98>を見れば分かるように、麻₂韻の場合すべての伝承音の中声が oa で現れ、例外がない。したがって正韻音が伝承音を受け入れたと見て良いだろう。

³³³ 花登正宏 (1997 : 159) を参照。

³³⁴ 『広韻』には戈韻 1 等と 3 等が分かれている。戈₁韻には合口しかないが、それが歌韻開口と開合の対をなしている。一方、3 等には開合が揃っているが、収録字が少ない。『広韻』には戈₃韻開口字が都合 6 字「迦(見母)祛(溪母)伽(群母)茄(群母)」載っており、合口字は 7 字「髀(溪母)癩(群母)髀(影母)鞞(曉母)坐(精母)臙(来母)」載っている。

戈₁韻の場合、牙喉音字の伝承音には例外が全く見られない。しかし、舌頭音・歯頭音・半舌音字の伝承音を見ると中声が a で現れる例外が多い。中でも舌頭音字はすべての中声が a で現れる。また、半舌音字も 6 字うち 5 字の中声が a で現れ、残りの 1 字「駮」の中声も oa ではなく o³³⁵で現れる。しかし、編者たちはそれらの伝承音を受け入れず、すべての例外を修正した。中声 a は合口性を反映していないため、伝承音の中声に合口性を加えて oa に修正したと考えられる。次に、中声 o の場合、他の字を修正した結果に基づき修正したと思われる。

戈₃韻の合口の伝承音は、喉音字の中声が oa で現れ、牙音字の中声が a で現れる。編者たちは開合を区別するために牙音字の中声を a から oa に修正した。戈₃韻の開口の伝承音の中声が a で現れるにも関わらず、それらの字を字母韻に基づき ia 韻に入れた事実から見れば、戈₃韻の合口は oa 韻ではなく ioia 韻に入れられても問題なかったと思われる。さらに、字母韻を見ても麻₂韻や戈₁韻の合口は「瓜」字母韻か「戈」字母韻に属し、戈₃韻の合口は拗音介音を伴う「癩」字母韻に含まれる。にもかかわらず、戈₃韻の合口を oa 韻に取りまとめた理由は次の 2 つが考えられる。

まず、4.1.6 において述べたように、合口字の修正は該当字の伝承音の中声に合口性を加える方式で行なわれた。つまり、戈₃韻の合口字も伝承音の中声が oa か a で現れるため、その傾向にしたがって oa 韻に入れられた可能性があり得る。

次に、戈₃韻の合口を字母韻にしたがって ioia 韻に入れようとしたが、『正韻』の中声体系において ioia という音節が許されなかったため、oa 韻に収められた可能性がある。確かに中声 ioia は固有語においても見当たらない中声であり、伝承音の中声表記に 1 回も用いられたことがない中声である。つまり、戈₃韻の合口は音節制約のため ioia 韻ではなく oa 韻に入れられた可能性が高い。

4.5.8 u 韻部

u 韻部は u 韻と iu 韻からなる。u 韻部には遇撰に属する虞韻が対応するが、声母により u 韻や iu 韻に分けて入れられた。u 韻部と虞韻の対応関係をまとめると次の通り。

<表 99> u 韻部

中終声	撰	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
u	遇	虞	3	独	jw	u		牙、唇輕、莊組、影母、曉母、半舌
iu	遇	虞	3	独	jw	u		知組、精組、章組、以母、半齒

³³⁵ 「駮」の伝承音は ro^lであるが、이운동 (1997 : 139)はその伝承音が新しい時代の中国音を反映していると解釈した。確かに「駮」は『訓蒙字会』にしか載っていないため、その可能性が高いと考えられる。

虞韻は3等韻であるが、伝承音においては1つの韻母が声母により中声uとiuで現れる。伝承音の中声に3等介音が写されていない場合、編者たちはそれを修正せずそのまま受け入れたが、虞韻の場合も他の韻と同様、伝承音の傾向にしたがって分韻したと思われる。虞韻の伝承音の中声出現率をまとめると次の通り。

<表 100> 「u」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
虞合3遇	牙音(104)	「u」 拘駒俱矩句瞿區驅軀劬臞癯衢瞿懼具虞愚隅遇寓(21) 「iu」 𪔐(1) 「o」 娛(1)
虞合3遇	云母(34)	「u」 于孟雩羽禹宇雨芋(8)
虞合3遇	唇輕(160)	「u」 膚夫鈇拊附跂府俯斧付傅賦敷葦稭桴俘郛麩撫拊赴扶芙符鳧父釜 腐附駙鮒無亡蕪毋巫誣武鵠舞廡撫侮務霧(47) 「o」 甫父脯簠輔母(6)
虞合3遇	照2(12)	「u」 芻雛數(3)
虞合3遇	喉音(54)	「u」 嫗窈醜(3) 「o」 迂(1)
虞合3遇	半舌(23)	「u」 樓屢(3)

正韻音の中声がuで現れるのは虞韻の牙音・唇輕音・半舌音・莊組・喉音字(余母除外)である。それらの字の伝承音を見ると、ほぼすべての中声がuで現れる。したがって、正韻音の中声が伝承音のそれを受け入れていると解釈することができる。<表 100>から分かるように云母字・莊組字・半舌音字には例外が見られない。牙音字には中声がiuである字が1字「𪔐」oである字が1字「娛」現れ、中声がoで現れる字は唇輕音字に6字「甫父脯簠輔母」、喉音字に1字「迂」ずつ見られる³³⁶。しかし、例外の数があまり多くないため、上述した例外の中声はuに修正された。

<表 101> 「iu」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
虞合3遇	舌上(24)	「iu」 株誅蛛拄廚嶠柱住(8)
虞合3遇	齒頭(31)	「iu」 取須鬣(3) 「u」 足趨(2) 「iui」 媿取娶趣聚(5)
虞合3遇	照3(53)	「iu」 朱珠主樞輸戍殊銖豎樹(10) 「u」 注註炷鑄(4)
虞合3遇	照2(4)	「u」 數(1)
虞合3遇	喉音(61)	「iu」 踰窳楡愉與諛庾愈癒裕諭喻(12) (以母)
虞合3遇	半齒(18)	「iu」 儒乳孺(3)

正韻音の中声がiuで現れるのは虞韻の舌音・齒音(莊組除外)・余母・半齒音字である。該当字の伝承音を見ると、中声がiuで現れる傾向が強い。なかでも舌上音・余母・半齒音字には例外が全くない。しかし、齒頭音字の場合、合計10字のうち中声がuで現れる字が2字

³³⁶ 例外に関連して伊藤智ゆき(2007:129)は「𪔐」を新しい時代の音とし、他の例外は類推と解釈している。

「足趨」iui で現れる字が5字「姫取娶趣聚」ある。つまり、齒頭音字の伝承音は中声がiuで現れる字より中声がiuiで現れる字が多いのである。にもかかわらず、编者たちは虞韻の齒頭音字をiu韻に取りまとめた。その理由はおそらく韻部を区別するためだろうと考えられる。つまりiui韻には止撰の合口韻が収められているため、遇撰の虞韻字をiui韻に入れることができなかつた可能性が高い。その上虞韻は韻尾を伴っていない韻であるが、中声iuiはまるで-i韻尾を写しているように見えるため、修正せざるを得なかつただろう。

章組字の伝承音を見ると中声がiuで現れる字が多い。14字のうち4字の中声がuで現れるが、编者たちはそれらの例外をiuに修正した。それは伝承音の傾向に合わせて修正した結果と解釈して良いだろう。それに、章組字と莊組字の伝承音の中声がiu:uのように分かれる傾向にあるため、両者を各々iu韻とu韻に分けた方が良いと考えたかも知れない。

生母字(莊組)である「數簍簍數」はiu韻に入れられた。4字のうち伝承音が確認できる字は「數」しかないが、その中声はuで現れる。にもかかわらず以上の4字はiu韻に取りまとめられた。興味深いのは生母の平声・去声字がu韻に収められた事実である。つまり、虞韻の生母字のうち平声字「𪛗𪛘𪛙𪛚𪛛」や去声字「數揀」はu韻に入れられ、上声のみiu韻に入れられたのである。調べたところ、11字の生母字のうち2字、即ち去声の「數」と上声の「數」の伝承音資料が残っていたが、2字の中声とともにuで現れることが確認できた。つまり、同じ声母を持っており、なお伝承音の中声も一緒であるのに、编者らはわざと生母字を声調により分けたということになる。それに11字はすべて「孤」字母韻に属するため、上声字だけをiu韻に取りまとめた理由が分かりにくい。強いて言えば4字のうち「數」を除いた残りの3字の中声がiuであった可能性が考えられる。しかし、現代漢字音においてㄙ:ㄙ、ㄙ:ㄙ、ㄗ:ㄗなどの対立がなくなっているため、「簍簍數」の伝承音の中声がiuであったことを裏付ける証拠が見つからない。

4.5.9 ㄐ韻部

ㄐ韻部はㄐ韻とiㄐ韻が含まれている。この韻部には莊組字を除いたすべての魚韻字が取りまとめられた。魚韻の莊組字はㄐ韻に入れられたが、このことはおそらく伝承音にしたがって分韻した結果であろう。以下の<表102>はㄐ韻部と魚韻との対応関係を示したものである。

<表102> ㄐ韻部

中終声	撰	韻	等	開合	頭	腹	尾	声母
ㄐ	遇	魚	3	独	j	o		牙、影母、曉母
iㄐ	遇	魚	3	独	j	o		知組、精組、章組、以母、半舌、半齒

魚韻も虞韻と同じく遇撰に属する3等韻であるが、虞韻の伝承音の中声がu或いはiuで現れる反面、魚韻の中声はㄐ乃至iㄐで現れる。魚韻の伝承音の中声も声母により3等介音を写している場合があれば、そうではない場合もある。『正韻』においては3等介音を反映

していない伝承音の中声を修正せず、そのまま受け入れている。魚韻についても他の場合と同様、3等介音が写されていない中声を修正しなかった。

魚韻は前期中古音時期には開口であったが、後期中古音時期に合口となった韻と知られている。魚韻の開合に関する学者たちの見解は一致していないが³³⁷、韻書や韻図に現れる魚韻の開合をまとめると次の通り。

開口：『広韻³³⁸』『韻鏡』『七音略』/『慧琳音義』『声音唱和図』

合口：『四声等子』『切韻指南』『切韻指掌図』

以上から前期中古音時期には魚韻が開口扱いされていたが、後期中古音時期には開合の区別が文献により異なっていることが分かる。つまり『慧琳音義』『声音唱和図』では魚韻が開口となっているが、後期韻図では合口となっているのである。

一方『挙要』の字母韻を見ると魚韻の莊組字が「孤」字母韻に属し、それ以外の字が「居」字母韻に属している。『正韻』において「孤」字母韻に当たる字はo韻・u韻に対応し「居」字母韻に当たる字はu韻・iu韻・ə韻・iə韻に対応する。このことにより『正韻』の編者たちが莊組字を除いた魚韻字を開口と認めていたと推測することができる。

魚韻の中声の出現比率を示すと次の通り。

<表 103> 「ə」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
魚独3遇	牙音 (134)	「ə」居裾車舉莒據踞鋸祛祛去渠菓鶉磔蘧籩瓠巨距拒炬苴遽魚漁語 圍圍禦御語(32) 「əi」筭(1)
魚独3遇	喉音 (24)	「ə」於飶虚嘘許(5)

正韻音の中声がəで現れるのは魚韻の牙喉音字である。<表 103>を見れば分かるようにə韻に入れられた魚韻字の伝承音は1字を除けばすべての中声がəで現れる。したがって魚韻の牙喉音字をə韻に入れたのは伝承音の傾向を反映した結果と考えられる。例外を見る

³³⁷ 羅常培(1930)、周法高(1948)、平山久雄(1995)などは魚韻を開口と見なしている。その反面Karlgren(1940)、麥耘(2009)は魚韻を合口と解釈しているが、麥耘(2009: 72)は魚韻が円唇性が緩い中舌的母音であった可能性が高いとしている。一方、河野六郎(1979: 493-494)はKarlgrenにしたがって魚韻を開口としているもののその母音については円唇性があっても緩い、中舌の中母音であったと述べている。

³³⁸ 『広韻』においては魚韻と虞韻が区別されている。魚・虞韻が遇撰に属している同じ3等韻である事実に基づけば、両者を開合により分けた可能性が高いと推測される。

と、まず喉音字の場合例外がない。牙音字には例外が1字「筍(əi)」のみ見られるが、他の牙音字の中声がəで現れるため修正したのだろう。

<表 104> 「iə」韻類の韓国漢字音の中声

韻母	七音	伝承音
魚合3遇	舌上(59)	「iə」瀦著樗樗楮除儲杼苧箸女(11) 「iəi」猪除篠(3)
魚合3遇	齒頭(60)	「iə」蛆疽沮睢沮絮徐敘澈序杼嶼緒(13) 「iəi」絮(1)
魚合3遇	照3(46)	「iə」諸渚杵處處書舒暑黍鼠恕庶墅苧署曙(16) 「iəi」諸(1) 「ia」煮翥(2)
魚合3遇	喉音(47)	「iə」余予蜎餘歟譽輿與予與譽預(14) 「iəi」輿豫與譽預(5)
魚合3遇	半舌(35)	「iə」驢廬閭呂侶膂旅慮鑪瀘(10) 「o」驢(1)
魚合3遇	半齒(13)	「iə」如洳汝女(4) 「iəi」汝女(2)

正韻音の中声がiəとなっているのは魚韻の舌上音・齒頭音・章組・以母・半舌音・半齒音字である。<表 104>から分かるように伝承音の中声は大体iəで現れる。したがって、iə韻の場合も伝承音の傾向を反映していると解釈して良いだろう。

伝承音を見ると中声がiəiで現れる例外が多数見られるが、中声がiəで現れる字がより多いため修正されたのだろう。さらに韻部を区別するためにも修正せざるを得なかったとも考えられる。半舌音字に中声がoで現れる例外が1字「驢」見られるが「驢」の伝承音はroだけでなくriəでも現れる。なお、章組字に中声がiaで現れる字が2字「煮翥」あるが、章組字のほぼすべての中声がiəで現れるため、修正したと考えられる。

4.5.10 まとめ

4.5において「贅・傀・佳・嬌・雞」「孤・歌・拘・居」韻部に属する字の正韻音を伝承音と対照した。9つの韻部には中古音の止摂・蟹摂・仮摂・果摂・遇摂が対応するが、各韻部と中古音の摂の対応関係を示すと次の通り。

Λ・ui : 止摂(蟹摂)

oi・ai・iəi : 蟹摂

o・u・ə : 遇摂

a : 仮摂・果摂

5つの摂は全て母音で終わる韻からなる摂である。しかし、止摂・蟹摂に属する韻は主母音が高母音か或いは韻尾-iを伴う韻であるのに対して、仮摂・果摂・遇摂はそうではない。止摂・蟹摂は1つの韻部に混在している場合があるが、大体止摂はΛ韻・ui韻に、蟹摂はoi

韻・ai 韻・iəi 韻に対応する傾向にある。仮撰・果撰が共に a 韻部に対応するのに対して、遇撰は 3 種の韻部に分けて入れられた。

他の撰の伝承音が中国語の二重母音(時には三重母音)を単母音と受け入れる傾向を見せているのに対して、止撰・蟹撰の伝承音はそれとは正反対の傾向を見せる。つまり、他の撰に比べ両撰の伝承音は多種多様な中声で現れ、例外も多く見られるのである。それはおそらく韓国語の母音体系に多様な offglide が存在し、様々な‘與 l 相合字’をもってその母音を表記することができたためだろう。正韻音の中声を伝承音と対照してみるとほとんどすべての場合、正韻音が伝承音に見られる傾向に従っていることが分かる。ただ、例外が多いだけ、これまで見てきたすべての修正のパターンが現れる³³⁹。

仮撰・果撰は a 韻部に入れられたが、それは伝承音の傾向を反映した結果と考えて良い。ただ、戈₃ 韻の開口の場合伝承音を受け入れず ia 韻に収められたが、その理由はおそらく字数が少ないためと思われる。

遇撰には 3 つの韻が含まれているが、魚韻の莊組字を除いて見ると 3 つの韻がそれぞれ異なる韻に対応する。遇撰に属する韻母は韻尾-i を伴わないのに、魚韻の伝承音を見るとまるで韻尾-i を写しているように見える例外が少なくないことが特徴的である。それは流撰字の伝承音にも見られる現象であるが、編者たちはそのような例外を修正した。

止撰・蟹撰字の正韻音や伝承音の中声を示すと次の通り。

撰 開合	正韻音中声	伝承音中声
蟹撰	Λi oi ai oai ui iəi iuiəi	Λi・ <u>o</u> ③・ai・ii・Λ oi・ <u>Λi</u> ・ai・ii③・iu ai・ <u>oai</u> ・oi③・ <u>iəi</u> ④・a・Λ・Λi・ii <u>oa</u> ・uəi・oi ui iəi・ <u>əi</u> ①・ <u>iə</u> ②・Λi・Λ・i・ii・ai iuiəi・ <u>iəi</u> ③・iu・uəi
止撰	Λ i ii ui iui	Λ・i・ii・iəi・oai・Λi i・ <u>a</u> ・Λ・Λi・ii ii・i・uəi・Λ・Λi ui・ <u>uəi</u> ①・i・oi・iu iui・ <u>iu</u> ②・ <u>iəi</u> ・iə・əi・i・oi・io・u・iuiəi

仮撰・果撰・遇撰字の正韻音や伝承音の中声を示すと次の通り。

撰 開合	正韻音中声	伝承音中声

³³⁹ ①音節制約、②韻部の区別、③開合の区別、④洪細の区別。下線は出現率が低いため修正した伝承音の中声を示す。

仮撰	a ia oa	a· <u>ai</u> · <u>ia</u> ia· <u>iə</u> ·a oa
果撰	a ia oa	a· <u>oa</u> ③· <u>ai</u> a oa· <u>a</u> ③· <u>o</u>
遇撰	o u iu ə iə	o· <u>io</u> ·u· <u>oi</u> ·ə·i u· <u>iu</u> ·o iu· <u>iu</u> ②· <u>u</u> ④ ə· <u>əi</u> iə· <u>iəi</u> ②· <u>ia</u> ·o

4.6 中声の修正パターン

正韻音と伝承音の中声を比較し両者の間の異同を分析した結果、中声の修正には次の4つのパターンがあることが明らかになった。すなわち

- ① 音節制約 ② 韻部の区別 ③ 開合の区別 ④ 洪細の区別

まず、伝承音には多数見られる中声(あるいは中声と終声の組み合わせ)が選ばれず『正韻』において全く現れない場合があるが、そういった修正類型を①音節制約という³⁴⁰。例えば *in/ik* 韻に属する字の伝承音には *ɲ* (*ɲk*) や *ək* という音節形が多数現れるが『正韻』ではそれらの中声を ‘i’ へ修正した。また *ui* 韻の場合も伝承音の中声が *uəi* に現れる傾向があるにもかかわらず、正韻音の中声を *ui* に修正したが、それは『正韻』で *ɲ* (*ɲk*)、*ək*、*uəi* のような中声(あるいは中声と終声の組み合わせ)が許されなかったためと考えられる。なかでも *ək* と *uəi* の場合、伝承音の傾向を考慮すると *ək* 韻や *uəi* 韻が立てられても問題がなかったはずであるが、編者たちはそうしなかった。4.1.1 と 4.5.4 において述べたように、入声 *ək* 韻はそれの舒声韻である *əŋ* 韻がなかったため立てられず、*uəi* 韻は *uəi* の開口韻である *əi* 韻がなかったため立てられなかった。このことから、編者たちが韻に四声や開合が揃っていなければならぬと考えていたことが推測される。言い換えれば、彼らにとって四声と開合が清濁か七音と同様守られなければならない資質として認識されていたと解釈できるのである。

次に、15世紀当時の韓国語の母音体系は中国語のそれに比べて比較的単純であったと考えられるが、それが原因で伝承音の中声と中国音の韻母はほとんどの場合一対多の対応関係をなしていた。編者たちは両言語の差を認識し、そういった傾向を考えに入れて伝承音の中声を修正したが、以下の対応から外れている伝承音の中声は修正を加えた。

oŋ·*uŋ* 韻部:通攝 *aŋ* 韻部:江·宕攝 *iŋ*·*oiŋ*·*uiŋ*·*iəŋ* 韻部:曾·梗攝

³⁴⁰ 本稿における‘音節制約’という用語は言語学の用語として普通に用いられているものではなく、説明のため作られた用語である。この用語の適切性については議論の余地がある。

ʌn· on· un 韻部:臻攝 an· ən 韻部:山攝

ʌm 韻部:深攝 am· əm 韻部:咸攝

ow 韻部:效攝 uw 韻部:流攝

ʌ· ui 韻部:止攝 (蟹攝) oi· ai· iəi 韻部:蟹攝 o· u· ə 韻部:遇攝 a 韻部:仮攝· 果攝

以上のような修正パターンを本稿では韻部の区別と呼ぶ。韻部の区別を伝承音ではなく中古音の16撰を基にしている修正パターンであると考え得るかも知れない。しかし上述した26韻部と16撰の対応自体が韓国語と中国語の母音体系の差を反映していることを考えなければならない。韻部の区別は上述の対応関係さえ守られなければ韻書の体系が崩れると判断された結果生じた修正のパターンであるだろう。

また、開合をきちんと区別していることは正韻音の中声の最大の特徴と言える。つまり、伝承音か固有語にほぼ見られない中声が『正韻』にたくさん現れているのである。例えば iuiə、iuiəi のような中声は韓国語にあまり現れない音節形であるが、正韻音の表記には iə の合口として iuiə が、iəi の合口として iuiəi が使われた。伝承音の傾向を完全に無視しそれらの中声を修正した理由は‘開合’を必ず守られなければならない言語の資質として認識したためであろう。

最後に、洪細の区別は中古音の洪音(1等2等)と細音(3等4等)を区別するため中声を修正した場合をいう。しかし、伝承音に洪細の区別があまり現れない場合にはそういう傾向を考慮してあえて中声を修正しよとしなかった。このことから中声の修正において伝承音が最重要な参考資料であったことを再確認したと考える。

5 結論

本研究は東国正韻漢字音の中声が基本的に伝承音字音の中声に基づいていることを証明し、修正のパターンを明らかにするため行なわれた。

以下に各章において検討したことをまとめておく。

第2章においてはまず韻書『東国正韻』(1448)の編纂目的と動機について述べ、次に同時期に刊行された韻書『洪武正韻訳訓』(1455)を『東国正韻』と比較検討した。

申叔舟の「序」では『東国正韻』の編纂目的について詳しく述べている。それによると『東国正韻』が乱雑な伝承漢字音を修正するため刊行されたということが分かる。したがって『東国正韻』に載っている漢字音がほかでもなく韓国漢字音であることが証明されると考えられる。そういった事実は『洪武正韻訳訓』との対比を通じても再確認できる。『洪武正韻訳訓』の編纂目的が中国音を示すことにあったこと、字の分類法が異なっていること、漢字音の表記に用いられた初声中声終声字の目録が全く異なっていることがそれを裏付ける。なお、東国正韻漢字音を初声中声終声字を備えて表記したのに対して洪武正韻訳訓漢字音の場合そうではなかったが、このことは韓国語と中国語の音節分析方法が異なっていることと関係があるだろう。

第3章においてはまず「序」に現れる『東国正韻』の編者たちの語音に対する認識と伝承漢字音の乱れの原因を検討し、さらに初声と終声の修正について調べた。

「序」によると編者たちは風土説に基づいて伝承音が中国音の音色をそのまま反映していないことを当然な現象として認めていたと推測される。それは舌頭・舌上、唇重・唇軽、歯頭・正歯を区別しない伝承音の初声を修正しなかった事実から証明される。その反面「清濁」と「四声」は断然変わってはいけない語音資質(法則)と認識していたと考えられるが、これは初声と終声の修正内容に基づけばさらに明らかになる。

初声終声の修正は次の4つに要約できる。すなわち

- ①字母之変：全清と次清が混乱していること。
- ②七音之変：牙舌唇齒喉半舌半齒が乱れていること。
- ③清濁之変：全清(及び次清)と全濁を区別していないこと。
- ④四声之変：上声と去声を区別しないこと。-t入声韻尾が終声ㄷに現れること。

『東国正韻』の編者たちが上述したすべての誤りを修正した。ほとんどの場合中古音の「七音清濁四声」にしたがって修正したと考えられるが、23字母のうち「業母欲母」は『拳要』の字母により「慈母邪母」は伝承漢字音の初声により修正した可能性もある。

第4章においては中声の修正について調べた。「序」の説明が初声と終声に関する内容に限られていて、中声について探るためには東国正韻漢字音と伝承漢字音を直接に比較しなければならない。そこで研究範囲を『東国正韻』の収録字のうち伝承漢字音が残っている字に限って、対象字の2つの漢字音を比較検討した。その結果ほとんどすべての場合東国正韻漢字音が伝承漢字音をそのまま受け入れていることが判明した。さらに東国正韻漢字音の修正した部分だけを切り離して修正内容を調べ、次の4つの修正パターンがあるということを明らかにした。すなわち

①音節制約：「 $\Lambda\eta$ (Λk)、 ək 、 $u\text{ə}i$ 」のような中声(あるいは中声と終声の組み合わせ)が伝承音には多数見られるが『東国正韻』には存在しない。つまり、上述の中声を伝承音の傾向にかまわず修正したと推測される。本研究ではそういった修正のパターンを音節制約と呼ぶ。

②韻部の区別：編者たちが定めた『東国正韻』の26韻部と中古音の16攝の対応関係から外れている中声を修正したことをいう。両者の対応関係は次のとおり。

$o\eta$ · $u\eta$ 韻部:通攝 $a\eta$ 韻部:江·宕攝 $i\eta$ · $oi\eta$ · $ui\eta$ · $i\text{ə}\eta$ 韻部:曾·梗攝

Λn · on · un 韻部:臻攝 an · $\text{ə}n$ 韻部:山攝

Λm 韻部:深攝 am · $\text{ə}m$ 韻部:咸攝

ow 韻部:效攝 uw 韻部:流攝

Λ · ui 韻部:止攝(蟹攝) oi · ai · $i\text{ə}i$ 韻部:蟹攝 o · u · ə 韻部:遇攝 a 韻部:仮攝·果攝

③開合の区別：ほとんどすべての伝承漢字音の中声には中国音の合口介音が反映されていないが、そういった中声を必ず修正したことをいう。当然ながら開口韻であるのに合口介音を写している中声も修正の対象になった。

④洪細の区別：洪音(1等2等)と細音(3等4等)を区別するため中声を修正したことをいうが、伝承漢字音に洪細の区別する傾向がある場合に限って見られる。

本研究においては東国正韻漢字音と伝承漢字音の中声を直接に比較することにより、『東国正韻』の「序」で記述していない中声の修正基準を解明しようとした。その結果中声に限って何より伝承漢字音を多く参考にしたことを確認し、上述したように修正パターンを4つに要約することができたが、まだ説明できない例外が残っている。そのことは今後の課題にしたいと思う。

参考文献

<資料>

- 『國音中古音對照表』1982. 臺北:廣文書局.
『古今韻會舉要』1975. ソウル:亞細亞文化社.
『洪武正韻譯訓』1973. ソウル:高麗大學校出版部.
『等韻五種』1975. 臺北:藝文印書館.
『東國正韻』1988. ソウル:建國大學校出版部.
『集韻』三版 1980. 臺北:中華書局.
권인한 2005. 『中世韓國漢字音集成』제이앤씨.
_____ 2009. 『中世韓國漢字音의 分析的 研究』박문사.
郭錫良 1986. 『漢字古音手冊』北京:北京大學出版社.
周祖謨 2004. 『廣韻校本』第三版 北京:中華書局.

<論文等>

日本語

- 有坂秀世 1936. 「漢字の朝鮮音について(下)」『方言』6-5.
_____ 1957. 「漢字の朝鮮音について」『國語音韻史の研究』東京:三省堂.
伊藤智ゆき 2007. 『朝鮮漢字音研究』本文篇・資料篇. 東京:汲古書院.
林茶英 2015. 「東國正韻」漢字音の重韻字表記の特徴」『東京大学言語学論集』36.
河野六郎 1939. 「朝鮮漢字音の一特質」『言語研究』第3号.
_____ 1968. 『朝鮮漢字音の研究』2. 天理時報社.
_____ 1979. 『河野六郎著作集』2. 東京:平凡社.
藤堂明保 1957. 『中國語音韻論』東京:江南書院.
花登正宏 1978. 「古今韻會舉要考 -韻類について-」『山形大学紀要(人文科学)』9-1.
_____ 1997. 『古今韻會舉要研究 - 中國近世音韻史の一側面-』東京:汲古書院.
平山久雄 1967. 「中古漢語の音韻」『中國文化叢書 1 - 言語』東京:大修館書店. 112-166.
_____ 1993. 「邵雍『皇極經世聲音唱和圖』の音韻體系」『東洋文化研究所紀要』120. 東京大學 東洋文化研究所.
_____ 1995. 「中古漢語魚韻的音值 -兼論人稱代詞「你」的來源」『中國語文』248.
_____ 1998. 「隋唐音系里的唇化舌根音韻尾和硬顎音韻尾」『語言學論叢』20. 117-138.
福井玲 2013. 『韓國語音韻史の探究』東京:三省堂.
三根谷徹 1953. 「韻鏡の三.四等について」『言語研究』23.
_____ 1956. 「中古漢語の韻母の體系」『言語研究』31.

韓國語

- 강신항 1973. 『사성통해연구』. ソウル:신아사.
_____ 1997. 「『東國正韻』音系の性格」『국어학 연구의 새 지평』성재이돈주선생 화갑기념논총 편집위원회. 13-35.
_____ 2000. 『韓國의 韻書』대학사.
_____ 2003A. 『訓民正音研究』성균관대학교 출판부.
_____ 2003B. 「‘正音’에 대하여」『韓國語研究』1. 한국어연구회.
_____ 2009. 「朝鮮初期漢字音과 東國正韻漢字音 比較表」『韓國語研究』6. 한국어언

- 구회. 119-194.
- 강창석 1992. 『15世紀 音韻理論의 研究: 借字表記 傳統과의 관련성을 중심으로』
 ソウル대학교 대학원. 박사학위논문.
- 권혁준 1997A. 「『東國正韻』과 『古今韻會舉要』의 通·宕·曾·梗攝 음운 체계
 비교」 『中國語文論叢』 12. 中國語文研究會.
- _____ 1997B. 「『東國正韻』과 『古今韻會舉要』의 臻·山攝 음운 체계 비교」 『中國語
 文論叢』 13. 中國語文研究會.
- _____ 1998. 「『東國正韻』과 『古今韻會舉要』의 咸·深攝 음운 체계
 비교」 『中國語文論叢』 14. 中國語文研究會.
- _____ 1999. 「『東國正韻』과 『古今韻會舉要』의 遇·果·仮攝 음운 체계
 비교」 『論文集(신학·인문대학편)』 34. 강남대학교 출판부.
- _____ 2000. 「『東國正韻』과 『古今韻會舉要』의 止·蟹攝 음운 체계 비교」 『中國言語
 研究』 12. 韓國中國言語學會.
- _____ 2001A. 「『東國正韻』과 『古今韻會舉要』의 效·流攝 음운 체계
 비교」 『論文集(신학·인문대학편)』 38. 강남대학교 출판부.
- _____ 2001B. 「『東國正韻』與『古今韻會舉要』之間的音位系統比較」 『中國學報』 43.
 韓國中國學會.
- _____ 2004. 「近古漢語 聲母 疑·魚·喻母의 대립 문제」 『中國語文論叢』 26. 中國語文研
 究會.
- _____ 2014. 『중국어역사음운학』 ソウル: 학교방.
- 김무림 1996. 「『東國正韻』의 編韻에 대하여」 『한국어학』 3. 117-133.
- _____ 1999. 『洪武正韻譯訓 研究』 ソウル: 月印.
- 김주필 2009. 「訓民正音의 性格과 ‘轉換’의 의미」. 2009년 겨울 국어학회
 전국대회. 發表論文集. 3-21.
- 김철현 1958. 「동국정운(東國正韻) 초성고(初聲攷)」 『국어국문학』 19. 107-132.
- _____ 1959. 「동국정운(東國正韻) 운모고(韻母攷)」 『국어국문학』 21. 1-90.
- 박병채 1973. 『古代 國語의 研究 : 音韻篇』 ソウル: 고려대학교 출판부.
- _____ 1977. 『고대국어의 연구』 ソウル: 민음사.
- _____ 1983. 『홍무정운역훈의 신연구』 ソウル: 고려대학교 민족문화연구소 출판부.
- 박창원 2010. 「15세기 국어의 이중모음」 『이중모음』. 149-173. 태학사.
- 사재동 2010. 「훈민정음(訓民正音) 창제(創制) 실용(實用)의
 불교문화학적(佛敎文化學的) 고찰(考察)」 『국학연구론총』 5(0). 105-207.
- _____ 2014. 「찬경(纂經) 『동국정운(東國正韻)』의 편위(編緯)와
 활용양상(活用樣相)」 『국학연구론총』 13(0). 47-75.
- 신아사 2009. 「『訓蒙字會』 『新增類合』 『千字文』에 반영된 止攝字 층위
 연구(1)」 『中國語文學論集』 58. 141-163.
- 심소희 1996. 『『皇極經世聲音唱和圖』 연구 -正音觀과 音韻體系를 중심으로-』
 연세대학교 중어중문학과 박사학위논문.
- _____ 2001. 「동아시아에서의 정음관 형성과 발전」 『한국어정보학』 4. 26-59.
- _____ 2011. 「洪武正韻 序를 통한 正音觀 고찰」 『中國言語研究』 35. 45-65.
- _____ 2013. 『한자 정음관의 통시적 연구』 이화여자대학교 출판부.
- 유창균 1965A. 「동국정운 연구-기일. 운목자 책정의 원류」 『어문학』. 12-36.
- _____ 1965B. 「東國正韻研究」 『震檀學報』 28. 97-134.
- _____ 1966. 『東國正韻研究』 研究篇·復原篇. 螢雪出版社.
- _____ 1967. 「東國正韻式 漢字音의 基層에 대한 試論」 『震檀學報』 31. 114-142.

- _____ 1968. 「古今韻會舉要의 反切과 東國正韻과의 比較」 『東洋文化』 8. 嶺南大學校附設東洋文化研究所.
- 유효홍 2014. 『訓民正音의 文字 轉換 方式에 대한 研究』 과주 : 대학사.
- 육효창 1989. 「중세국어 이중모음의 연구사적 고찰」 『동악어문학』 24.
- 이기문 1990. 『國語音韻史研究』 (國語學叢書) ソウル: 塔出版社.
- _____ 1998, 2003. 『國語史概說』 ソウル: 대학사.
- 이돈주 1990. 『訓蒙字會 漢字音 研究』 ソウル: 弘文閣.
- _____ 1995. 『漢字音韻學의 理解』 ソウル: 塔出版社.
- _____ 2004. 『韓中漢字音研究』 ソウル: 대학사.
- 이동립 1970. 『東國正韻研究』 研究篇・再構篇. 東國大學校國語國文學研究室.
- 임다영 2010. 『『동국정운』 한자음과 현실 한자음의 비교 연구-止攝과 蟹攝을 중심으로-』 연세대학교 중어국문학과 석사학위논문.
- 임용기 2008. 「세종 및 집현전 학자들의 음운 이론과 훈민정음」 『한국어학』 41. 115-156.
- _____ 2010. 「초성. 중성. 종성의 자질과 훈민정음」 『국어학』 57. 75-106.
- _____ 2014. 「훈민정음 창제와 관련한 몇 가지 문제」 『한국어사 연구』 1. 95-132.
- 정경일 2002. 『한국 운서의 이해』. 아카넷.
- 조운성 2010A. 「동국정운의 성모 체계」 구결학회.
- _____ 2010B. 「동국정운의 운류와 고금운회거요의 자모운」 『서강인문논총』 28. 203-225.
- _____ 2010C. 「동국정운의 운류와 고금운회거요의 반절하자」 『인문연구』 58. 315-336.
- _____ 2011A. 「동국정운의 業모와 欲모」 『구결연구』 26. 269-288.
- _____ 2011B. 『『동국정운』 한자음의 성모와 운모 체계 연구』 연세대학교 국어국문학과 박사학위논문.
- _____ 2014. 「『홍무정운역훈』 과 『운경』 의 운류 비교」 구결학회.
- 차익중 2014A. 『東國正韻式 漢字音 研究』 ソウル대학교 대학원. 박사학위논문.
- _____ 2014B. 「동국정운의 중성 배열 원리에 대하여」 『국어학』 70. 국어학회.
- _____ 2015. 「개간법화경언해의 한자음에 대하여」 『한국어학』 68. 한국어학회.
- 최세화 1976. 『15世紀 國語의 重母音研究』 亞細亞文化社.
- 최영애 1999. 「韓國漢字音에 나타난 重紐현상과 해석」 『中國言語研究』 8. 1-44.
- _____ 2000. 『中國語音韻學』 ソウル: 통나무
- _____ 2003. 「『蒙古字韻』 과 그 음운특징-15.6 세기의 한국자료를 통하여」 『중국어문학논집』 24. 89-115.
- 허용 1952. 「[에. 애. 외. 왜]의 음가(音價)」 『국어국문학』 1. 5-8.
- _____ 1968. 「국어의 상승적 이중모음 체계에 있어서의 「빈간」」 『李崇寧博士 頌壽紀念 論叢』. 611-617.
- _____ 1985. 『국어 음운학』 ソウル: 샘문화사.
- _____ 1981, 2008. 『언어학』. ソウル: 샘문화사.

中国語

- 崔玲愛 1975. 『洪武正韻연구』 國立臺灣大學 中國文學研究所 博士學位論文.
- 董同龢 1948. 「廣韻重紐 試釋」 『中央研究院歷史語言研究所集刊』 13. 1-20.
- _____ 1968. 『漢語音韻學』 臺北: 文史哲出版社.
- 潘悟雲 1994. 「釋二等」 『音韻學研究』 第三輯. 中華書局.

- Karlgren, Bernhard 1940. 『中国音韻学研究』. 高本漢 著:趙元任. 李方桂 合譯. 臺北:商務印書館
- 李榮 1956. 『切韻音系』 臺北:鼎文書局.
- 李新魁 1984. 「重紐研究」 『語言研究』 2. 73-104.
- _____ 1986. 『漢語音韻學』 北京
- 龍宇純 1970. 「廣韻重紐音值試論-兼論幽韻及喻母音值」 『崇基學報』. 161-181.
- 陸志韋 1947. 『古音說略』 哈佛燕京學社.
- 馬德強 2008. 『重韻研究』 復旦大學. 博士學位論文.
- 麥耘 2009. 『音韻學概論』 南京:江蘇教育出版社.
- 寧忌浮 2003. 『洪武正韻研究』 上海:上海辭書出版社.
- 王靜如 1948. 「論古漢語之腭介音」 『燕京學報』 35. 51-94.
- 王力 1956. 『漢語音韻學』 北京:中華書局.
- _____ 1972. 『漢語音韻』 香港:中華書局香港分局.
- _____ 1980. 『漢語史稿』 北京:中華書局.
- _____ 1984. 『中國言語學史』 香港:三聯.
- 薛鳳生 1985. 「試論等韻學之原理與內外轉之含義」 『語言研究』 1. 38-56.
- _____ 1996A. 「試論『切韻』音系的元音音位與「重紐. 重韻」等現象」 『無錫教育學院學報』 4. 29-35.
- _____ 1996B. 「切韻音系的元音音位與重紐. 重韻等現象」 『語言研究』 1.
- 章炳麟 1976. 「音理論」 『聲韻學論文集』 臺北:木鐸 55-62.
- 周法高 1948. 「廣韻重紐的研究」 『中央研究院歷史語言研究所集刊』 13. 49-117.
- 竺家寧 1986. 『古今韻會舉要的語音系統』 臺灣學生書局.

英語

- Fukui Rei 2012. 「Tongguk Chōngun and the Phonological System of Middle Korean」 『SCRIPTA』 Volume 4. 13-26.